

阿武隈川上流河川改修事業

# トロミ地区遺跡調査報告 3

トロミ遺跡（3次調査）

2014年

福島県教育委員会  
会館<sup>財</sup> 福島県文化振興財団  
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所



阿武隈川上流河川改修事業

# トロミ地区遺跡調査報告 3

トロミ遺跡（3次調査）





口絵1 1号特殊遺構遺物出土状況（東から）



口絵2 14号特殊遺構遺物出土状況（北東から）



口繪3 1号特殊遺構出土土師器



口繪4 14号特殊遺構出土土師器

## 序 文

国土交通省福島河川国道事務所が実施する「阿武隈川上流河川改修事業(トロミ地区)」は、阿武隈川上流部右岸に位置する二本松市トロミ地区の堤防を整備し、洪水による冠水などの被害を防ぐことを目的とした事業です。

福島県教育委員会では、この計画地区内にある周知の埋蔵文化財包蔵地について関係機関と保存のための協議を行いました。しかし、現状での保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施することとなりました。

本報告書は、平成23年度から発掘調査を開始した、二本松市所在のトロミ遺跡の3次調査の成果をまとめたものです。

トロミ遺跡の3次調査では、100基を越える縄文時代の落し穴群を検出し、広範囲な狩猟場が形成されていたことが判明しました。また、古墳時代後期の土師器と礫を集積した特殊遺構が2カ所で確認されました。この時期の土器がまとめて出土したのは、二本松市では初めてで貴重な発見となりました。

県では、広く県民の皆様がこの成果を知って頂くために一般見学会を開催し、当日は調査の出土品もご覧頂く機会を設け、多くの皆様に遺跡へと足をお運び頂きました。

3年にわたる調査により、トロミ遺跡では縄文時代から鎌倉時代までの人々の生活の営みが確認されました。これらの成果から窺われるのは、この地が各時代の人々にとって重要な地域であったということです。

この報告書が文化財に対する県民の皆さんの理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用して頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり、ご協力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、二本松市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年12月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重





## あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、阿武隈川上流河川改修事業の実施に伴い、平成25年度に発掘調査を行った、二本松市トロミ地区に所在するトロミ遺跡の3次調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では、縄文時代の狩猟用の落とし穴群や遺物包含層、古墳時代後期の土器と礫を集積した特殊遺構、奈良・平安時代の竪穴住居跡や畑跡、中世の掘立柱建物跡や畑跡などが確認され、当時の人々が使用した縄文土器や石器、土師器・須恵器、かわらけなど数多くの遺物が出土しました。そのなかで、縄文時代の落とし穴群は、阿武隈川に面する自然堤防上に列をなして確認され、広範囲な狩猟場として利用されたことが明らかとなりました。また、古墳時代後期の特殊遺構からは土師器が数多く出土しており、この時期の土器がまとめて見つかったのは二本松市では初めてのことです。これらの成果から、この地が各時代の人々にとって重要な地域であったことを窺い知ることができます。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました二本松市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年12月

公益財団法人 福島県文化振興財団  
理事長 遠藤 俊博



## 緒 言



- 1 本書は、平成25年度に実施した阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書は、福島県二本松市北トロミ・南トロミに所在するトロミ遺跡(埋蔵文化財番号：21000138)の3次調査の成果を取録したものである。
- 3 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興財団(現、公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興財団(現、公益財団法人福島県文化振興財団)では、遺跡調査部調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。

主 幹	吉田 功	専門文化財主査	能登谷宣康	専門文化財主査	小暮 伸之
文化財主事	鈴木侑加子	文化財主事	下山 貴生	文化財主事	由井 文菜
- 6 発掘調査における地形測量及び遺構平面測量の一部は、測量支援業務委託として株式会社イビソクが担当職員の監督の下、実施した。
- 7 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 8 第2章から第4章に掲載した土坑及び小穴群の一覧表の項目は、本書内で統一せず、各章ごとに設定した。
- 9 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し付章にその結果を掲載している。

放射性炭素年代	株式会社 加速器分析研究所
赤色顔料分析	株式会社 バレオ・ラボ
- 10 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局福島河川国道事務所が製作した工用地図を複製したものである。
- 11 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 12 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言を頂いた。

二本松市教育委員会	浪江町教育委員会
-----------	----------

## 用 例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。
- (1) 方位 図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「Ⅲ」, 相対的に緩傾斜の部分には「下」, 後世の擾乱部や人為的な削土部は「ア」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。  
(例) 遺構外自然堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 網 点  は被熱範囲を示す。それ以外の凡例は、同図中に表示した。
- (7) 遺 構 番 号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
- (8) 土 色 土層注記に使用した土色は、「新版標準土色帖 22 版」(小山正忠・竹原秀雄 1999) に基づいている。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。
- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し、胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。
- (3) 網 点  は黒色処理を示す。それ以外の凡例は同図中に示した。
- (4) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。  
(例) 図1の2番の遺物…図1-2  
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。  
(例) 1-2…図1-2
- (5) 遺物計測値 ( ) 内の数値は推定値, [ ] 内の数値は遺存値を示す。
- 3 本書で使用した略号は、次のとおりである。
- |         |           |          |            |
|---------|-----------|----------|------------|
| 二本松市…NM | トロミ遺跡…TRM | 竪穴住居跡…SI | 掘立柱建物跡…SB  |
| 柱列跡…SA  | 溝跡…SD     | 土坑…SK    | 特殊遺構・畑跡…SX |
| 柱穴・小穴…P | グリッド…G    | 遺構外堆積土…L | 遺構内堆積土…ℓ   |
- 4 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、巻末に収めた。

# 目 次

## 序 章

第1節 事業の概要と調査経過	1
第2節 地理的環境	6
第3節 歴史的環境	9
第4節 調査方法	14

## 第1章 調査⑤中区の調査成果

第1節 調査経過と概要	16
第2節 基本土層	16
第3節 遺構外出土遺物	18

## 第2章 調査③・④区の調査成果

第1節 調査経過と概要	21			
第2節 基本土層	23			
第3節 竪穴住居跡	27			
23号住居跡(27)				
第4節 掘立柱建物跡	30			
18号建物跡(30)	19号建物跡(32)			
第5節 柱列跡	33			
7号柱列跡(33)	8号柱列跡(34)	9号柱列跡(34)	10号柱列跡(34)	
第6節 土坑	36			
36号土坑(36)	37号土坑(36)	38号土坑(37)	39号土坑(37)	40号土坑(37)
41号土坑(38)	42号土坑(38)	43号土坑(41)		
第7節 畑跡	41			
12号畑跡(41)	13号畑跡(43)	15号畑跡(45)	16号畑跡(46)	17号畑跡(46)
18号畑跡(48)	19号畑跡(50)	20号畑跡(51)	21号畑跡(53)	22号畑跡(54)
23号畑跡(55)	24号畑跡(56)			
第8節 溝跡	57			
12号溝跡(57)	24号溝跡(57)	26号溝跡(60)	27号溝跡(61)	28号溝跡(61)
29号溝跡(61)	30号溝跡(63)	31号溝跡(63)	32号溝跡(64)	33号溝跡(64)
35号溝跡(65)	36号溝跡(66)			

第9節 小 穴 群	66
第10節 遺構外出土遺物	67
土器・土製品(67)	石器・石製品(75) 銅製品(78)

### 第3章 調査①区の調査成果

第1節 調査経過と概要	79
第2節 基本土層	82
第3節 竪穴住居跡	83
24号住居跡(83)	25号住居跡(88)
第4節 掘立柱建物跡	90
20号建物跡(90)	
第5節 土 坑	91
66号土坑(102)	111～135・137～159号土坑(102)
分 布(102)	形態分類(102) まとめ(104)
第6節 溝 跡	104
34号溝跡(104)	37号溝跡(104) 38号溝跡(106)
第7節 小 穴 群	106
第8節 遺構外出土遺物	111
土器・土製品(111)	石器・石製品・銅製品(122)

### 第4章 調査⑨区の調査成果

第1節 調査経過と概要	123
第2節 基本土層	126
第3節 土 坑	128
44～65・67～110号土坑(128)	
第4節 溝 跡	144
25号溝跡(144)	39号溝跡(146)
第5節 遺構外出土遺物	146
土 器(146)	石 器(154)

### 第5章 調査⑩区の調査成果

第1節 調査経過と概要	155
第2節 基本土層	157
第3節 土 坑	158

34号土坑(158)	35号土坑(158)	
第4節 溝 跡		158
25号溝跡(158)		
第5節 特殊遺構		160
1号特殊遺構(160)	14号特殊遺構(163)	
第6節 遺構外出土遺物		169
土 器(169)	石 器(170)	

## 第6章 総 括

平成25年度のまとめ(171)	3年間の調査のまとめ(171)
-----------------	-----------------

## 付 章 自然科学分析

第1節 出土炭化物の放射性炭素年代	174
第2節 土器に付着する赤色顔料分析	178

## 挿図・表・写真目次

### [挿図]

図1 阿武隈川上流河川改修事業位置図	1	図17 23号住居跡出土遺物	30
図2 工事計画図	2	図18 18号建物跡	31
図3 調査区割図	4	図19 19号建物跡	32
図4 トロミ遺跡周辺の地形分類図	7	図20 7～10号柱列跡	35
図5 トロミ遺跡周辺の遺跡	11	図21 36・41号土坑	39
図6 グリッド配置図	15	図22 42・43号土坑、37・41号土坑出土遺物	40
図7 調査⑤中区地形図・基本土層	17	図23 12号畑跡・出土遺物	42
図8 調査⑤中区遺構外出土遺物(1)	19	図24 13号畑跡・出土遺物	44
図9 調査⑤中区遺構外出土遺物(2)	20	図25 15号畑跡	45
図10 調査③・④区遺構配置図(1)	22	図26 16号畑跡	47
図11 調査③・④区遺構配置図(2)	23	図27 17号畑跡	48
図12 調査③・④区遺構配置図(3)	24	図28 18号畑跡	49
図13 調査③・④区遺構配置図(4)・基本土層	25	図29 19号畑跡	50
図14 調査③・④区地形図	26	図30 20号畑跡	52
図15 23号住居跡	28	図31 20号畑跡出土遺物	53
図16 23号住居跡カマド	29	図32 21号畑跡	54

図33	22号畑跡……………55	図69	調査①区南側小穴群……………108
図34	23号畑跡……………55	図70	調査①区遺構外出土遺物(1)……………114
図35	24号畑跡……………56	図71	調査①区遺構外出土遺物(2)……………115
図36	12・24・27・31・32号溝跡……………58	図72	調査①区遺構外出土遺物(3)……………116
図37	24号溝跡出土遺物……………59	図73	調査①区遺構外出土遺物(4)……………117
図38	28・29・35号溝跡, 32号溝跡出土遺物……………62	図74	調査①区遺構外出土遺物(5)……………118
図39	26・30・33・36号溝跡……………65	図75	調査①区遺構外出土遺物(6)……………119
図40	O32・33グリッド付近小穴群……………67	図76	調査①区遺構外出土遺物(7)……………120
図41	調査③・④区遺構外出土遺物(1)……………69	図77	調査①区遺構外出土遺物(8)……………121
図42	調査③・④区遺構外出土遺物(2)……………70	図78	調査⑨区遺構配置図(1)……………124
図43	調査③・④区遺構外出土遺物(3)……………71	図79	調査⑨区遺構配置図(2)……………125
図44	調査③・④区遺構外出土遺物(4)……………72	図80	調査⑨区基本土層……………127
図45	調査③・④区遺構外出土遺物(5)……………73	図81	調査⑨区土坑の形態別分布・ 軸長分布図……………130
図46	調査③・④区遺構外出土遺物(6)……………74	図82	44~48号土坑……………132
図47	調査③・④区遺構外出土遺物(7)……………76	図83	49~53号土坑……………133
図48	調査③・④区遺構外出土遺物(8)……………77	図84	54~59号土坑……………134
図49	調査①区遺構配置図(1)……………80	図85	60~65号土坑……………135
図50	調査①区遺構配置図(2)……………81	図86	67~71号土坑……………136
図51	調査①区基本土層……………82	図87	72~77号土坑……………137
図52	24号住居跡(1)……………84	図88	78~82号土坑……………138
図53	24号住居跡(2)……………85	図89	83~86・90号土坑……………139
図54	24号住居跡カマド……………86	図90	87~89・91~93号土坑……………140
図55	24号住居跡出土遺物……………88	図91	94~99号土坑……………141
図56	25号住居跡……………89	図92	100~105号土坑……………142
図57	20号建物跡……………91	図93	106~110号土坑……………143
図58	調査①区土坑分布図……………92	図94	57号土坑出土遺物……………144
図59	66・111~115号土坑……………94	図95	25・39号溝跡……………145
図60	116~121号土坑……………95	図96	調査⑨区遺構外出土遺物(1)……………149
図61	122~127号土坑……………96	図97	調査⑨区遺構外出土遺物(2)……………150
図62	128~133号土坑……………97	図98	調査⑨区遺構外出土遺物(3)……………151
図63	134・135・137~140号土坑……………98	図99	調査⑨区遺構外出土遺物(4)……………152
図64	141~146号土坑……………99	図100	調査⑨区遺構外出土遺物(5)……………153
図65	147~152号土坑……………100	図101	調査⑨区遺構配置図・基本土層……………156
図66	153~159号土坑……………101	図102	34・35号土坑, 25号溝跡……………159
図67	34・37・38号溝跡, 34号溝跡出土遺物……………105	図103	1号特殊遺構・出土遺物……………161
図68	調査①区北側小穴群……………107		



図104 1号特殊遺構出土遺物	162	図109 調査⑩区遺構外出土遺物	170
図105 14号特殊遺構	164	図110 暦年較正年代グラフ	177
図106 14号特殊遺構出土遺物(1)	166	図111 X線分析スペクトル	179
図107 14号特殊遺構出土遺物(2)	167	図112 土器附着赤色顔料分析	179
図108 14号特殊遺構出土遺物(3)	168		

[表]

表1 周辺の遺跡一覧(1)	12	表7 調査①区小穴一覧(3)	111
表2 周辺の遺跡一覧(2)	13	表8 調査⑨区土坑一覧	129
表3 調査③区小穴一覧	67	表9 放射性炭素年代測定結果(1)	176
表4 調査①区土坑一覧	93	表10 放射性炭素年代測定結果(2)	176
表5 調査①区小穴一覧(1)	109	表11 簡易定量値	178
表6 調査①区小穴一覧(2)	110	表12 分析結果一覧	179

[写真]

1 調査⑤中区全景	183	22 16号畑跡	194
2 調査⑤中区基本土層	183	23 17号畑跡	194
3 調査⑤中区遺構外出土縄文土器・石器	184	24 18号畑跡	195
4 調査③区L I d 上面全景	185	25 19号畑跡	195
5 調査③区(1)	185	26 20号畑跡	196
6 調査③区(2)	186	27 21号畑跡	196
7 調査④区L I d 上面全景	186	28 22号畑跡	197
8 調査④区(1)	187	29 23号畑跡	197
9 調査④区(2)	187	30 24号畑跡	198
10 調査③区基本土層	188	31 12・24号溝跡	198
11 調査④区基本土層	188	32 24・26号溝跡	199
12 23号住居跡全景	189	33 27・28号溝跡	199
13 23号住居跡	189	34 28・29号溝跡	200
14 18号建物跡全景	190	35 30・31号溝跡	200
15 19号建物跡全景	190	36 32・33号溝跡	201
16 7～10号柱列跡	191	37 35・36号溝跡、小穴群	201
17 36～39号土坑	191	38 調査③・④区遺構内出土土師器・須恵器	202
18 40～43号土坑	192	39 調査③・④区遺構外出土縄文土器	203
19 12号畑跡	192	40 調査③・④区遺構外出土縄文土器、 土師器・須恵器	204
20 13号畑跡	193		
21 15号畑跡	193	41 調査①区L III 上面全景	205

42	調査①区LⅦ上面全景	205	68	調査⑨区南側LⅦ上面全景	222
43	調査①区北側調査区	206	69	調査⑨区南側LⅦ上面	222
44	調査①区基本土層	206	70	44~51号土坑	223
45	24号住居跡全景	207	71	52~59号土坑	224
46	24号住居跡	207	72	60~65・67・68号土坑	225
47	25号住居跡全景	208	73	69~76号土坑	226
48	25号住居跡	208	74	77~84・90号土坑	227
49	20号建物跡全景	209	75	85~89・91・92号土坑	228
50	66・111~113号土坑	209	76	93~100号土坑	229
51	114~121号土坑	210	77	101~108号土坑	230
52	122~129号土坑	211	78	109・110号土坑、25・39号溝跡、 調査風景等	231
53	130~135・137・138号土坑	212	79	調査⑩区遺構外出土縄文土器(1)	232
54	139~146号土坑	213	80	調査⑩区遺構外出土縄文土器(2)	233
55	147~154号土坑	214	81	調査⑩区LⅡ上面全景	234
56	155~159号土坑、34・37・38号溝跡	215	82	調査⑩区	234
57	調査①区北側小穴群全景	216	83	34・35号土坑	235
58	調査①区南側小穴群	216	84	25号溝跡全景	235
59	24号住居跡出土土師器	217	85	1号特殊遺構全景(1)	236
60	調査①区遺構外出土縄文土器	217	86	1号特殊遺構全景(2)	236
61	調査①区遺構外出土縄文土器・ 土師器・瓦	218	87	1号特殊遺構	237
62	調査①区遺構外出土石器・石製品	218	88	14号特殊遺構全景(1)	238
63	調査⑨区南側LⅠd上面全景	219	89	14号特殊遺構全景(2)	238
64	調査⑨区(1)	219	90	14号特殊遺構、見学会風景	239
65	調査⑨区(2)	220	91	1号特殊遺構出土土師器	240
66	調査⑨区北側LⅦ上面全景	221	92	14号特殊遺構出土土師器(1)	241
67	調査⑨区北側LⅦ上面	221	93	14号特殊遺構出土土師器(2)	242

# 序 章

## 第1節 事業の概要と調査経過

### 阿武隈川上流河川改修事業の概要（図1）

阿武隈川では有史以来幾度となく大規模な洪水被害に見舞われてきた。特に明治43年8月や大正2年8月に発生した洪水では、甚大な被害が発生した記録が残っている。昭和に入ってから度も大規模な洪水が発生しており、特に近年においては計画高水位を越える程の大規模な洪水が相次いで発生した。戦後最大の出水を記録した昭和61年8月の台風による洪水では、被災家屋20,216戸、浸水面積15,117haという甚大な被害を受けた。それを契機に支川広瀬川等では激甚災害対策特別緊急事業により引堤等の改修が行われたが、阿武隈川中上流部の完成堤防割合は、約3割程度であった。その後の平成10年8月の大雨では、被災家屋2,096戸、浸水面積3,631haに達する被害が生じ、社会及び地域経済に大きな損害を与えた。中上流部ではこの洪水に対する改修事業を「平成の大改修」と称し、無堤部の築堤を中心とした治水対策が実施された。しかし、阿武隈渓谷などの狭窄部や集落が分散する地域など、連続堤による治水対策が困難な箇所や、暫定堤防までの整備であった本宮町では、平成14年7月の洪水においても浸水被害が発生した。

阿武隈川の二本松・安達地区は、阿武隈川が阿武隈山地と奥羽山脈の間を流下し、狭窄部「阿武隈峡」を抱えるという地形特性の中、区間に家屋が点在し、これまでの一般的河川改修手法である

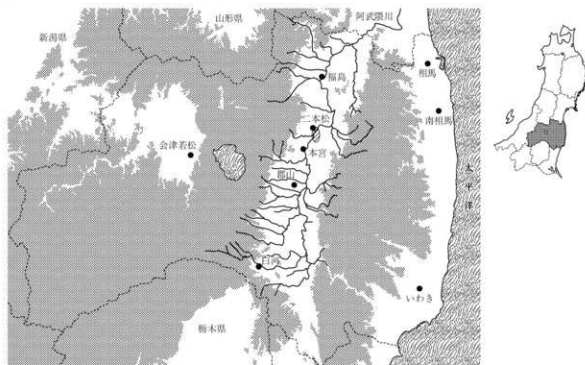


図1 阿武隈川上流河川改修事業位置図



図2 工事計画図

連続堤防では事業費が大きく、効果の発現にも長期間を要することから、これまで長年の間、治水対策手法が懸案になってきた。こうした状況の下、国土交通省では平成13年2月20日に「二本松・安達地区河川整備検討委員会」を設立し、従来の改修方式(連続堤)によらない治水対策(輪中堤や地上げ移転方式等)である「阿武隈川上流二本松・安達地区土地利用一体型水防災事業」を平成14年度より開始し、平成21年度には輪中堤整備による「二本松・安達地区水防災Ⅰ期事業(油井・榎戸、安達ヶ原地区)」が完了した。

平成21年度より「土地利用一体型水防災事業」を実施するⅡ期区間(高田、トロミ、平石高田、矢ノ戸、浅川・蓬田、上川崎地区)は、平成10年8月洪水、平成14年7月洪水において、度重なる家屋の浸水に加え、国道4号線の一時通行止めや、当該地区の生活道路でもある国道459号(旧主要地方道二本松・浪江線)、主要地方道二本松・金屋線、主要地方道原町・二本松線、二本松市道が冠水し、一時的に孤立する家屋が発生するなど、輪中堤や住家の地上げ移転等の治水対策が必要とされている。

#### 調査に至る経緯(図2)

阿武隈川右岸に位置する二本松市トロミ地区では、総延長1.4kmの輪中堤方式による堤防建設が計画され、現在、国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が事業を進めている。

トロミ地区に関わる埋蔵文化財の表面調査は、昭和45年度と平成5年度に二本松市教育委員会によって実施され、奈良時代～平安時代の遺物が採取されるトロミ遺跡として確認・登録されている。今回の築堤工事に伴う試掘調査に先立ち、トロミ遺跡周辺の地形観察と地形改変に関する聞き取り調査を実施したところ、遺跡の周知の範囲よりもさらに南北に広がる可能性が高いことがわかったため、北側と南側の隣接地をそれぞれ遺跡推定地として試掘調査の対象とすることとなった。

トロミ遺跡の試掘調査は平成22年6月から着手し、初年度は堤防工事予定地内の遺跡範囲と北側推定地(NH-B1)について実施した。その結果、奈良・平安時代の土師器・須恵器を中心に遺物が出土し、他にも縄文土器・弥生土器・陶磁器・石器・古代の平瓦等が出土した。また、古代の竪穴住居跡・溝跡・遺物包含層等を確認したが、試掘箇所が用地買収の済んだ畑等に限られたため、遺跡の広がり把握するのに十分な情報が得られず、工事予定地内の要保存範囲を確定するには至らなかった。なお、遺跡推定地(NH-B1)とした舟形橋北側の地区では明確な遺構や遺物包含層は確認されず、要保存範囲としては取り扱わないこととなった。

平成23年度には、前年に引き続き工事予定地内の遺跡範囲と、県道二本松・金屋線が横切る南側の遺跡推定地(NH-B2)について試掘調査を実施した。その結果、トロミ遺跡では平安時代の竪穴住居跡等を確認し、未試掘部分も含めて要保存範囲として取り扱うこととなった。また、南側の遺跡推定地(NH-B2)でも土坑が検出され、縄文土器等の遺物の出土も確認されたことから、要保存範囲としてトロミ遺跡に加えることとなった。

2カ年にわたる試掘調査は、用地買収と併行して実施せざるを得ない状況となった。そのため、買収手続きが終了した場所から調査に及ぶこととなり、試掘箇所も限られた。阿武隈川流域という立地条件にも影響され、地表下の状況が試掘地点によって大きく異なることから、地点ごとの堆積土の照合が困難で、遺構・遺物の確認できる文化層が、どれくらいの深さで残存しているのか十分に把握するには至らず、発掘調査を実施するにあたって課題として残ることとなった。

#### 平成23年度の調査経過 (図3)

平成22年度の試掘調査を受け、平成23年度から発掘調査を実施する予定で事前準備を進めたが、平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、準備作業の中断を余儀なくされた。その後、大震災の影響による混乱の中、調査の諸準備及び条件整備が徐々に進展し、5月中旬に国土交通省側から示された調査対象地内が①～⑧に8分割された区割図及び工事計画に従い、5月23日より、順次、調査②・⑤上・⑤下・⑥・⑦・⑧区の調査を実施し、12月20日に調査を終了した。各調査区は調査終了後に国土交通省へ順次引き渡しを行ったが、調査⑤下・⑥区に関しては、次年度当初に行う下層の調査が終了した後に引き渡すこととした。当年度の調査面積は合計13,100㎡である。

なお、当年度の詳細な調査経過と調査②・⑤上・⑦・⑧区の調査成果については、『阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告1』に掲載した。

#### 平成24年度の調査経過 (図3)

平成24年度は、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故で甚大な被害を受けた、



図3 調査区割図

浜通り地方の常磐自動車道建設工事に伴う調査が優先事業との福島県教育委員会の見解が示され、これを受けて、国土交通省側からは、前年度に引き渡しを行った調査②区の樋門工事に加えて、調査⑤上・⑤中・⑤下・⑥・⑦区に掛かる築堤工事の計画が示された。工事計画に従い、4月13日より前年度から継続調査となる調査⑤下・⑥区の作業に着手し、引き続き調査⑤中区へと調査を進めた。途中、工事計画の変更もあり、12月21日には調査⑤中区中層までの調査終了確認と、工事用道路部分については国土交通省への引き渡しを行い、調査を終了した。これにより、調査面積は合計で12,000㎡となり、調査⑤中区に関しては、次年度下層の調査が終了した後に引き渡すこととなった。

なお、当年度の詳細な調査経過と調査⑤中区の中世面及び古代面、調査⑤下・⑥区の調査成果については、『阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告2』に掲載した。

#### 平成25年度の調査経過（図3）

平成25年度阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡発掘調査は、二本松市北トロミ・南トロミに所在するトロミ遺跡の3次調査を実施した。調査面積は合計で30,200㎡である。平成25年度の調査に先立ち、平成25年2月13日に福島県教育委員会・国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所・財団法人福島県文化振興財団により平成25年度の調査に関する事前協議が持たれた。その中で、国土交通省側からは、平成25年度で埋蔵文化財調査をすべ

て終了して欲しい旨の要望が出された。

これを受けて、福島県文化振興財団では二本松市教育委員会の協力を得て発掘作業員の確保を図るなど事前準備を進めた。3月8日には前三者による平成25年度の調査箇所及び調査工程に関する事前協議が持たれ、福島河川国道事務所からは既に調査を終了した調査②区の樋門工事に加えて、調査②～⑦区に掛かる築堤工事及び調査⑨・⑩区に関わる県道切り替え工事の計画が示された。

これにより、昨年度からの継続調査となる調査⑤中区の下層に加えて、調査④区、県道二本松・金屋線の切り替え工事に関わる調査⑩区の調査から着手することとし、その後は、調査④区の南側に隣接する調査③・①・⑨区へと作業を進めることを確認した。ただし、平成23年度調査の調査②区では、中層の古代面に加えて、縄文時代の文化層が2面確認され、隣接地区でも同様の状況が予測されることから、特に調査①区については、平成25年度中の調査終了が困難な場合もあり得るとの見通しを工事側に申し添えた。その場合は、改めて事前に協議を行なうことを確認した。

福島県文化振興財団では、平成25年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部調査課の職員6名を配してトロミ遺跡の3次調査にあたることとなった。この時点での委託契約に基づく調査面積は22,600㎡である。

4月早々から調査連絡所の整備等、現地での諸準備を進め、4月10日からは作業員を雇用し、各調査区の遺構検出作業に着手した。春先は天候にも恵まれ、調査は順調に進むかと思われたが、各調査区では壁面からの湧水等に悩まされることとなり、追い討ちをかけるかのように4月20日を過ぎてからの降雪もあって、排水作業に思わぬ努力を費やすこととなった。それでも、平成24年度からの継続調査となった調査⑤中区では、縄文時代前期の遺物包含層を確認したほか、調査④区では中世の畑跡・柱列跡等を検出し、遺跡南端となる調査⑩区では中世の土坑等が検出された。

5月の中旬からは、新たに調査③区の表土剥ぎにも着手した。また、前年度に下層まで及ばなかった⑤中区の調査も5月17日には終了するに至り、工事側への引き渡しを行った。さらに、5月下旬からは、調査⑨区の表土剥ぎにも着手した。この間、調査⑩区では古墳時代後期の土師器類がまとまって出土し、二本松市内では初めての事例となることから、5月31日に一般公開による現地見学会を実施、約100名の参加者があった。なお、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響で、双葉郡浪江町は二本松市トロミ地区に仮庁舎となる町役場二本松事務所を設置しており、この縁から、浪江町教育委員会の協力を得て、二本松市等に避難している浪江町民20名を作業員として追加雇用し、更なる調査の進捗を図ることとした。

6月に入ると、調査⑩区では、湧水に悩まされながらも6月6日に調査を終了するに至った。調査③区では畝状遺構が検出され、中世の畑跡が遺跡南域にまで広がることが明らかとなった。また、調査③・④区の工事用道路部分及び、調査③・④区を分ける市道の付け替え予定部分の先行調査にも着手した。6月後半からは梅雨時の雨の影響も出始め、調査区がほとんど水没する事態も起こった。また、この頃には早くも夏日を記録する陽気となり、作業員の熱中症に気遣いながらの調査となったが、調査の進捗を図るため、6月末には調査①区の一部にも着手することとした。

この間、平成24年度当初に立てた調査想定面積に反して調査③・④区でも上層から中世の遺跡が確認されるなど、試掘調査の期間が十分に確保できなかった故の弊害も出てきており、複数の文化層による調査面積の増加が懸念される事態となったことから、遺跡の調査実績をもつ測量業者と測量業務支援の委託契約を結び、地形測量並びに遺構測量の一部等を外注することとした。

7月に入ると、樋門工事、築堤工事並びに県道付け替え工事の施工業者が決まり、7月30日に工事側との日程調整を行った。なお、7月5日には二本松市立石井小学校6年生30名による遺跡見学及び発掘体験を実施した。8月に入ると、連日猛暑が続き調査への影響も懸念されたが、現場での熱中症の心配は10月初めまで続くことになった。この間、8月上旬には調査③・④区の工事用道路部分の調査を終了し、8月19日に引き渡しを行った。

9月上旬には調査⑨区北側の調査を終了。工事側による旧県道の路盤剥がしが終了したことから、9月6日からは調査⑨区南側の調査に着手した。10月上旬には調査④区、③区の作業が相次いで終了、これにより調査①区と調査⑨区南側の作業を残すのみとなった。調査⑨区南側では、県道工事の際に調査区西側が大きく掘削されていたため、中世面と古墳時代面は調査区東側のみに遺存していたが、下層の縄文時代面は、時期の異なる上下2面が確認された。特に縄文時代下面では土坑41基を検出、これらはいずれも調査⑨区北側から続く狩猟用の落とし穴で、阿武隈川に面する自然堤防上に確認され、ほぼ南北方向に列をなしていた。この落とし穴群は調査①区からさらに平成23年度に調査を行った調査②区にまで延びており、広範囲な狩猟場が形成されていたことが判明、トロミ遺跡に新たな知見を加えることとなった。

この間、11月27日には二本松市立安達太良小学校6年生6名による遺跡見学及び発掘体験を実施し、12月4日には、先行して調査⑨区南側の作業を終了した。この頃には、湧水に加え降霜による足場の悪さに連日泣かされることとなったが、調査①区についても、12月19日に作業を終了し、翌20日には連絡所を撤収した。12月24日には福島県教育委員会・国土交通省・福島県文化振興財団の三者により、調査⑨区南側と調査①区の調査終了確認と工事側への引き渡しを行い、今年度の調査を終了した。これにより、平成25年度の調査面積は合計で30,200㎡となり、平成23年度から3年に及んだ、阿武隈川の築堤工事に関わるトロミ遺跡の調査をすべて終了した。(吉田)

## 第2節 地理的環境

**位置** トロミ遺跡は福島県二本松市北トロミ・南トロミ地区に所在する遺跡である。福島県は本州の北東部、東北地方の南端に位置する。面積の約8割を山地が占め、南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた「浜通り地方」、「中通り地方」、「会津地方」の3区域に区分される。二本松市は、中通り地方中央部よりやや北寄りに所在する。二本松市は北を福島市、東を伊達郡川俣町と双葉郡浪江町・葛尾村、南を田村市・本宮市・田村郡三春町・安達郡大玉村、西を郡山市・耶麻郡猪苗代町と接している。



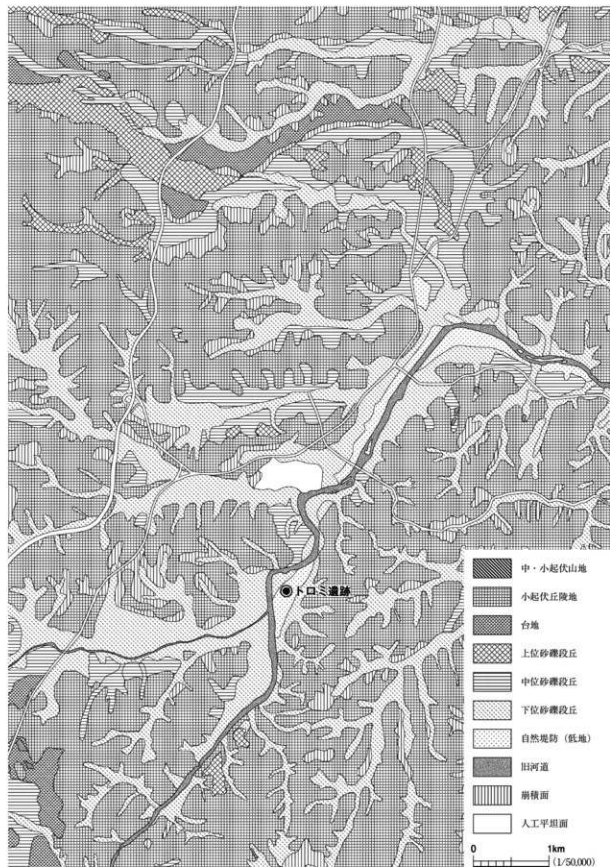


図4 トロミ遺跡周辺の地形分類図

二本松市は安達郡安達町・東和町・岩代町と合併したことで、東西約35km、南北約17kmの東西に長い市域となった。市のほぼ中央を北流する阿武隈川を挟み、西に標高1,700mの安達太良連峰、東に標高800m程の阿武隈高地を望む立地である。市内は二本松藩の城下町として街道が整備され、それらを礎とした現代交通網が広がる。主要な道路としては国道4号・東北自動車道が南北に縦走し、福島市土湯から浪江町津島に抜ける国道459号が東西を貫いている。鉄道はJR東北本線が国道4号に沿うように敷設されている。市内には南から杉田駅・二本松駅・安達駅の3駅舎が存在する。

本遺跡が位置する北トロミ・南トロミ地区は、阿武隈川東岸に位置する。遺跡範囲は南トロミから北トロミにかけて、阿武隈川に沿うように南北に延びる。遺跡範囲は東西約200m、南北約600mの範囲である。本遺跡は二本松駅から南へ約2.5km、国道4号・東北自動車道の位置から西に約2kmを測る。北緯37°34'58"、東経140°26'28"に位置する。本調査区は、トロミ遺跡を南北に貫く範囲である。調査区の現況は、宅地・畑・荒地であった。

**気候** 二本松市の気候区分は準寒帯日本型気候区分に属すが、奥羽山脈の東麓であるため降水量は比較的少ない。山がちな市域であることから気候状況は一様でなく、丘陵地の斜面の向きに応じて、日照・風向き・気温などが異なる。

トロミ遺跡が位置する二本松市中心部では、年間平均気温は11.0℃前後を測る。風は冬季から春先にかけて、「安達太良おろし」と言われる東へ向かって吹き降ろす寒風がみられる。

年間降水量は1,100mm程度で、月平均で100mm前後と多くはない。しかし、台風の接近・通過に伴う降雨によって、阿武隈川の洪水被害は散見される。台風の北上による雨量の増加と阿武隈川の北流による流出量の増加が重なることや、さらには蛇行箇所や狭窄部、他河川との合流部での洪水被害が発生しやすい河川である。過去、二本松市を含む安達地方では、幾度も洪水被害を経験している。そのため護岸改修や堤防設置工事が行われている。平成23年度発掘調査時においても、台風により、遺跡内が水没する被害にあっている。

**地形** 福島県中通り地方は阿武隈川の流域である中通り低地帯を挟んで、西に奥羽山脈、東に阿武隈高地が位置する。二本松市は、西の標高1,000m以上の安達太良山(1,700m)・東吾妻山(1,974m)などが連なる奥羽山脈、東の標高800m級の阿武隈高地、その間を阿武隈川が流れる中央低地の3地帯に分類できる。急峻な地形である奥羽山脈を東流する河川が樹枝状に開析し、阿武隈川流域に扇状地を形成している。阿武隈山地は比較的緩やかな山形で、緩やかな勾配で小河川が阿武隈川と合流する。中央低地の阿武隈川流域は、標高は200～300m程度である。二本松市域は他の中通り地方の市町村よりも、より安達太良連峰が東へ、阿武隈高地が西へそれぞれ張り出すように丘陵地が迫る。そのため、地区ごとに異なる複雑な地形構成となっている。このような地形から市域には平坦地は少なく、地形の多くは丘陵地で占められる。

阿武隈川は福島県西白河郡西郷村の旭岳(標高1,835m)に源を發し、福島県中通り地方を北流して、宮城県岩沼市・亶理町境で太平洋に注ぐ一級河川である。二本松市域では、主に奥羽山脈から

東流する杉田川・油井川や、阿武隈高地から流れる小河川が阿武隈川に合流して、扇状地や谷底平地を形成している。阿武隈川の東岸には、これらの河川の浸食や堆積作用によって、自然堤防の発達を観察できる。本遺跡は、杉田川が阿武隈川に合流する対岸に形成された自然堤防上に立地している。この自然堤防は南北約8kmにわたって形成され、南トロミ集落や工場が立地している。南トロミ集落は、阿武隈川が氾濫した昭和61(1986)年の「8.5水害」時にも浸水の被害が少なかった地区である。自然堤防東側の後背湿地は、主に水田として利用されている。

**地質** 奥羽山脈は中新世に形成された固結堆積物や火山性堆積物などを基盤として、第四紀の安達太良山起源の火山性堆積物が広く認められる。この火山堆積物を河川が開削し、阿武隈川沿いに扇状地を形成することにより、洪積層や沖積層が発達している。また、急峻な地形や火山性堆積物であることから、山腹斜面などでは崩壊地が多く観察できる。阿武隈高地は、中新世から鮮新世の時期に形成された花崗岩を母岩とする砂壤土が主体となり分布する。中央低地は、第四紀の砂礫土を主体とした未固結堆積物で構成される。トロミ遺跡は阿武隈川流域の第四紀に形成された、低位段丘上に位置する。(吉田)

### 第3節 歴史的環境

二本松市は、二本松藩主丹羽氏11代が居城とした二本松城の城下町として発展してきた。現在でも、至るところに城下町としての町並みや文化が色濃く残る。図5を参照に二本松市の遺跡分布を簡約すると、中央部を流れる阿武隈川及びその支流においては、古代～中世の集落跡を中心とした遺跡が多く認められる。安達太良山麓や阿武隈高地には、縄文時代の集落跡や中世の山城が点在する様相が見て取れる。本節では、近世の二本松藩成立までを概観する。

二本松市の旧石器時代を記載するにあたり、旧石器捏造事件については言及せざるを得ない。捏造に関係した遺跡として、市内には原七笠張遺跡・一斗内松葉山遺跡が存在する。しかし、両遺跡ともに、事件により遺跡登録から除外されている。平成13(2001)年には、一斗内松葉山遺跡において、全国で初めて旧石器捏造事件の検証発掘を当時の安達町教育委員会が主体となり実施した。調査の結果、石器の産状や地層状況と地層に埋め込まれたように石器が出土したことから、出土した石器は捏造された石器と判断された。二本松市内では、旧石器時代の遺跡は少ない。上竹遺跡(12)では石刃、下田遺跡では尖頭器や石刃が採集されている。油王田遺跡では発掘調査により尖頭器や搔器などが出土している。いずれも後期旧石器時代後半頃と推察される。阿武隈山地や奥羽山脈から延びる丘陵地では、古い地層が認められることから、旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高い。縄文時代の遺跡は安達太良山麓や阿武隈川の河岸に中期以降の大集落が形成され、阿武隈高地内の台地上には小規模な集落が点在する。トロミ遺跡の対岸に位置する八万館遺跡(25)では、古いものでは早期の燃糸文系土器や押型文土器片が出土している。前期中半の遺構・遺物が主となる遺跡である。中期では中期末葉に安達太良山東麓を中心に、複式畑を伴う竪穴住居跡が造られた。この

時期の集落は大規模となり、原瀬上原遺跡や塩沢上原遺跡・田地ヶ岡遺跡などが著名である。本遺跡の立地と同様に阿武隈川右岸に立地する遺跡としては、本宮市の山王川原遺跡(155)・高木遺跡(157)・北ノ脇遺跡(156)がある。これらの遺跡は中期末葉～後期前葉の大集落である。また、阿武隈川左岸には、頭部を穿孔した土偶が出土した下川崎の堂平遺跡がある。

二本松市内で弥生時代の遺跡は、山がちな地形によるものであろうか、あまり認められていない。隣接する大玉村には中期後半の下高野遺跡や後期後半の諸田遺跡がある。また、本宮市にも陣場遺跡などがあり、これらの遺跡は安達太良山麓の扇状地上に位置していることが特筆される。扇状地を利用した稲作などが行われていた可能性が考えられている。

古墳時代の二本松市域は、古墳の確認例が少ない地域である。郡山市・本宮市・大玉村などでは多く分布している。大玉扇状地を見下ろす丘陵上には、4世紀前半の前方後円墳である領域壇古墳(146)や4世紀後半～6世紀の築造とされる向山古墳群(149)が存在する。市内で発掘調査が行われた古墳としては、塚ノ腰古墳群(63)が挙げられる。当初、3基以上の群集墳であったが破壊され、わずかに残った1基の発掘調査を行った。調査により、礫敷きの横穴式石室を有していたことが確認された。また、黒塚古墳(14)は安達ヶ原の鬼婆の伝説の地で、首塚と伝えられている。直径10m程度の円墳であり、本来は群集墳であったものが、唯一残存した古墳と推測される。

律令時代の集落遺跡では、借宿遺跡(54)と矢ノ戸遺跡(13)などにおいて発掘調査が行われた。借宿遺跡は阿武隈川を挟んだトロミ遺跡の対岸の台地上に立地する。8世紀頃の集落跡である。矢ノ戸遺跡は阿武隈川の自然堤防上に立地している。7世紀前半～11世紀にかけての集落跡である。トロミ遺跡や矢ノ戸遺跡と同様に阿武隈川右岸の自然堤防上には、大規模な集落が形成されるようである。同時期の自然堤防上にある遺跡としては、本宮市の百目木・高木・北ノ脇・山王川原遺跡、郡山市の徳定A・B遺跡などがある。当該地域は安積郡に属していたが、延喜6(906)年に安積郡北部の入野・佐戸・安達三郷を割いて、安達郡が分置した。安達太良川の支流杉田川南の河岸段丘上に位置する郡山台遺跡(58)が、安達郡衙の推定地とされている。掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが多数検出され、規格的に配置された様相が明らかとなった。出土遺物は瓦・土師器・須恵器・硯とともに、焼米が多量に出土している。このことから、掘立柱建物は穀物を貯蔵していた正倉であったと考えられている。また、隣接する郡山台廃寺からは、単弁の軒丸瓦が出土している。この寺は奈良時代には私寺で、平安時代には官寺にされたと推測されている。本遺跡においても、石帯や円面硯など郡山台遺跡との関連性をうかがえるような遺物が出土し、集落が形成されていたことが明らかとなった。本遺跡から東900mには赤井沢遺跡(45)が位置する。1基のみ調査が行われ、9世紀の須恵器や瓦が多量に出土した。半地下式の瓦陶兼用の登り窯である。

安達郡は、仁平元(1151)年に惟宗定兼の上申により、安達郡から安達保に替えられた。安達保は、鎌の便補地として認可を受けた。その後、安達保は小槻家へ、さらに建保6(1218)年には壬生(小槻)国宗の申請により安達荘へと変遷している。この安達荘は壬生家別相伝地として建武年間まで継続した。また、安達保は奥州合戦以後に源頼朝より、安達盛長が地頭職に任じられ、本貫の地とした

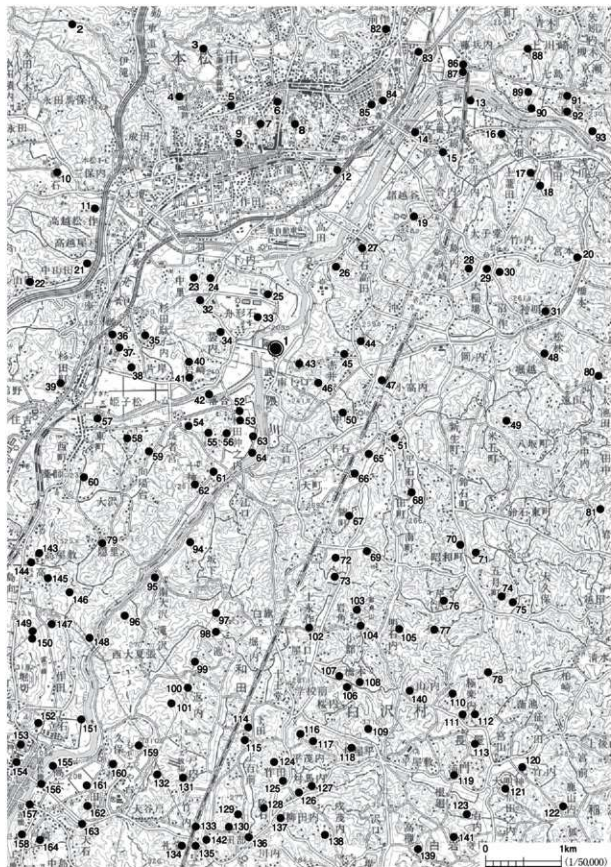


図5 トロミ遺跡周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧(1)

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	トロミ遺跡	縄文・古代～中世の集落跡	51	庚申山遺跡	縄文時代の散布地
2	長者久保遺跡	縄文時代の散布地	52	落合古墳	古墳
3	心安館跡	中世の城館跡	53	落合の万葉歌碑	近世の石造物
4	二本松城跡	中世・近世の城館跡	54	信宿遺跡	古代の集落跡
5	代官丁遺跡	縄文時代の散布地	55	落合塚群	中世・近世の塚
6	竹田・梶崎用水路跡	近世の用水路	56	落合小屋館跡	中世の城館跡
7	浮野河外苑三尊坐遊供貴塔婆	中世の石造物	57	飯小松供養碑	中世の石造物
8	亀谷観音堂の芭蕉句碑	近世の石造物	58	郡山台遺跡	古墳～古代の集落跡
9	坂下門跡	近世の城館跡	59	佐手内遺跡	縄文時代の散布地
10	水田館跡	中世の城館跡	60	大沢遺跡	縄文時代の散布地
11	松ヶ横遺跡	中世の城館跡	61	菅田遺跡	古代の散布地
12	上竹遺跡	古代の散布地	62	菅田館跡	中世の城館跡
13	矢ノ戸遺跡	古墳～古代の集落跡	63	塚ノ麓古墳群	古墳
14	黒塚	古墳	64	前田遺跡	古代の散布地
15	上平館跡	中世の城館跡	65	戸ノ内館跡	中世の城館跡
16	石畑遺跡	縄文時代の散布地	66	針間内館跡	中世の城館跡
17	蓬田遺跡	平安時代の墳墓	67	立石遺跡	縄文時代の散布地
18	蓬田館跡	中世の城館跡	68	治部田内館跡	中世の城館跡
19	講越谷館跡	中世の城館跡	69	宗明内館跡	中世の城館跡
20	坂本館跡	中世の城館跡	70	竹ノ内館跡	中世の城館跡
21	石川館跡	中世の城館跡	71	岩ノ作館跡	中世の城館跡
22	高島館跡	中世の城館跡	72	西新井館跡	中世の城館跡
23	中ノ内塚群	中世・近世の塚	73	寺向塚群	中世・近世の塚
24	羽石館跡	中世の城館跡	74	鈴石古館跡	中世の城館跡
25	八万館遺跡	縄文時代の散布地、古代の集落跡	75	大久保館跡	中世の城館跡
26	高田館跡	縄文時代の散布地	76	芦ノ沢館跡	中世の城館跡
27	佐官館跡	中世の城館跡	77	長峰館跡	中世の城館跡
28	島ノ内館跡	中世の城館跡	78	滝小屋館跡	中世の城館跡
29	太子堂遺跡	縄文時代の散布地	79	隠里遺跡	縄文時代の散布地
30	十部館跡	中世の城館跡	80	上太池田壇	塚
31	大平古館跡	中世の城館跡	81	三本松塚	塚
32	唐谷山遺跡	古代の散布地	82	前作館跡	中世の城館跡
33	岡塚群	中世・近世の塚	83	野辺遺跡	縄文～古代の散布地
34	中森山遺跡	古代の散布地	84	天皇館跡遺跡	散布地
35	駄子内館跡	中世の城館跡	85	天皇館跡	中世の城館跡
36	大平古墳	古墳	86	藤兵内遺跡	古墳～古代の散布地
37	駄子内塚群	中世・近世の塚	87	藤兵内古墳	古墳
38	古館跡	中世の城館跡	88	赤坂館跡	中世の城館跡
39	杉田館跡	中世の城館跡	89	八坂山古墳	古墳
40	坊ヶ脇古墳	古墳	90	戸ノ内遺跡	縄文・古代の散布地
41	坊ヶ脇遺跡	縄文時代の散布地	91	七島古墳群	古墳
42	岩崎遺跡	古代の散布地	92	坂ノ下A遺跡	縄文時代の散布地
43	浜井場館跡	中世の城館跡	93	坂ノ下B遺跡	散布地
44	吉祥院遺跡	古代の散布地	94	北大沢七ツ壇塚群	中世～近世の塚
45	赤井沢館跡	古代の集落跡	95	南大沢遺跡	散布地
46	萬葉谷館跡	中世の城館跡	96	古館跡	中世～近世の城館跡
47	広谷原遺跡	縄文・古代の散布地	97	白旗山古墳群	古墳
48	松林遺跡	縄文時代の散布地	98	愛宕壇古墳	古墳
49	五間日田館跡	中世の城館跡	99	最明内古墳	古墳
50	太夫内館跡	中世の城館跡	100	二ツ池古墳群	古墳

表2 周辺の遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
101	和田十三仏古墳群	古墳	133	竹ノ内古墳	古墳
102	一本松古墳群	古墳	134	礼堂館跡	中世の城館跡
103	岩角山磨崖仏	近世の石造物	135	御前塚遺跡	近世の塚
104	岩角館跡	中世の城館跡	136	小田部古墳	古墳
105	東明石内塚群	中世～近世の塚	137	船々岡供養塔	中世の石造物
106	橋本遺跡	縄文・古代の散布地	138	牛ヶ平古墳群	古墳
107	三ツ塚古墳群	古墳	139	花館古墳	古墳
108	ザーメキ遺跡	縄文・古代の散布地	140	山ノ内古墳	古墳
109	桜内古墳	古墳	141	和尚塚古墳	古墳
110	念仏塚古墳	古墳	142	腰巻山遺跡	縄文・古代の散布地
111	榎葉内五輪塔	中世の石造物	143	羽山神社供養塔	中世の石造物
112	源訪館跡	中世の城館跡	144	菊池館跡	中世の城館跡
113	駒の腰遺跡	古墳～古代の散布地	145	堂ヶ久保古墳群	古墳
114	堀ノ内古墳群	古墳	146	傾城塚古墳	古墳
115	下田古墳	古墳	147	前山小作田山遺跡	縄文～発生時代の散布地
116	桜本遺跡	縄文時代散布地	148	大川隣遺跡	縄文・古代の散布地
117	ドウセイ塚古墳	古墳	149	向山古墳群	古墳
118	平茂内古墳	古墳	150	巖治内館跡	中世の城館跡
119	中曾根遺跡	縄文・古代の散布地	151	大榎遺跡	古代の散布地
120	竹ノ内館跡	中世の城館跡	152	石雲寺供養塔	中世の石造物
121	信田ノ内遺跡	中世の城館跡	153	香森館跡	中世の城館跡
122	柳沢花遺跡	中世の城館跡	154	愛宕館跡	中世の城館跡
123	堂平遺跡	縄文・古代の散布地	155	山王川原遺跡	古代の集落跡
124	一本松古墳	古墳	156	北ノ脇遺跡	縄文・古代の集落跡
125	暮々内遺跡	古墳	157	高木遺跡	縄文・古代の集落跡
126	好馬内遺跡	縄文時代散布地	158	渡場遺跡	縄文～近世の散布地
127	船々岡館跡	中世の城館跡	159	問答山古墳群	古墳
128	除石古墳群	古墳	160	根岸古墳群	古墳
129	境ノ内五輪塔	中世の石造物	161	長畑古墳群	古墳
130	小田部古墳	古墳	162	高木田中館跡	中世の城館跡
131	文蔵塚塚	中世～近世の塚	163	上人塚遺跡	中世～近世の塚
132	問答塚群	中世～近世の塚	164	大学館跡	中世の城館跡

とされる。さらに嫡子景盛へと相続されている。弘安8(1285)年の霜月騒動と呼ばれる内乱により、景盛の孫泰盛一族は滅亡している。以後鎌倉幕府滅亡時まで安達氏一門の城高景が安堵していたと考えられる。本遺跡で検出した大規模な建物跡群や井戸跡などは、この時期に該当する遺構である。

建武親政以後は、北畠顕家が陸奥守に任じられた。南北朝期には、足利尊氏は南朝を征伐するため、康永4(1345)年に吉良氏と畠山氏を奥州管領として任じている。親応の擾乱では畠山氏は尊氏・師直派、吉良氏は直義派となった。畠山高国・国氏が奥州管領として下向した際に田地ヶ岡館跡を築いた。親応2(1351)年、吉良貞家は畠山国氏の岩切城を攻め、国氏・高国・直泰を滅ぼした。国氏の嫡子である国詮は二本松に移ったが、奥州管領と称した。国詮の嫡子満泰は白旗ヶ峰を中心とした天然の要害地に居館を築造し、この霧ヶ城を本拠とした。現在の二本松城跡(4)である。安達郡の畠山氏の支配は11代に及び、15世紀からは地名をとって二本松氏を名乗った。二本松氏は二本松市を中心に阿武隈川西岸から安積郡北部一帯を治めた。阿武隈川東部は三春田村氏・結城白川

氏・吉良氏・宇都宮氏・石橋氏・大内氏などが支配していたようである。

戦国時代に入ると、伊達氏や革新氏などにより、幾度となく二本松領は攻撃を受けることになる。天正13(1585)年に伊達氏と畠山氏・佐竹氏・革新氏などが争った人取橋の戦いがある。翌年、畠山義継の子国王丸の代に伊達政宗によって攻め滅ぼされた。南北朝期から戦国時代にかけてこの地域は、多くの山城が築かれ戦乱の舞台となった。館主が推定されている館跡として、石川佐渡守の石川館跡(21)、大塚備中の羽石館跡(24)、平石甲斐守武頼の高田館跡、小国又四郎の駄子内館跡(35)などがある。本遺跡のすぐ東の丘陵上にも泥海館とも呼ばれる浜井場館跡(43)、さらに菖蒲谷館跡(46)が位置する。

天正18(1590)年、豊臣秀吉の奥州仕置により、二本松を含む安達郡は蒲生氏郷が領した。二本松城城主には、蒲生郷成が配置された。トロミ地区は文禄3(1594)年の蒲生領高目録では、平石村領に属している。慶長3(1598)年には上杉景勝が入部、関ヶ原の戦い以後は、蒲生秀行が領することとなる。その間、蒲生氏郷以来会津若松城の支城として支配した。寛永4(1627)年、会津藩に加藤嘉明が40万石で入部すると、嘉明の娘婿である松下重綱が5万石で入部したことで、二本松藩が成立した。重綱・長綱の後、嘉明の三男明利が3万石の所領を与えられた。明利は二本松城の改修を行い、この城跡の改修後の城郭を描いたのが「正保二本松城絵図」といわれる。(吉田)

## 第4節 調査方法

トロミ遺跡の発掘調査を実施するにあたり、平成23年度の1次調査の際に、工事側の工区を示す幅杭を基に調査区を設定し、国土座標を基に遺跡全体をカバーする10mごとの方眼(グリッド)を設定した。トロミ遺跡の調査で用いた測量座標は、世界測地系に基づく国土座標第Ⅹ系の座標で、グリッド原点の座標値は遺跡の北西に位置する $X=174,300$ 、 $Y=53,500$ である。各グリッドには東西方向にA・B…Zというようにアルファベットの英文字を付し、南北方向に1・2…70というように算用数字を付して、S21グリッド、M52グリッドなどと呼称し、個別の番号を与えた。このグリッド番号は、遺構の大まかな位置表示を行ったり、遺構外遺物の出土位置を表示するのに使用した。さらに、遺構平面図を作成するための水糸ラインを1m方眼で規定した。水糸ラインの方向はグリッドの分割線の方角と一致しており、1m単位の国土座標で表記した。なお、測量基準点の打設及び簡易水準点の移動は測量会社に委託した。

発掘作業に際し、重機を使用して調査区の表土を除去し、その後、人力により遺構の検出作業及び遺物包含層の掘り下げを行ったが、各調査区の東辺及び西辺は民有地と接していることから、表土除去にあたって、民有地境から約1m幅の安全帯を設けて掘り下げ、調査が進行するに従い、掘削深度に合わせてさらに内側に約1m幅の安全帯を設けて掘り下げた。なお、土量が多く、遺物を確認できない堆積土については、調査員が立会いの下、重機で慎重に掘削した。

遺構の掘り込みは、竪穴住居跡は土層観察用畦を残した4分割法、土坑・柱穴跡は2分割法を基



本とし、溝跡・畑跡は土層観察用畦を適宜残した。遺物の採り上げは、遺構内のは区画ごと、遺構外のはグリッド単位で採り上げ、遺構外の土層番号は基本土層をしとローマ数字を組み合わせてL I・L II…と表し、遺構内の土層はℓと算用数字の組み合わせでℓ 1・ℓ 2…と表記した。なお、さらに分層される堆積土には、小文字のアルファベットを付加した。

調査の記録は、実測図作成及び写真撮影により行った。遺構図は、基本的に1/20縮尺で平面図と土層断面図を作成し、遺構細部や遺物出土状況などは1/10縮尺、溝跡や畑跡など図化範囲が広範囲にわたるものは1/40縮尺、調査区地形測量図は1/200縮尺で作成した。なお、6月下旬からは測量支援業務として、測量会社が担当調査員の監督の下、遺構図の平面図作成と調査区の地形測量図作成を実施した。遺構写真は、検出状況、土層堆積状況、遺物出土状況、完掘状況などについて、同一被写体を35mm判のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルム及びデジタルカメラで随時撮影した。また、報告書掲載遺物写真はデジタルカメラによって撮影した。

調査において出土した遺物や実測図・写真などの記録類は、当財団の定める基準に従って整理を行った。報告書刊行後は福島県教育委員会へ移管し、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。(能登谷)

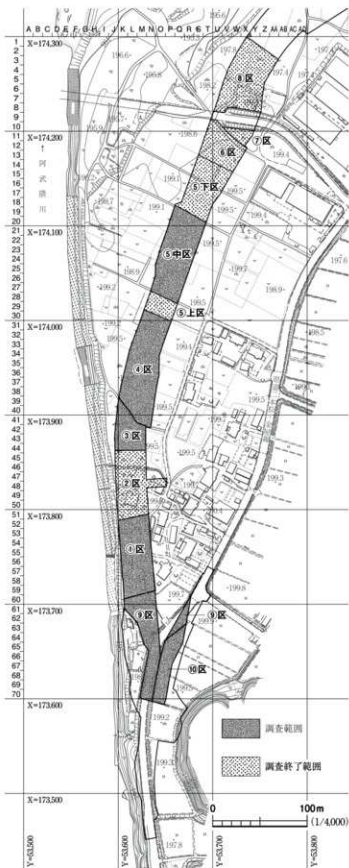


図6 グリッド配置図

# 第1章 調査⑤中区の調査成果

## 第1節 調査経過と概要

調査⑤中区は本遺跡のほぼ中央部に位置する。調査の結果、旧地形は南西へ向かって緩く傾斜することがわかった。

調査⑤中区の調査は、平成24年度と平成25年度の2カ年にわたり実施した。平成24年度調査では、中世面及び古代面については調査が終了し、さらに調査区西部の工事用道路部分については、下層の縄文時代面まで調査を終了した。

本年度の調査を開始したのは、4月10日である。平成24年度調査時に掘削途中であった調査区東部のLⅣの掘削を人力によって行った。本調査区では平成24年度調査の結果、本遺跡が立地する自然堤防の中央に近い東端部付近に遺構・遺物が多く分布していることが明らかとなっていたため、東端部の調査を優先し、グリッドごとに掘削・遺構検出を行った。遺構・遺物の分布が少ない調査区西端部については、調査員立ち合いのもと一部重機を併用し掘削を行った。その結果、LⅤ上面で遺構は検出されず、遺物出土量も少なかった。

LⅤもLⅣと同様に調査区東端部から、人力と重機を併用し、グリッドごとに掘削・遺構検出を行ったが、遺構は確認できず、遺物出土量も少なかった。これを受け、下層のLⅦ・Ⅷについては部分的にトレンチを設定し、人力及び重機で掘り下げたが、遺物は出土せず、遺構が検出される可能性は低いものと判断し、5月17日にLⅥ上面で調査終了の全景写真撮影を行った。これをもって面積2700㎡の調査を終了し、現地を5月中旬に国土交通省へ引き渡した。

この2カ年の調査の結果、本調査区では竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟、土坑3基、畑跡9カ所、溝跡10条が検出された。これらを時代別に見ると、奈良・平安時代のものは、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟、土坑2基、畑跡4カ所、溝跡10条である。鎌倉時代のものは、土坑1基、畑跡5カ所である。

(下 山)

## 第2節 基本土層

トロミ遺跡は、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防上に営まれている。平成25年度に調査を行った調査①・③・④・⑤中・⑨・⑩区の各地区では、地形的要因により土層の堆積状況が異なっていた。このため、基本土層については、隣接する調査区で対応できる層位以外は、各調査区個別に設定している。

本調査区は第1節で述べたように、平成24年度調査時に掘削途中であった調査区東部のLⅣの掘削から調査を開始した。LⅣは暗褐色砂質土層である。本層からは縄文時代前期中葉～後期初頭

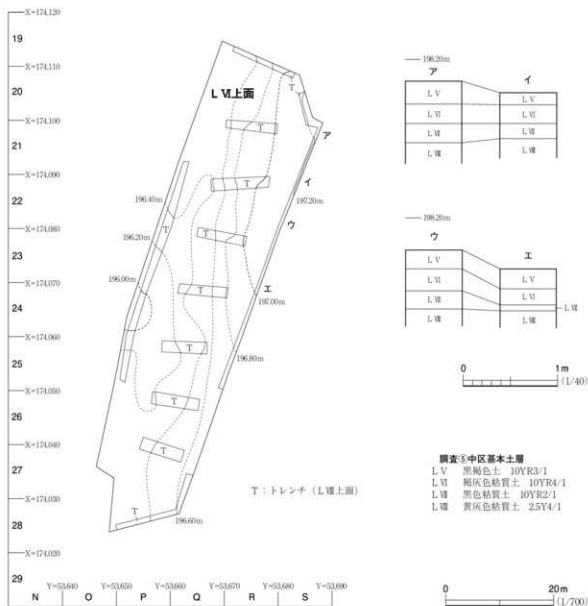


図7 調査⑤中区地形図・基本土層

にかけての遺物が出土している。L.Vは黒褐色土層で調査区全域に堆積し、調査区南部へ向けて緩やかに下っていく。本層からは縄文時代前期中葉～後葉の遺物が出土している。層厚は12～30cmを測る。L.VIは赤灰色粘質土層で、層厚は18～30cmを測り、調査区南部へ向かって緩く下っていく。本層から遺物は出土していない。L.VIIは黒色粘質土層で、層厚は11～60cmを測る。本層から遺物は出土していない。トレンチ調査の結果、本調査区西半部では、この層以下が全体的にグライ化していることが確認できた。L.VIIIは黄灰色粘質土層で、層厚は12～28cmを測る。本層から遺物は出土していない。

本調査区では平成24年度調査を含め、17層が確認された。本年度調査を行ったL.IV～L.VIIIは、本調査区全域で確認でき、若干の起伏を持ちながらも、全体的に南に向けて緩やかに下りながら堆積している状況が確認できた。

(下 山)

### 第3節 遺構外出土遺物

本調査区はLⅥまで掘削を行い、トレンチ調査を行った部分については、LⅦまで掘削を行っている。掘削を行った部分の内、遺物を包含していたのはLⅣ・Ⅴであり、縄文時代前期～後期の遺物が出土している。

本調査区からは、縄文土器片899点、土師器甕片19点、石器2点、剥片15点が出土した。この中で特徴的な縄文土器片46点、石器2点、剥片1点を以下に記す。

#### 縄文土器 (図8・9、写真3)

図8-1～26は縄文時代前期中葉の大木3式土器である。1は斜縄文が施されるが、施文圧が弱く、明瞭な帯状の痕跡は認められない。2の口縁部は平縁を呈すると考えられる。外面に施文は認められない。3は波状沈線文が施されている。4・5は半截竹管を用いて体部上半に2条一對の波状沈線文が施されている。6は口縁部に小波状の粘土紐が縦位に貼付されている。7・8は横位の押引文を施す。9は体部に2条一對の鋸歯状の沈線文が施されている。10・11は体部に2条一對の平行沈線文が縦位に施されている。12は体部に棒状浮文が施されている。13は沈線文が施されている。14～26は体部上半に綾線文帯を持つ。14～16は山形状の口縁を呈する。14・15は口縁部にボタン状の貼付文を持ち、14～16・19は口唇部に半截竹管で刻みを施している。また、14の体部上半には補修痕と考えられる穿孔が認められる。17は断面円形の工具により口唇部に斜めに刻みを施している。18は山形状の口縁を呈し、口唇部に半截竹管で刻みを施す。口縁部から体部にかけて2条一對の平行な短沈線文が縦位に施されている。

図8-27・28、図9-1～4は縄文時代前期後葉の大木4式土器である。27は口唇部と体部上半に小波状の粘土紐が貼付されている。28は頸部に小波状の粘土紐と直線的な粘土紐が貼付され、直線的な粘土紐の上には、半截竹管による刻みが認められる。図9-1は唇部と体部上半に小波状の粘土紐が貼付され、体部上半に縄文を施す。2は体部上半に小波状の粘土紐が貼付されている。3・4は深鉢の底部資料である。ともに底面外縁部がやや外側に張り出している。4は網代瓦痕を残すもので、底面を平滑にするためか、ヘラ状工具で網代の痕跡を部分的に調整している。

図9-5は縄文時代前期後葉の大木5式土器である。粘土紐を短くちぎって梯子状文を施している。同図6～12は浮島Ⅲ式土器である。変形爪形文や沈線文、貝殻文が施文されている。同図13は諸磯Ⅱ式土器である。矢羽状の刻みが施された浮線文が特徴的である。

図9-14～17は縄文時代中期に位置づけられる。14は沈線によって文様を描画し、区画外に縄文を施す。15は体部にやや節の太い斜縄文が施されている。16は口唇に沿って沈線が巡り、口縁部を無文としている。体部上半には節の太い斜縄文を施す。17は沈線で区画文を描画し、区画内に縄文を充填している。

図9-18は縄文時代後期に位置づけられ、櫛歯状工具による縦位の条痕が施される。

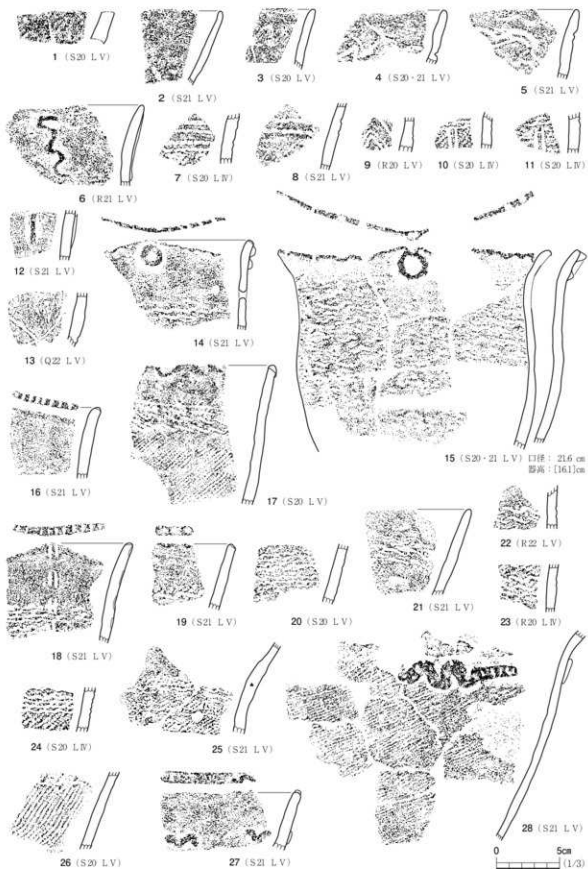


図8 調査⑤中区遺構外出土遺物 (1)

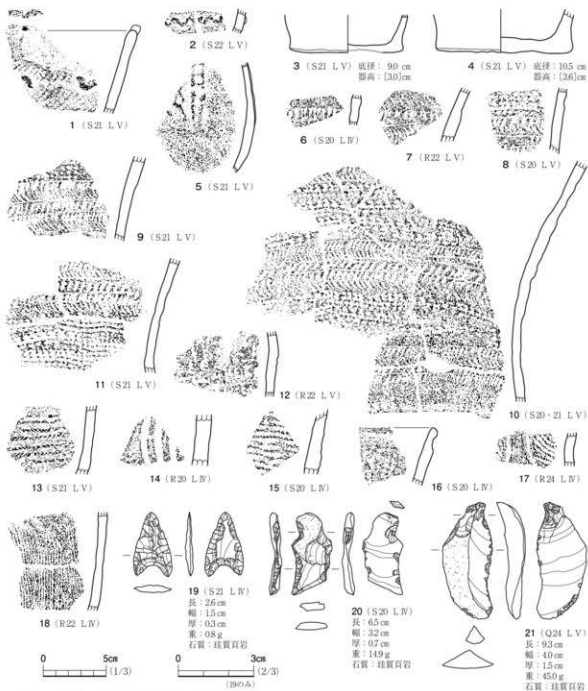


図9 調査⑤中区遺構外出土遺物(2)

石器(図9, 写真3)

図9-19は、珧質頁岩製の凹基無茎鏃で、両面に調整刻離が施されている。20は、珧質頁岩製の搔器で、背面に自然面が残存している。両側縁には鋸歯状に調整刻離を加えている。21は、二次加工のある剥片である。石匙の未成品かと思われる。背面に自然面が残存している。石質は珧質頁岩である。

(下山)

## 第2章 調査③・④区の調査成果

### 第1節 調査経過と概要

調査③・④区は遺跡の中央部に位置する。調査前の現況は畑及び墓地・荒地・竹林で、ほぼ平坦な地形であった。両調査区は細い市道によって分かれており、当初は別々に調査し、報告する予定であったが、調査を進めるに従い、この市道も撤去して調査することになるとともに、それぞれの調査区の遺構・遺物が類似していることから、一連のものとして調査・報告することにした。

調査は、東辺部に重機等が通行する道路を設定して、4月10日から重機によりその西方の区域の表土剥ぎを開始した。なお、調査③区の表土剥ぎは、表層のみに止め、本格的な表土剥ぎは5月に入ってから実施することにした。4月15日からは作業員による調査④区の中世面(L I d 上面)の遺構検出作業も開始し、畑跡などの遺構が検出され始めた。

5月に入ると、調査区南部から多くの遺物が出土し、溝跡も検出され、遺構の掘り込みにも着手した。5月16日には、調査④区の重機路部分を除く区域の表土剥ぎが終了したことから、調査③区の表土剥ぎを開始し、作業員による遺構検出作業も開始した。5月下旬になると、調査③区でも畑跡の調査が展開され、調査④区の工事用道路部分の調査は中世面から古代面(L I e・II 上面)へと移行していった。

6月に入ると、両調査区の工事用道路部分の調査はさらに進捗し、中旬には下層の縄文時代の遺物包含層の調査へと移行していった。これに対し、それと並行して行っていたその東方の区域の調査では多くの遺構が検出され、遺構の調査に手間取ったが、6月下旬からは測量支援業務として測量会社が遺構平面図や地形図作成を実施することになり、調査の進捗が図られることになった。

8月上旬には、工事用道路部分3,900㎡(調査③区：1,200㎡+調査④区：2,700㎡)の調査が終了し、8月19日に国土交通省に現地を引き渡した。それと同時に、市道の付替えを行うとともに、下旬からは市道下の調査にも着手した。

9月に入ると、それまで着手していた工事用道路東側隣接地7,600㎡(調査③区：1,400㎡+調査④区：6,200㎡)の調査が概ね終了し、9月18日には国土交通省に調査終了部分を引き渡した。さらに、調査区東辺部に設定した重機路部分の調査に着手した。調査は順調に推移し、下旬には市道下及び重機路部分の縄文時代の遺物包含層の調査に着手するが、西側の隣接地ではLVより下層から遺構・遺物が検出されないことから、この区域に関しては、LV上面までの調査に止めることにし、10月4日には調査④区、7日には調査③区の調査を終了し、10月23日に国土交通省へ残る部分1,800㎡(調査③区：700㎡+調査④区：1,100㎡)を引き渡した。

調査の結果、古代面からは竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、柱列跡1列、土坑7基、溝跡10条、畑跡5カ所、中世面からは掘立柱建物跡1棟、柱列跡3列、土坑1基、溝跡2条、畑跡7カ所が検

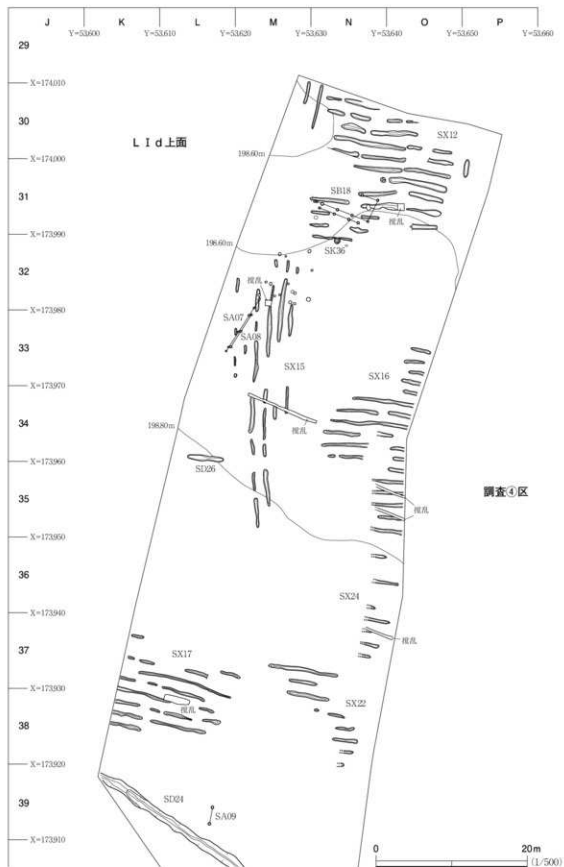


図10 調査③・④区遺構配置図(1)



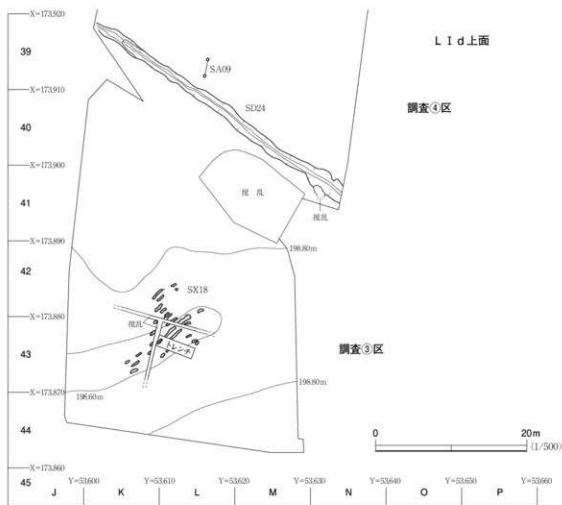


図11 調査③・④区遺構配置図(2)

出された。また、縄文土器片2,852点、弥生土器片8点、土師器片4,076点、須恵器片407点、かわらけ片4点、陶磁器片22点、石器・刺片類51点、石製品1点、土製品8点、銅製品45点、鉄滓3点などが出土した。(能登谷)

## 第2節 基本土層

本節では、調査③・④区の基本土層を総括して述べる。本調査区の土層の観察は、調査区西壁3カ所、東壁3カ所で行い、各層ごとの特徴や遺構の検出状況、包含される遺物などから、以下の16層に大別した。

L I a～cは調査区全体に堆積する層である。L I aは黄褐色土砂層で、層厚は12～34cmである。L I bは黒色土層で調査区西側では砂礫が多量混入している。層厚は18～28cmである。L I cはにぶい黄褐色砂質土層で調査区南側では砂利が多量混入している。層厚は8～40cmを測り、調査区南半部に向けて層厚が増していく。L I dは灰黄褐色土層で上面では畑跡や溝跡が検出され、溝

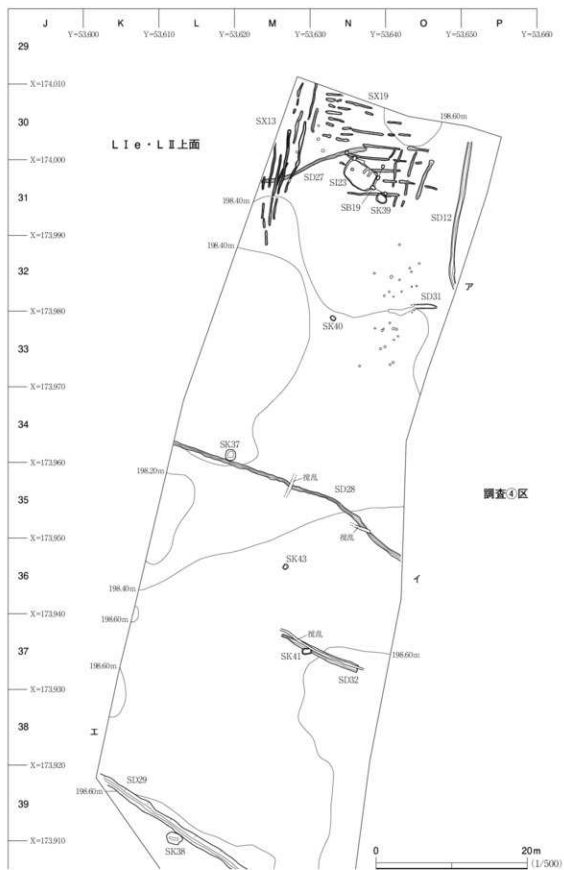


図12 調査③・④区遺構配置図(3)



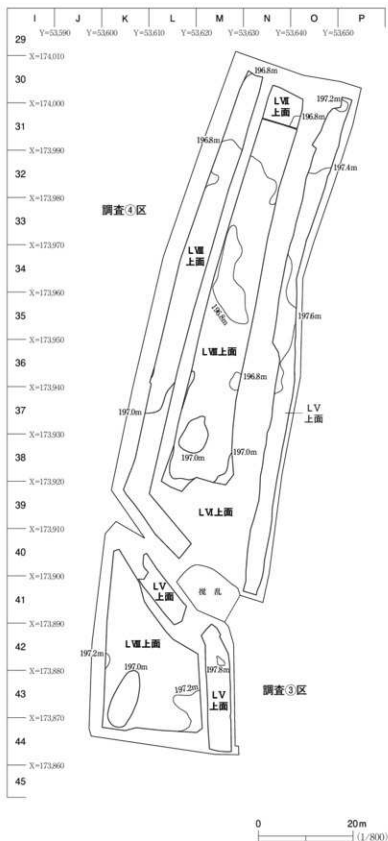


図14. 調査③・④区地形図

跡からはほぼ完形の土師器や須恵器が出土している。層厚は13～26cmである。J 41・43グリッド付近では確認されなかったが、K 39～41グリッド、L 40～44グリッド、M 41・42・44グリッド周辺で確認されている。L I eは灰黄褐色砂質土層の洪水砂層であり、調査区中央より北側は層厚が比較的薄く、上面では住居跡や畑跡など、奈良時代の遺構が検出されている。層厚は8～28cmを測る。調査区南側には堆積していない。

L IIは調査区全体に堆積する黒褐色土層で、縄文時代後期と晩期の遺物、土師器が含まれており、層厚は20～30cmを測るが、概ね均一に堆積している。

L III aは褐色砂層で、K 38グリッド付近には堆積していなかった。層厚は12～30cmを測り、調査区南半部に向け層厚が増していく。L III bは調査区全体に分布する暗褐色砂層で礫が多量混入している。層厚は24～54cmと比較的厚い。調査区北東部の黄褐色砂質土層が堆積しており、これをL III cとした。L III a～cは縄文時代後期初頭の洪水堆積層と思われる。

L IVは暗褐色砂質土層で縄文時代中期末葉～後期初頭の遺物

が含まれている。層厚は12～21cmである。平成23年度に調査された調査⑦区のLⅣaに対応する。なお、調査④区東側と調査③区北側・東側では、遺物の出土状況から、下層より遺構が検出される可能性は低いと判断し、本層の掘削までで調査を終了している。

LⅤは黒褐色土層で、縄文時代前期中葉～後期初頭の遺物が含まれている。層厚は25～32cmである。調査⑦区のLⅣb・cに対応する。

LⅥは褐灰色粘質土層で、層厚は22～26cmである。平成23・24年度に調査された調査⑤下区では縄文時代前期前葉～中葉の遺物が含まれていた。調査⑦区のLⅤに対応する。

LⅦは黒色粘質土層で、粘性は強く、層厚は24～34cmである。昨年度までの調査の中で、他の調査区からは、縄文時代早期中葉及び縄文時代前期前葉の土器が出土している。調査⑦区のLⅥa・bに対応する。

LⅧは黄灰色粘質土層で基盤層である。粘性は強く、調査区北側では全体的にグライ化していることが確認されている。本調査区のいずれの地点においてもこの層以下からは遺物が出土していないため、この層までを調査対象としている。調査⑦区のLⅦに対応する。

調査の結果、本調査区の旧地形は若干の起伏を持ちながらも、全体的に北側に向けて緩やかに下っていくことが確認された。

(鈴木・下山)

### 第3節 竪穴住居跡

#### 23号住居跡 S I 23

##### 遺 構 (図15・16, 写真12・13)

本遺構は、平成22年度の試掘調査の際に検出された遺構で、調査④区北部に存在し、N30・31グリッドに位置する。LⅠe上面において長方形プランを検出した。19号畑跡及び19号建物跡、27号溝跡と重複しており、いずれの遺構よりも古い。

平面形は北西-南東主軸の隅丸長方形で、規模は上端で北西-南東が4.4m、北東-南西が3.1m、床面で北西-南東が4.1m、北東-南西が2.45～2.87mを測る。床面は新カマド手前が貼床である以外はLⅠeで、ほぼ平坦である。周壁もLⅠeで、各壁とも直線的に急外傾して立ち上がっているが、南東壁と南西壁の一部は立ち上がりか緩い部分もあり、特に、南東隅は緩いスロープ状をなして裾が住居内へ張り出している。壁高は約5～17cmを測る。

遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ1は人為堆積と推測される粘質土、ℓ2・3は遺構廃絶後のLⅠdの自然流入土、ℓ4は貼床土である。ℓ4除去後の住居跡掘形の底面はLⅡで、不整であった。

遺構内堆積土のℓ1～3を除去したところ、北東壁東半に敷設された新カマド燃焼部と北西隅から旧カマドの煙道部が検出された。

新カマドの燃焼部は両袖が直線的に住居内に張り出しており、いずれも粘土を客土して構築されている。燃焼部全体の規模は、残存幅1m、奥行き95cmを測り、両袖は長さ85cm(左袖)・95cm(右

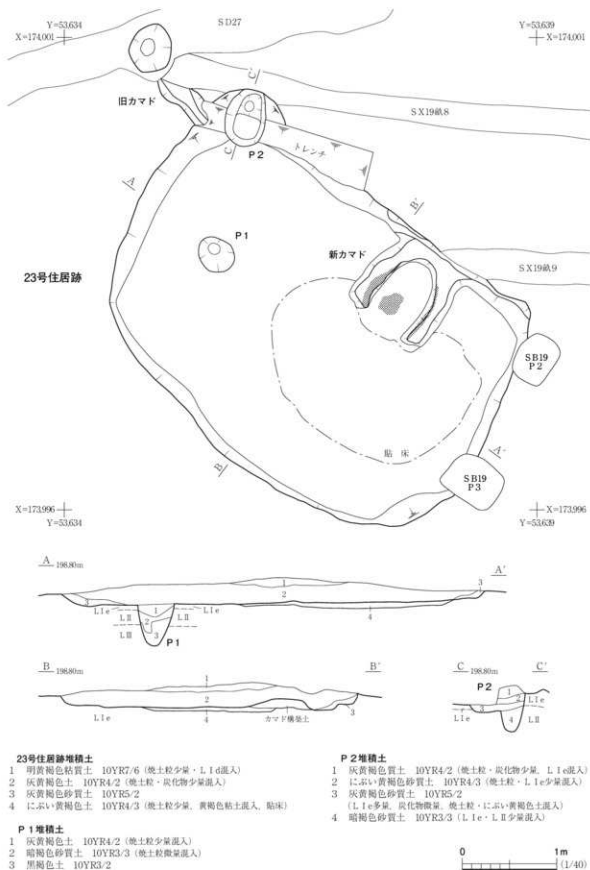


図15 23号住居跡

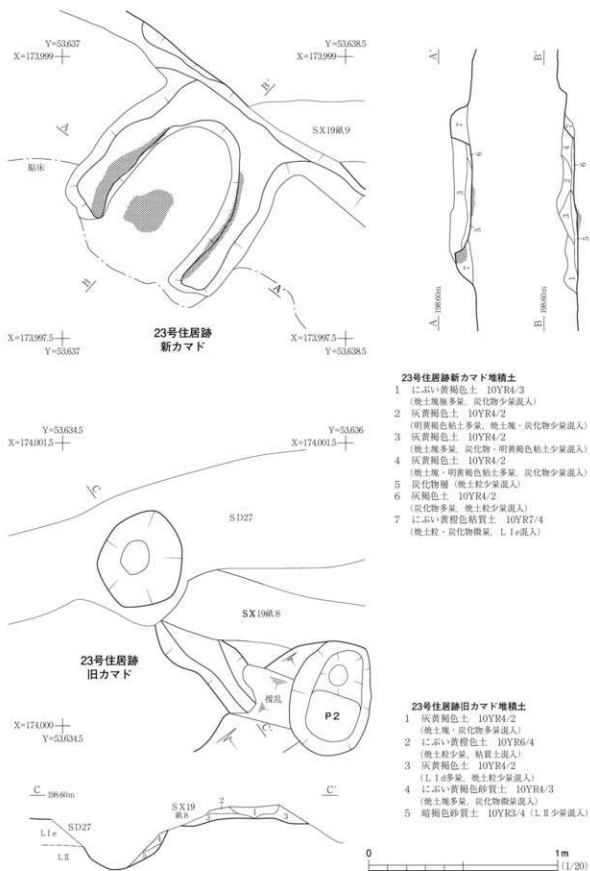


図16 23号住居跡カマド

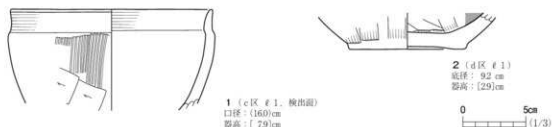


図17 23号住居跡出土遺物

袖)、幅25cm、高さ10cmを測る。左袖の内壁は直立ないしは内傾する硬化した焼面であり、右袖の内壁は急外傾し、硬化した焼面が一部に残存していた。左袖の内壁の焼成化は壁面から最大6cmまで及んでいた。底面は平坦で、中央部に焼面が確認された。底面の規模は、奥行き78cm、幅50cmを測り、焼成化は底面から約2cmまで及んでいた。カマド内堆積土は7層に分層され、 $\ell$  1～4はカマド廃絶後の堆積土、 $\ell$  5・6はカマド使用中に堆積した炭化物及び炭化物を多量含む土、 $\ell$  7はカマド構築土である。

旧カマドは、燃烧部が試掘調査の際に削平されており、煙道と煙出しピットのみが検出された。煙道は長さ65cm、幅23cm、深さ5cmを測り、煙出しピットは48×40cmの楕円形を呈し、煙道からの深さは22cmを測る。

また、床面西側中央からP 1、旧カマド煙道東方からP 2が検出された。P 1は円形を呈し、規模は37×35cm、深さ43cmを測る。P 2は楕円形を呈し、規模は59×40cm、深さ28cmを測る。

#### 遺物 (図17、写真38)

遺構内堆積土から、土師器片48点、須恵器片3点が出土した。

図17-1・2は土師器甕である。1の口縁部は内外面ともヨコナデされ、体部は外面がハケメ調整及びヘラケズリされている。2は内外面ともヘラナデされ、内面は黒色処理されている。

#### まとめ

本遺構は隅丸長方形を呈する中型の竪穴住居跡で、北東壁に新カマド、北西隅に旧カマドが敷設されている。帰属時期は出土遺物から8世紀頃と推測される。(能登谷)

## 第4節 掘立柱建物跡

調査④区において、掘立柱建物跡が2棟検出された。柱穴の形状及び検出面が異なり、それぞれの重複する遺構との関係から、18号建物跡は鎌倉時代頃、19号建物跡は平安時代頃と推測される。なお、柱間距離の計測は、柱痕ないしは各柱穴の芯々間を計測した。

### 18号建物跡 S B 18

#### 遺構 (図18、写真14)

本遺構は調査④区北部に存在し、N 31グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。



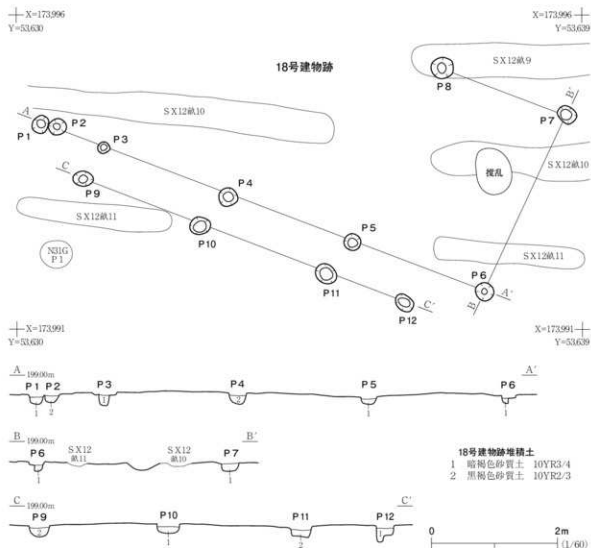


図18 18号建物跡

12号畑跡と重複し、本遺構のP8が12号畑跡の畝間溝9の堆積土を掘り込んでいる。また、南方約3mには遺構内堆積土が近似する36号土坑が存在する。

本遺構の検出された12個の柱穴の内、P3～8が身舎の柱穴で、P9～12は南に付属する庇の柱穴と推測される。なお、P1・2はP3～6の延長線上に存在し、本遺構に伴うものとした。

身舎の平面形は北西-南東主軸の長方形で、規模は南側柱列(P3～6)で6.4m、東側柱列(P6～7)で3.10mを測り、南側柱列の柱間距離は西から2.10+2.10+2.20mを測る。軸線方位は南側柱列でN69°Wである。なお、身舎の北西部の柱穴は検出されなかった。また、P3西方のP1とP3の柱間距離は1.05mを測り、P2がP1の東に隣接している。

庇の柱列(P9～12)の規模は5.40mで、柱間距離は西から2.00+2.10+1.30mを測り、P3～6との距離は60cmを測る。なお、P9～11はそれぞれ身舎のP3～5に対応している。

各ピットの上端における平面形は円形ないしは楕円形で、全体的な形状は円筒形ないしは鍋底状である。上端における長径は20～35cmを測り、深さは12～26cmで、P3・12以外は10cm台である。

遺構内堆積土は、遺構内で統一して捉えることとし、2層に分層した。いずれも、柱を抜き取った後に流入した土と推測される。

P9内堆積土から土師器杯片1点が出土したが、図示できる資料はなかった。

### まとめ

本遺構は、12個以上の柱穴から構成される掘立柱建物跡で、3間×1間の身舎の南側に1間幅の庇が付く南北棟と推測される。帰属時期は、検出層位から鎌倉時代と推測される。（能登谷）

## 19号建物跡 SB19

### 遺 構 (図19, 写真15)

本遺構は調査④区北部に存在し、N・O31グリッドに位置する。遺構検出面はL I e上面である。本遺構のP2・3が23号住居跡と重複し、P4が19号畑跡と重複しており、本遺構は23号住居跡より新しく、19号畑跡よりは古い。

本遺構は、4個の柱穴がL字状に配され、西側柱列(P1-3)は深いのが、東のP4は浅いものである。西側柱列の規模は3mを測り、柱間距離は北から1.6+1.4m、軸線方位はN24°Eである。また、南側柱列(P3-4)の柱間距離は1.8mを測る。

各ピットの上端における平面形はP1-3は長方形で、P4は方形であり、P2・3の底面は柱材を据える部分が深くなっている。上端の規模は、P1-3は長軸長49~57cm、P4は45×40cmを測り、深さはP1が40cm、P2・3は56・57cm、P4は9cmを測る。

各ピット内の堆積土は、遺構内で統一して捉えることとし、3層に分層した。いずれもL I dを基調とした土で、柱を抜き取った後に自然流入したものと推測される。

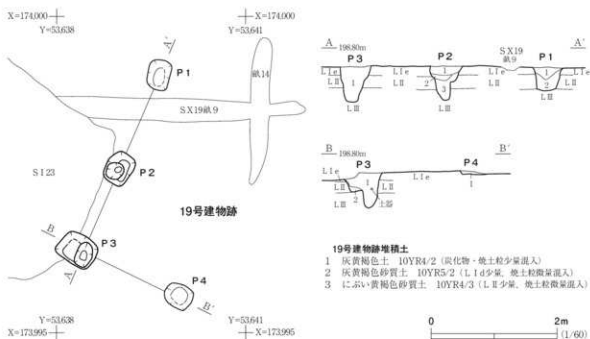


図19 19号建物跡

P2内堆積土から土師器甕片2点、P3内堆積土から土師器甕片1点が出土したが、図示できる資料はなかった。

#### まとめ

本遺構は、柱穴が4個しか検出されず、それらが不均一な柱間距離でL字状に配されていることから、掘立柱建物跡とするには根拠に欠け、柱列跡とするべきかもしれないが、P4に対応してP1の東方に柱穴が存在したと仮定した場合、P4が浅いことから、この穴も浅く、19号畑跡の畝間溝に削平されて消失した可能性も考えられ、2間×1間の小規模な南北棟が推測される。帰属時期は、検出層位から平安時代頃と推測される。(能登谷)

## 第5節 柱列跡

調査④区から柱列跡が4列検出された。その内、7・8号柱列跡は同じ場所で建て替えられたものと推測され、他の2基は小規模なものである。

以下において各遺構について記述するが、規模・柱間距離は底面の中心を結んだ数値である。

### 7号柱列跡 SA07

#### 遺構(図20, 写真16)

本遺構は調査④区北部から中央部にかけて存在し、L33グリッド、M32・33グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。南東に8号柱列跡が主軸を同じくして隣接し、北東隅では15号畑跡と重複し、本遺構の方が新しい。

本遺構は北東-南西主軸の柱列跡で、6個の柱穴で構成される。全長8.03mを測り、軸線方位はN33°Eである。柱間距離は南から0.63+2.40+2.60+1.20+1.20mを測る。各ピットの上端における平面形は円形基調で、全体的な形状は円筒形ないしは楕円状であるが、P6はさらに北側に浅い張り出しを持っている。上端における長径は、P6以外は17~24cm、P6は45cmを測り、深さは7~15cmを測る。各ピット内の堆積土は同一であり、いずれも柱を抜き取った後にL I cを基調とした土が流入したものと推測される。本遺構からは遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は、6個の柱穴から構成される柱列跡で、同一面から検出された15号畑跡に後続する遺構である。同一面において、同様に畑跡に後続し、柱間距離が2mを超える遺構として、北東約15mに18号建物跡が存在することから、18号建物跡と同時期に存在していた可能性も考えられるが、機能は不明である。また、南東に隣接して検出された8号柱列跡と主軸方向が一致し、P2~4は同遺構のP1~3にそれぞれ隣接していることから、機能時期に前後関係が想定されるが、その前後関係は不明である。帰属時期は、検出層位から鎌倉時代と推測される。(能登谷)

### 8号柱列跡 SA08

#### 遺構 (図20, 写真16)

本遺構は調査④区北部から中央部にかけて存在し、L・M33グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。北西に7号柱列跡が主軸を同じくして隣接している。

本遺構は北東-南西主軸の柱列跡で、3個の柱穴で構成される。全長5.10mを測り、軸線方位はN33°Eである。柱間距離は南から2.50+2.60mを測る。各ピットの上端における平面形は円形基調で、全体的な形状は、P1は円錐形、P2・3は円筒形である。上端における長径は23~30cmを測り、深さはP1・3は10cm前後、P2は21cmを測る。各ピット内の堆積土は同一であり、いずれも、柱を抜き取った後にL I cを基調とした土が流入したものと推測される。本遺構からは遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は3個の柱穴から構成される柱列跡で、本遺構の北西に隣接して検出された7号柱列跡とは機能時期に前後関係が想定されるが、どちらが先行するのかわからない。帰属時期は、検出層位から鎌倉時代と推測される。(能登谷)

### 9号柱列跡 SA09

#### 遺構 (図20, 写真16)

本遺構は調査④区南部に存在し、L39グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。南西約2mに24号溝跡が存在する。

本遺構は北東-南西主軸の柱列跡で、2個の柱穴で構成される。柱間距離は2.30mを測り、軸線方位はN10°Eである。各ピットの上端における平面形は円形で、全体的な形状は楕円状である。上端における長径は約35cmを測り、深さはP1が10cm、P2が7cmを測る。各ピット内の堆積土はそれぞれ異なり、P1は砂利混じりのL I cで、P2はL I dを基調としてL I cの砂利が混入していた。また、両ピット内堆積土からは土師器破片が合計3点出土しているが、図示できる資料はなかった。

#### まとめ

本遺構は2個の柱穴から構成される柱列跡で、機能は不明である。帰属時期は、検出層位から鎌倉時代と推測される。(能登谷)

### 10号柱列跡 SA10

#### 遺構 (図20, 写真16)

本遺構は調査④区南東端に存在し、N40グリッドに位置する。遺構検出面はL I e上面である。南に隣接して35号溝跡が存在する。

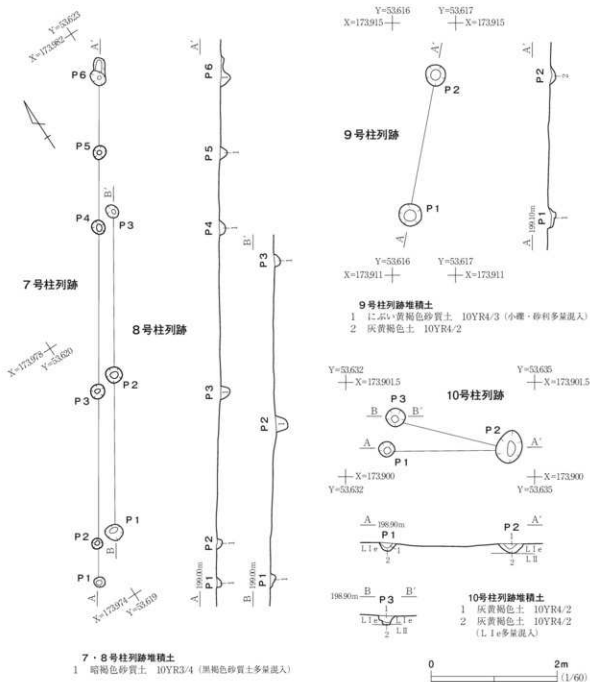


図20 7～10号柱列跡

本遺構は東西主軸の柱列跡で、2個の柱穴で構成されるが、P1の北に隣接して検出されたビット(P3)も本遺構に含めておくことにした。P1-2の柱間距離は1.95mを測り、P3-2の柱間距離は1.90mを測る。各ビットの上端における平面形は、P1・3は円形、P2は楕円形であり、全体的な形状はP1・3は円筒形で、P2は楕円状である。上端における長径は、P1・3はそれぞれ24・28cm、P2は52cmを測り、深さはP1が12cm、P2・3が約24cmを測る。各ビット内の堆積土は同一で、2層に分層された。いずれも柱を抜き取った後にL1dを基調とした土が流入したものと推測され、ℓ2にはL1eが多く混入していた。本遺構からは遺物は出土していない。

## まとめ

本遺構は3個の柱穴から構成される柱列跡で、本来はP1-2、P3-2のどちらの組み合わせが存在したのかを知ることはできないが、P2の規模が他のピットと形状・規模とも異なることから、あるいは以上のような組み合わせの2時期を想定できるのかも知れない。なお、本遺構はさらに東方に延びている可能性があり、P1-2は南に隣接する35号溝跡と主軸方位がほぼ一致していることから、一体となって区画施設として機能していた可能性がある。帰属時期は、検出層位から平安時代と推測される。

(能登谷)

## 第6節 土 坑

調査③区から土坑が1基(42号土坑)、調査④区から土坑が7基(36~41・43号土坑)検出された。検出面の違いから、36号土坑は鎌倉時代頃、他の土坑は奈良・平安時代のものと推測され、さらに、40・41・43号土坑は木炭焼成坑と推測される。

## 36号土坑 SK36 (図21, 写真17)

本遺構は調査④区北部に存在し、N32グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。12号畑跡の畝間溝13と重複し、本遺構の方が新しい。また、北方約3mには遺構内堆積土が近似する18号建物跡が存在する。

上端における平面形は円形を呈し、規模は径約75cmを測る。周壁及び底面はL I dで、南東壁は直立気味、他の周壁は直線的に急外傾している。底面は北西-南東主軸の楕円形を呈し、上下2面存在する。上位面は緩く南へ下降し、下位面はほぼ水平である。底面の規模は、長径50cm、短径40cmを測り、深さは上位面で24cm、下位面で30cmを測る。

遺構内堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ はL I cを基調とした流入土、 $\ell 2$ は人為堆積土と推測される。遺構内から遺物は出土しなかった。

本遺構は、検出層位から鎌倉時代に帰属すると推測されるが、機能は不明である。

(能登谷)

## 37号土坑 SK37 (図21・22, 写真17・38)

本遺構は調査④区中央部に存在し、L・M34グリッドに位置する。遺構検出面はL II上面である。南に28号溝跡が隣接する。

上端における平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北1.4m、東西1.3mを測る。周壁及び底面はL IIである。周壁は緩く外傾し、東壁には起伏が認められる。底面は隅丸長方形を呈し、平坦である。底面の規模は南北90cm、東西80cmを測り、深さは20cmを測る。

遺構内堆積土は3層に分層され、いずれもL I dを基調とした流入土であるが、 $\ell 2$ はL I eを多く含み、 $\ell 3$ はL IIを多く含んでいる。なお、 $\ell 1 \cdot 2$ には長径6~20cmの礫が合計8個混入

していた。ℓ 2から土師器片17点が出土した。

図22-1はロクロ成形の土師器杯で、平底の底部から体部下半が外反して立ち上がり、腰が張る。底面周縁は手持ちヘラケズリされている。2～5は非ロクロ成形の土師器甕片である。2の底面中央には木葉痕が認められ、3～5はハケメ調整されている。

本遺構は、出土遺物から奈良時代に帰属すると推測されるが、機能は不明である。(能登谷)

#### 38号土坑 SK 38 (図21, 写真17)

本遺構は調査④区南部に存在し、L 39・40グリッドに位置する。遺構検出面はL II上面である。北に29号溝跡が隣接する。

上端における平面形は北西-南東主軸の楕円形を呈し、規模は長径2.1m、短径1.45mを測る。周壁及び底面はL IIである。側壁は緩く内湾気味に立ち上がり、両端の壁はやや急に立ち上がっている。底面の平面形は長楕円形を呈し、中央部に向かって両端から緩く下降している。底面の規模は長径1.25m、短径40cmを測り、中央部の深さは63cmを測る。

遺構内堆積土は4層に分層され、いずれもL I eを基調とした流入土で、ℓ 3はL IIを含んでいる。遺構内から遺物は出土しなかった。

本遺構は、検出層位及び堆積土から北に隣接する29号溝跡よりは古い遺構と推測され、おおよそ奈良時代頃に帰属するものと推測される。なお、機能は不明である。(能登谷)

#### 39号土坑 SK 39 (図21, 写真17)

本遺構は調査④区北部に存在し、N・O 31グリッドに位置する。遺構検出面はL I e上面である。遺構の北側で19号畑跡の畝間溝11・13と重複し、本遺構の方が古い。また、北西約1.5mには23号住居跡、北に隣接して19号建物跡のP 4が存在する。

上端における平面形は北西-南東主軸の不整楕円形を呈し、規模は長径1.47m、短径1.18mを測る。周壁はL I eで、北西壁及び北東壁では立ち上がりやや急であるのに対して、南東壁及び南西壁では緩やかな立ち上がりである。底面の平面形は楕円形を呈し、全体的に不整で、南西部は浅い窪みになっている。底面の規模は長径1.25m、短径95cmを測り、最深部の深さは20cmを測る。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれもL I dを基調とした流入土であるが、焼土粒・炭化物を多く含んでいる。遺構内堆積土から土師器甕片25点が出土したが、図示できる資料はなかった。

本遺構は、堆積土に焼土粒や炭化物を多く含んでいることが特徴的であるが、これは近接する23号住居跡を起源とする可能性が高いと考えられる。帰属時期は検出層位から、奈良・平安時代と推測される。なお、機能は不明である。(能登谷)

#### 40号土坑 SK 40 (図21, 写真18)

本遺構は調査④区北部に存在し、N 33グリッドに位置する。遺構検出作業の際に遺構上部を削

平してしまい、最終的な遺構検出面はLⅡ上面である。

平面形は北西-南東主軸の隅丸長方形を呈し、規模は長軸72cm、短軸40～50cmを測る。周壁の残存高はわずか3cmで、底面には若干の起伏が認められる。また、底面は酸化鉄が表出し、硬い面となっている。

遺構内堆積土は2層に分層され、ℓ1は炭化物層で、遺構北端部では焼土塊が少量混入していた。遺構内から遺物は出土しなかった。

本遺構は壁面や底面に焼面が確認できなかったが、焼土塊を含む炭化物層が底面近くに堆積していることから、木炭焼成遺構と推測され、帰属時期は奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

#### 41号土坑 SK41 (図21・22, 写真18)

本遺構は調査④区中央部に存在し、M37グリッドに位置する。遺構検出面はLⅡ上面である。遺構の北東部で32号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は東西主軸の隅丸長方形を呈し、上端における規模は長軸1.2m、短軸72cmを測る。周壁は直立ないしは急外傾して立ち上がり、大部分はLⅡであるが、下位がLⅢの部分がある。西壁及び南壁は部分的に焼成化しており、焼成化は壁面から約1cmのところまで及んでいる。底面はLⅢで、壁際が中央に向かって緩く下降しており、それより内側は若干の起伏が認められるものの、ほぼ平坦である。底面の規模は長軸1.1m、短径60cmを測り、深さは20cmを測る。

遺構内堆積土は3層に分層され、いずれもLⅠdを基調とした流入土である。ℓ1には焼土粒、ℓ2には炭化物が多く含まれ、ℓ3にはLⅠeが多く含まれている。なお、西壁際のℓ2から残存状態の良い炭化材が2点出土しており、一方(長さ19cm、幅6cm)は壁に沿い、他方(長さ8cm、幅6cm)はその下方に直交していた。

ℓ2上面から図22-6の土器器瓶片3点が出土した。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部付近で緩く外反し、口縁端部は面取りされて、下端が下方に引き出されている。口縁部付近の体部にはタタキメが認められ、体部下半は縦位のヘラケズリであり、体部中央には4条の沈線が巡り、沈線間に櫛歯状工具による波状文が描かれている。なお、器面の色調は黒色である。

本遺構は壁面が焼成化しており、炭化物層が底面近くに堆積していることから木炭焼成遺構と推測され、帰属時期は出土遺物から平安時代と推測される。(能登谷)

#### 42号土坑 SK42 (図22, 写真18)

本遺構は調査③区西部中央に存在し、J42グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面であるが、さらに上層から掘り込まれていた可能性もある。本遺構の東半部は重機により削平してしまった。重複する遺構や近接する遺構はない。

本遺構の上端における平面形は残存部でN2°E主軸の長楕円形を呈する。規模は、長さ1.4m、幅35cm、深さ55cmを測る。壁面は底面から急角度で立ち上がり、北側上方部で緩やかに外反する。



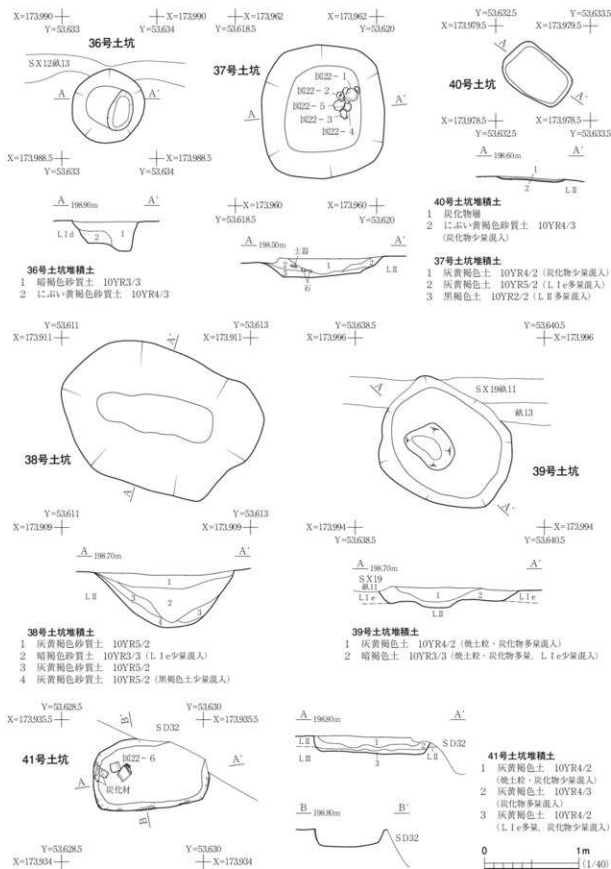


図21 36~41号土坑

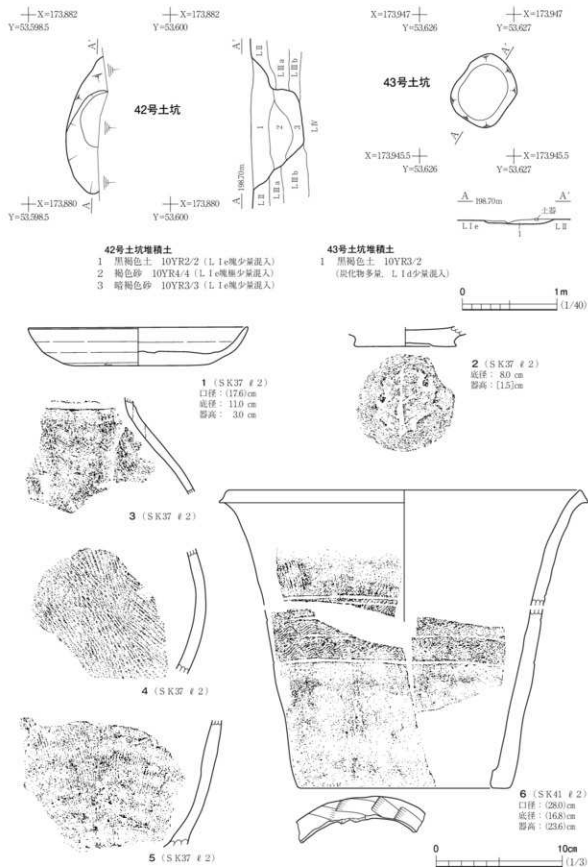


図22 42・43号土坑, 37・41号土坑出土遺物

遺構内堆積土は3層で、いずれも人為堆積土と判断した。すなわち、各層位にL I e塊が均一に混入していること、堆積土の色調・土質がL II・III a・III bに類似していることから、本遺構掘削直後に、掘削排土を用いて埋め戻したと考えられる。当初は、下層に確認できた土器を埋設した遺構の可能性を想定したが、遺構精査の結果、これらの土器は本遺構に伴うものではなく、L IVに含まれるものであると判断した。よって、本遺構の性格は不明である。

本遺構から遺物は出土しなかったが、検出面の年代観及び、遺構面がそれより上層である可能性を考慮すると、奈良・平安時代以降に構築され直後に埋め戻されたと考えられる。(下 山)

#### 43号土坑 SK 43 (図22, 写真18)

本遺構は調査④区中央部に存在し、M36グリッドに位置する。遺構検出作業の際に遺構上部を削平してしまい、遺構検出面は南端ではL I e上面で、それ以外はL II上面である。

上端における平面形は北東-南西主軸の隅丸長方形を呈し、規模は長軸73cm、短軸60cmを測る。周壁の残存状況は悪く、緩く立ち上がっている。底面は平面形が楕円形を呈し、若干の起伏が認められ、短軸方向では緩く湾曲している。底面の規模は長軸60cm、短軸45cmを測り、深さは4~7cmを測る。遺構内堆積土は1層で、炭化物が多く含まれている。

遺構内堆積土から土師器甕片7点が出土したが、図示できる資料はなかった。

本遺構は、壁面や底面に焼面が確認できなかったが、炭化物層が底面近くに堆積していることから木炭焼成遺構と推測され、帰属時期は奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

## 第7節 畑 跡

調査③・④区において、大小12カ所の畑跡が検出された。これらの特徴は、並行する直線的な溝跡が規則的に並ぶというもので、北に隣接する調査⑤中区でも平成24年度の調査で検出されている。今回の調査で検出した畑跡は、検出層位の違いから、L I d上面で検出された12・15~18・22・24号畑跡、L I e・II上面で検出された13・19~21・23号畑跡に分かれ、前者は平安時代から鎌倉時代、後者は奈良・平安時代のもものと推測される。

調査において検出された溝跡は、畝と畝の間の溝跡であることから、「畝間溝」と呼称するが、挿図中では「畝1」などと省略して表示した。また、畝の幅は相対する畝間溝の下端間の距離を計測した。なお、10・11・14号畑跡は欠番である。

#### 12号畑跡 SX 12

##### 遺 構 (図23, 写真19)

本遺構は、調査④区北部に存在し、M30・31グリッド、N30~32グリッド、O30・31グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。18号建物跡及び13号畑跡、36号土坑と重複し、13

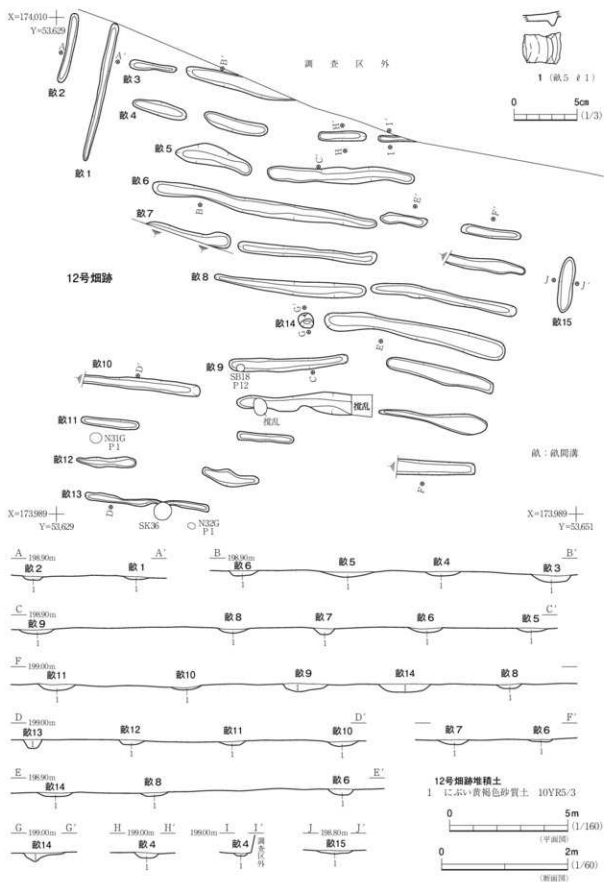


図23 12号畑跡・出土遺物

号畑跡より新しく、18号建物跡及び36号土坑よりは古い。また、北端は調査区外に延びている。

本遺構は、南北方向の3条の溝と東西方向の28条の溝からなる。東西方向の溝の内、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、15条の畝間溝に整理された。全体の規模は、東西235m、南北20m以上である。畝間溝は、直線的なものが主体をなすが、緩く湾曲するものや蛇行するものがある。東西方向の畝間溝は北半のものと南半のものとは、主軸方向が若干ずれているが、それぞれの区域ではほぼ平行している。畝間溝の断面形は皿状のものが主体をなし、逆台形のものもある。畝間溝の規模は、長さ2～9.6m、幅32～90cm、深さ4～12cmを測る。畝の幅は1～1.7mを測り、1.2～1.5mのものが主体をなしている。遺構内堆積土は1層で、L I cが流入したものである。

#### 遺物 (図23)

畝間溝5～12内堆積土より縄文土器片1点、土師器片14点、須恵器片1点、陶器片1点が出土した。図23-1は畝間溝5から出土した陶器小皿の底部片で、瀬戸・美濃大窯第1段階から第2段階の製品である。

#### まとめ

本遺構は、東西方向の畝間溝を主体にする畑跡で、北方へさらに展開しているものと推測される。畝間溝は洪水砂のL I cによって埋没しており、検出層位から鎌倉時代頃に帰属すると推測されるが、出土遺物から室町時代まで下る可能性もある。(能登谷)

### 13号畑跡 SX13

#### 遺構 (図24, 写真20)

本遺構は、調査④区北西部に存在し、M29～32グリッド、N29・30グリッドに位置する。遺構検出面はL I e上面である。12号畑跡及び27号溝跡と重複し、本遺構は27号溝跡より新しく、12号畑跡より古い。なお、北端及び西端は調査区外へ延びている。

本遺構は、北東-南西方向に主軸を持つ18条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、8条の畝間溝に整理された。全体の規模は、北東-南西22m以上、北西-南東4.5m以上である。畝間溝は、直線的なものや緩く湾曲するもの、緩く蛇行するものがあり、方位が多少ぶれるものも認められるが、隣り合う畝間溝とはほぼ平行している。畝間溝の断面形は皿状のものが主体をなし、逆台形やボウル状のものもある。畝間溝の規模は、長さ60cm～9.86m、幅10～52cm、深さ4～12cmを測り、幅は30cm前後のものが主体をなす。畝の幅は40cm～1.9mで、北部の畝間溝2・4間で最大幅を測り、中央部の畝間溝2・6間及び2・4間で1.6m前後を測る他は、60～90cmのものが主体をなしている。遺構内堆積土は1層で、L I dが流入したものである。

#### 遺物 (図24)

畝間溝3・6・8などの堆積土より土師器片7点、須恵器片5点が出土した。図24-1は須恵

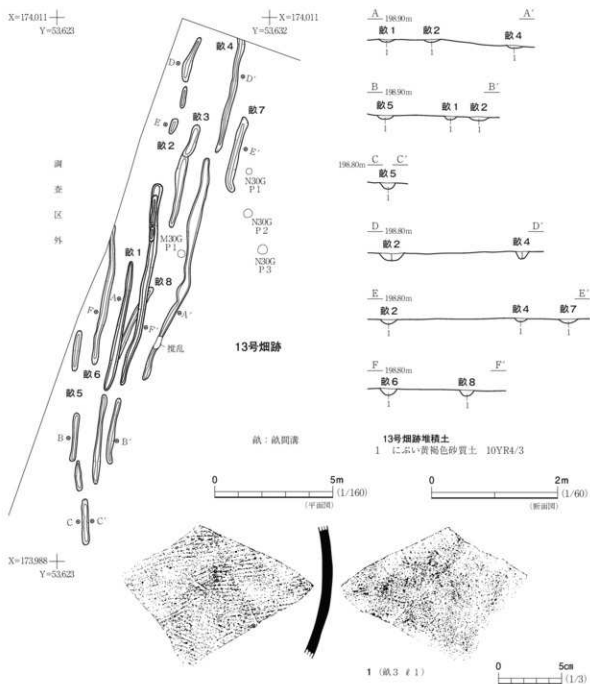


図24 13号畑跡・出土遺物

器壁片で、外面には平行するタタキメが認められる。

まとめ

本遺構は、南北方向の鉄間溝からなる畑跡で、北方及び西方にさらに展開しているものと推測される。本調査区から検出された畑跡の中では、鉄幅が狭い部類に入る。検出層位から奈良・平安時代に帰属すると推測される。

(能登谷)

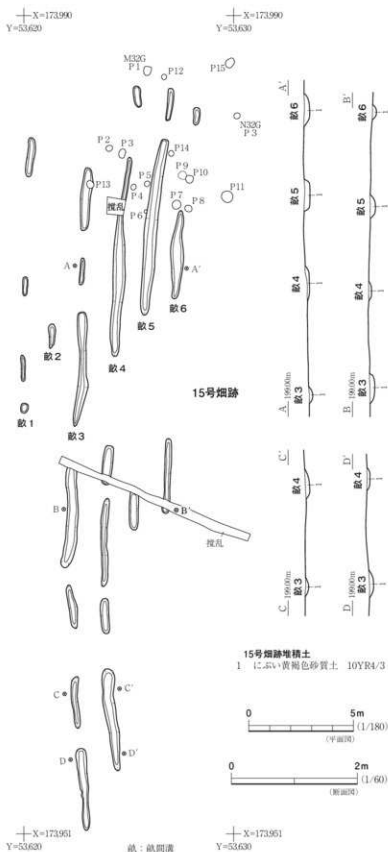


図25 15号畑跡

## 遺構 (図25, 写真21)

本遺構は、調査④区の北部南側から中央部にかけて存在し、L33グリッド、M32～35グリッドに位置する。遺構検出面はL1d上面である。7号柱列跡及び小穴群と重複し、いずれの遺構よりも本遺構の方が古い。また、北東には12号畑跡、東方には16号畑跡が近接する。

本遺構は、南北方向に主軸を持つ24条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、6条の畝間溝に整理された。全体の規模は、南北35.5m、東西7.8mを測る。畝間溝は、直線的なものや緩く湾曲するもの、緩く蛇行するものがあり、ほぼ平行している。なお、畝間溝4～6は途中の浅い窪みによって広く途切れている部分がある。畝間溝の断面形は皿状を呈する。畝間溝の規模は、長さ45cm～9.5m、幅16～60cm、深さ3～10cmを測る。畝の幅は、短い畝間溝2が1条のみ存在する畝間溝1・3間の大部分では2.6m前後を測るが、畝間溝2部分及びそれ以外の場所では1～1.6mを測る。遺構内堆積土は1層で、L1c

が流入したものである。遺構内から遺物は出土しなかった。

#### まとめ

本遺構は、南北方向の畝間溝からなる畑跡で、畝間溝は洪水砂のL I cによって埋没している。検出層位から鎌倉時代頃に帰属すると推測される。(能登谷)

### 16号畑跡 S X 16

#### 遺 構 (図26, 写真22)

本遺構は、調査④区の北部南側から中央部にかけて存在し、N 34グリッド、O 33～35グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。遺構の東端は調査区外へ延びており、西方には主軸方向が直交する15号畑跡、南方には主軸方向が並行する24号畑跡が近接する。南方の24号畑跡と本遺構の関係であるが、24号畑跡との間隔が本遺構の畝間溝の間隔より広めであることから、本遺構とは一連の遺構ではないと判断した。なお、遺構南半は検出作業時に遺構の西側を削平している。

本遺構は、東西方向に主軸を持つ22条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、17条の畝間溝に整理された。全体の規模は、南北25m、東西11.2m以上である。畝間溝は、直線的なものや緩く湾曲するもの、緩く蛇行するものがあり、ほぼ平行している。畝間溝の断面形は皿状を呈する。畝間溝の規模は、長さ1～8.1m以上、幅26～52cm、深さ5～10cmを測る。畝の幅は、1.1～1.6mを測る。遺構内堆積土は1層で、L I cが流入したものである。遺構内堆積土から土師器片3点、陶磁器片1点が出土したが、図示できる資料はなかった。

#### まとめ

本遺構は、東西方向の畝間溝からなる畑跡で、畝間溝は洪水砂のL I cによって埋没している。検出層位から鎌倉時代頃に帰属すると推測される。(能登谷)

### 17号畑跡 S X 17

#### 遺 構 (図27, 写真23)

本遺構は、調査④区南西部に存在し、K 37・38グリッド、L 37・38グリッド、M 37グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。なお、西端は調査区外へ延びている。

本遺構は、東西方向に主軸を持つ18条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、9条の畝間溝に整理された。全体の規模は、東西15m以上、南北12.5mである。畝間溝は、直線的なものや緩く湾曲するもの、緩く蛇行するものがあり、方位が多少ぶれるものも認められるが、隣り合う畝間溝とはほぼ平行している。畝間溝の断面形は皿状を呈する。畝間溝の規模は、長さ90cm～12.65m、幅22～60cm、深さ3～14cmを測る。畝の幅は1.15～1.6mを測る。遺構内堆積土は1層で、L I cが流入したものである。畝間溝5内堆積土から須恵器片1点が出土したが、図示できる資料はなかった。



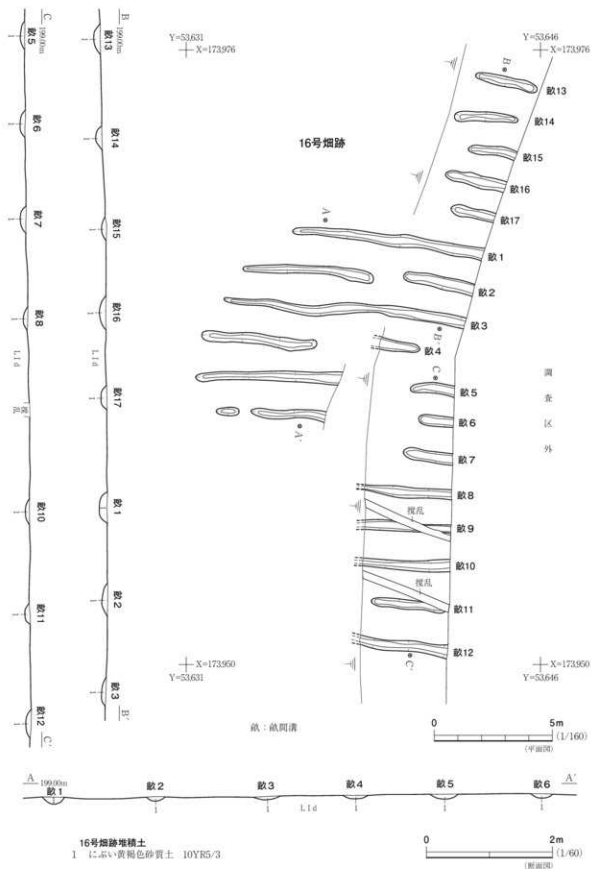


图26 16号烟跡

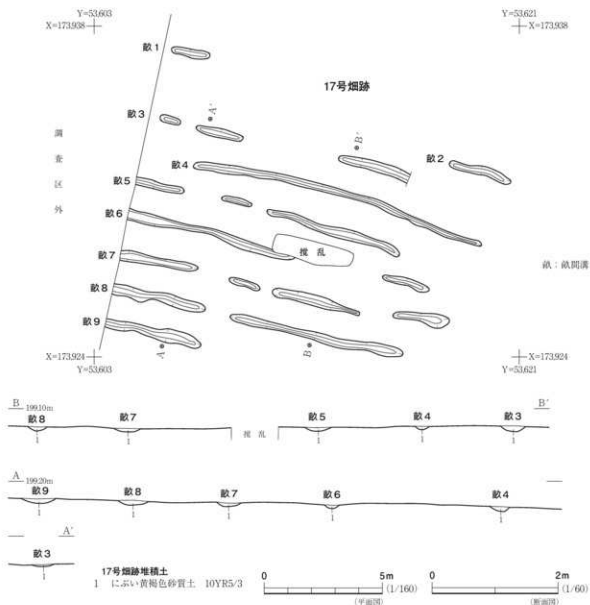


図27 17号畑跡

まとめ

本遺構は、東西方向の畝間溝からなる畑跡で、畝間溝は洪水砂のL I cによって埋没している。検出層位から鎌倉時代に帰属すると推測される。(能登谷)

18号畑跡 S X 18

遺 構 (図28, 写真24)

本遺構は、調査③区南半部に広がる畑跡である。検出面はL I d上面で、K 42・43グリッド、L 42・43グリッドに位置する。標高は198.6m、規模は東西10.4m、南北11.9mを測る。重複遺構や周辺遺構はない。L I cを人力で除去したところ、概ね北東-南西方向に主軸を持つ規則的に並ぶ溝跡群として検出された。溝の堆積土とL I dは土色・土質の違いが明瞭で、比較的容易に遺構

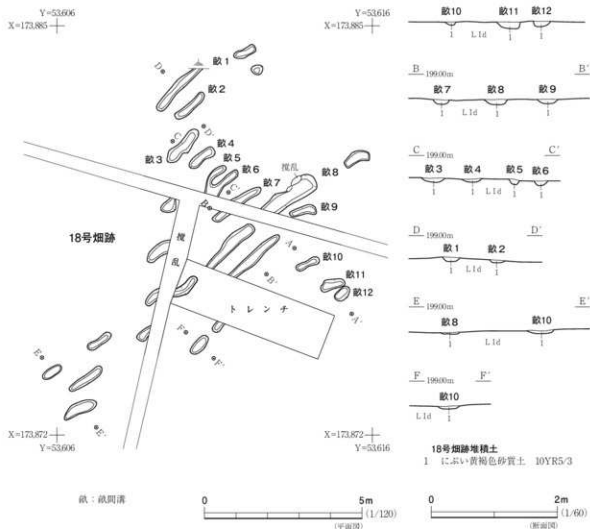


図28 18号畑跡

を認識することができた。

本遺構は、27条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、12条の畝間溝に整理された。畝間溝は概ね北東方向に主軸を持つ。畝間溝は、ほぼ直線的ではあるものの緩やかなカーブを描くものや、方位の多少のぶれが認められる。畝間溝の規模は、長さ55cm～1.9m以上、幅20～65cm、深さ4～12cm、隣接する溝との間隔は下端で20～45cmを測る。遺構内堆積土は1層で、L I cに相当する。畝間溝の断面形は逆蒲鉾形と逆台形を呈するものがあるが、前者が多い。畝間溝の堆積土中から土師器甕片4点が出土したが、図化しなかった。

#### まとめ

本遺構は、12条の畝間溝からなる畑跡で、L I d上面で検出された。調査③区で検出された畑跡の中では中規模の面積を持つ。本遺構の年代は、検出層位から平安～鎌倉時代の範疇に収まるものと想定される。

(下 山)



新旧関係は認められなかった。全体の規模は、東西15m、南北15m以上である。

畝間溝は、直線的なものが主体をなすが、緩く湾曲するものや緩く蛇行するものもあり、隣り合う畝間溝とはほぼ平行している。畝間溝の断面形は皿状のものが主体をなし、逆台形やボウル状のものもある。畝間溝の規模は、長さ60cm～6.9m、幅20～55cm、深さ4～14cmを測り、北西部及び東部では長さ2.2m以下のものが多く、中央部では4m以上のものが多く検出された。畝の幅は、北西部では55～85cmを測るのに対し、その東方では90cm～2.2mを測り、1.2～1.5mのものが主体をなしている。

遺構内堆積土は1層で、L I dが流入したものである。固く締まっていた。遺構内堆積土から土師器片1点が出土したが、図示できる資料はなかった。

#### まとめ

本遺構は、東西方向の畝間溝を主体とし、南東部では南北方向の畝間溝が交差する畑跡である。検出層位から奈良・平安時代に帰属すると推測される。(能登谷)

### 20号畑跡 S X 20

#### 遺構 (図30, 写真26)

本遺構は、調査③区北半部に広がる畑跡である。K 40～42グリッド、L 40～42グリッド、M 41・42グリッドに位置し、L I e 上面で検出された。標高は198.7～198.8mで、規模は東西22.5m、南北25.8mを測り、北東部分は調査④区へと延びるが、後世の削平が著しく確認することができなかった。本遺構は30号溝跡と重複しており、本遺構が古く、南側には21号畑跡が存在する。L I dを人力で除去したところ、概ね北東-南西方向に主軸を持つ並行する溝跡群として検出された。溝の堆積土とL I e (検出面)は土色と土質の違いが大きいことから、比較的明瞭に遺構を認識することができた。

本遺構は、50条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、35条の畝間溝に整理した。畝間溝は、ほぼ直線的ではあるものの緩やかなカーブを描くものや、方位の多少のぶれが認められる。畝間溝の規模は、長さ76cm～10m以上、幅14～74cm、深さ6～18cm、隣接する溝との間隔は下端で22cm～1.14mを測る。遺構内堆積土は1層で、L I dに相当する。畝間溝の断面形は逆蒲鉾形と逆台形を呈するものがあるが、前者が多い。

#### 遺物 (図31, 写真38)

本遺構からは土師器片37点、須恵器片7点が出土した。その中で3点を図化した。

図31-1・2は土師器杯である。いずれも内面はヘラミガキ調整後に黒色処理が施されている。1は体部下端に回転ヘラケズリ調整を施す。底面には回転糸切り痕を残す。2は体部外面上部から底面全面にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。同図3は内面黒色処理が施された土師器高杯の脚部である。杯部の大部分が欠損している。外面にハケメ調整を施し、下部には沈線が巡っている。内面上部には指頭圧痕が施されている。

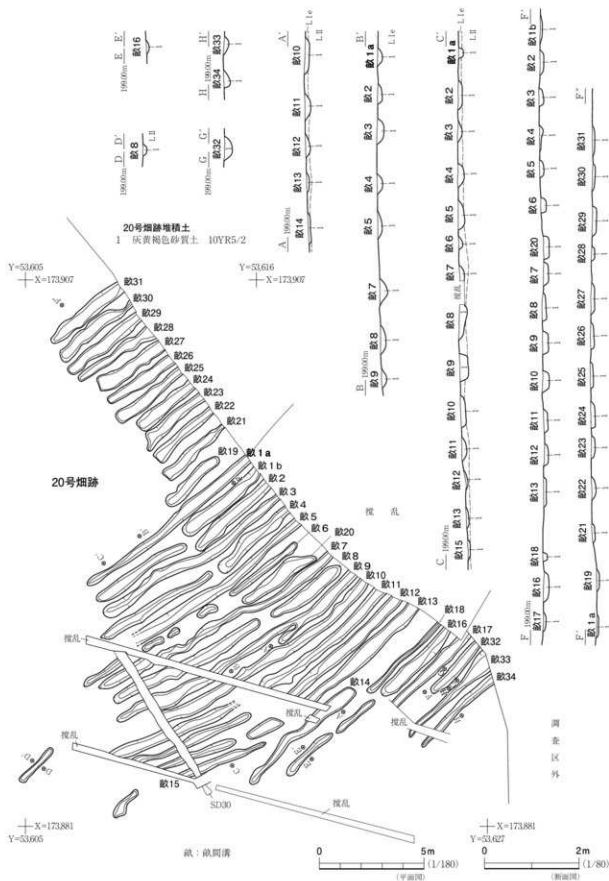


図30 20号畑跡

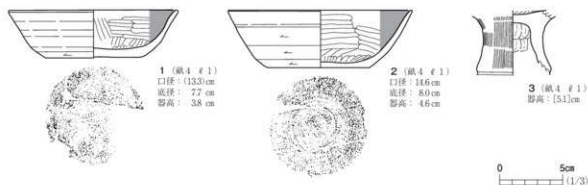


図31 20号畑跡出土遺物

### まとめ

本遺構は、概ね北東方向に延びる35条の畝間溝からなる畑跡である。調査③区の中で検出された畑跡の中では最も大きな面積を持つ。出土遺物・検出層位及び遺構内堆積土を考慮すると、本遺構は奈良・平安時代に造られ、9世紀初頭～前葉頃の洪水によって廃絶したものと想定される。なお、畝間溝14から出土した炭化物の放射性炭素年代は $1870 \pm 20\text{BP}$ (弥生時代後期頃)と推測されており、年代に誤差が生じている。(下 山)

### 21号畑跡 S X 21

#### 遺 構 (図32, 写真27)

本遺構は、調査③区南半部に広がる畑跡である。L 43・44グリッドに位置し、L II上面で検出された。標高は198.6 m、規模は東西9.8 m、南北10 mを測る。本遺構の東側約5 mには33号溝跡が存在する。重複遺構は確認されなかった。L I dを人力で除去したところ、概ね北東-南西方向に並行する溝跡群として検出された。溝の堆積土とL IIは土色と土質の違いが大きく、比較的明瞭に遺構を認識することができた。

本遺構は、19条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、13条の畝間溝に整理された。畝間溝は、ほぼ直線的ではあるものの緩やかなカーブを描くものや、方位の多少のずれが認められる。畝間溝の規模は、長さ66cm～6.7 m以上、幅20～60cm、深さ3～15cm、隣接する溝との間隔は下端で30cm～1.5 mを測る。遺構内堆積土は1層で、L I dに相当する。畝間溝の断面形は逆蒲鉾形と逆台形を呈するものがあるが、前者が多い。

### まとめ

本遺構は、概ね北西方向に延びる13条の畝間溝からなる畑跡である。調査③区の中で検出された畑跡の中では中規模の面積を持つ。本遺構からの出土遺物はなく、年代を決定することは困難であるが、検出層位及び遺構内堆積土を考慮すると、本遺構は奈良・平安時代頃に造られ、9世紀初頭～前葉頃の洪水によって廃絶したものと想定される。(下 山)

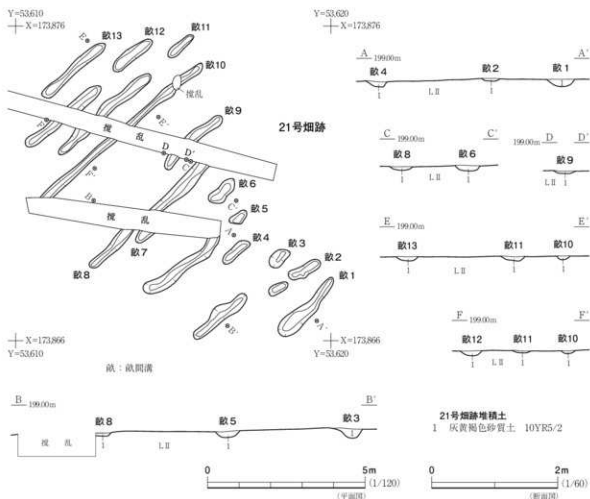


図32 21号畑跡

### 22号畑跡 S X 22

#### 遺 構 (図33, 写真28)

本遺構は、調査④区南部に存在し、M37・38グリッド、N37～39グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。西方には17号畑跡、北方には24号畑跡が隣接する。なお、遺構南端付近は検出作業時に遺構の西側を削平している。

本遺構は、東西方向に主軸を持つ9条の溝からなり、同一軸線上に並ぶものに関しては、一連の畝間溝として同一の番号を付すことにし、8条の畝間溝に整理された。全体の規模は、東西132.2m、南北125.5mを測る。

畝間溝は、直線的なものや緩く湾曲するもの、緩く蛇行するものがあり、隣り合う畝間溝とはほぼ平行している。畝間溝の断面形は皿状のものが主体をなし、ポウル状のものもある。削平を受けていない畝間溝1～6の規模は、長さ60cm～9.3m、幅30～55cm、深さ3～13cmを測り、北側の畝間溝1～3は長くて幅が広めであるのに対し、南側の畝間溝4～6は短くて狭いものである。畝の幅は1.3～1.5mを測る。遺構内堆積土は1層で、L I dが流入したものである。畝間溝2・8内



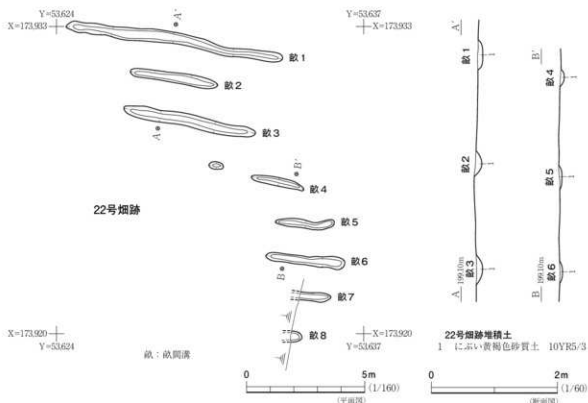


図33 22号畑跡

堆積土から土師器片各1点が出土したが、図示できる資料はなかった。

#### まとめ

本遺構は、東西方向の畝間溝からなる畑跡で、畝間溝は洪水砂のL I cによって埋没している。検出層位から鎌倉時代に帰属すると推測される。(能登)

### 23号畑跡 S X 23

#### 遺構 (図34, 写真29)

本遺構は、調査③区北東部に位置する畑跡である。K 39・40グリッドに位置し、L II 上面で検出された。標高は198.7m、規模は東西51m、南北5mを測るが、本遺構の北西部は調査区外に

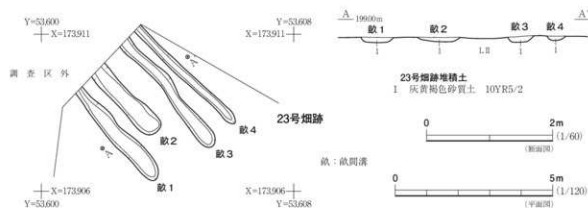


図34 23号畑跡

延びており、正確な規模は不明である。本遺構と重複する遺構は確認されなかったが、南東約3mには20号畑跡が存在する。L I dを人力で掘削している段階で検出された。溝の堆積土とL IIは土色と土質の違いが不明瞭で、遺構認定に時間を要したが検出面精査によって、遺構プランを確認、概ね北西-南東方向に主軸を持つ畑跡と認識した。

本遺構は、4条の畝間溝からなり、検出順に畝間溝1~4と呼称することとした。畝間溝は、ほぼ直線的である。畝間溝の規模は、長さは短いもので2.75m以上、長いもので4.35m以上、幅30~75cm、深さ6~10cm、隣接する溝との間隔は下端で45~95cmを測る。遺構内堆積土は1層で、L I dに相当する。畝間溝の断面形は逆漏斗形を呈する。本遺構からは土師器甕片1点が出土したが、図化しなかった。

### まとめ

本遺構は、概ね北東方向に延びる4条の畝間溝からなる畑跡である。L II上面で検出された。調査③区で検出された畑跡の中では、小規模の面積を持つ。本遺構の所属時期は検出層位及び遺構内堆積土を考慮すると奈良・平安時代頃に造られ、9世紀初頭~前葉頃の洪水によって廃絶したものと想定される。

(下 山)

### 24号畑跡 S X 24

#### 遺 構 (図35, 写真30)

本遺構は調査④区中央部南半の東辺に存在し、N 36・37グリッド、O 36・37グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。北方には主軸方向が並行する16号畑跡が近接し、南西にも同じ主軸方向の22号畑跡が近接している。北方の16号畑跡と本遺構の関係であるが、16号畑跡との間

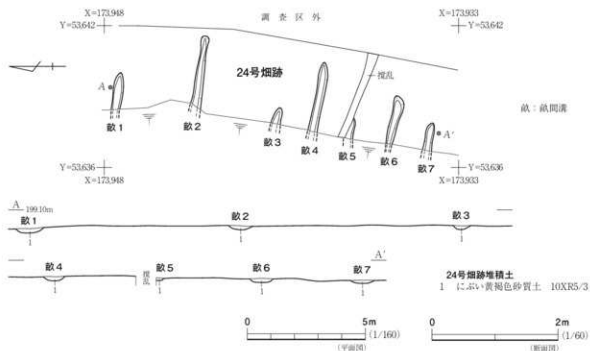


図35 24号畑跡

隔が同遺構の畝間溝の間隔より広めであることから、本遺構とは一連の遺構ではないと判断した。なお、検出作業時に遺構の西側を削平している。

本遺構は、東西方向に主軸を持つ直線的な並行する7条の畝間溝からなり、全体の規模は、東西3.6m以上、南北13.7mである。畝間溝の断面形は皿状を呈し、畝間溝の規模は、残存長70cm～31m、幅25～45cm、深さ5～9cmを測る。畝の幅は、南半では14～15mであるが、北半では3.1～3.3mを測る。遺構内堆積土は1層で、L I cが流入したものである。畝間溝4内堆積土から土師器片4点が出土したが、図示できる資料はなかった。

#### まとめ

本遺構は、東西方向の畝間溝からなる畑跡で、畝間溝は洪水砂のL I cによって埋没している。北半の畝幅は南半の畝幅の2倍であることから、畝間溝1・2と畝間溝2・3のほぼ中間には畝間溝が存在したことが推測される。検出層位から鎌倉時代に帰属すると推測される。(能登谷)

## 第8節 溝 跡

調査③区から溝跡が3条(30・33・36号溝跡)、調査④区から溝跡が9条(12・24・26～29・31・32・35号溝跡)検出された。検出面の違いから、24・26号溝跡は鎌倉時代、他の溝跡は奈良・平安時代のもので推測される。

#### 12号溝跡 S D 12 (図36, 写真31)

本遺構は調査④区北東部に存在し、O 31・32グリッド、P 30・31グリッドに位置する。遺構検出面は、北側ではL I e上面、南側ではL II上面である。平成23年度に調査した調査⑤上区から延びてくる溝跡で、南端は調査区外に延びている。

本遺構は北東-南西主軸の溝跡で、北半は直線的であるが、南半は緩い弧状をなし、南端はさらに東側へ湾曲している。断面形は、逆台形ないしはV字状、U字状を呈している。規模は、長さ19.8m、上端幅44～72cm、深さ14～26cmを測る。側壁はL I e～IIで、直線的ないしは内湾気味に外傾し、起伏が認められる。底面はL IIIで、中央部から南部にかけては工具痕による起伏が顕著である。北へ緩く下降し、両端における比高差は約10cmを測る。遺構内堆積土は5層に分層され、L I dを基調とした流入土である。

遺構内堆積土から土師器片が1点出土したが、図示できる資料ではなかった。

本遺構は、北側に隣接する調査⑤上区へと延びる溝跡で、機能として水路が推測される。帰属時期は検出層位から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

#### 24号溝跡 S D 24 (図36・37, 写真31・32・38)

本遺構は調査④区南部に存在し、K 39グリッド、L 39・40グリッド、M 40・41グリッド、N

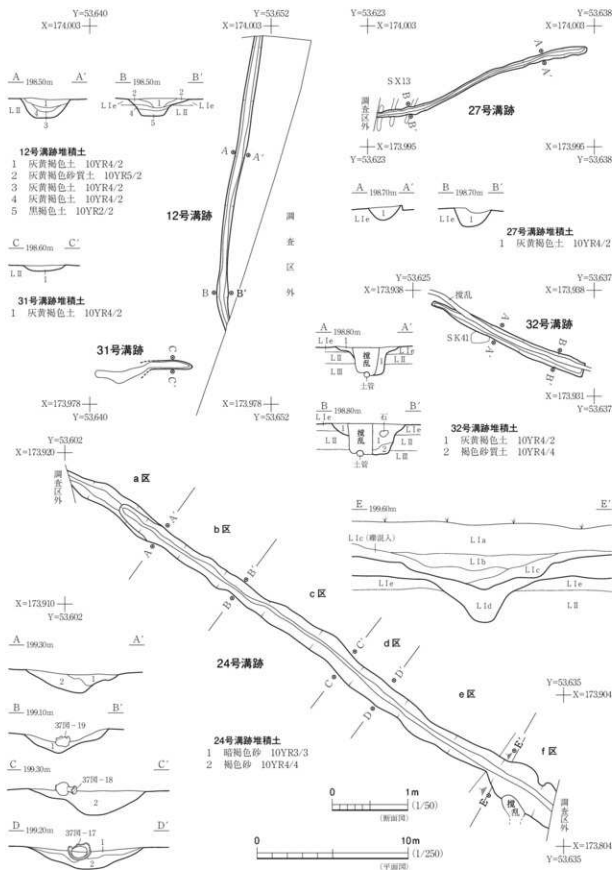


図36 12・24・27・31・32号溝跡

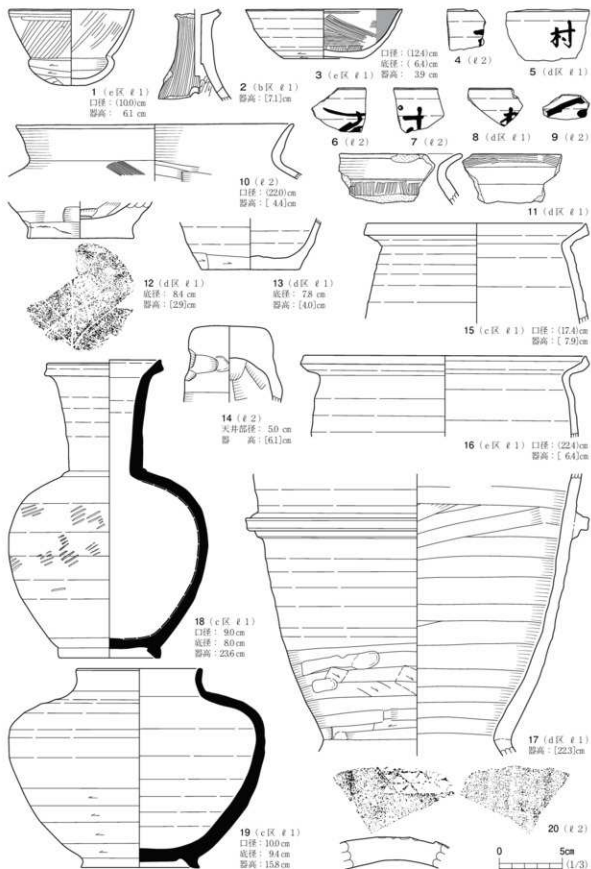


图37 24号溝跡出土遺物

40・41グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。L I e上面で検出された29号溝跡とはほぼ同じ位置に存在する。なお、北西端及び南東端は調査区外に延びている。

本遺構は北西-南東主軸の直線的な溝跡で、東半は緩く蛇行しており、断面形は、幅広のV字状ないしはU字状、碗状を呈している。規模は、長さ40mで、上端幅は南東部では25mを測り、それより北西では1.1~1.6mを測る。深さは北西部では6~15cm、それより南東では27~40cmを測る。側壁及び底面はL I dである。側壁は直線的ないしは内湾して緩く立ち上がっており、南東部では起伏が認められる。底面は幅が狭い部分が多く、起伏が所々に認められ、北西部の底面が一段高くなっている部分より南東では、その両端における顕著な比高差は認められない。遺構内堆積土は2層に分層され、L I cが流入した後の窪みにL I bが堆積したものである。なお、ℓ1の砂利層は遺構上部を含めて、周囲に広く堆積していた。

遺構内堆積土から縄文土器片36点、土師器片791点、須恵器片40点、瓦片1点、刺片2点が出土した。その内、特徴的なものを図37に図示した。

図37-1は土師器小型丸底鉢である。口縁部は内外面ともヘラミガキされ、体部外面はヘラケズリされている。2は土師器器台の脚部で、台部から円孔が貫通し、側面にも円孔がある。外面はヘラミガキされ、赤色塗彩されている。3はロクロ成形の土師器杯で、体部下端から底面全面が回転ヘラケズリされている。4~9は墨書土器で、土師器杯の体部に墨書されている。5は「村」と読めるが、他は判読不明である。10~12は非ロクロ成形の土師器甕で、10・11は口縁部がヨコナデされ、体部にはハケメが認められる。13・15・16はロクロ成形の土師器甕で、15・16の口縁部は面取りされ、上端が上方へ引き出されている。14は杵形支脚である。17はロクロ成形の土師器甕である。体部上半には箍状の突帯が巡っている。18は球胴の須恵器長頸瓶で、頸部下端にはリング状の突帯が巡り、体部にはタキメが認められる。19は須恵器短頸甕で、口縁部が直立し、体部は肩が張っている。20は平瓦で、外面には三角形を重層させた押型文、内面には布目瓦痕が認められる。以上の図示した遺物は、1・2・10は古墳時代前期のもので、他は平安時代のもので主体をなす。

本遺構は29号溝跡が埋没していく過程における溝跡で、L I cによって概ね埋没し、最終的にはL I bによって完全に埋没している。遺構の機能としては水路や区画溝が推測され、帰属時期は検出層位から鎌倉時代頃と推測される。(能登谷)

#### 26号溝跡 S D 26 (図39, 写真32)

本遺構は調査④区中央部に存在し、L 34・35グリッドに位置する。遺構検出面はL I d上面である。当初、畑跡の畝間溝の一部かと推測したが、周辺から他に並行する溝跡は検出されなかった。

本遺構は東西主軸の直線的な溝跡で、横断面形は鍋底状である。規模は、長さ48m、上端幅55~80cm、深さ6~9cmを測る。周壁及び底面はL I dで、周壁の立ち上がりは緩く、底面も緩く湾曲している。遺構内堆積土は1層で、L I cが流入したものである。遺物は出土しなかった。

本遺構は、同一面から検出されている畑跡の畝間溝と形状が似ている。機能は不明であるが、帰属時期は検出層位から鎌倉時代頃と推測される。(能登谷)

#### 27号溝跡 S D 27 (図36, 写真33)

本遺構は調査④区北部に存在し、M31グリッド、N30・31グリッドに位置する。遺構検出面はL I e 上面である。23号住居跡及び13号畑跡、19号畑跡と重複し、23号住居跡よりは新しく、13・19号畑跡よりは古い。また、西端は調査区外に延びている。

本遺構は南西から北東へ緩く蛇行しながら延びる溝跡で、断面形はボウル状を呈している。規模は、長さ14.7m、上端幅30～65cm、深さ9～20cmを測る。側壁はL I e～Ⅱで直線的に外傾し、底面はLⅡで緩く南西へ下降している。両端における比高差は約6cmを測る。遺構内堆積土は1層で、L I d が流入したものである。遺構内からは遺物は出土しなかった。

本遺構は、調査区内を起点に西方へと延びる溝跡で、機能として水路が推測される。帰属時期は検出層位から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

#### 28号溝跡 S D 28 (図38, 写真33・34)

本遺構は調査④区中央部に存在し、L34・35グリッド、M35グリッド、N35・36グリッド、O36グリッドに位置する。遺構検出面はLⅡ上面であるが、東端の調査区境の壁面観察により、掘り込み面はL I e であることを確認した。西部で37号土坑が北に隣接していた。西端及び東端は調査区外に延びている。

本遺構は北西から南東へ延びる溝跡で、北西から南東へ直線的に延びた後、緩く南方へ湾曲し、その先は緩く蛇行している。断面形は、逆台形ないしはV字状、U字状、ボウル状を呈している。規模は、長さ34.5m、上端幅27～57cm、深さ18～30cmを測る。側壁はほぼLⅡであるが、下部がLⅢの部分もある。直立気味のところや直線的に外傾し、起伏が認められる。底面はLⅢで、若干起伏が認められる。西端から約4.5mの地点までは南東から緩く下降し、それより先は西端に向けて緩く上昇している。西端から約4.5mの地点と南東端の比高差は約20cm、西端との比高差は約10cmを測る。遺構内堆積土は6層に分層され、L I d を基調とした流入土で、L I e やLⅡも流入している。遺構内堆積土から土師器片が3点出土したが、図示できる資料はなかった。

本遺構は調査区を横断する溝跡で、機能として水路が推測される。帰属時期は検出層位から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

#### 29号溝跡 S D 29 (図38, 写真34)

本遺構は調査④区南部に存在し、K39グリッド、L39・40グリッド、M40・41グリッド、N40・41グリッドに位置する。遺構検出面は、西部ではLⅡ上面で、それより東方ではL I e である。L I d 上面で検出された24号溝跡とはほぼ同じ位置にあり、東端手前では本遺構より先に埋没した

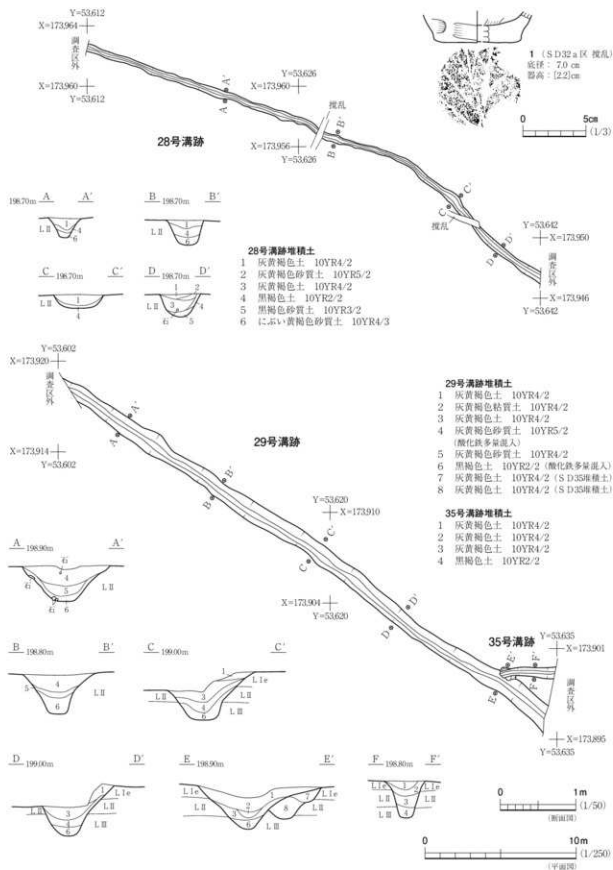


図38 28・29・35号溝跡, 32号溝跡出土遺物



35号溝跡と重複しているが、同時存在した可能性もある。北西端及び南東端は調査区外に延びている。

本遺構は北西-南東主軸の直線的な溝跡で、東半は緩く蛇行しており、断面形は、逆台形ないしはV字状、U字状を呈している。規模は、長さ40mを測り、上端幅は80cm~1.5mであるが、大半は1.1~1.2mを測る。深さは47~81cmで、地点により深さが異なるが、これは検出面の違いによるもので、西部以外は約55~70cmである。側壁は上部がLⅡ、下部はLⅢで、LⅡ部分は崩落により立ち上がりが緩くなって部分もあり、LⅢ部分は直立気味ないしは急傾斜している。LⅢ部分は酸化鉄が表出して茶色を呈し、西端では礫が突出している。底面はLⅢで、酸化鉄が表出して硬くなっている部分が多く、西端では礫が突出している。底面幅が狭い部分と広い部分があり、西半では起伏が少ないが、東半は起伏が多い。底面は両端から中央部に向けて緩く傾斜しており、両端と中央部の比高差は約20cmを測る。遺構内堆積土は6層に分層され、LⅠdを基調とした流入土で、LⅠeやLⅡも流入している。

遺構内堆積土から土師器片4点、須恵器片3点が出土したが、図示できる資料はなかった。

本遺構は、調査区を横断する溝跡で、壁面下半及び底面に酸化鉄が表出していることから、水路であった可能性が高く、さらには、南の区域との区画溝でもあったと推測される。帰属時期は検出層位から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

### 30号溝跡 S D 30 (図39, 写真35)

本遺構は、調査③区北部中央に存在し、K・L42グリッドに位置する。遺構検出面はLⅠe上面である。本遺構は20号畑跡と重複しており、本遺構の方が新しい。周辺遺構としては、本遺構南側に21号畑跡が存在する。

本遺構はN33°W主軸の直線的な溝跡で、北西端は削平により破壊されている。規模は長さ7.94m、幅21~50cm、深さ8~14cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がる。本遺構両端の底面の比高差は約14cmで、南東部に向かって緩く傾斜している。断面形は逆蒲葺状を呈する。遺構内堆積土は1層であり、LⅠdに相当する。

本遺構は20号畑跡と重複関係にあるが、機能していた時期に大差はないと想定している。本遺構から遺物は出土していない。よって、遺構の年代は正確に決定することはできないが、検出面と遺構内堆積土を考慮すると、平安時代頃に造られ、9世紀初頭~前葉頃の洪水によって廃絶したものと想定される。(下山)

### 31号溝跡 S D 31 (図36, 写真35)

本遺構は調査④区北部に存在し、O32・33グリッドに位置する。遺構検出面はLⅡ上面であるが、西半部は遺構検出時に削平してしまい、底面のみを検出した。周辺からは小穴群が存在する。

本遺構は東西主軸の溝跡で、緩く蛇行している。断面形は鍋底状を呈している。規模は、長さ

6.4 m, 上端幅50～57cm, 深さ7cmを測る。側壁及び底面はLⅡで、側壁は緩く内湾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は1層で、LⅠdが流入したものである。

遺構内からは遺物は出土しなかった。

本遺構は小規模な溝跡であり、機能は不明であるが、帰属時期は検出層位から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

### 32号溝跡 S D 32 (図36・38, 写真36・38)

本遺構は調査④区中央部に存在し、M・N37グリッドに位置する。遺構検出面はLⅠe上面であるが、北西部は遺構検出時に遺構上部を削平してしまった。41号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。また、遺構の北壁に沿って後世の攪乱を受けている。

本遺構は北西-南東主軸の直線的な溝跡で、断面形は、本来は箱形を呈していたと推測される。規模は、長さ11mを測り、削平部分より南東における上端幅と深さはそれぞれ75cm～1.1m, 30～39cmを測る。側壁は北壁の残りは悪いが、南壁ではLⅠe～Ⅲで、上部は緩く外傾し、それより下方は直立気味ないしは直線的に急外傾している。底面はLⅢで、起伏が若干あるが、ほぼ水平である。遺構内堆積土は2層に分層され、LⅠdを基調とした流入土である。

本遺構内の攪乱土から縄文土器片1点、土師器片4点、須恵器片1点が出土した。図38-1は非ロクロ成形の土師器甕の底部片で、内面はヘラナデされ、底面には木葉痕が認められる。

本遺構は、調査区内で完結する溝跡で、水路としての機能は推測できない。帰属時期は、検出層位及び重複する41号土坑の出土遺物の年代から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

### 33号溝跡 S D 33 (図39, 写真36)

本遺構は、調査③区南東部に存在し、M44グリッドに位置する。遺構検出面はLⅠe～LⅡ上面である。断面A-A'付近にはLⅠeが部分的にしき認められず、LⅠd直下にLⅡが存在していた。重複遺構はなく、周辺遺構としては、本遺構北西に21号畑跡がある。

本遺構は、N35°W主軸の直線的な溝跡と、ほぼ中央部で直角に取りつく溝跡で、平面形はT字状を呈する。北東端と南東端は調査区外に延びており、北西端は削平されている。規模は長さ7.6m以上、幅38～56cm以上、深さ4～14cmを測る。本遺構底面の両端の比高差は6cmで、南東部に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆蒲鉾状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は1層であり、LⅠdに相当する。

本遺構から遺物は出土しておらず、遺構の年代を正確に決定することはできないが、検出面と遺構内堆積土を考慮すると、平安時代頃に造られ、9世紀初頭～前葉頃の洪水によって廃絶したものと想定される。(下山)

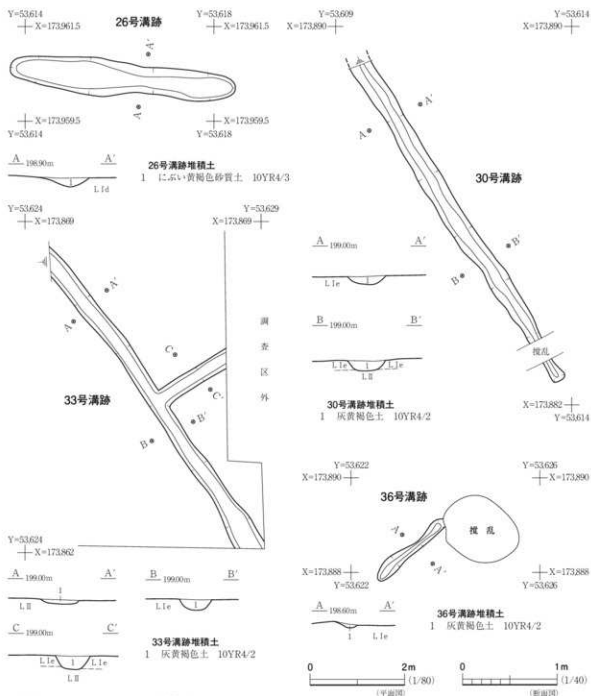


図39 26・30・33・36号溝跡

## 35号溝跡 S D 35 (図38, 写真37)

本遺構は調査④区南東端に存在し、N 41グリッドに位置する。遺構検出面はL I e上面である。西端は29号溝跡と重複し、東端は調査区外に延びている。29号溝跡と同時に存在した可能性があるが、最終的には本遺構の方が先に埋没していた。また、北に主軸方位がほぼ一致する10号柱列跡が隣接している。

本遺構は東西主軸の直線的な溝跡で、西端は29号溝跡に向けて若干湾曲しており、その接続部

では両脇に小さな平坦面が存在する。断面形はV字状を呈している。規模は、長さ3.7m、上端幅45～70cm、深さ54cmを測る。側壁はL I e～Ⅲで、直立気味ないしは急外傾している。底面はL Ⅲで、中央部に向けて両端から緩く下降しており、西端付近はほぼ水平である。遺構内堆積土は4層に分層され、L I dを基調とした流入土で、L I eやL Ⅱも流入している。

遺構内堆積土から土師器片が2点出土したが、図示できる資料はなかった。

本遺構は、29号溝跡を意識して構築された溝跡で、機能として水路が推測される。また、北に隣接する10号柱列跡と主軸方位がほぼ一致していることから、両遺構は一体となって区画施設としても機能していた可能性がある。帰属時期は検出層位から奈良・平安時代と推測される。(能登谷)

### 36号溝跡 S D 36 (図39, 写真37)

本遺構は、調査③区北東部に存在し、M42グリッドに位置する。遺構検出面はL I e上面である。本遺構は20号畑跡と重複しており、本遺構の方が古い。周辺遺構は存在しない。

本遺構はN45°E主軸の直線的な溝跡で、北東端は削平されている。規模は長さ1.84m以上、幅26～33cm、深さ10cmを測る。底面の両端の比高差は3cmで、ほぼ水平に構築されている。断面形は逆漏斗状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。本遺構は、調査③区の重複路部分を重機によって掘削している段階で1条の溝跡として認識していた。しかし、本遺構が20号畑跡と重複関係にあることと、本遺構の規模から、20号畑跡下層に時期差のある畑跡が存在していると想定していた。よって、重機による掘削はL I dを余分に残し、人力による掘削に切り替えたが、本遺構以外に明瞭な溝跡群は検出されなかった。遺構内堆積土は1層であり、L I dに相当する。

本遺構から遺物は出土しておらず、遺構の年代を正確に決定することはできないが、検出面と遺構内堆積土を考慮すると、平安時代頃に構築され、9世紀初頭～前葉頃の洪水によって廃絶したものと想定される。(下 山)

## 第9節 小 穴 群

### 小穴群 G P (図40, 写真37)

調査④区において、掘立柱建物跡や柱列跡に伴う柱穴の他にも、柱穴と推測される小穴(ピット)が、L I d上面では18号建物跡付近及び12号畑跡付近、L I e上面では13号畑跡付近、L Ⅱ上面では調査区北東部から合計48個検出された。これらの小穴については、グリッドごとにピット番号を付し、「M32G-P1」などと呼称した。各小穴の計測値及び形状を表3に記した。

小穴の平面形は、円形ないしは楕円形を呈し、全体の形状は円筒形ないしは皿状を呈するものが主体的である。また、L I d上面で検出された小穴内にはL I cが堆積しており、L I e上面で検出された小穴内にはL I d、L Ⅱ上面で検出された小穴内にはL I eが堆積していた。M32G-P2からかわかけ片、O33G-P2から土師器片がそれぞれ1点ずつ出土した。(能登谷)

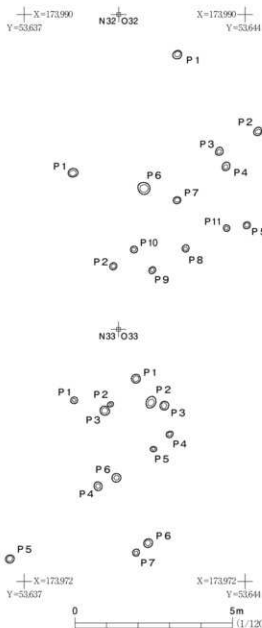


図40 O32・33グリッド付近小穴群

表3 調査④区小穴一覧

グリッド	No	規模 (cm)	平面形	形状	検出面	備考
		長さ×幅×深さ				
M30	1	32	7	円形	L I e	
M32	1	43 × 35	10	楕円形	L I d	かわらけ出土
	2	30 × 28	23	円形	L I d	
	3	44 × 30	9	楕円形	L I d	
	4	30 × 24	13	楕円形	L I d	
	5	30 × 26	15	楕円形	L I d	
	6	17 × 13	9	円形	L I d	
	7	45 × 42	15	円形	L I d	
	8	36 × 30	25	楕円形	L I d	
	9	40 × 39	10	円形	L I d	
	10	40 × 38	24	円形	L I d	
	11	57 × 50	17	楕円形	L I d	
	12	25	14	円形	L I d	
	13	39 × 34	11	楕円形	L I d	
	14	28 × 27	12	円形	L I d	
	15	49 × 39	24	楕円形	L I d	
N30	1	40	4	円形	L I e	
	2	37 × 34	6	楕円形	L I e	
	3	26	5	円形	L I e	
N31	1	51 × 43	20	楕円形	L I d	
N32	1	30	12	円形	L II	
	2	25	17	楕円形	L II	
	3	32 × 28	14	楕円形	L I d	
	4	33 × 26	15	楕円形	L I d	
N33	1	21	5	円形	L II	
	2	16	4	円形	L II	
	3	23	13	円形	L II	
	4	24	7	円形	L II	
	5	23	12	円形	L II	
	6	27	5	円形	L II	
O32	1	30	12	円形	L II	
	2	26	19	円形	L II	
	3	24	6	円形	L II	
	4	30 × 24	5	楕円形	L II	
	5	22	4	円形	L II	
	6	40 × 36	19	楕円形	L II	
	7	22	9	円形	L II	
	8	22	5	円形	L II	
	9	21	4	円形	L II	
	10	21	4	円形	L II	
	11	22	22	円形	L II	
O33	1	21	16	円形	L II	土師器出土
	2	40 × 31	17	楕円形	L II	
	3	20	18	円形	L II	
	4	23	10	円形	L II	
	5	17	3	円形	L II	
	6	29 × 25	10	楕円形	L II	
	7	24	12	円形	L II	

※「備考」 →: 新旧関係 (古→新)

## 第10節 遺構外出土遺物

土器・土製品 (図41～46, 写真39・40)

縄文土器・弥生土器 (図41～43, 写真39・40)

図41-1～4は縄文時代前期の土器である。1は半截竹管の凹面による押引文が施されている。2は口縁部に半截竹管の凹面による平行沈線が鋸歯状に描かれ、頸部には半截竹管の凸面による斜めの刻みを持つ隆線が巡っている。3は内湾気味の口縁部外面にソーメン状の細い粘土紐を貼り付けて文様を描いており、粘土紐の上には細かい爪形文が施されている。4は底部付近の破片で、結

節縄文が横位に回転施文されている。1・2は前期中葉の大木3式土器、3・4は前期末葉の大木6式土器である。

図41-5は縄文時代中期初頭の大木7a式土器である。頸部が大きく外傾し、口縁部は直立気味に立ち上がった後に外反している。口縁部は山形を呈するものと推測され、平行沈線による区画文内には2本の鋸歯文が向き合わせに描かれている。

図41-6～17、図42-1～19は縄文時代中期末葉から後期初頭の土器で、大木10式土器・牛銜式土器・網取I式土器である。図42-18・19は鉢形土器、他は深鉢形土器である。図41-6・8は無文の口縁部が内湾ないしは内傾するもので、体部には斜縄文を施している。図41-7は頸部に沈線を巡らして、口縁部を無文とし、体部には隆線による区画文を描画している。体部の区画内は無文で、区画外には縄文を施している。図41-9は沈線による区画文を描画し、区画内には縄文を施し、区画外には刺突文を施している。図41-10・11は同一個体と推測される。沈線により区画文を描画し、区画内に縄文を施し、区画外を無文としている。図41-12～17、図42-1は隆線により区画文を描画するものであるが、15は図42-3の仲間とも考えられる。区画内に縄文を施すものと区画内を無文とするものがある。17は波状口縁で、波頂部は二股に割れている。図42-2・5は口縁部付近に隆線または沈線を2条巡らせ、頸部を無文としている。図42-3・4は頸部に隆線を巡らせ、口縁部を無文としている。図42-6は沈線により区画文を描画し、区画内に縄文を施し、区画外を無文としている。図42-7・8は頸部に縦長の瘤を貼り付け、それぞれの瘤の間に直線及び弧線による区画文を配置するもので、7と8では縄文部と無文部の配置が反対になっている。図42-9・10は口縁部付近が直立するもので、口縁部が無文となるものである。なお、9は頸部に沈線が巡っている。図42-11～16には口縁部の突起や体部の橋状取手を集めた。図42-18・19は体部が内湾し、頸部で強く屈曲した後口縁部が直線的ないしは外反している。口縁部には稜が巡り、体部には弧線が充填された沈線区画文が描画されている。

図42-20、図43-1～4は縄文時代後期前葉の網取II式土器である。図42-20は波状口縁で、外面には渦巻文とその両脇に円孔が描かれ、口唇部には刻みが施されている。図43-1は円孔を持つ口縁部である。図43-2は沈線による区画文が描画され、区画内には縄文が施され、無文部の上位には円孔が配されている。図43-3には沈線による区画文と渦巻文が描かれている。図43-4は地文の上に多条沈線文を施している。

図43-5～7は縄文時代後期中葉の加曾利B式土器である。5・6は平口縁で、内湾気味である。口唇に沿って沈線が数条横走し、6はさらに上下の線を弧線で連絡している。7は波状口縁で、沈線で区画された縄文帯が横走している。

図43-8～18は縄文時代後期後葉～末葉の土器である。口縁部に小さな山形突起が付き、口縁部及び体部には、直線ないしは弧線による区画文が描画されている。区画内には縄文や刻みが充填され、沈線上に小さな瘤が貼付されているものもある。

図43-19・20は縄文時代後期の粗製土器である。19には櫛歯状工具による沈線文が描かれ、20

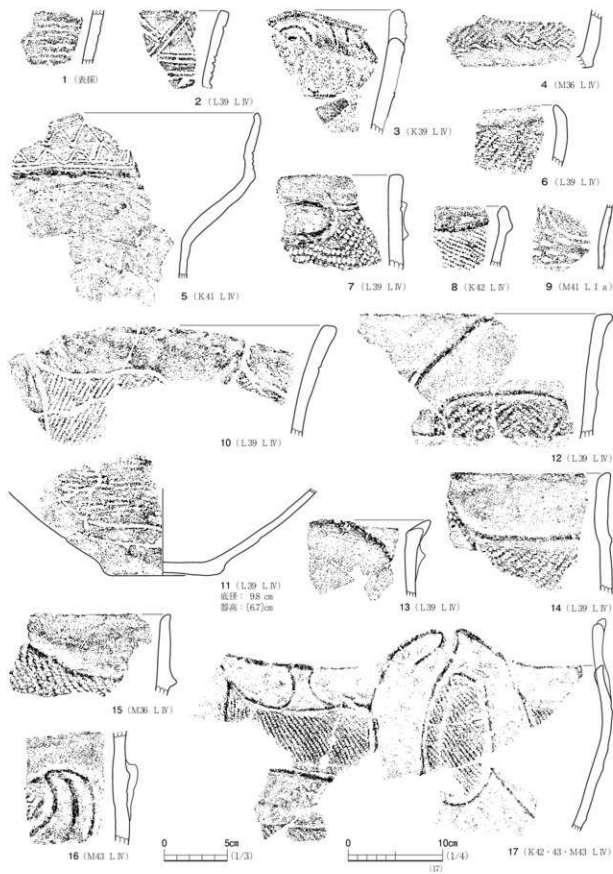


図41 調査③・④区遺構外出土遺物(1)

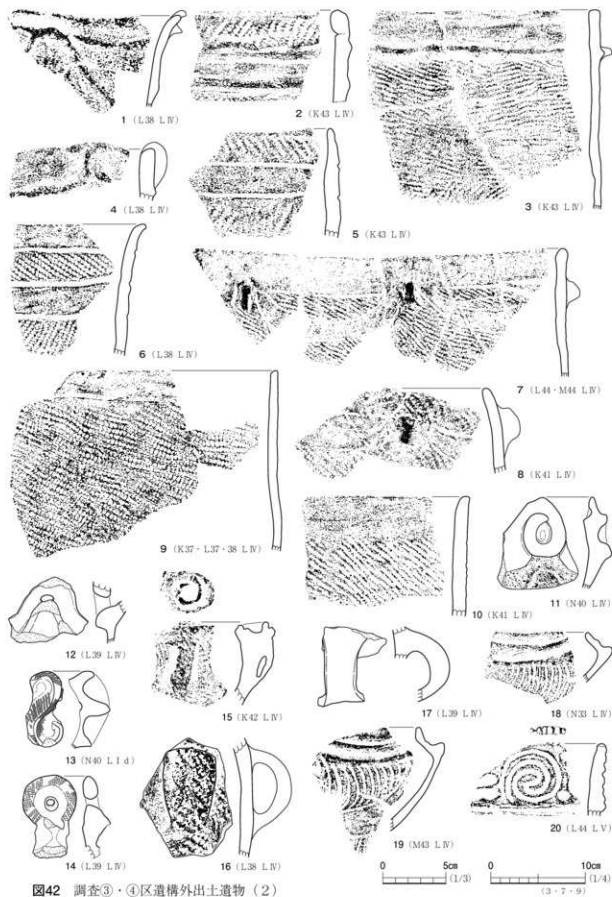


図42 調査③・④区遺構外出土遺物(2)



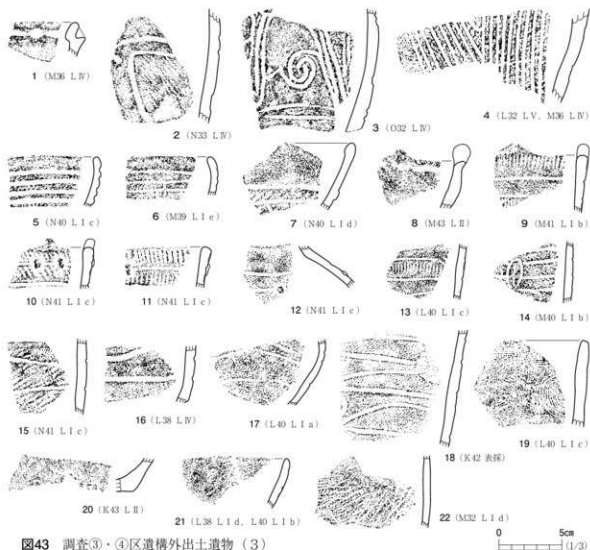


図43 調査③・④区遺構外出土遺物(3)

には筋の細かい燃糸文が施されている。

図43-21・22は弥生時代中期後葉の土器である。21は幅の狭い2本同時施工による連弧文が描かれ、22には附加条縄文が施されている。

#### 土師器(図44・45, 写真40)

図44-1~8は土師器杯で、1~4は非ロクロ成形、5~8はロクロ成形である。1は口縁部へ直線的に立ち上がる器形で、両面ともヨコナデされている。2は内湾して立ち上がる器形で、両面ともヘラミガキ後に黒色処理されている。なお、外面はヘラミガキ前にヘラケズリされている。3は内湾気味に立ち上がる器形で、体部外面に段を有している。外面はヨコナデされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。4も内湾して立ち上がる器形で、口縁部は両面ともヨコナデされ、外面は底部付近がヘラケズリ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。5~7は内湾して立ち上がる器形で、いずれも底面切り離しは回転系切りであり、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。5は体部下端から底面周縁が回転ヘラケズリされ、体部と底面には「五」(推定)と墨書されている。6は体部下端が回転ヘラケズリされ、体部と底面には「万」と墨書されている。7は体部

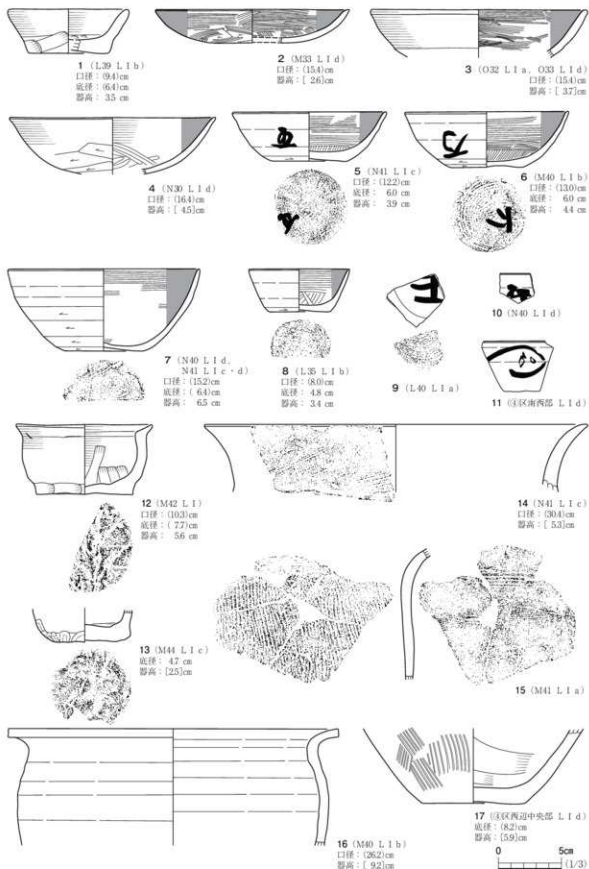


図44 調査③・④区遺構外出土物(4)

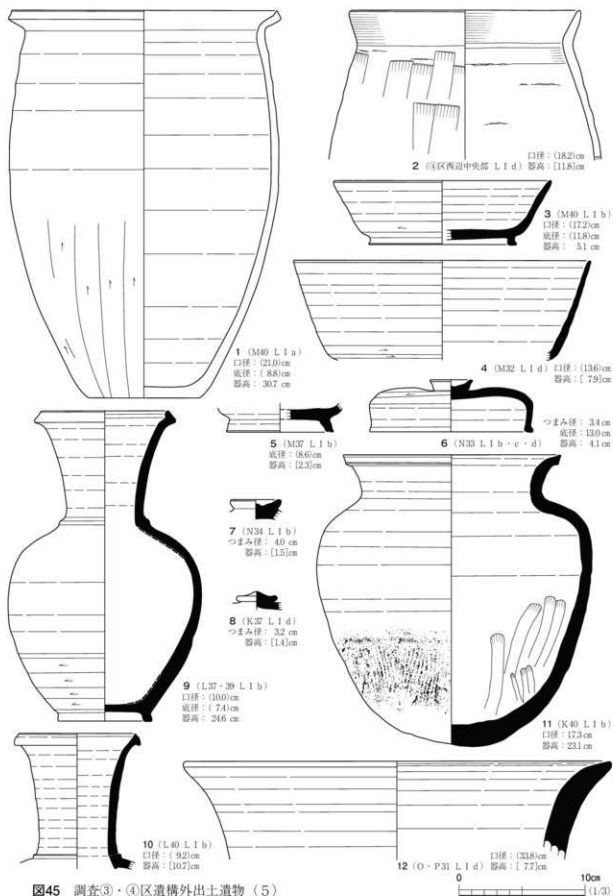


図45 調査③・④区遺構外出土遺物 (5)

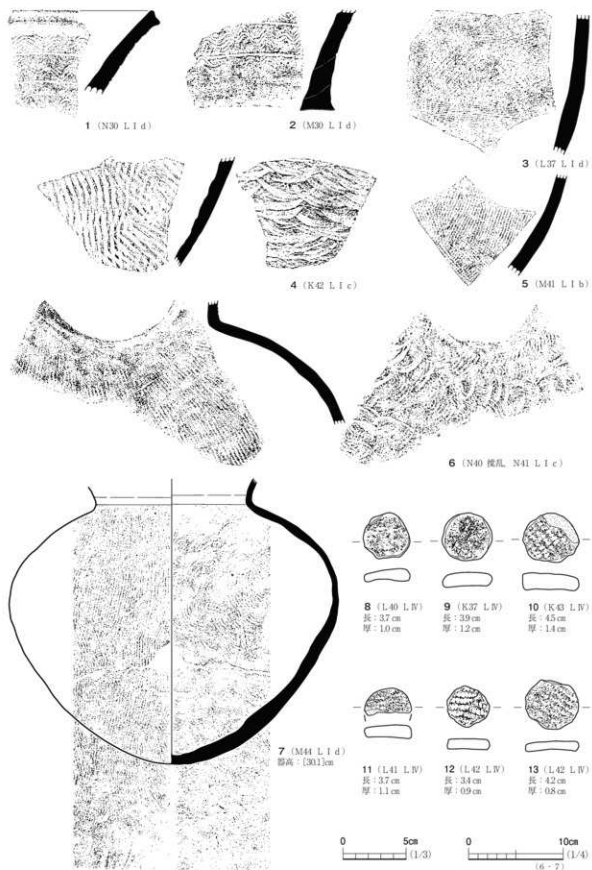


図46 調査③・④区遺構外出土遺物 (6)

下半が回転ヘラケズリされている。8は直線的に立ち上がる器形で、底面切り離しは回転糸切りであり、外面は体部下端が回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。

図44-9~11は墨書土器である。9は土師器杯の底面に「王」と墨書され、10・11は土師器杯の体部に判読不明な文字が墨書されている。

図44-12・13は土師器鉢である。12は内湾して立ち上がった後、口縁部が直線的に外傾している。両面とも口縁部付近はヨコナデされ、それより下位の体部はナデ調整されている。また、底面には木葉痕が認められる。13の底面にも木葉痕が認められる。

図44-14・15・17、図45-2は非ロクロ成形の土師器甕である。図44-14・15・17は外面がハケメ調整されているが、14は細かいハケメであり、古墳時代前期の土器と推測される。図45-2は両面とも口縁部はヨコナデされ、体部はヘラナデされている。

図44-16、図45-1はロクロ成形の甕である。いずれも、体部は内湾して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が外傾し、口縁端部は面取りされている。図45-1の体部下半は縦方向にヘラケズリされている。

#### 須恵器 (図45・46、写真40)

図45-3~5は須恵器高台付杯である。3・4は体部が直線的に立ち上がり、体部下端が回転ヘラケズリされている。図45-6~8は須恵器蓋である。6は器高が高く、体部が直立することから須恵器短頸壺の蓋であるのに対して、7・8はつまみが低いことから須恵器杯・高台付杯に伴う蓋であろう。6は外面肩部が回転ヘラケズリされている。

図45-9・10は須恵器長頸壺である。9は球胴で、頸部下端にはリング状突帯が巡り、口縁端部は面取りされて上端が上方に引き出されている。体部下半は回転ヘラケズリされている。10も頸部下端にはリング状突帯が巡り、口縁端部は下端が下方に引き出されている。

図45-11・12、図46-1~7は須恵器甕である。図45-11は肩が張り、丸底となる器形で、口縁部は外反し、端部は面取りされて上端が上方に引き出されている。体部下半にはタタキメが認められる。12は外反しながら口縁部に至るが、端部は面取りされていない。図46-1・2は口縁部で、口唇に沿った平行沈線間に櫛歯状工具による波状文が描かれている。図46-3~7は体部で、外面にはタタキメ、内面には当具痕が認められるが、3は叩き調整の後に横方向にヘラナデしている。

#### 土製品 (図46)

図46-8~13は縄文土器片の周縁を加工した土器片裂円盤である。

#### 石器・石製品 (図47・48)

図47-1・2は石楯である。1は凹基無茎楯で、2は凹基有茎楯である。いずれも細かい調整剝離を施しているが、この調整剝離は腹面中央までは及んでいない。

図47-3・4・6は二次加工のある剥片である。いずれも縦長剥片で、4の背面には自然面が

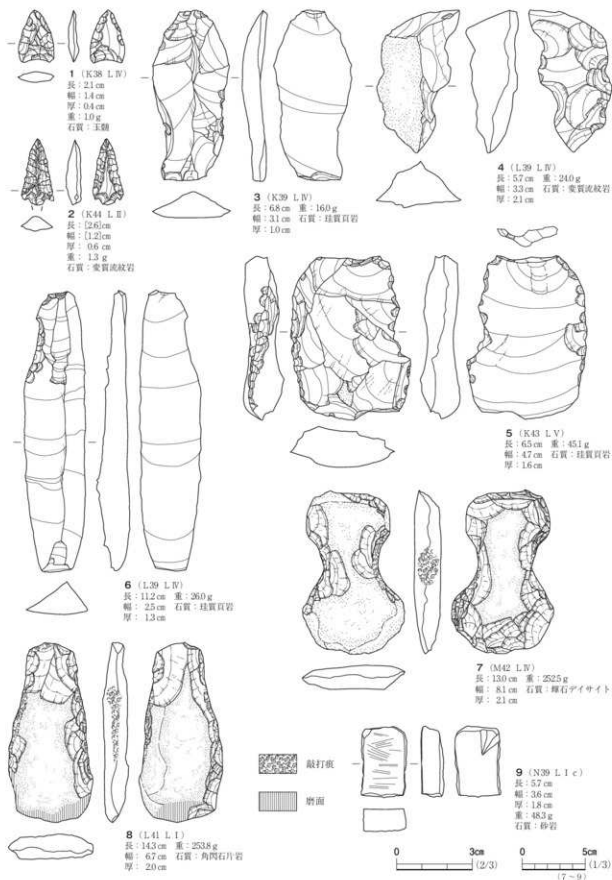


図47 調査③・④区遺構外出土遺物(7)

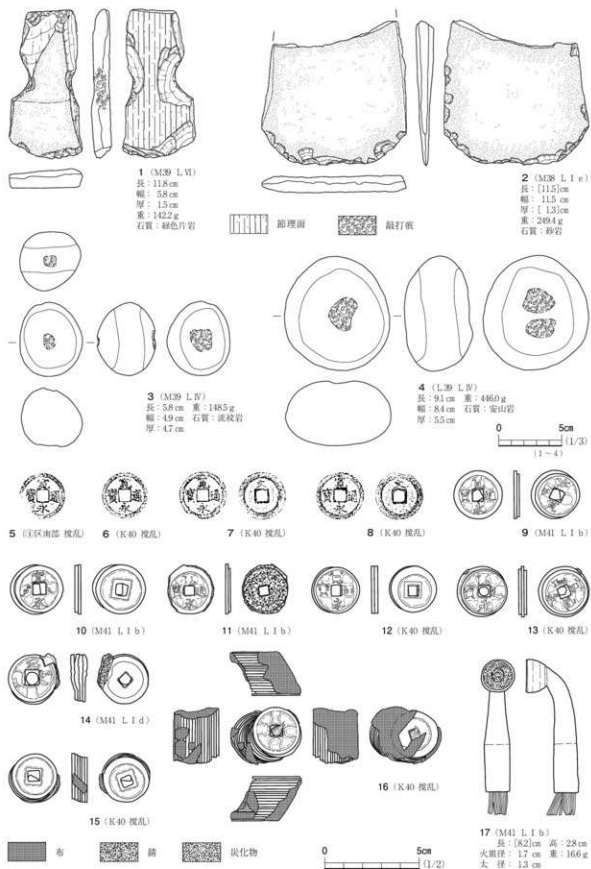


図48 調査③・④区遺構外出土遺物 (8)

残存している。図47-5は搔器で、一方の側縁に刃部が作り出されている。

図47-7・8、図48-1・2は打製石斧である。図47-7は分銅形を呈し、刃部は弧状をなしている。両面には自然面が広く残存し、両側縁の括れ部分には敲打痕が認められる。図47-8はヘラ状を呈し、刃部は緩い弧状をなしている。両面には自然面が広く残存し、両側縁の中央部及び基部の一部には敲打痕、刃部には磨耗痕が認められる。図48-1は分銅形を呈し、緩い弧状をなしている。背面には自然面が広く残存し、腹面は節理面である。両側縁の括れ部分及び基部の一部、刃部の一部には敲打痕が認められる。図48-2は刃部が弧状をなし、両面には自然面が広く残存している。図48-3・4は平坦面を持つ円礫を利用したくはみ石である。

図47-9は砥石で、表面のみが使用面である。

#### 銅製品 (図48)

図48-5・9-11・14・17はほぼ同じ場所から出土し、6-8・12・13・15・16はまとめて出土した。銭貨は表面に他の銭貨の痕跡が認められるものや複数枚が結合した状態のものがあることから、本来、銭差によってまとめていたと推測され、16の孔内には銭差(紐)が残存し、15・16の表面には布が付着していた。5-13において、銭文が認められる銭貨は「寛永通寶」で、古寛永・新寛永とも認められる。7・8は背面に「文」の文字がある。14の一番上のものは「元祐通寶」(北宋、1086年初鋳)である。17は煙管の雁首で、吸口側には木質部が一部残存していた。火皿の内径は15mmを測る。

(能登谷)



### 第3章 調査①区の調査成果

#### 第1節 調査経過と概要

調査①区は遺跡の南部に位置し、北には平成23年度に調査した調査②区、南には本年度調査の調査⑨区が隣接する。調査前の現況は宅地及び畑・山林で、ほぼ平坦な地形であった。なお、調査区のはは中央部は阿武隈川へ下りるための道路により東西方向に削平されており、調査区が南北に分かれることから、それぞれ「北側調査区」、「南側調査区」と呼称することにした。

4月初めに現地を確認した際に、工区範囲を示す幅杭の残存状況が悪く、家屋解体後の基礎コンクリート等の残骸が南側調査区内に残されていたことから、その後の国土交通省との打ち合わせの中で、幅杭に関しては国土交通省が打設し、コンクリート等の残骸の除去及び放射能汚染が疑われる表層の土の除去に関しては当方で対応することにした。

6月に入り、南側調査区の表層の土を除去したところ、現表土から間もない深度で焼土面が検出されたことから、古代の遺構の可能性も視野に入れ、6月26日から7月上旬まで作業員による遺構検出作業を実施した。しかし、それらの焼土面は近現代のものであることが判明し、7月中旬からは、重機による表土剥ぎを開始した。なお、この段階で調査⑨区の調査が継続中であったことから、同区の排土を調査の終了した、北方の調査⑤中区や調査②区へ移動するための重機路を東辺に残すことになった。

8月に入り、作業員による遺構検出を実施したところ、竪穴住居跡や小穴群が検出され始めたが、隣接する調査⑨区の調査と並行して進めていたことから、これらの遺構の精査を開始したのは9月中旬になってからである。9月下旬からは、北側調査区の調査も開始し、竪穴住居跡の他、土坑や溝跡、多数の小穴群が検出された。両調査区のこれらの古代・中世の遺構に関しては、10月下旬までには調査が終了し、それ以降は下層の縄文時代の遺物包含層の調査へと移行していった。なお、9月上旬に調査⑨区北側の調査が終了したが、北側調査区に隣接して樋門工事も開始されたことから、本調査区の排土を北方へ移動することができなくなり、調査の終了した調査⑨区北側に移動せざるを得ない状況になったことから、南側調査区東辺の重機路は北側調査区の排土を移動するためさらに残すことになった。

12月に入ると、両調査区からは南北に並ぶ土坑群が検出され、重機路の調査にも着手した。ここで検出された土坑の数は48基を数えたが、中旬には調査終了の目途が立ち、19日にはすべての調査を終了して、24日に国土交通省に現地を引き渡した。なお、調査面積は、合計7,800㎡（中世・古代面2,800㎡＋縄文時代上面2,500㎡＋下面2,500㎡）である。

調査の結果、竪穴住居跡2軒（奈良時代）、掘立柱建物跡1棟（近世）、土坑49基（縄文時代の落とし穴状土坑48基）、溝跡3条、小穴503個が検出され、縄文土器片5,565点、弥生土器片1点、土師

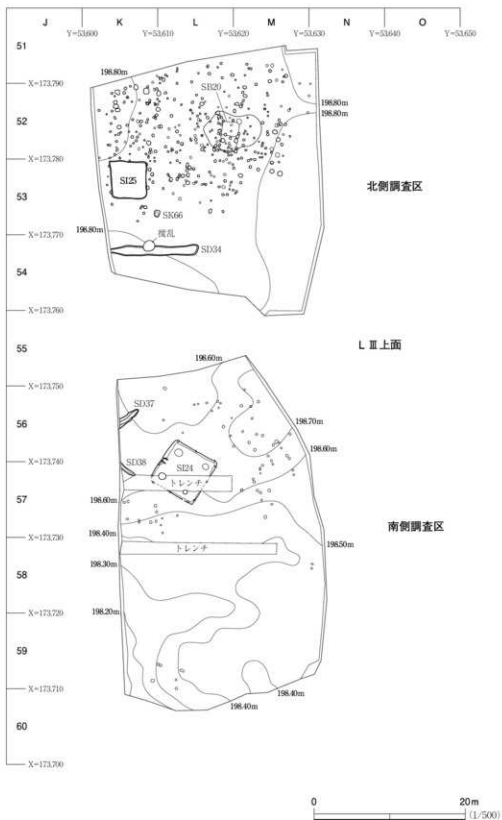


図49 調査①区遺構配置図(1)

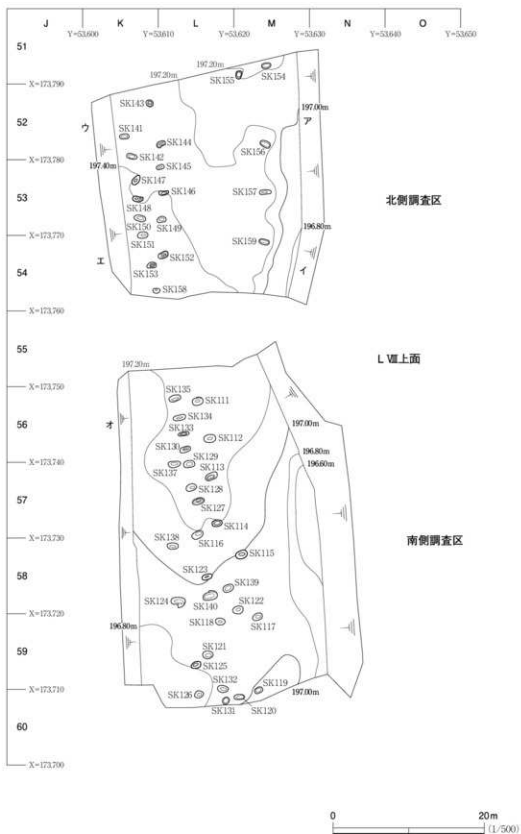


図50 調査①区遺構配置図(2)

器片1,557点、須恵器片195点、かわらけ片1点、陶磁器片14点、瓦片1点、石器・剥片類493点、石製品5点、土製品1点、銅製品2点などが出土した。(能登谷)

## 第2節 基本土層

本調査区の土層の観察は、北側調査区では東西壁各2カ所、南側調査区では西壁1カ所で行い、各層ごとの特徴や遺構の検出状況、包含される遺物などから、以下の11層に大別した。なお、基本土層の土質・色調は平成24年度調査報告の基本土層と対応している。

本調査区は宅地造成などの攪乱の影響で、広い範囲でLⅡ上面辺りまで削平を受けている。現状土等が堆積している層をLⅠとした。層厚は20～60cmを測る。

LⅠaは黄褐色砂層で、層厚は50～65cmと比較的厚い。南側調査区では確認されなかった。LⅠ及びLⅠaともに土師器や須恵器など古代の遺物が含まれている。LⅠdは灰黄褐色土層、LⅠeは灰黄褐色砂質土層である。北側調査区東側のM54グリッド周辺にのみ堆積しており、層厚はそれぞれ18cm、9cmと比較的薄い。両層とも奈良時代の遺構面を覆っていることから、同時に運ばれた洪水堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

LⅡは黒褐色土層で北側調査区東側のM54グリッド周辺を除き、全体に堆積していた。層厚は15～30cmである。縄文時代後期と晩期の遺物、土師器が含まれている。

LⅢaは褐色砂層で層厚は20～45cmであるが、概ね均一に堆積している。この下層のLⅢbは暗褐色砂層で砂礫が多量に混入しており、層厚は24～37cmである。LⅢa・bは調査区全体に堆積しており、縄文時代後期初頭の洪水堆積層と考えられる。

LⅣは暗褐色砂質土層で、南側調査区のM58・59グリッド、L59グリッド周辺で部分的に堆積していた。平成23年度に調査された調査②区LⅣaに対応する。

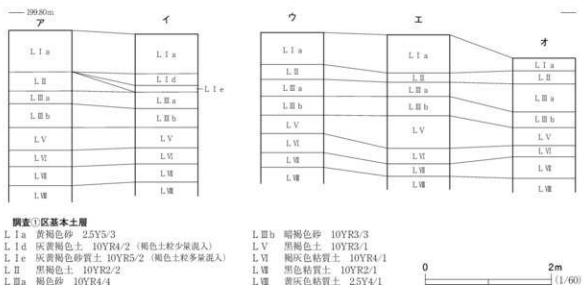


図51 調査①区基本土層

L Vは黒褐色土層で調査区全体に堆積しており、層厚は比較的厚く28～52cmである。調査②区のL IV bに対応する。北側調査区の本層からは縄文時代前期後葉頃の土器が大量に出土しており、調査②区の調査の際に検出された竪穴住居跡との関連があるものと考えられる。

L VIは褐灰色粘質土層で、層厚は16～30cmを測るが、概ね均一に堆積している。調査②区のL Vに対応する。

L VIIは黒色粘質土層で、粘性は強く、層厚は20～35cmである。調査②区のL VIに対応する。

L VIIIは黄灰色粘質土層である。粘性は強く全体的にグライ化している。本調査区のいずれの地点においてもこの層以下からは遺物が出土していないため、この層までを調査対象としている。本層上面では縄文時代早期末葉頃の落とし穴状土坑が検出されている。遺物は確認されなかった。調査②区のL VIIに対応する。

調査の結果、本調査区の旧地形は北部から中央部にかけて緩やかに下ったのち、南部にかけて緩やかに上昇し、西側から東側に向けて緩やかに下っていくことが確認された。また、L VIII上面で検出された落とし穴状土坑群は自然堤防上の微高地に多く構築されていることが明らかとなった。

(鈴木・下山)

### 第3節 竪穴住居跡

本調査区で検出された竪穴住居跡は、24・25号住居跡の2軒である。24号住居跡は南側調査区の北部、25号住居跡は北側調査区のほぼ中央部に位置する。検出面はいずれもL III a上面であるが、遺構面はさらに上層である可能性が高い。帰属時期は、出土遺物から奈良時代と想定される。

#### 24号住居跡 S I 24

##### 遺 構 (図52～54, 写真45・46)

本遺構は、南側調査区北部の平坦面に立地し、K 57・L 56・L 57グリッドに位置する。北西6.3mに37号溝跡、西方2mに38号溝跡が近接している。検出面はL III a上面である。L 57グリッドP 8と重複し、L III a上面における遺構検出の際に掘削したトレンチにより本遺構の南半分が大きく削平されている。

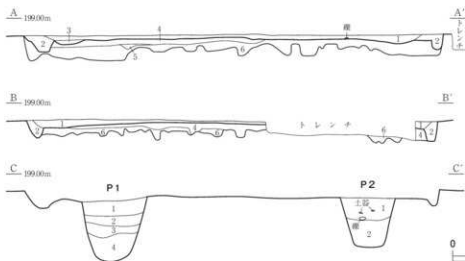
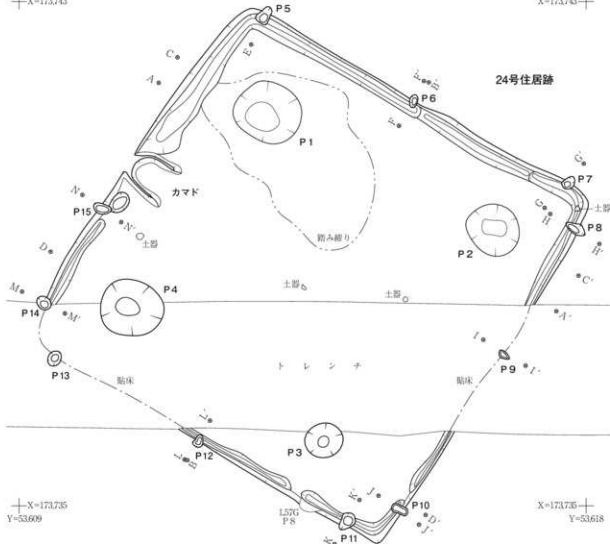
平面形は北西-南東主軸の方形を呈し、規模は、上端で北西-南東6.6m、北東-南西6.4m、床面で北西-南東、北東-南西とも6m、床面までの深さ約10cmを測る。壁は急な角度で立ち上がる。床面は全面が貼床で、部分的に凹凸が認められ、全体的に壁に向かい緩やかに傾斜している。また、P 1周辺の床面には踏み締まりが確認された。

遺構内堆積土は6層に分層した。ℓ 1・2は堆積状況から住居廃絶後の自然流入土と考えられる。ℓ 3はカマド崩落土、ℓ 4～6は貼床土である。

本住居跡に伴う施設として、カマド1基、壁溝、ピット15個が検出された。

Y=53609  
+X=173743

Y=53618  
X=173743+



**24号住居跡増積土**

- 1 暗褐色砂質土 10YR3/3
- 2 黒褐色砂質土 10YR3/2
- 3 によい黄褐色砂質土 10YR5/3
- 4 黒褐色砂質土 10YR2/2
- 5 暗褐色砂質土 10YR3/2
- 6 暗褐色砂質土 10YR3/4

**P1増積土**

- 1 黒褐色砂質土 10YR3/2
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/4
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3
- 4 黒褐色砂質土 10YR2/3

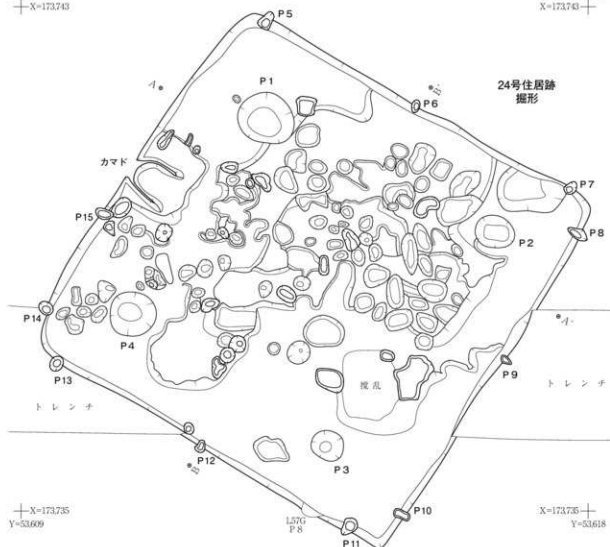
**P2増積土**

- 1 黒褐色砂質土 10YR3/2
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3

図52 24号住居跡 (1)

Y=53609  
+X=173743

Y=53618  
X=173743+



+X=173735  
Y=53609

X=173735+  
Y=53618



- P3・4堆積土**  
 1 黒褐色砂質土 10YR2/3  
 2 暗褐色砂質土 10YR3/3
- P5～12・14・15堆積土**  
 1 黒褐色砂質土 10YR3/2

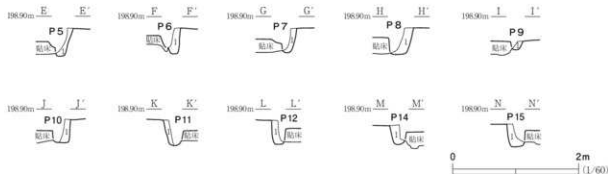


図53 24号住居跡 (2)

カマドは北西壁中央に位置する。燃焼部のみが検出され、煙道部は検出できなかつた。燃焼部は天井が遺存せず、規模は、全長78cm、中央部幅58cm、底面の焚口幅68cm、奥行き60cmを測る。燃焼部の袖は直線的に伸び、「八」の字状に開く。

カマド内堆積土は5層に分層した。ℓ1・2はカマド廃棄後の自然流入土、ℓ3は使用時にカマドの底面に堆積した炭化物を多く含む土、ℓ4は袖の内面に貼り付けた植物繊維を含む粘土、ℓ5はカマドの北西方向に堆積しているカマド構築土で、カマド燃焼部の天井を壊して北東方向に廃棄したと考えられる。

カマドの両脇と南の一部分を除いた壁際から幅10～50cmの壁溝が検出された。本住居跡検出面からの深さは20～28cm、床面からの深さは8～17cmを測る。

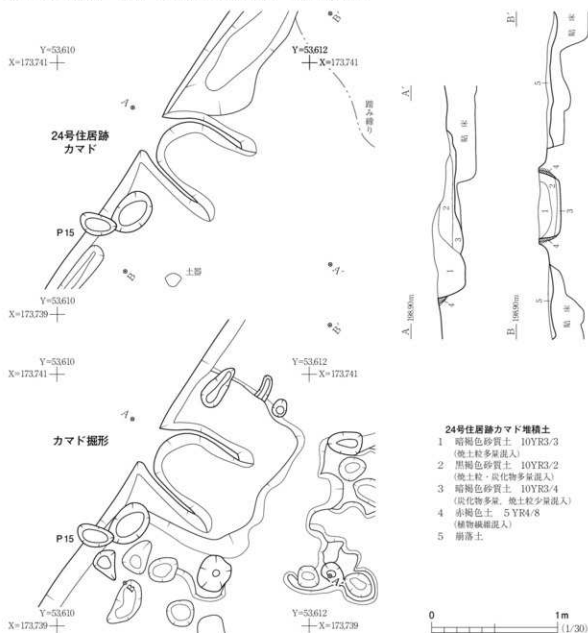


図54 24号住居跡カマド



ピットは床面から4個、壁際から11個検出された。床面で検出されたP1～4は方形に配置されていることから、主柱穴と考えられる。平面形はどれも楕円形で、規模は、径65cm～1.04m、床面からの深さは78cm～1.04mを測る。堆積土はP1で4層、P2～4で2層に分層でき、いずれも自然流入土であると考えられる。P5～15は周壁から検出され、カマドがある北西壁で2個、他の各壁では3個ずつ検出された。平面形は楕円形で、規模は、径10～18cm、深さは本住居跡検出面から15～44cmを測る。各ピットの間隔は、P5～6で276m、P6～7で278m、P8～9で228m、P9～10で298m、P11～12で270m、P12～13で264m、P14～15で178mである。堆積土はいずれも1層で、地山土が混入している自然流入土である。

貼床除去後の掘形底面は、全体的に凸凹していた。また、カマド付近は、台形状に掘り残されていた。

#### 遺物 (図55, 写真59)

図55-1は手握ねの小型土器で、体部はほぼ直立し、両面ともヨコナデされている。2・3は非ロクロ成形の土師器杯で、2は須恵器風である。2は平底で、体部が直線的に外傾し、外面は口縁部がヨコナデされ、体部下半から底部にかけてはヘラケズリ後にヘラミガキされている。内面はヨコナデされている。3は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反している。外面はハケメ調整後に口縁部がヨコナデされ、底部付近はヘラケズリされている。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。4は非ロクロ成形の土師器鉢で、体部は内湾して立ち上がっている。両面とも口縁部はヨコナデされ、体部外面はナデ調整、底部付近はヘラケズリないしはヘラミガキされており、体部内面はナデ調整されている。底面には木葉痕が認められる。5は非ロクロ成形の土師器高杯の高台部で、裾が大きく広がっている。外面はナデ調整され、内面は裾をヘラケズリした後にヘラミガキ・黒色処理されている。また、杯部の内面もヘラミガキ後に黒色処理されている。6は非ロクロ成形の土師器小型甕で、口縁部はほぼ直立している。両面とも口縁部はヨコナデされ、体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整されている。7～9は非ロクロ成形の土師器甕で、7・8の底面には木葉痕が認められる。7の外面はヘラケズリされ、内面はナデ調整後に黒色処理されている。8の外面はハケメ調整後にヘラケズリ及びナデ調整され、内面はハケメ調整及びナデ調整されている。9は両面とも口縁部はヨコナデされ、体部はハケメ調整されている。

図55-10は須恵器杯で、体部は内湾し、口縁部は薄く作られている。11は須恵器長頸瓶の頸部である。口縁部付近で緩く外反している。12は須恵器甕の体部片で、外面にはタタキメ、内面には当具痕が認められる。

#### まとめ

本遺構は方形を呈する大型の竪穴住居跡で、北西壁にカマドが敷設され、方形に配された主柱穴の他、各壁には壁柱穴が規則的に存在し、カマド付近以外には壁溝が巡っている。また、住居跡掘形の段階でカマド燃焼部の両袖も含めてカマド部分を高く掘り残していることが特徴的である。さらに、出土遺物に土師器高杯や須恵器風の土師器杯が組成されることが特徴的である。この須恵器

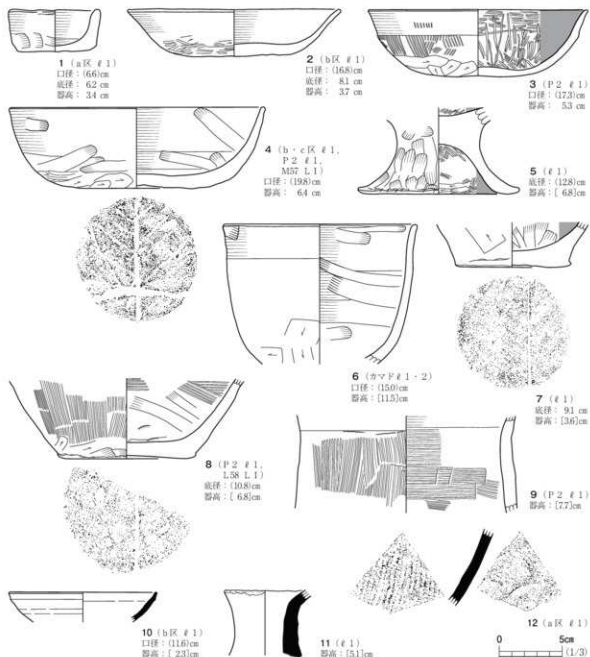


図55 24号住居跡出土遺物

風の土師器杯は土師器工人在須恵器杯を模倣して製作したものと推測され、帰属時期は出土遺物から8世紀前半頃と推測される。(由 井)

### 25号住居跡 S I 25

#### 遺 構 (図56, 写真47・48)

本遺構は、北側調査区に存在し、K53グリッドに位置する。LⅢa上面において検出したが、遺構の掘り込み面はさらに上層である可能性が高い。小穴群の一部と重複しており、本遺構の方が新しい。重複している小穴群は、本遺構に付属する壁柱穴かと想定したが、堆積土の状況から、本

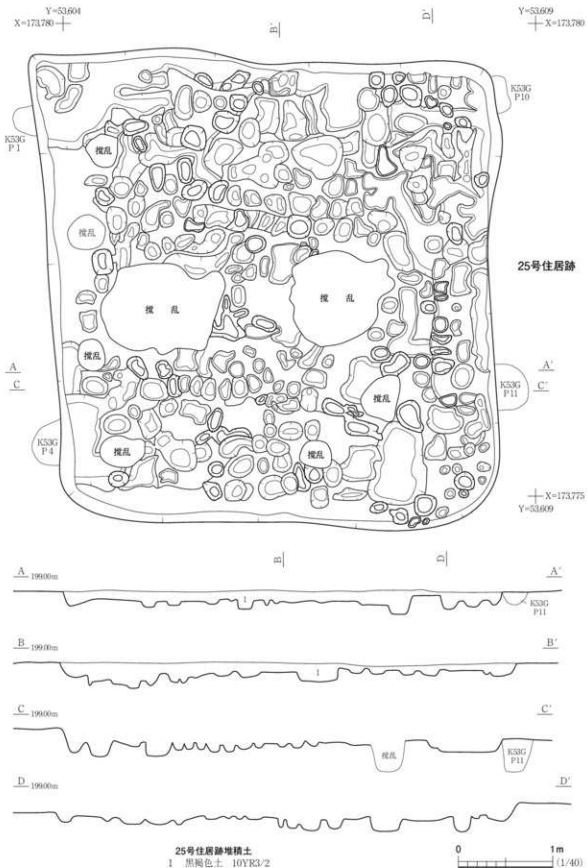


図56 25号住居跡

遺構に付随する柱穴ではないと結論づけた。第7節で後述するが、小穴群の一部は古代まで遡る可能性がある。

本遺構の上端における平面形は、南北主軸の方形基調で、規模は南北長5.04m、東西長4.68m、壁高は12～16cmを測り、緩やかに立ち上がる。壁面はLⅢaである。

遺構内堆積土は単層で、黒褐色土を主体とした自然堆積土である。堆積土を除去すると、底面に貼床の痕跡は認められず、円形もしくは楕円形を呈するくぼみを多数確認できた。これらのくぼみも同じ堆積土で埋没しており、これを除去すると凹凸が著しいLⅢaが露出した。これらの凹凸の規模は、40×25cm大、深さ6～10cm程で、このサイズが大半を占める。この凹凸は本遺構を構築する際に、荒掘りを行った鋤や鍬などの工具痕の1単位を表していると考えられる。

本遺構に伴う柱穴・カマドは検出されず、遺物も出土しなかった。

#### まとめ

本遺構は、南北長5.04m、東西長4.68mを測る方形基調の堅穴住居跡の掘形である。柱穴やカマドは検出されず、本遺構を堅穴住居跡と決定づける積極的な根拠はないが、その規模や平面形、さらには本遺構の南側約30mで検出された24号住居跡の掘形の底面の状況が本遺構と類似することから、本遺構は堅穴住居構築段階で廃棄されたものと想定している。遺物が出土しておらず、本遺構の正確な時期を想定することはできないが、遺構面がLⅢaより上層である可能性と24号住居跡の帰属時期から推測すると、奈良時代であると考えられる。(下山)

## 第4節 掘立柱建物跡

本調査区において、掘立柱建物跡を1棟確認した。柱痕が認められなかったため、遺構を報告するに際し、規模・柱間距離は各柱穴の底面の中心を結んで計測を行っている。

### 20号建物跡 SB20

#### 遺構 (図57, 写真49)

本遺構は、北側調査区のL52グリッド、M52グリッドに位置する建物跡である。標高198.8～198.9mの平坦面に立地している。検出面はLⅢa上面で、第7節で述べる小穴群と同じである。しかし、遺構の掘り込み面は小穴群を含めさらに上層の可能性もある。

本遺構は、調査当初、建物跡と認識しておらず、小穴群の一部として調査を行っていた。小穴群を半載し、土層観察を行っている際に、礎石もしくは根石と考えられる石を伴う小穴が規則的に並んでいることを確認した。これをもって、建物跡と認識し、調査を続行したところ、本遺構を構成する柱穴を6個確認した。

本遺構は、南北方向に桁行きを持つ長方形の建物跡である。東側柱列を基準にした主軸方位はN8°Eである。西側の柱穴を北からP1～3とし、東側の柱穴を北からP4～6と呼称した。この

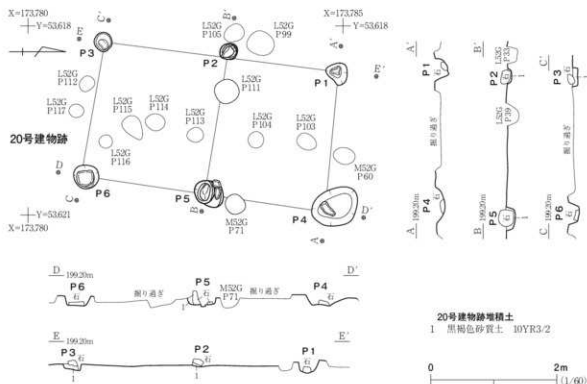


図57 20号建物跡

建物跡の面積は、874㎡となる。規模は、西側桁行き37m、東側桁行き3.9mを測る。南側梁行き2.18m、北側梁行き2.24mを測る。柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は30～80cm前後である。6個の柱穴すべてから礎石もしくは根石を確認し、長さ20cm程度の平石を埋めていた状況が見取れた。P5では3個の礎が置かれていた。

各柱穴内の堆積土は、遺構内で統一して捉えることとした。いずれも単層であり、自然堆積土と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は、桁行2間、梁行1間の南北に長軸を有する建物跡である。なお建物跡内には本建物跡の柱穴としなかった小穴も認められ、部屋の間仕切りや床束であった可能性も考慮できる。本遺構の年代は、遺物が出土していないため性格な時期は不明であるが、小穴群と同様、近世以降に帰属すると考えている。

(下 山)

## 第5節 土 坑

調査①区で検出された土坑は総数49基を数える。遺構番号は検出順に付けたが、その後の調査によって攪乱と判断したものがあり、この遺構番号については、欠番とし、本節では扱わないこととした。欠番とした土坑は136号土坑(S K 136)である。

また、66号土坑を除いた48基の土坑は検出層位及び分布状況・形態から縄文時代早期末葉頃の

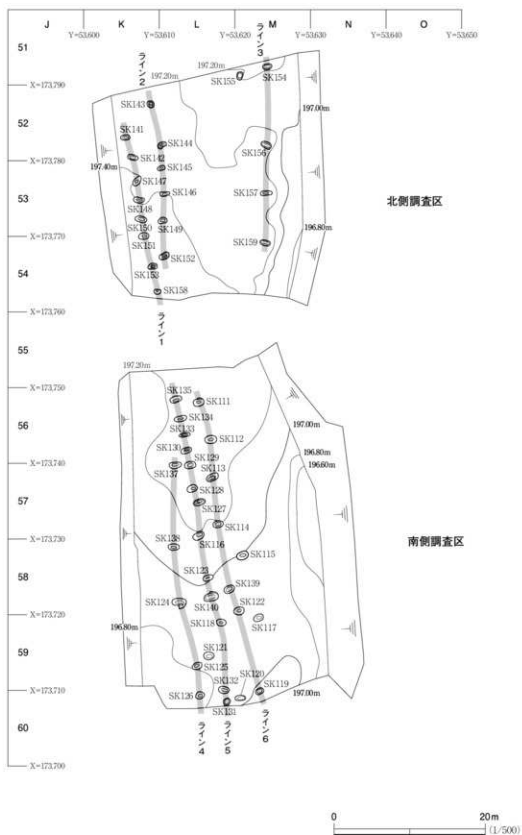


図58 調査①区土坑分布図

表4 調査①区土坑一覧

遺構番号	探洞番号	写真図取番号	位置	規模 (cm)			平面形		長軸方位	断面形	長短比	分布(ウイン)	堆積土	分類
				開口部	底面	深さ	開口部	底面						
66	59	50	L.53	86×70	57×36	27	不整形	楕円形	N 8° E	U字形	-	-	1層	-
111	59	50	L.56	144×93	62×36	48	楕円形	楕円形	N 76° E	U字形	1.54	6	3層	B V
112	59	50	L.56	156×107	73×36	68	楕円形	楕円形	N 85° E	U字形	1.45	6	2層	B V
113	59	50	L.57	172×87	93×28	79	楕円形	楕円形	N 63° E	Y字形	1.97	6	2層	B I
114	59	51	L.57	138×91	87×48	68	楕円形	楕円形	N 80° E	進台形	1.51	6	4層	B II
115	59	51	M58	159×109	80×41	65	楕円形	楕円形	N 67° E	Y字形	1.45	-	5層	B I
116	60	51	L.57・58	155×99	82×49	83	楕円形	楕円形	N 67° E	有段	1.56	5	4層	B II
117	60	51	M58・59	132×94	63×39	68	楕円形	楕円形	N 69° E	進台形	1.4	-	3層	B II
118	60	51	L.59	128×91	57×27	81	楕円形	楕円形	N 82° W	V字形	1.4	5	3層	B V
119	60	51	M59・60	113×80	80×52	41	楕円形	楕円形	N 60° E	進台形	1.41	6	3層	B II
120	60	51	M60	140×68	108×48	50	長楕円形	楕円形	N 85° E	進台形	2.05	-	2層	C II
121	60	51	L.59	140×110	84×47	83	楕円形	楕円形	N 85° E	進台形	1.27	-	4層	B II
122	61	52	M58・59	141×108	64×37	71	楕円形	楕円形	N 81° E	進台形	1.3	6	5層	B II
123	61	52	L.58	137×79	58×20	69	楕円形	楕円形	N 70° E	V字形	1.73	5	3層	B V
124	61	52	L.58	189×89	120×39	51	長楕円形	楕円形	N 89° W	進台形	2.12	4	3層	C II
125	61	52	L.59	138×91	73×38	61	楕円形	楕円形	N 68° E	進台形	1.51	4	2層	B II
126	61	52	L.60	121×94	56×34	55	楕円形	楕円形	N 78° E	進台形	1.28	4	2層	B II
127	61	52	L.57	156×83	71×26	57	楕円形	楕円形	N 76° E	有段	1.87	5	4層	B II
128	62	52	L.57	142×91	63×32	88	楕円形	楕円形	N 74° E	有段	1.56	5	3層	B II
129	62	52	L.56・57	151×92	83×50	79	楕円形	楕円形	N 81° E	進台形	1.64	5	3層	B II
130	62	53	L.56	148×77	49×14	64	楕円形	楕円形	N 72° E	V字形	1.92	5	2層	B V
131	62	53	L.60	100×85	76×62	42	楕円形	楕円形	N 96° E	進台形	1.17	5	3層	B V
132	62	53	L.59・60	147×94	88×36	68	楕円形	楕円形	N 83° W	進台形	1.56	5	3層	B II
133	62	53	L.56	148×50	68×21	61	長楕円形	楕円形	N 81° E	V字形	2.96	5	3層	C V
134	63	53	L.56	171×68	89×20	62	長楕円形	楕円形	N 78° E	V字形	2.51	5	3層	C IV
135	63	53	L.56	155×87	100×30	63	楕円形	楕円形	N 74° E	進台形	1.78	5	4層	B II
137	63	53	L.56・57	164×85	91×35	59	楕円形	楕円形	N 89° W	進台形	1.92	4	2層	B II
138	63	53	L.58	146×81	83×32	77	楕円形	楕円形	N 89° E	進台形	1.8	4	2層	B II
139	63	54	L・M58	146×99	93×53	39	楕円形	楕円形	N 67° E	進台形	1.47	6	3層	B II
140	63	54	L.58	196×100	140×53	47	(楕円形)	(楕円形)	N 77° E	進台形	1.96	5	2層	B II
141	64	54	K.52	125×66	85×34	58	楕円形	楕円形	N 84° E	進台形	1.89	1	2層	B II
142	64	54	K.52	138×70	87×42	56	楕円形	楕円形	N 72° W	進台形	1.97	1	2層	B II
143	64	54	K.52	100×95	43×32	72	円形	楕円形	-	有段	1.05	2	2層	A II
144	64	54	K・L.52	123×62	70×23	62	楕円形	楕円形	N 66° E	有段	1.98	2	2層	B II
145	64	54	K・L.53	108×60	58×20	55	長楕円形	楕円形	N 74° E	U字形	1.8	2	2層	C V
146	64	54	L.53	135×55	76×35	43	長楕円形	楕円形	N 85° E	進台形	2.45	2	2層	C III
147	65	55	K.53	147×83	53×30	60	楕円形	楕円形	N 35° E	U字形	1.77	1	2層	B V
148	65	55	K.53	143×65	90×24	55	長楕円形	楕円形	N 90° E	U字形	2.2	1	2層	C V
149	65	55	K・L.53	125×76	70×40	30	楕円形	楕円形	N 77° E	進台形	1.64	2	2層	B II
150	65	55	K.53	155×80	97×45	50	長楕円形	楕円形	N 86° W	進台形	2.2	1	2層	C III
151	65	55	K33・54	140×86	65×35	60	楕円形	楕円形	N 74° E	進台形	1.62	1	2層	B II
152	65	55	L.54	140×82	72×10	56	楕円形	楕円形	N 67° E	Y字形	1.7	2	2層	B I
153	66	56	K.54	132×75	58×18	74	楕円形	楕円形	N 76° E	Y字形	1.76	1	3層	B I
154	66	56	M51	127×65	102×38	30	楕円形	楕円形	N 83° E	進台形	1.69	3	2層	B V
155	66	56	M51	115×82	67×62	28	楕円形	楕円形	N 17° E	進台形	1.64	-	2層	B II
156	66	56	M52	140×85	124×50	35	楕円形	楕円形	N 75° W	U字形	1.64	3	2層	B V
157	66	56	M53	156×57	82×27	42	長楕円形	楕円形	N 87° E	進台形	2.73	3	2層	C II
158	66	56	K・L.54	94×65	29×22	22	楕円形	楕円形	N 85° W	進台形	1.7	1	2層	B II
159	66	56	M54	140×74	115×35	50	楕円形	楕円形	N 74° W	進台形	1.89	3	3層	B II

※「平面形」:( ) 推定形 「長短比」:長軸/短軸

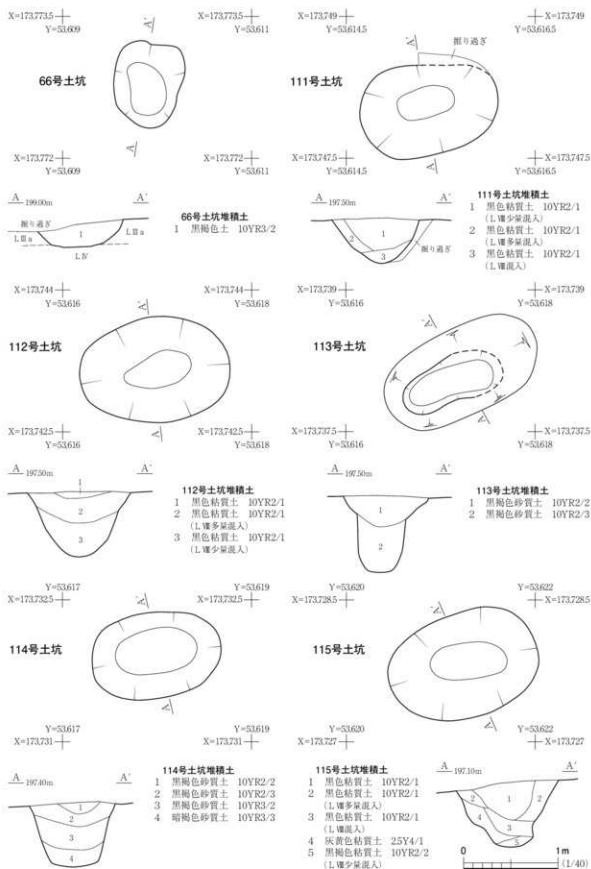


図59 66・111～115号土坑



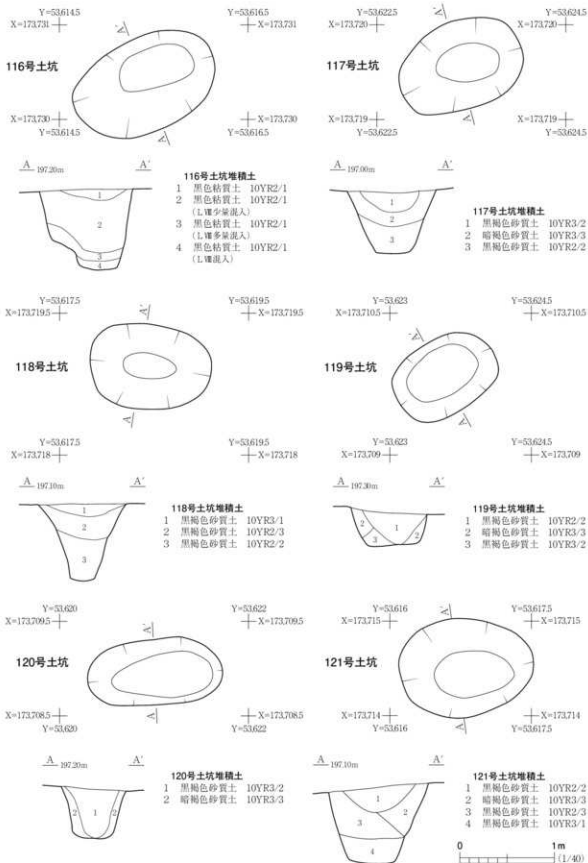


图60 116~121号土坑

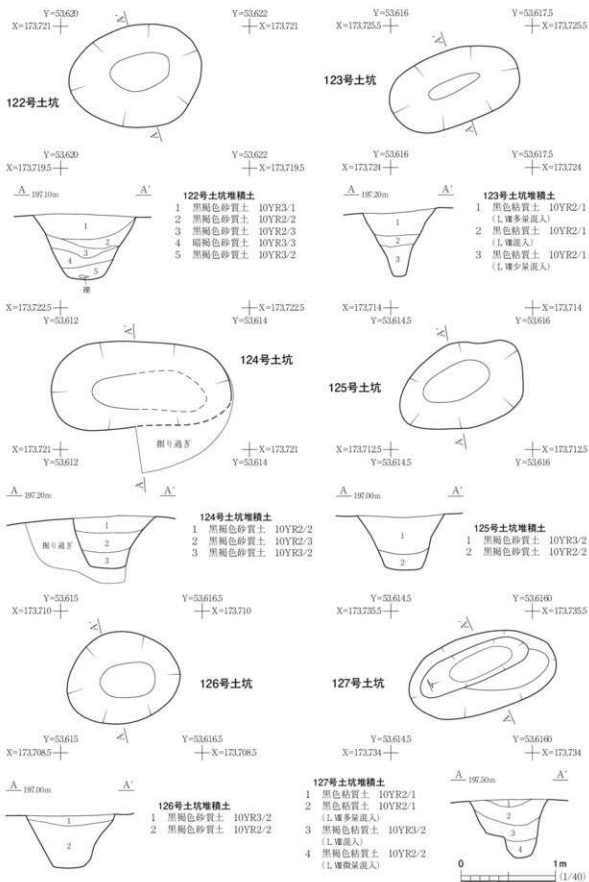


図61 122～127号土坑

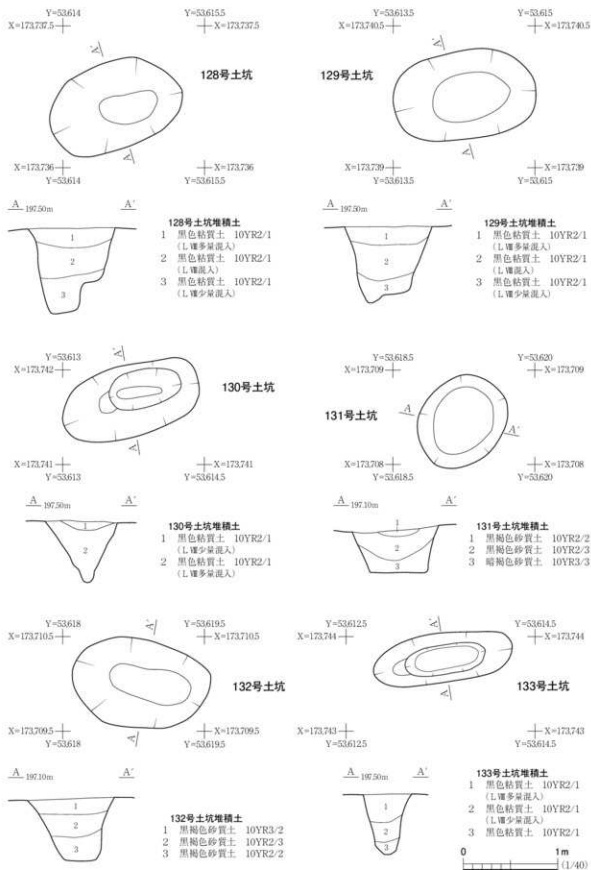


图62 128~133号土坑

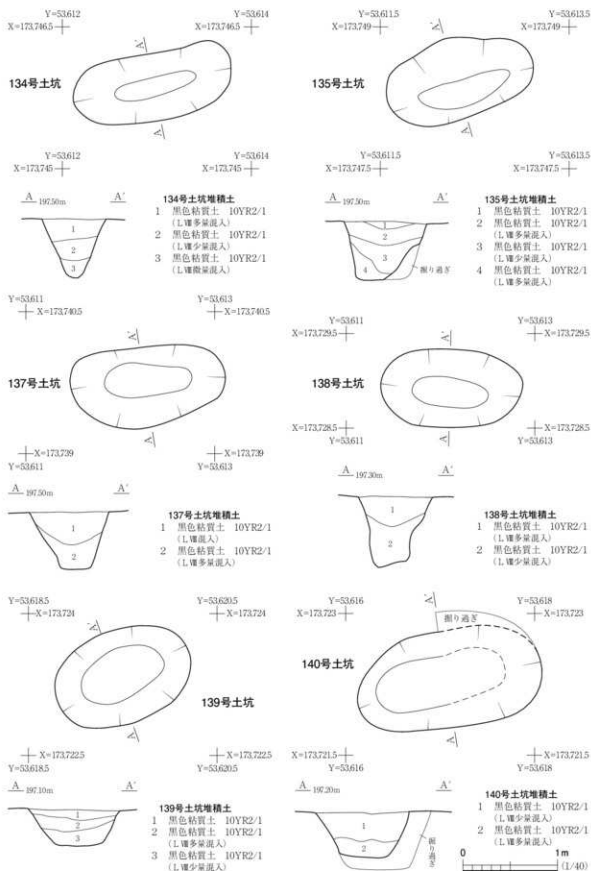


図63 134・135・137～140号土坑



图64 141~146号土坑



図65 147～152号土坑



图66 153~159号土坑

落し穴状土坑と推測される。そこで、66号土坑のみを単独で報告し、他の48基の土坑については、紙面の都合上、分布状況・形態について概観するにとどめることにする。なお、個々の土坑の位置・規模等の詳細なデータについては、表4に記載した。

#### 66号土坑 SK 66 (図59, 写真50)

本遺構は、北側調査区南西部に存在し、L 53グリッドに位置する。検出面はL III a上面である。重複遺構はない。本遺構北方には、25号住居跡がある。

本遺構の主軸方位はN 8° Eで、上端における平面形は不整形を呈し、長さ86cm、幅70cm、深さ27cmを測る。底面の平面形は楕円形を呈する。壁面は底面から緩やかに立ち上がる。

遺構内堆積土は単層であり、自然堆積と考えられる。

本遺構からは遺物が出土しなかったため、性格な年代を決定することはできないが、検出層位から奈良・平安時代の範疇に収まるものと想定される。

#### 111～135・137～159号土坑 SK 111～135・137～159 (図58～66, 写真50～56)

本遺構群は、遺構の平面形を明確にするために、L VII上面まで掘り下げて検出している。そのため遺構面はさらに上層である可能性もある。個別に見てみると、主軸がほぼ東西方向の楕円形ないしは長楕円形のものが主体をなす。堆積土はいずれも自然堆積と判断した。本遺構群の分布状況及び平面形・横断面形による形態分類は以下のとおりである。

#### 分 布 (図58)

本遺構群は、南北それぞれの調査区で南北に並んで存在している。北側調査区では3列、南側調査区でも3列見て取れる。北側調査区で南北方向に並ぶ3列の土坑列を西からライン1 (141・142・147・148・150・151・153・158号土坑)、ライン2 (143～146・149・152号土坑)、ライン3 (154・156・157・159号土坑)とし、南側調査区で南北方向に並ぶ3列の土坑列を西からライン4 (124～126・137・138号土坑)、ライン5 (116・118・123・127～135・140号土坑)、ライン6 (111～114・119・122・139号土坑)と呼称した。なお、北側調査区の155号土坑、南側調査区の115・117・120・121号土坑は上記のラインに属さないが、南側調査区の4基はライン5及びライン6と近接していることから、それらのラインに含めて捉えることもできる。なお、ライン1とライン5、ライン2とライン6は本来一連のものであったと考えられる。また、ライン2は平成23年度調査の調査②区で検出された土坑列と一連のもものと想定され、ライン4～6は調査③区で検出された土坑列へと連続しているものと想定できる。

#### 形態分類 (表4)

**平面形** A類：円形、B類：楕円形、C類：長楕円形



A類とB類の区別は、上端における長短比(長軸/短軸)が1.15を目安とし、これを下回るものはA類に、上回るものはB類に分類した。B類とC類の区別は、長短比が2を目安とし、これを下回るものをB類に、上回るものをC類に分類した。

**横断面形** I類：Y字形のもの、II類：壁面片側に段(平坦面)を有するもの

III類：逆台形のもの、IV類：V字形のもの、V類：U字形のもの

上記の平面形と横断面形の組み合わせにより、以下の9類が看取された。

**A II類** (143号土坑)

本類の土坑は1基である。規模は100×95cm、深さ72cmを測る。

**B I類** (113・115・152・153号土坑)

本類の土坑は4基である。規模は長軸132～172cm、深さ56～79cmを測る。規模と深さに相関関係は認められない。

**B II類** (116・127・128・144号土坑)

本類の土坑は4基である。規模は長軸123～156cm、深さ57～88cmを測る。規模と深さに相関関係は認められない。144号土坑を除く3基はライン5に属し、隣接していることが確認できる。

**B III類** (114・117・119・121・122・125・126・129・131・132・135・137～142・149・151・154・155・158・159号土坑)

本類の土坑は23基である。規模は長軸94～196cm、深さ22～83cmを測る。概ね規模の小さい土坑ほど深さが浅い傾向を看取できる。本類は南側調査区南部に密集している。

**B IV類** (118・123・130号土坑)

本類の土坑は3基である。規模は長軸128～148cm、深さ64～81cmを測る。規模の小さい土坑ほど深い傾向がある。本類はすべてライン5に存在しているが、これらがまとまっている様子は看取されない。

**B V類** (111・112・147・156)

本類の土坑は4基である。規模は長軸140～156cm、深さ35～68cmを測り、規模と深さに相関関係が看取できる。

**C III類** (120・124・146・150・157)

本類の土坑は5基である。規模は長軸135～189cm、深さ42～51cmを測る。本類は深さ40～50cm程で比較的浅い形態である。

**C IV類** (133・134号土坑)

本類の土坑は2基で、規模は長軸148～171cm、深さ61～62cmを測り、隣接して構築されている。

**C V類** (145・148号土坑)

本類の土坑は2基で、規模は長軸108～143cm、深さ55cmを測る。

## まとめ

調査①区では49基の土坑跡が検出され、その内48基は縄文時代の落し穴状土坑と考えられる。BⅢ類に属する土坑がまとめて分布する傾向を確認できたが、他の土坑が構築されている標高や分布は、形態分類ごとで明確な差を看取することはできなかった。また、遺構内堆積土はすべて自然堆積土と判断されたことから、時期差も推定できなかった。いずれの土坑からも遺物が出土していないため、性格な年代を決定することはできないが、検出層位を考慮すると、縄文時代早期末葉～縄文時代前期前葉の範疇に収まるものと想定される。(下 山)

## 第6節 溝 跡

調査①区から溝跡が3条(34・37・38号溝跡)検出された。いずれも、検出面はLⅢ a上面であるが、本来の遺構面はさらに上層である可能性がある。

### 34号溝跡 S D 34 (図67, 写真56)

本遺構は、北側調査区南部に存在し、K・L54グリッドに位置する。検出面はLⅢ a上面であるが、さらに上層から掘り込まれていた可能性もある。本遺構は他の遺構との重複関係はない。周辺遺構としては、本遺構北方には25号住居跡がある。

本遺構は、東西主軸の直線的な溝跡で、西端は調査区外に延びている。長さ11.48m、幅44cm～1.35m、深さ4～18cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、壁面は底面から緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は単層で、LⅡが流入したものと推測される。

本遺構からは縄文土器片28点、土師器甕片3点が出土した。縄文土器はすべて縄文時代晩期のものである。本遺構から出土した土器片3点を図示した。

図67-1は体部上半に棒状工具で横位の沈線を1条施し、その下端に半截竹管で刺突文を施している。2は口縁下端に沈線を施し、体部に縄文を施している。3は網目状糸文が施されている。

本遺構の所属時期は、遺構内堆積土から土師器片が出土していることと、遺構面がLⅢ aより上層である可能性を考慮すると、奈良・平安時代の範疇に収まるものと想定される。(下 山)

### 37号溝跡 S D 37 (図67, 写真56)

本遺構は調査①区南側調査区の北西部に存在し、K56グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ a上面である。南方4.5mに主軸方向がほぼ直交する38号溝跡が近接する。なお、南西端は調査区外に延びている。

本遺構は北東-南西主軸の直線的な溝跡であるが、底面は緩く蛇行している。北東隅は閉塞し、南西に向かって次第に幅が広がっており、断面形は逆台形を呈している。規模は、長さが3.55m、

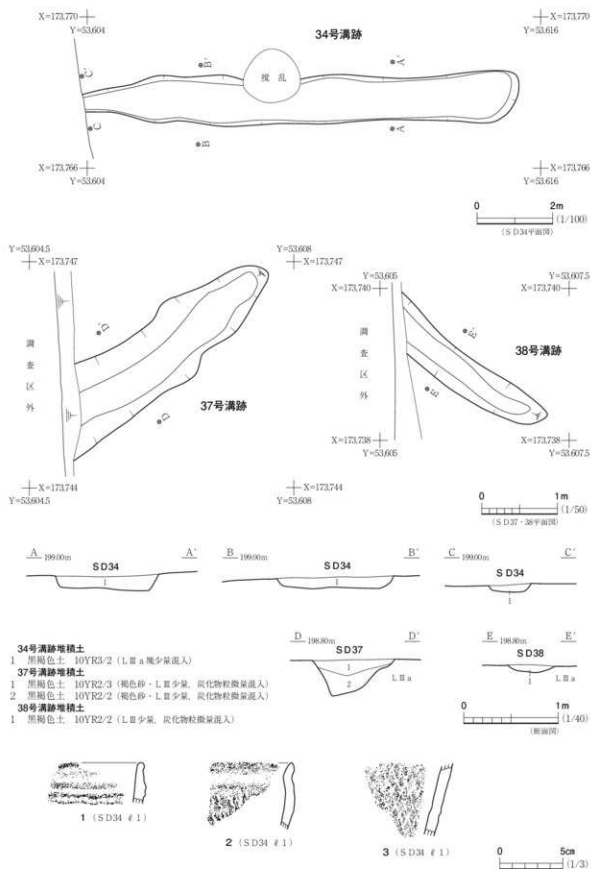


图67 34·37·38号溝跡, 34号溝跡出土遺物

上端幅は中央部で80cm、南西部で最大96cmを測り、深さは21cmを測る。側壁はLⅢaで、南壁は直立気味に急外傾し、北壁は急ないしは緩やかに外傾している。全体的に不整で起伏が認められる。それにより、両辺のラインの一部が乱れている。底面もLⅢaで、大きな起伏が認められ、不整である。遺構内堆積土は2層に分層され、LⅡを基調とした流入土である。遺構内から遺物は出土していない。

本遺構は、調査区外で38号溝跡と連続ないしは重複している可能性もあり、本遺構が単独で存在した場合は水路と推測されるが、38号溝跡と一体で存在した場合は区画施設と推測される。帰属時期は奈良・平安時代頃であろうか。(能登谷)

#### 38号溝跡 S D 38 (図67, 写真56)

本遺構は調査①区南側調査区の北西部に存在し、K57グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢa上面である。北方4.5mに主軸方向がほぼ直交する37号溝跡が近接し、東方2mには24号住居跡が近接する。なお、北西端は調査区外に延びている。

本遺構は北西-南東主軸の溝跡で、緩い弧状をなし、南東隅は閉塞している。断面形は皿状を呈している。規模は、長さ2.5m、上端幅34-48cm、深さ8cmを測る。側壁及び底面はLⅢaで、側壁は直線的に外傾し、底面は南東へ緩く下降している。遺構内堆積土は1層で、LⅡを基調とした流入土である。遺構内から遺物は出土していない。

本遺構は、調査区外で37号溝跡と連続ないしは重複している可能性もあり、本遺構が単独で存在した場合は水路と推測されるが、37号溝跡と一体で存在した場合は区画施設と推測される。帰属時期は奈良・平安時代頃であろうか。(能登谷)

## 第7節 小穴群

#### 小穴群 G P (図68・69, 写真57・58)

調査①区において、掘立柱建物跡や柱列跡に伴う柱穴の他にも、柱穴と推測される小穴(ピット)が503個検出された。その内訳は、北側調査区が430個、南側調査区が73個であり、北側調査区ではLⅡ上面及びLⅢa上面から検出され、南側調査区ではLⅢa上面から検出された。各調査区における分布をみると、北側調査区では広範囲に密集しているのに対して、南側調査区では密集域は3カ所認められ、それぞれにおける分布は散的である。これらの小穴については、グリッドごとにピット番号を付し、「K52G-P1」などと呼称した。各小穴の計測値及び形状を表5-7に記した。

小穴の平面形は円形ないしは楕円形を呈し、全体の形状は円筒形ないしは皿状を呈するものが主体的である。各小穴内の堆積土は、黒褐色土ないしは暗褐色土が主体をなしている。小穴は、小穴同士が重複する場合や、他の遺構と重複する場合があり、特に、25号住居跡と重複する小穴に関

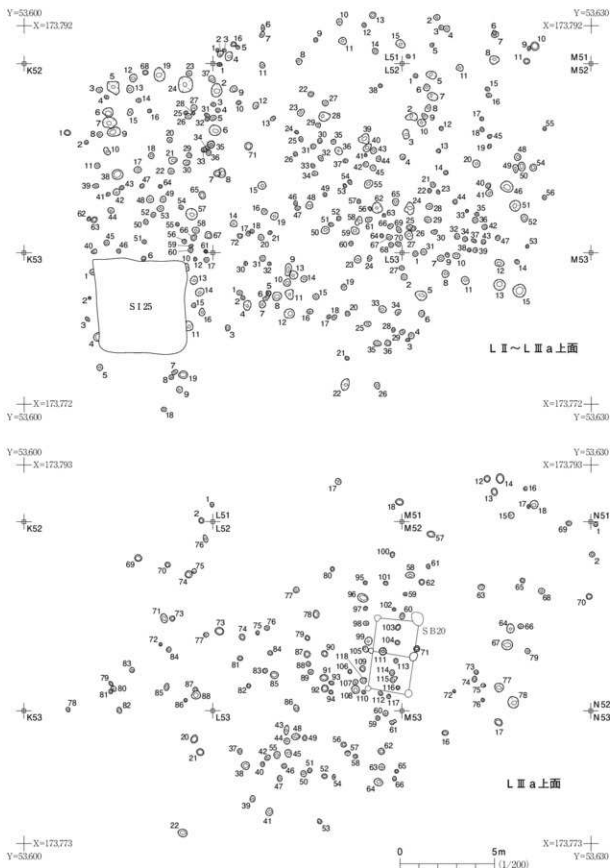


図68 調査①区北側小穴群

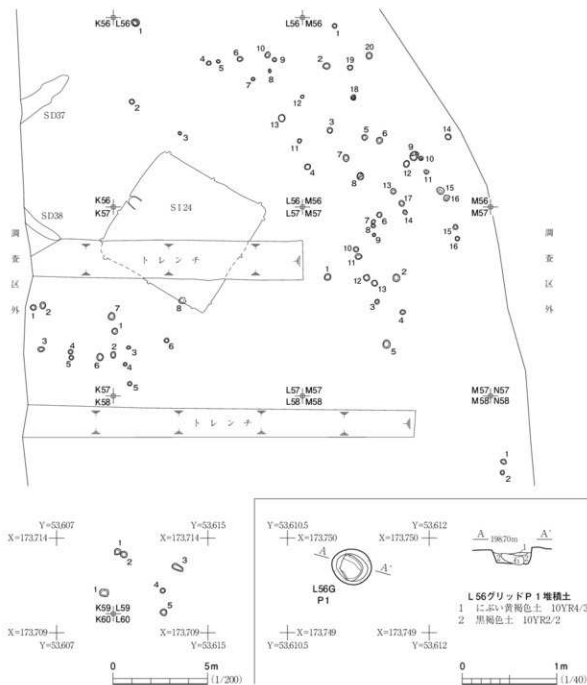


図69 調査①区南側小穴群

しては、同住居跡よりも古いことが確認されていることから、本調査区の小穴が古代まで遡る可能性がある。また、L56G-P1の底面からは礎石と推測される扁平な川原石(29×27×9cm)が出土し、L52G-P86から縄文土器片1点、L52G-P105から縄文土器片1点、L52G-P110から陶器片1点、L52G-P118から須恵系土器片1点、L56G-P9から須恵器片1点、M52G-P3から土師器片1点と陶器片2点、M56-P2から縄文土器片3点が出土した。

本調査区内より検出された小穴の帰属時期に関しては、先述のように、古代まで遡る可能性もあるが、出土遺物から下限は中世から近世と推測される。(能登谷)







表7 調査①区小穴一覽(3)

エリア	No.	規模(cm) 長×幅×高さ	平面形	溝状土	備考	エリア	No.	規模(cm) 長×幅×高さ	平面形	溝状土	備考	エリア	No.	規模(cm) 長×幅×高さ	平面形	溝状土	備考		
自然発見穴	L56	1 44×28	18 楕円形	①	礎石	M56	11 25×22	22 楕円形	①		M57	1 32×31	10 長方形	①					
		2 26×25	6 円形	②			12 38×30	13 楕円形	①			2 35×31	5 楕円形	②					
		3 18×18	11 円形	①			13 27	15 円形	①			3 21×21	12 円形	②					
		4 21×21	15 円形	①			14 32×29	14 楕円形	①			4 27×23	5 楕円形	②					
		5 18×18	16 円形	②			15 39×34	30 楕円形	①			5 41×30	5 楕円形	①					
		6 31×26	13 楕円形	①			16 32×28	27 円形	①			6 30×36	16 楕円形	①					
		7 17×17	5 円形	①			17 31×27	16 楕円形	①			7 25×18	9 楕円形	①					
		8 17×17	5 円形	①			18 36	31 円形	①			8 22	7 円形	①					
		9 20×20	20 円形	②			19 28	14 円形	①			9 18	7 円形	①					
		10 30×25	9 楕円形	②			20 37×32	22 楕円形	①			10 28	16 円形	①					
		11 23×20	12 楕円形	①			K57	1 29×29	4 円形			①	11 36×29	22 楕円形	①				
		12 25×15	4 楕円形	①				2 34×28	15 楕円形			①	12 31	13 円形	①				
		13 38×25	6 楕円形	①				3 32×20	12 楕円形			①	13 32	2 円形	①				
		M56	1	24×24			4 円形	①	土器			4 24×24	14 円形	①	M58	1	30×21	4 楕円形	①
				25×31			22 楕円形	①				5 22×22	12 円形	①			2 25×22	10 楕円形	②
31×28	25 楕円形			①	6 36×31	21 楕円形	①	15 25		10 円形	①								
32×28	7 楕円形			①	7 36×36	21 円形	①	16 23		11 円形	①								
30	10 円形			①	L57	1 28×28	17 円形	①		N58	1	20×20	12 円形	①					
33	12 円形			①		2 31×27	16 楕円形	①				2 20×20	10 楕円形	①					
37	12 円形			①		3 20×20	13 円形	①				3 25×22	10 楕円形	②					
38	15 楕円形			①	4 19×19	5 円形	①	K59		1	44×34	欠面 長方形	②						
51	4 17 楕円形			②	5 20×20	12 円形	①				L59	1	34×30	欠面 楕円形			①		
23	13 円形			②	6 24×21	5 楕円形	①	2 32×31		欠面 円形			①						
			7 20×20	5 円形	②	3 23×21	欠面 長方形	①											
						8 30×30	37 円形	①				4 23×23	欠面 円形	①					
												5 33×33	欠面 円形	①					

※[規模] : 遺存数

※[平面形] : 縮小図

※[層位] : 北側調査区: ① IYK3-2黒褐色砂質土

② IYK3-2黒褐色砂質土+IYK7-6明赤褐色シルト層含む

③ IYK3-1黒褐色砂質土(一部アフリカ)

④ IYK3-4暗褐色砂質土+IYK4-6褐色砂質土

⑤ IYK3-4暗褐色砂質土

※[備考] : ( ) : 焼出部位、→ : 新旧関係(古→新)、土器・土器出土

自然発見穴: ① IYK2-2黒褐色土(炭化物微塵、L土含む)

② IYK3-2黒褐色土

③ 褐色土+黒褐色土

## 第8節 遺構外出土遺物

土器・土製品(図70～76, 写真60・61)

縄文土器・弥生土器(図70～74, 写真60・61)

図70-1は縄文時代早期中葉の田戸上層式土器である。口縁部が内湾気味で、口唇に沿った沈線と工具の凹面による刺突列が巡っている。

図70-2～4は縄文時代前期前葉の大木2a式土器で、胎土に繊維を含んでいる。2は小波状口縁で、口唇に沿って刺突が巡っている。3の外表面には破線(短沈線)による文様が描かれ、4には羽状縄文が施されている。

図70-5～9は縄文時代前期中葉の大木3式土器である。5の口縁部は折り返し口縁風であり、下端には刻みを施している。体部には燃糸文が施されている。6は口縁部が外反している。口唇に沿って2列の円形刺突が巡り、体部には垂下する2列の円形刺突と2条1対の弧線文が配されている。7は小型の深鉢形土器で、口縁部から体部上半がほぼ直立している。口縁部には、口唇に沿って粘土紐を巡らせた後に、縦位に短い粘土紐を等間隔で貼り付けている。8・9は同一個体で、口縁部には5列の円形刺突が巡り、波頭下には上面に刻みを持つ隆線を垂下させている。

図70-10～24, 図71-1～10は縄文時代前期後葉の土器である。図70-10は口縁部に半截竹

管の凹面による押引文が施され、11の口縁部には半載竹管の凹面による刺突列が施されている。12～14は口縁部を無文とし、端部に蛇行する粘土紐を貼り付けている。15・18・19は口唇に刻みを施し、16は体部に半載竹管の凹面による直線的な沈線文が横走り、口唇に刻みを持つ短い粘土紐を貼り付けている。17は口縁端部が薄く作られ、口唇に沿って2列の刺突が巡っている。23の口縁部には1列あたりの並びが悪いものの、4列の刺突が巡っている。図70～24、図71-1～5は口縁部付近が外反し、結節文が巡っている。口唇に刻みを施すものや口唇に蛇行する粘土紐を貼り付けるものがある。以上の土器は大木4式土器及びそれに近い土器である。

図71-6～9は諸磯b式土器である。6・7は体部に半載竹管の凹面による弧線文が描かれ、6の区画内には斜位の刻みの充填も見られる。7は波状口縁で、口縁部が肥厚し、口唇に沿って半載竹管の凹面による刺突が巡っている。8・9は平口縁で、口唇に沿って半載竹管の凹面による沈線文が巡っている。

図71-10は浮島式土器で、口縁部には縦位の条線文、体部には貝殻文が施されている。

図71-11～22、図72-1は縄文時代前期末葉の大木6式土器である。図71-11・12は同一個体で、波状口縁であり、波頭部は二股で、口唇が内傾している。外面には上面に細かい刻みを持つ細い粘土紐を貼り付けた文様が展開している。13・14は波状口縁であり、13には縄文原体の側面圧痕、14には半載竹管の凹面による押引文が施されている。15・16は同一個体で、頸部及び体部には半載竹管の凹面による押引文が施されている。17は折り返し口縁で、口縁部には鋸歯状に沈線文が描かれている。18・19は平口縁で、体部上半が内湾気味に立ち上がり、口唇に沿って沈線ないしは隆線が巡っている。20は口縁部が肥厚し、口唇に沿って半載竹管の凹面による押引文及び沈線文が巡っている。21・22は口縁部が肥厚し、頸部に鋸歯状の文様を持つもので、21は口唇に沿って2列の円形刺突が巡り、22は波頭部の口唇に刻みを持つ。図72-1は波状口縁で、波頂下には渦巻文を配し、体部上半には半載竹管の凹面による押引文及び波状の沈線文が巡っている。

図72-2・3は明確な時期は不明であるが、縄文時代前期の土器と推測される。2は頸部に隆線が巡り、3は頸部に爪形の刺突が巡っている。

図72-4～21、図73-1～3は縄文時代中期初葉の大木7a式土器である。4～14は沈線区画の中に刻みや条線を充填するもので、口縁部及び体部は内湾気味のものが多い。6・7は口唇に渦巻き状の貼り付けを持つ。15・16・20は口縁部ないしは頸部に隆線を貼り付けるもので、15の隆線には刻みが施され、16・20の口縁部には沈線文と刺突が巡っている。18は内湾する口縁部に沈線文を持つもので、阿玉台式土器と似ており、大木7a式土器の新しい段階の土器と推測される。19・21は平口縁で、内湾している。19は口縁部に鋸歯状の沈線文を重層させ、体部には結節を持つ縄文を縦走させている。21は2個の突起下をX字状の高まりとし、そこに三角文を基調とした文様を描画している。上部及び下部の平行沈線間と斜行する平行沈線間には刻みが充填されており、高まりの両脇の区画には格子状の沈線文が充填されている。図73-1は波状口縁で、波頂下には円文を配し、口唇に沿って線間に刻みが充填された平行沈線文が巡っている。円文の内外に

は格子状の沈線文が充填されている。図72-17及び図73-2は結節を持つ地文が施された体部資料である。図73-3は口縁部の突起で、口唇及び側面には刻みが施されている。

図73-4~6は縄文時代中期前葉の大木7b式土器である。4は口縁部に刺突文を多用している。5・6は体部片で、5は縦走する沈線の脇にC字上の沈線文を配し、6は縦走する3本の沈線の内、中央のものを有節沈線としている。

図73-7~9は縄文時代中期中葉の土器で、7は大木8a式土器の口縁部突起である。8・9は大木8b式土器で、8は口縁部が内湾し、隆線と沈線により文様が描かれている。9は体部に平行沈線と鋸歯状の沈線文が描かれている。

図73-10~17は縄文時代中期末葉の大木10式土器である。沈線ないしは隆線により区画文が描画され、区画内に縄文を充填したり、区画内を無文としている。

図73-18・19、図74-1・2は後期初頭の土器である。頭部に隆線が巡り、口縁部を無文としている。18には口唇から垂下する隆線があり、19の隆線上には刻みが施されている。

図74-3~6は縄文時代後期前葉の網取式土器である。3は頭部に隆線が巡り、両端に円形のくほみを持つ文様で波頂部と連絡している。4~6は多条沈線文を施している。

図74-7~16は縄文時代後期中葉~末葉の土器である。7~9・13は平行沈線間に刻みや縄文が充填されており、13には2個一対の貼瘤がある。10~12は体部に格子状の沈線文を施している。14は無文の鉢形土器で、口唇には上面に刻みを持つ貼瘤を持つ。15は台付鉢の台部で、無文である。16は波頂部が8個ある深鉢形土器で、頭部は括れ、全面無文である。

図74-17~22は縄文時代後期の粗製土器及び底部資料である。17は折り返し口縁風で、18は口唇にも施文している。22の底面には網代圧痕が認められる。

図74-23は弥生時代中期後葉の壺形土器である。体部上半には2本同時施工による渦巻文が描かれ、体部下半には地が施されている。

#### 土 師 器 (図75, 写真61)

図75-1は土師器高杯の杯部で、体部は直線的に外傾し、両面ともヨコナデされている。

2は小型の手柄ね土器で、両面とも黒色処理及びヨコナデされ、外面の底部付近はユビオサエ、内面の見込みはヘラナデされている。

図75-3~6は土師器杯である。3・4は非ロク口成形で、5・6はロク口成形である。3は体部が内湾して立ち上がり、外面下部には段が存在する。外面は、口縁部付近がヨコナデされ、段より下の底部付近は手持ちヘラケズリされている。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。4は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は両面ともヨコナデされており、体部は外面がヘラミガキ後にヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。5は体部が内湾して立ち上がり、外面は体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。6は体部が内湾気味に立ち上がり、外面は体部下端から底面周縁にかけて手持ちヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。

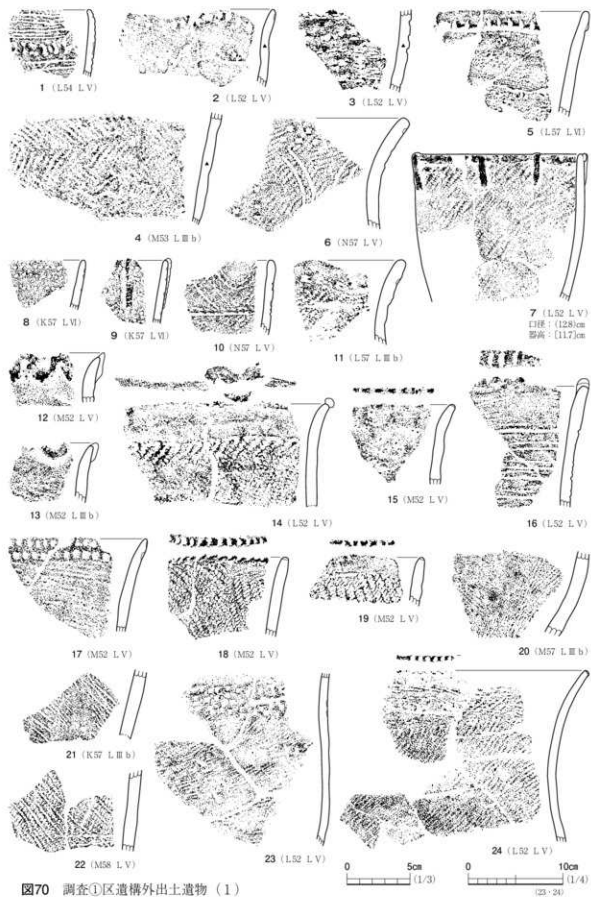


図70 調査①区遺構外出土遺物(1)

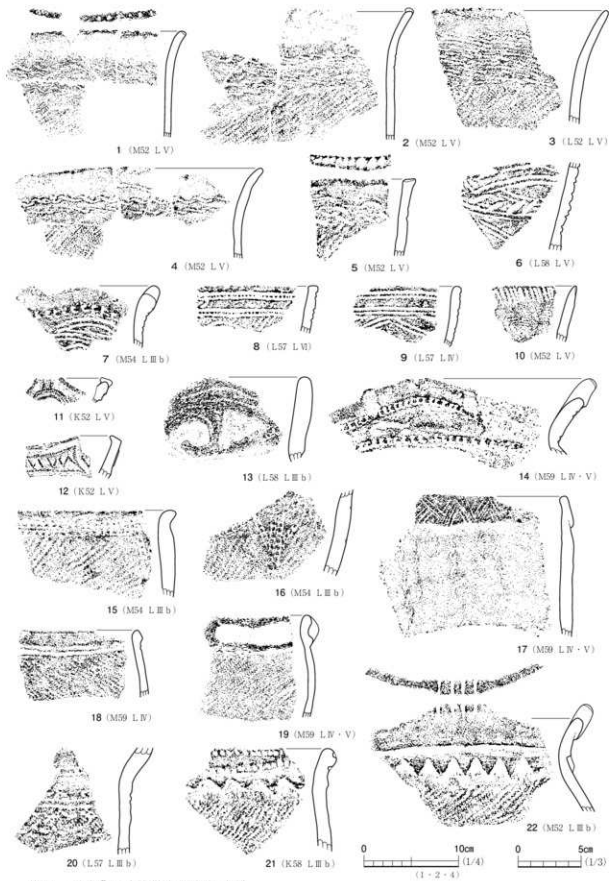


図71 調査①区遺構外出土遺物(2)

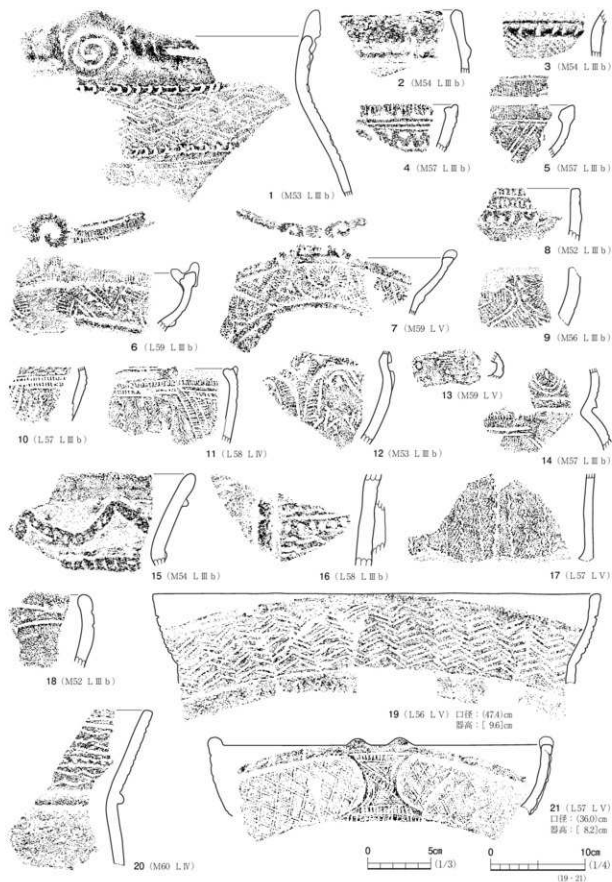


図72 調査①区遺構外出土遺物(3)

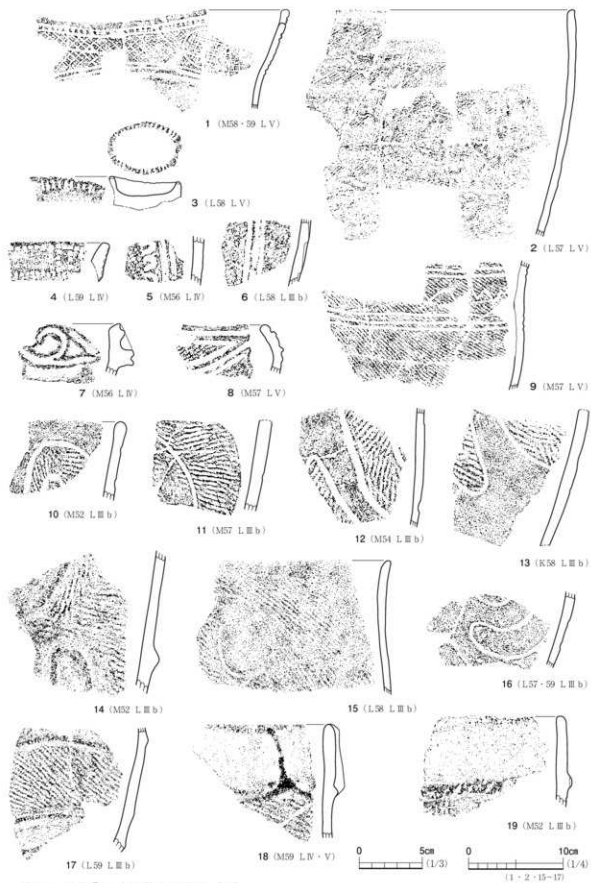


図73 調査①区遺構外出土遺物 (4)

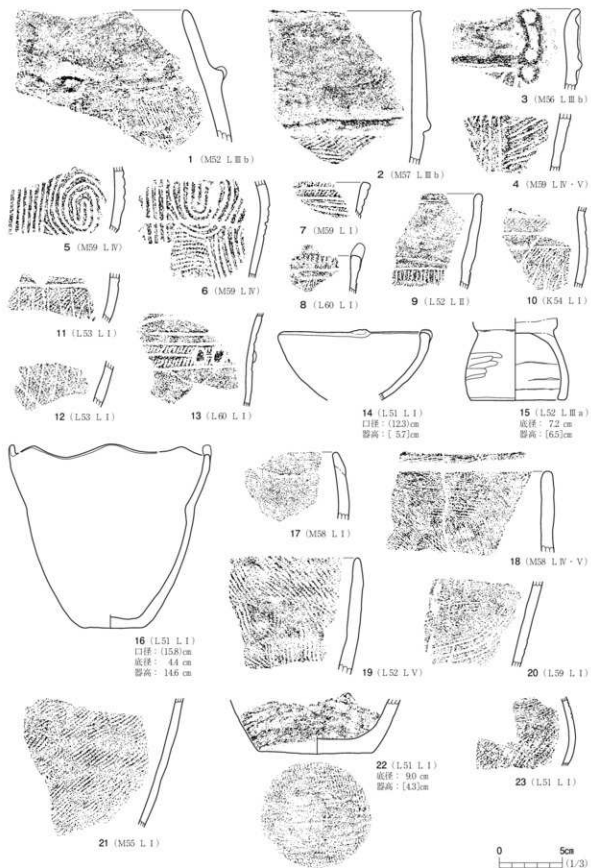


図74 調査①区遺構外出土遺物 (5)



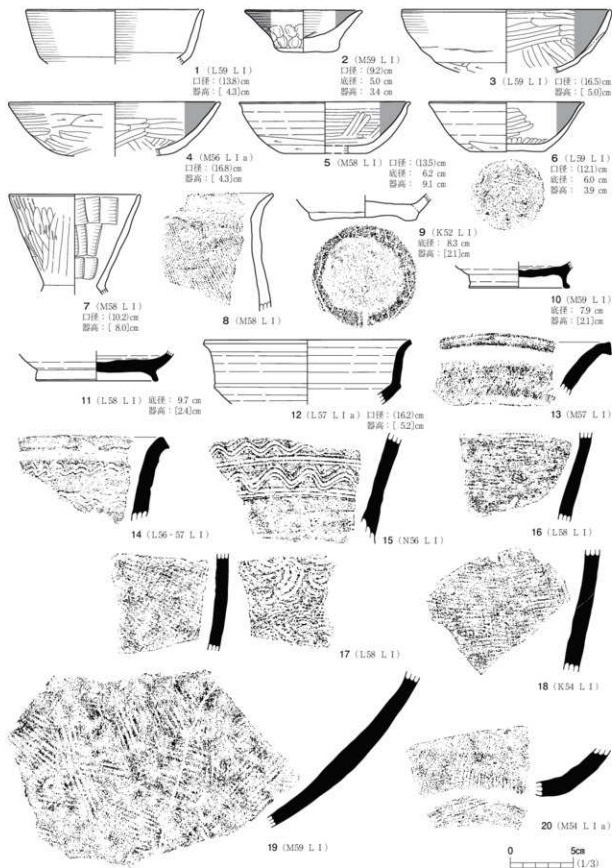


图75 調査①区遺構外出土遺物(6)

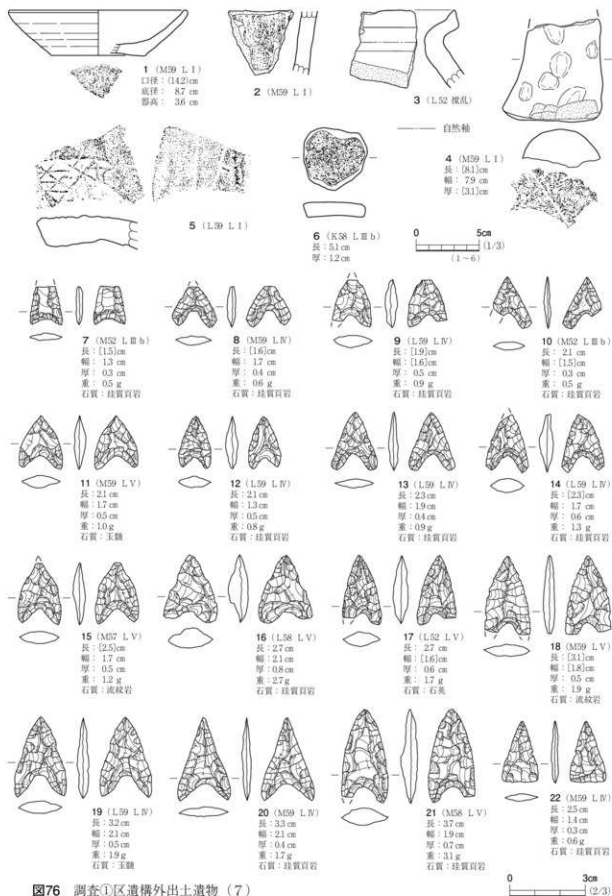


図76 調査①区遺構外出土遺物 (7)

図75-7は土師器丸底甕の口縁部で、直線的に立ち上がっている。外面はハケメ調整後に縦方向にヘラミガキされ、内面はヘラナアされている。

図75-8・9は土師器甕で、8は口縁部がヨコナアされ、体部はハケメ調整されている。9は底面の中央部が脱落して高台風になっており、底面周縁部には木葉痕が認められる。

### 須恵器(図75)

図75-10-12は須恵器高台付杯である。10の高台端部は外側に小さく張り出しているのに対し、11の高台は直線的である。12は口縁端部が面取りされている稜觥で、体部下半は内湾気味に

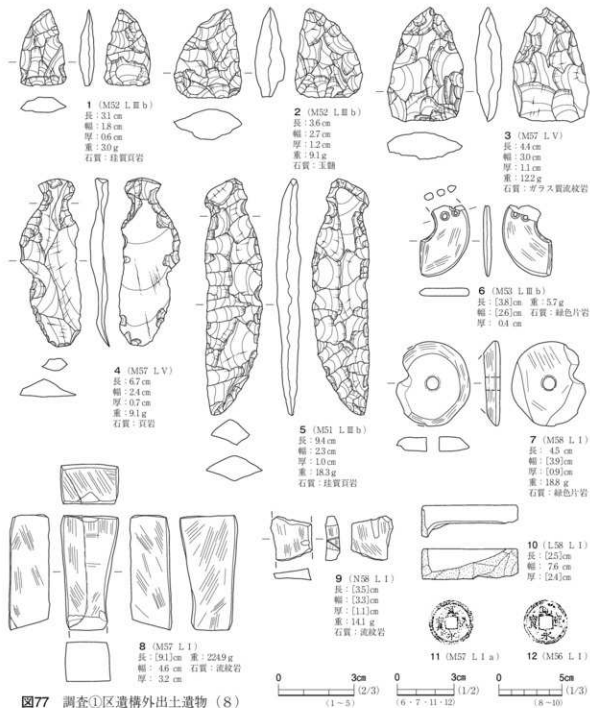


図77 調査①区遺構外出土遺物(8)

立ち上がり、体部上半は外反気味に立ち上がっている。

図75-13～20は須恵系甕である。13～15は口縁部で、13・14は口縁端部が面取りされている。13の外面にはタタキメが認められ、14・15の外面には波状文が描かれている。16～20は体部及び底部付近で、外面にはタタキメが認められ、17の内面には当具痕が認められる。

#### かわらけ・陶器 (図76)

図76-1はロクロ成形のかわらけ皿で、体部は直線的に外傾し、底面切り離しは回転糸切りである。2は須恵系陶器の播鉢の体部片である。内面は摩耗しており、卸目が微かに残存している。3は炎器系陶器の甕の口縁部付近資料である。頸部で屈曲し、口縁端部は面取りされ、上端が上方へ引き出されている。外面及び内面の一部には自然軸が付着している。

#### 土製品・瓦 (図76, 写真61)

図76-4は土製支脚である。裾広がり、横断面は円形を呈し、底面には木葉痕が認められる。5は平瓦で、外面には三角形を重層させた押型文、内面には布目圧痕が認められる。赤褐色を呈する。6は縄文土器片の周縁を加工した土器片裂円盤である。

#### 石器・石製品・銅製品 (図76・77, 写真62)

図76-7～22, 図77-1・2は石鏃である。図76-7～21は凹基無茎鏃で、側縁が直線的なものと弧状をなすものがある。図76-22は平基無茎鏃で、側縁が直線的である。図77-1・2は平基で、側縁の一方が直線的であり、他方は緩い弧状をなしている。1は先端付近には自然面が残存し、側縁の細かい調整剥離もなされておらず、2は側縁の調整剥離がそれぞれの面で一方のみであることから、これらは石鏃の未成品の可能性もある。

図77-3は平基の石槍である。側縁は緩い弧状をなしている。

図77-4・5は縦長の石匙である。4は素材剥片を取り出した際の剥離面が広く残存しており、側縁の調整剥離は括れ部以外では顕著ではない。それに対して、5は両面のほぼ全面に調整剥離がなされている。いずれも、一方の側縁は直線的で、他方は緩い弧状をなしている。

図77-6は緑色片岩製の珧状耳飾りである。折損部付近に3個の補修孔が存在する。図77-7は緑色片岩製の紡錘車で、上部は欠失している。図77-8・9は砥石である。8は一端が欠損しており、表面及び両側面が摩耗している。9は三方の側面が欠損し、両面及び一側面が摩耗している。図77-10は硯の先端部片である。

図77-11・12は「寛永通寶」である。

(能登谷)

## 第4章 調査⑨区の調査成果

### 第1節 調査経過と概要

本節では調査⑨区の調査経過と概要について述べる。調査前の現況は調査区北西部(K～N・59～63グリッドの範囲:約1,000m<sup>2</sup>)が宅地跡・耕作地跡、調査区南東部～南部(O～Q・62～64グリッドとM～P・64～71グリッドの範囲:約1,700m<sup>2</sup>)が現用の県道73号二本松・金屋線であった。調査にあたっては調査区の東側が民地(住宅・耕作地)に接していたため、掘削深度に合わせて安全帯を設けて掘り下げた。年度当初の工事計画では現用の県道撤去工事が8月以降に予定されていたため、調査は調査区北西部から着手した。5月23日に調査を開始し、5月中は原発事故による汚染土の除去、表土剥ぎ等を行った。6月になると遺物包含層の掘り下げが本格化し、4日には縄文時代上層面の遺構検出作業を開始した。27日には縄文時代上層面の精査が終了し、地形測量を行った。28日以降は下層の掘り下げに移行したが、遺物の出土が希薄になったため、重機を導入して作業の進捗を図った。7月になると梅雨入りし、連日の降雨で作業はほぼ中断した。特に7月下旬には集中豪雨に見舞われ、調査区が度々冠水したため、その排水と復旧作業に追われた。8月下旬には縄文時代下層面で土坑群が検出された。9月上旬に土坑群の精査、地形測量が終了し、18日に調査区北西部を工事側に引き渡した。調査区南東部～南部は10月4日に調査を開始し、11日に中世面、17日に古墳時代面の調査が終了した。10月下旬には台風26・27号の影響により調査区が冠水したが、31日には縄文時代上層面の遺構精査が終了した。11月になると縄文時代下層面の調査に移行し、土坑群の精査を行った。地形測量を含め、全ての調査が終了したのは12月4日である。実働日数は60日であった。なお、7月5日には二本松市立石井小学校、11月27日には二本松市立安達太良小学校の児童による遺跡見学が行われた。

次に概要について述べる。調査⑨区はトロミ遺跡の南部に位置し、北流する阿武隈川に最も近接した調査区である。調査区内の地形は上位の中世面・古墳時代面がほぼ平坦なのに対し、下位の縄文時代面では現在の阿武隈川に沿った形で南北方向に延びる自然堤防状の尾根とその後背地となる。中世面(L I d 上面:1,000m<sup>2</sup>)と古墳時代面(L II 上面:800m<sup>2</sup>)は宅地・耕作地の造成や県道工事に伴って調査区の西側部分が大きく掘削されており、現状では東側の県道部分にのみ帯状に残されていた。検出された遺構は中世面の溝跡2条、土坑3基である。古墳時代面では遺構は検出されなかったが、土師器片・須恵器片が少量出土した。縄文時代面は上層面(L V 上面:1,900m<sup>2</sup>)と下層面(L VII 上面:1,000m<sup>2</sup>)の2面を確認した。上層面では縄文時代前期後葉～後期後葉の遺物が多く出土した。下層面では縄文時代前期前葉以前の落し穴状土坑を63基検出した。これらは自然堤防状の尾根地形の頂部付近で確認され、ほぼ南北方向に列をなしている。出土した遺物は縄文土器片1,439点、土師器片104点、須恵器片6点、石器190点である。(小 巻)

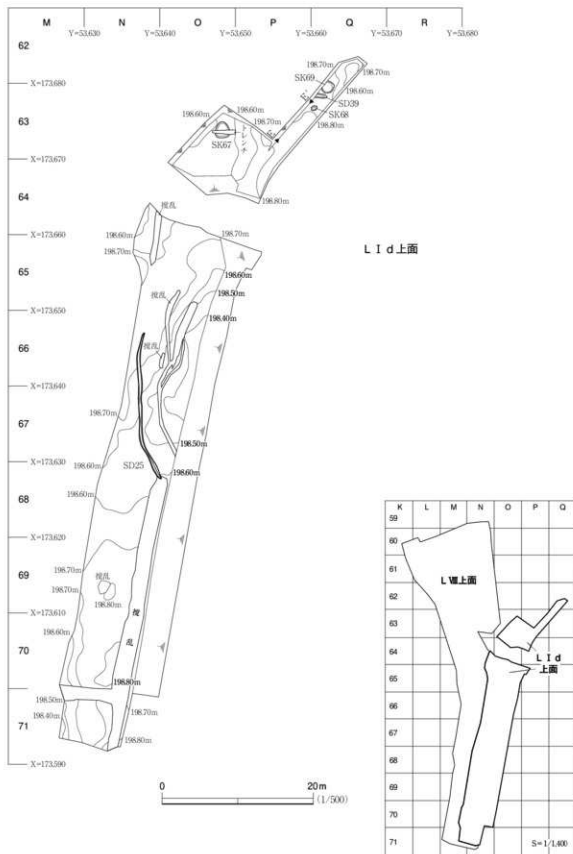


図78 調査⑨区遺構配置図(1)

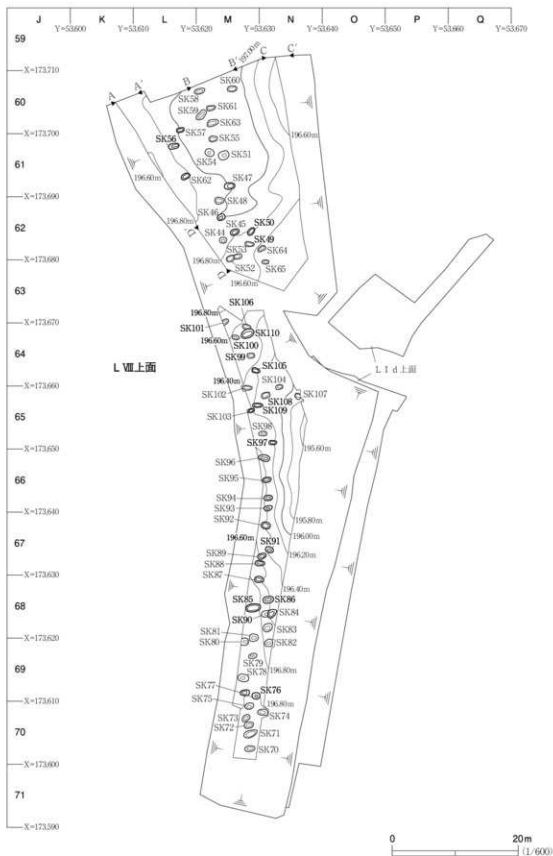


図79 調査⑨区遺構配置図(2)

## 第2節 基本土層

L I a は層厚が約30～60cmあり、現表土・盛土である。色調と性状は異なるが、調査②区のL I、調査⑤区・⑥区のL I a<sub>1</sub>、調査⑩区のL I aに概ね相当する。L I a' は層厚が約15～25cmあり、阿武隈川の堆積作用に起因する砂層である。色調は異なるが、調査⑤区・⑥区のL I a、調査⑩区のL I a' に概ね相当する。L I b は層厚が約5～15cmあり、色調と性状は異なるが、調査②区のL I b、調査⑤区・⑥区のL I c、調査⑩区のL I bに概ね相当する。L I d は層厚が約10～30cmあり、色調と性状は異なるが、調査②区のL I d、調査⑤区・⑥区のL I d、調査⑩区のL I dに概ね相当する。本層上面が中世の遺構検出面である。L I d' は層厚が約5～10cmあり、L I dの下半部に相当する堆積土である。上記のL I a～L I dは、中世面が遺存する東側の県道部分(図78のE-E')で観察された。前節で述べたように、調査区北西部(図79のA-A'・B-B'・C-C'・D-D')は大きく掘削されているため、L I a～L I dが遺存しておらず、層厚約10～50cmの現表土・耕作土のL Iが確認された。L Iからは縄文時代後期中葉・後期末葉～晩期初頭、古墳時代後期、奈良・平安時代の遺物が出土している。

L II は層厚が約30cmの黒褐色粘質土を主体とする層であるが、耕作等による攪拌を受けており、L Iに由来する黒色粘質土の塊が層中に混入している。調査②区のL II、調査⑤区・⑥区のL II、調査⑩区のL IIに概ね相当する堆積土であり、本来は本層上面が古墳時代の遺構検出面であるが、当該期の遺構は検出されなかった。本層中からは縄文時代後期後葉の遺物が出土している。

L III a・L III bは調査②区のL III a、調査⑤区・⑥区のL IIIに概ね相当する砂質土である。層厚はともに約20～50cmである。L III aからは遺物が出土しなかったが、L III bからは縄文時代前期後葉～中期前葉・中期後葉～後期後葉の遺物が出土した。L III c・L III dは調査区北西隅(K60グリッド付近)で部分的に確認された砂礫層である。層厚はL III cが最大約40cm、L III dが最大約20cmで、調査②区のL III b、調査⑤区・⑥区のL III bに概ね相当する。L III cからは縄文時代前期後葉～中期前葉・中期末葉～後期前葉の遺物が出土し、L III dからは縄文時代中期末葉の遺物が出土した。L III a～L III dはいずれも阿武隈川の堆積作用に起因する堆積土である。

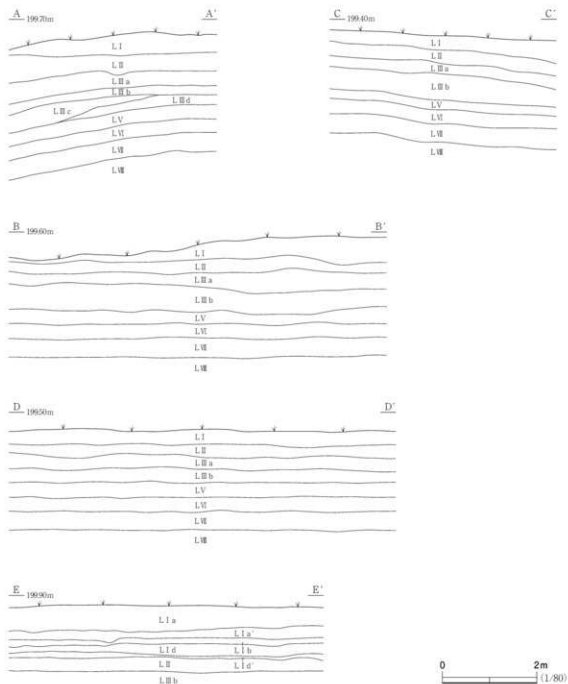
L V は層厚が約20～40cmあり、阿武隈川の堆積作用に起因する堆積土である。調査②区のL V、調査⑤区・⑥区のL Vに概ね相当する。層中からは縄文時代前期末葉～中期前葉の遺物が多く出土した。

L VI は層厚が約20～30cmあり、阿武隈川の堆積作用に起因する堆積土である。色調と性状は異なるが、調査⑤区・⑥区のL VIに概ね相当する。層中からは少量の遺物が出土している。

L VII は層厚が約30～40cmあり、色調は若干異なるが、調査②区のL VI、調査⑤区・⑥区のL VIIに概ね相当する。層中からはごく少量の遺物が出土している。

L VIIIは阿武隈川の堆積作用に起因する堆積土で、トロミ遺跡の基盤層である。性状が若干異なる





調査⑨区基本土層 (A-A'・B-B'・C-C'・D-D')

- L.I 黒褐色土 10YR3/1 (現表土・耕作土)
- L.II 黒褐色土10YR3/1と黒色粘質土10YR3/1との混土
- L.IIIa 明黄褐色砂質土 10YR6/6
- L.IIIb 暗褐色砂質土 10YR3/3
- L.IIIc 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (指頭大の礫混入)
- L.IIId 褐灰色砂質土 10YR4/1 (拳大の礫混入)
- L.V 黒色砂質土 10YR2/1
- L.VI 明黄褐色砂質土 10YR7/6
- L.VII 黒褐色粘質土 10YR3/1
- L.VIII におい黄褐色砂質土 10YR6/4

調査⑨区基本土層 (E-E')

- L.Ia におい黄褐色土 10YR4/3 (現表土・盛土)
- L.Ia' 明黄褐色砂質土 10YR7/6
- L.Ib 灰黄褐色土 10YR4/2
- L.Ic 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
- L.Ic' 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
- L.II 黒褐色粘質土 10YR3/1
- L.IIIb 暗褐色砂質土 10YR3/3

図80 調査⑨区基本土層

が、調査②区のLⅤ、調査⑤区・⑥区のLⅥに概ね相当する。本層の上面で縄文時代の落し穴状土坑が63基検出された。土坑群の年代は調査⑤区・⑥区における基本土層の検出結果等から、縄文時代前期前葉以前と推定される。

(小 暮)

### 第3節 土 坑

44～65・67～110号土坑 SK 44～65・67～110 (図81～94, 写真70～78)

調査⑨区で検出された土坑は縄文時代前期前葉以前に比定されるものが63基、中世以降に比定されるものが3基の計66基を数える。本節では以下に、各時代の土坑の概要について報告する。また、各土坑の詳細なデータについては表8に一括して示した。

縄文時代前期前葉以前に比定される土坑は南北方向に並んでいることから、全て落し穴状土坑と判断した。これらはLⅥ上面で検出されたが、北側に隣接する調査①区では同種の土坑をLⅦ中位のレベルで確認している。したがって、本調査区で検出された土坑は本来、現状よりも約15～20cm深かった可能性がある。また、本調査区においては土坑の平面形、断面形、長軸方位等で明確に分類できなかったが、土坑の開口部の規模と検出面から底面までの深さによって、表8、図81に示したように4種類に分けることができた。

土坑Aは開口部の長軸長が1.2～2.0m、短軸長が0.6～1.4mの範囲に収まり、検出面から底面までの深さが60cm以上あるものである。46・47・51・52・54・56・57・59・61・62・75～78・80～84・86～88・90～93・95～97号土坑の29基が該当する。開口部の平面形は楕円形が26基、隅丸長方形が1基、円形が1基、不整形が1基、底面の平面形は楕円形が26基、隅丸長方形が1基、不整形が2基で、いずれも楕円形が基調になっている。長軸方位はN85°E～N89°Wの範囲に収まる。断面形は逆台形が20基、U字形が8基、方形が1基で、逆台形が多い。堆積土はいずれも1～3層の自然流入土である。なお、46・47・52・62・75・77・80・83号土坑の8基には断面に逆台形、U字形のセクションが観察されることから、掘り直して同じ土坑A、あるいは後述する土坑Bとして再利用されたことが考えられる。これは掘削の省力化と効率化を図るため、比較的深い土坑Aが窪地化した段階で、再度掘り直された可能性を示している。重複関係は2カ所確認され、新旧は「53号土坑(土坑B)→52号土坑(土坑A)」 「90号土坑(土坑A)→84号土坑(土坑A)」である。掘り直された土坑Aが、その後、土坑Aと土坑Bのいずれにもなっていることも考え合わせると、両者の違いが時期差に起因するものであるとは考えにくい。土坑Aの分布は調査区北側の標高196.80～197.00m付近の微高地から、調査区中央部の鞍部を経て、調査区南側の標高196.60～196.80m付近の微高地にかけて認められる。特に調査区中央部から南部にかけては標高196.40～196.60m付近に13基、標高196.80m付近に6基が、2つの列をなしてほぼ等間隔に並んでいる。自然堤防上の鞍部を狙って、集中的に構築されたようである。なお、掘り直されたと思われる土坑Aは調査区北側と南側の微高地に分布する傾向がある。

表8 調査㉔区土坑一覧

遺構番号	遺構種類	写真ID 調査番号	位置	平面形		長軸方位	規模 (cm)			断面形	堆積土	備考
				開口部	底面		開口部	底面	高さ			
44	82	70	M62	楕円形	楕円形	N 71° W	114 × 96	63 × 34	52	並流斜形	3層・自然	土坑B
45	82	70	M62	楕円形	楕円形	N 67° E	141 × 98	106 × 47	40	流台形	3層・自然	土坑B
46	82	70	M62	楕円形	楕円形	N 69° E	128 × 96	73 × 38	60	流台形	3層・自然	土坑A
47	82	70	M61	楕円形	楕円形	N 73° E	162 × 108	98 × 52	66	流台形	3層・自然	土坑A
48	82	70	M62	楕円形	楕円形	N 89° E	150 × 110	106 × 53	54	流台形	3層・自然	土坑B
49	83	70	M62	楕円形	楕円形	N 83° W	143 × 78	130 × 62	21	流台形	2層・自然	土坑C
50	83	70	M62	楕円長方形	楕円形	N 45° E	133 × 84	106 × 38	46	流台形	2層・自然	土坑B
51	83	70	M61	楕円長方形	楕円形	N 64° E	162 × 131	78 × 47	91	流台形	3層・自然	土坑A
52	83	71	M62・63	楕円形	楕円長方形	N 61° E	133 × 90	102 × 62	65	流台形	3層・自然	土坑A・SK33上重履
53	83	71	M62	(楕円形)	(楕円形)	N 87° E	[122] × 80	[112] × 50	57	(方形)	3層・自然	土坑B・SK32上重履
54	84	71	M61	円形	形	N 60° E	132 × 128	54 × 40	75	流台形	3層・自然	土坑A
55	84	71	M61	楕円長方形	楕円形	N 87° E	138 × 99	98 × 50	59	流台形	3層・自然	土坑B
56	84	71	L 61	楕円形	楕円形	N 73° E	169 × 85	110 × 38	69	流台形	3層・自然	土坑A
57	84	71	L 60	楕円形	楕円形	N 72° E	128 × 68	100 × 38	66	流台形	3層・自然	土坑A
58	84	71	L・M 60	楕円形	楕円形	N 71° E	167 × 90	122 × 47	48	流台形	2層・自然	土坑B
59	84	71	M 60	楕円形	楕円形	N 45° E	192 × 98	149 × 36	77	流台形	3層・自然	土坑A
60	85	72	M 60	楕円形	楕円形	N 87° E	158 × 88	122 × 60	46	流台形	2層・自然	土坑B
61	85	72	M 60	楕円形	楕円形	N 82° E	142 × 76	124 × 48	63	方形	3層・自然	土坑A
62	85	72	L 61	楕円形	楕円形	N 56° E	149 × 87	118 × 57	76	流台形	3層・自然	土坑A
63	85	72	M 60	楕円形	楕円形	N 73° E	191 × 96	146 × 51	53	流台形	3層・自然	土坑B
64	85	72	N 62	楕円形	楕円形	N 51° E	130 × 80	106 × 48	57	流台形	3層・自然	土坑B
65	85	72	N 62・63	楕円形	楕円形	N 68° W	98 × 58	80 × 30	31	並流斜形	2層・自然	土坑C
67	86	72	O 63	不整形	不整形	N 63° E	233 × 211	394 × 194	13	流台形	1層・自然	中程以降
68	86	72	Q 63	楕円形	楕円形	N 65° E	95 × 60	60 × 26	15	流台形	1層・自然	中程以降
69	86	73	Q 62・63	(不整形)	(不整形)	N 41° E	149 × [125]	140 × [114]	18	流台形	1層・自然	中程以降
70	86	73	M 70	楕円形	楕円形	N 84° E	170 × 90	100 × 46	54	流台形	2層・自然	土坑B
71	86	73	M・N 70	楕円形	楕円形	N 68° E	226 × 104	144 × 67	58	流台形	1層・自然	土坑B
72	87	73	M 70	楕円形	楕円形	N 69° E	158 × 104	102 × 44	43	並流斜形	2層・自然	土坑B
73	87	73	M 70	楕円形	楕円形	N 53° E	141 × 94	92 × 45	52	流台形	3層・自然	土坑B
74	87	73	N 70	楕円形	楕円形	N 83° W	160 × 104	87 × 46	52	並流斜形	2層・自然	土坑B
75	87	73	M 69・70	楕円形	楕円形	N 76° E	143 × 100	78 × 52	62	流台形	1層・自然	土坑A
76	87	73	M・N 69	楕円形	楕円形	N 89° W	133 × 108	50 × 34	69	U字形	2層・自然	土坑A
77	87	74	M 69	楕円形	楕円形	N 85° E	155 × 104	90 × 52	80	流台形	3層・自然	土坑A
78	88	74	M 69	楕円形	楕円形	N 83° W	174 × 110	76 × 42	76	U字形	2層・自然	土坑A
79	88	74	M・N 69	楕円形	楕円形	N 85° E	132 × 78	78 × 26	59	流台形	3層・自然	土坑A
80	88	74	M 68・69	(楕円形)	(楕円形)	N 68° W	[114] × 114	72 × 36	83	U字形	3層・自然	土坑A
81	88	74	M・N 68・69	楕円形	楕円形	N 85° E	146 × 116	77 × 42	72	流台形	2層・自然	土坑A
82	88	74	N 68・69	楕円形	楕円形	N 78° E	137 × 128	73 × 30	79	U字形	1層・自然	土坑A
83	89	74	N 68	楕円形	不整形	N 81° E	162 × 128	88 × 64	95	流台形	3層・自然	土坑A
84	89	74	N 68	不整形	不整形	N 53° E	178 × 114	106 × 64	96	流台形	3層・自然	土坑A・SK90上重履
85	89	75	M・N 68	楕円形	楕円形	N 81° E	240 × 130	193 × 88	50	流台形	2層・自然	土坑B
86	89	75	N 68	楕円形	楕円形	N 82° E	173 × 106	113 × 40	91	U字形	3層・自然	土坑A
87	90	75	M 68・N 67・68	楕円形	楕円形	N 86° W	145 × 98	100 × 50	66	流台形	3層・自然	土坑A
88	90	75	M・N 67	楕円形	楕円形	N 83° E	152 × 85	104 × 42	66	流台形	3層・自然	土坑A
89	90	75	N 67	楕円形	楕円長方形	N 82° E	148 × 87	95 × 47	38	流台形	3層・自然	土坑B
90	89	74	N 68	(楕円形)	(楕円形)	N 85° E	[114] × 94	[64] × 29	82	流台形	1層・自然	土坑A・SK84上重履
91	90	75	N 67	楕円形	楕円形	N 79° W	141 × 94	72 × 33	61	流台形	2層・自然	土坑A
92	90	75	N 67	楕円形	楕円形	N 75° W	152 × 111	94 × 62	79	流台形	3層・自然	土坑A
93	90	76	N 66	楕円形	楕円形	N 73° E	134 × 80	72 × 28	64	U字形	2層・自然	土坑A
94	91	76	N 66	楕円形	楕円形	N 89° W	135 × 86	80 × 40	49	流台形	3層・自然	土坑B
95	91	76	N 66	楕円形	楕円形	N 76° E	151 × 86	96 × 36	75	U字形	2層・自然	土坑A
96	91	76	N 66	楕円形	楕円形	N 86° W	192 × 106	130 × 46	82	流台形	2層・自然	土坑A
97	91	76	N 65	楕円形	楕円形	N 86° W	126 × 70	84 × 36	80	U字形	3層・自然	土坑A
98	91	76	N 65	楕円形	不整形	N 86° W	132 × 73	70 × 33	57	流台形	2層・自然	土坑B
99	91	76	M 64	楕円長方形	楕円形	N 85° E	111 × 78			2層・自然	土坑D	
100	92	76	M 64	楕円形	楕円形	N 75° W	120 × 68			2層・自然	土坑D	
101	92	77	M 63・64	(楕円形)	(楕円形)	N 68° E	96 × 76			2層・自然	土坑D	
102	92	77	M 64・65	楕円形	楕円形	N 89° W	158 × 73			2層・自然	土坑D	
103	92	77	M 65	楕円形	楕円形	N 79° E	114 × 60			3層・自然	土坑D	
104	92	77	N 64・65	楕円形	楕円形	N 75° E	108 × 68			2層・自然	土坑D	
105	92	77	M・N 64	楕円形	楕円形	N 75° W	140 × 78			3層・自然	土坑D	
106	93	77	M 64	(楕円形)	(楕円形)	N 74° W	136 × 72			2層・自然	土坑D	
107	93	77	N 65	(楕円形)	(楕円形)	N 76° W	90 × 86			2層・自然	土坑D	
108	93	77	N 65	楕円長方形	楕円形	N 68° E	136 × 90			2層・自然	土坑D	
109	93	78	M・N 65	楕円形	楕円形	N 84° E	165 × 69			2層・自然	土坑D	
110	93	78	M 64	楕円形	楕円形	N 67° E	208 × 138			3層・自然	土坑D	

● [平面形] [断面形]

● [規模] [ ] : 遺存部

● [堆積土] 自然 : 自然堆積

● [備考]

土坑B : 深さ40cm以上150cm未満 土坑C : 深さ40cm未満 土坑D : 流水により底面まで調査不能

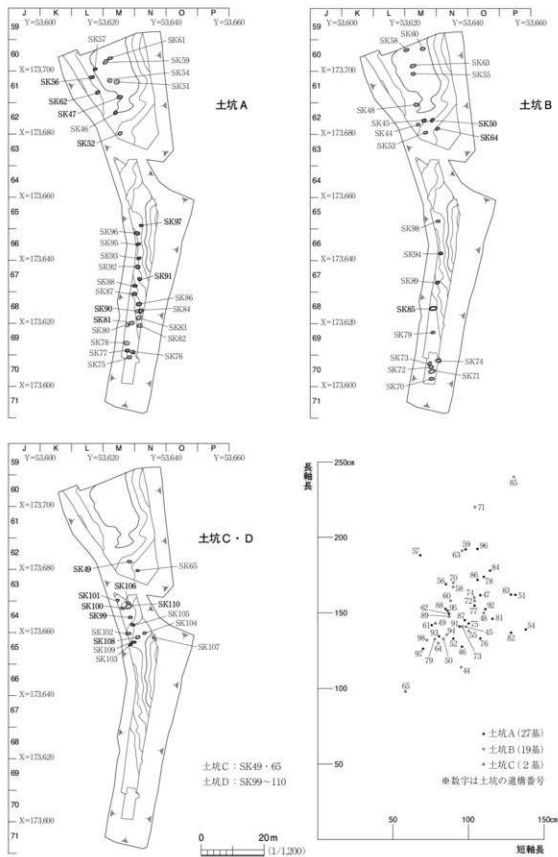


図81 調査⑨区土坑の形態別分布・軸長分布図

土坑Bは開口部の長軸長が1.3～1.7m、短軸長が0.7～1.1mまでの範囲に収まるものが多く、検出面から底面までの深さは40cm以上60cm未満である。土坑Aに比べると、規模は一回り小さい。44・45・48・50・53・55・58・60・63・64・70～74・79・85・89・94・98号土坑の20基が該当する。開口部の平面形は楕円形が18基、隅丸長方形が2基、底面の平面形は楕円形が18基、隅丸長方形が1基、不整形が1基で、いずれも楕円形が基調になっている。長軸方位はN89°E～N89°Wの範囲に収まる。断面形は逆台形が16基、逆蒲葺形が3基、方形が1基で、逆台形が多い。堆積土はいずれも2～3層の自然流入土である。なお、断面に逆台形、U字形等のセクションが観察されるものではなく、土坑Aで認められたような掘り直し、再利用は行われなかったと思われる。その理由として、土坑Bは土坑Aに比べて浅いため、比較的早く埋没してしまったか、あるいは掘削の省力化と効率化を図るために掘り直しだけの利便性がなかったことが考えられる。土坑Bの分布は調査区北側の標高196.60～197.00m付近の微高地から、調査区中央部の鞍部を経て、調査区南側の標高196.80m付近の微高地にかけて認められる。分布域だけを見ると土坑Aと大差ないが、土坑Bは調査区北側の微高地に10基、調査区南側の微高地に5基、それぞれブロック状にまとまって構築されている点に特徴がある。調査区中央の鞍部にはほぼ等間隔で5基が並んで分布するが、土坑Aの集中的な分布の在り方とは対照的である。各土坑間の間隔も土坑Aに比べると開いている。

土坑Cは開口部の長軸長が0.9～1.5m、短軸長が0.5～1.8mの範囲に収まり、検出面から底面までの深さは40cm未満である。49・65号土坑の2基が該当する。開口部と底面の平面形はいずれも楕円形である。長軸方位は49号土坑がN83°W、65号土坑がN88°Eである。断面形は49号土坑が逆台形、65号土坑が逆蒲葺形を呈する。堆積土はいずれも2層の自然流入土である。図81の軸長分布を見ると、49・65号土坑の長軸長と短軸長の比率が土坑A・土坑Bとほぼ同じである点、65号土坑がその比率を変えずに土坑A・土坑Bを縮小したような規模である点が看取される。さらに2基とも、検出面から底面までの深さが浅いことも考え合わせると、作りかけの落し穴状土坑である可能性が高い。土坑Cの分布域は調査区北側の標高196.60m付近の微高地から、調査区中央部の鞍部へ向かう緩斜面である。この付近からM63～65・N63～65グリッドにかけては本調査区の中で湧水が最も著しい地点である。土坑Cはこの湧水の影響を受けて、構築を断念したものと思われる。

土坑Dは湧水のため、底面まで調査ができなかった土坑である。湧水が著しいM63～65・N63～65グリッドに位置している。99～110号土坑の12基が該当する。開口部の長軸長が1.0～2.1m、短軸長が0.6～1.4mの範囲に収まる。開口部の平面形は楕円形が10基、隅丸長方形が2基で、楕円形を基調としている。長軸方位はN85°E～N89°Wの範囲に収まる。堆積土はいずれも2～3層の自然流入土である。

以上、縄文時代前期前葉以前に比定される落し穴状土坑について概述した。当時の狩猟具である石鏃は57号土坑の堆積土から1点出土しただけであるため、これらの落し穴状土坑が組織的な追い込み罠に使用された可能性は低く、後背地の水場に集まる動物を狙って仕掛けたトラップと考え

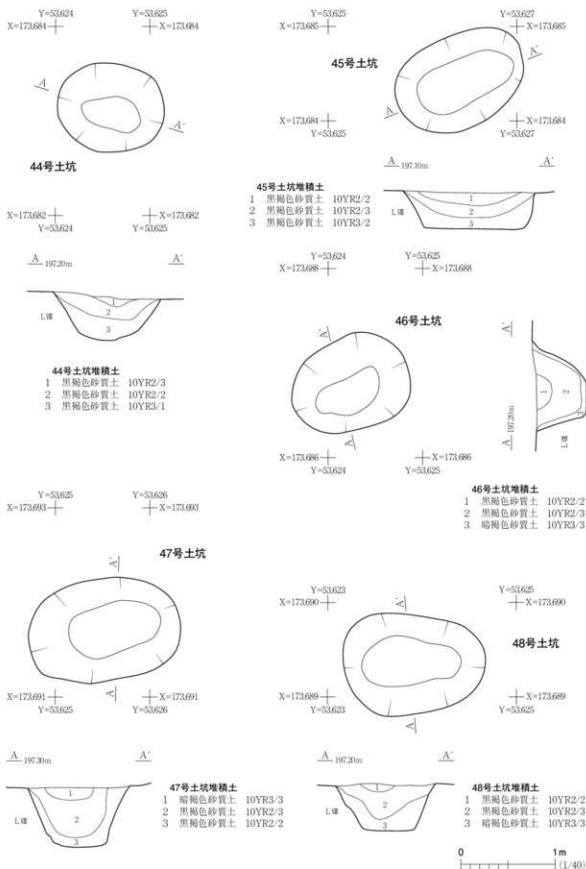


図82 44～48号土坑

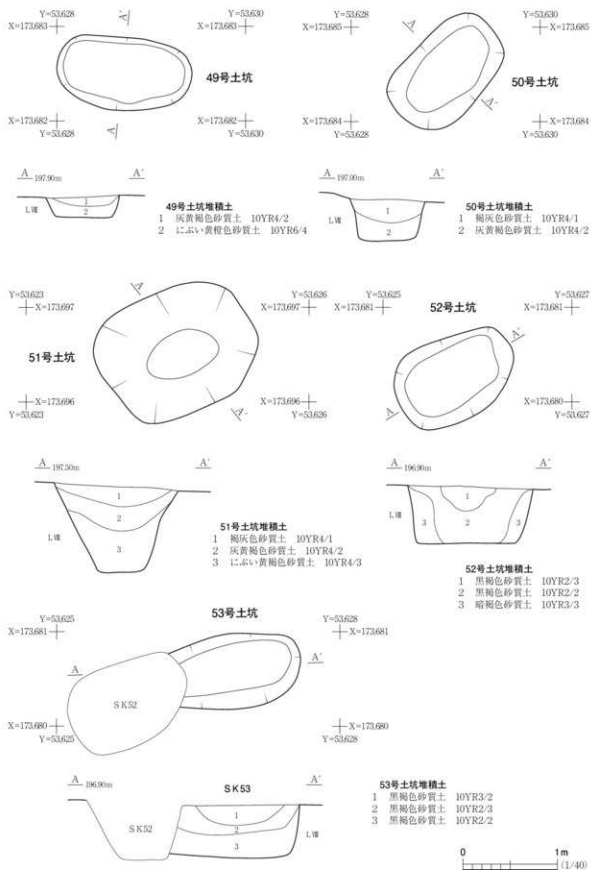


图83 49~53号土坑

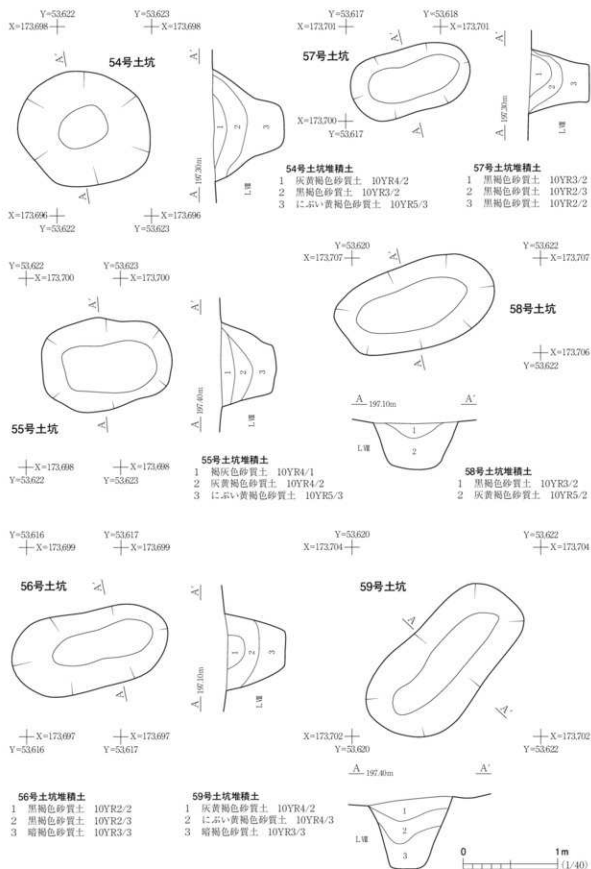


図84 54～59号土坑



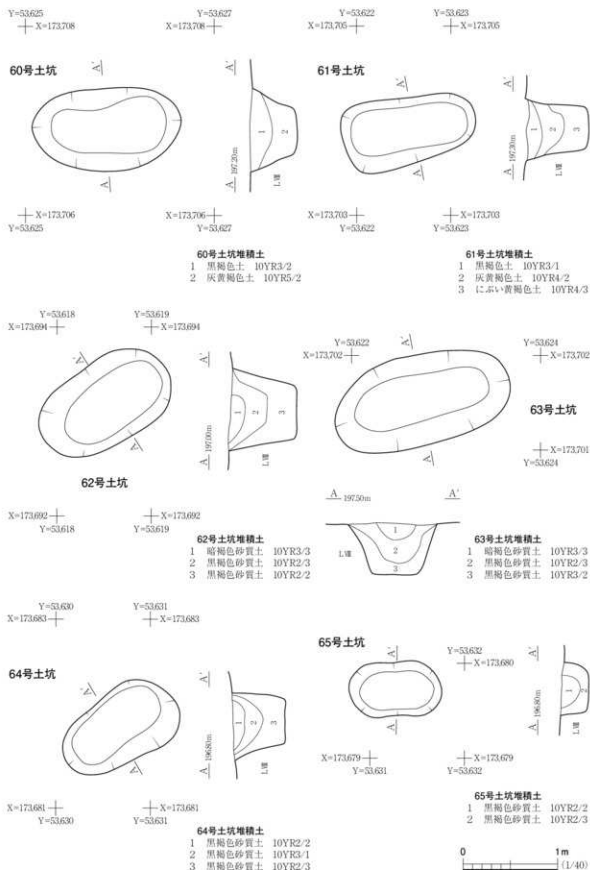


图85 60~65号土坑

第4章 調査⑨区の調査成果

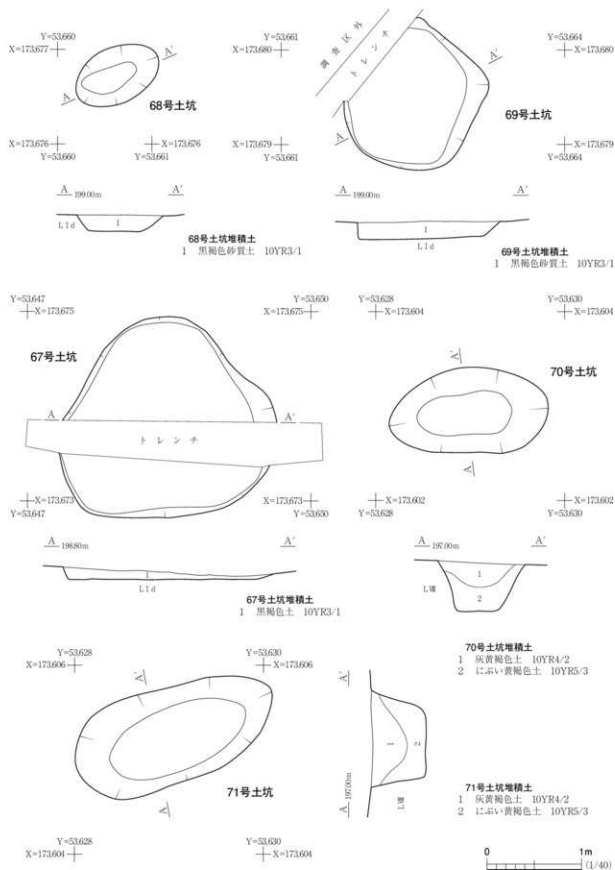


図86 67~71号土坑

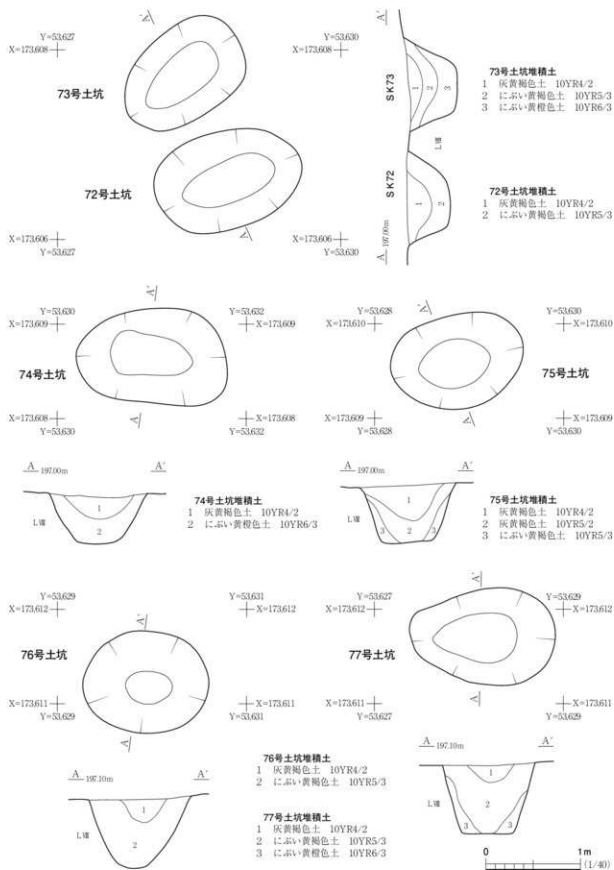


図87 72~77号土坑

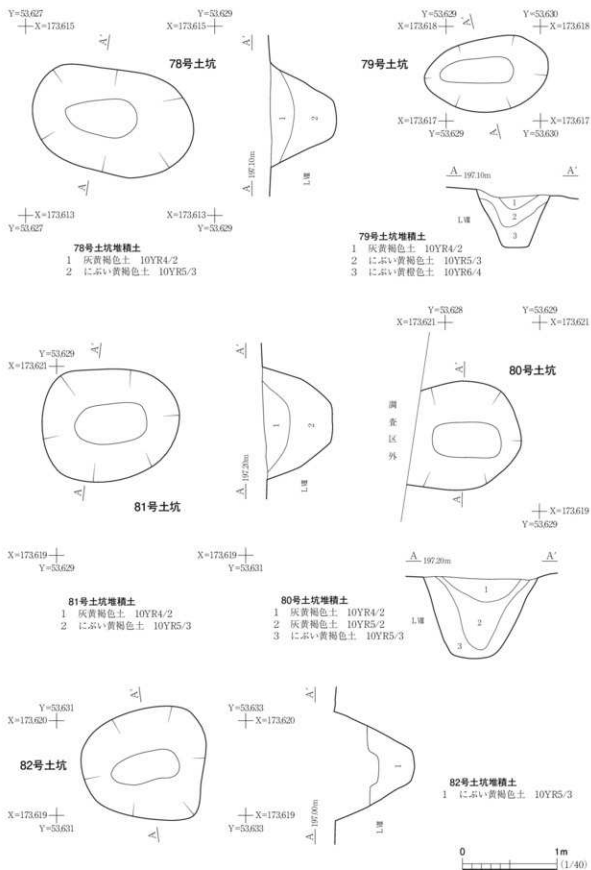


図88 78~82号土坑

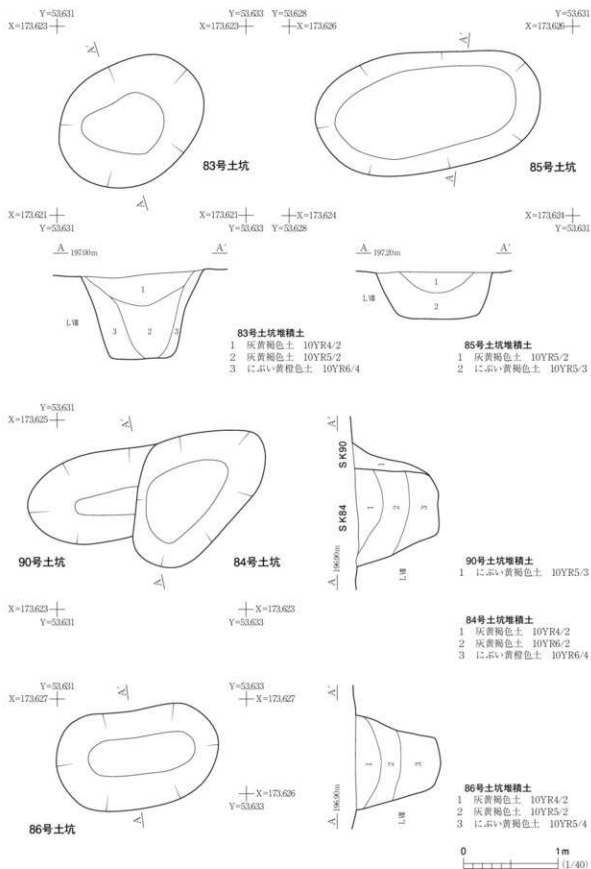


图89 83~86·90号土坑

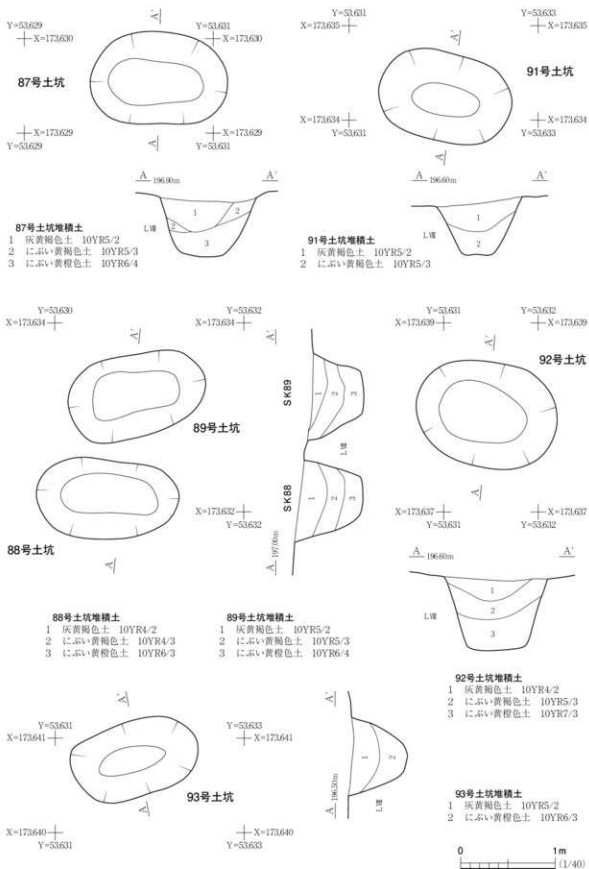


図90 87~89・91~93号土坑

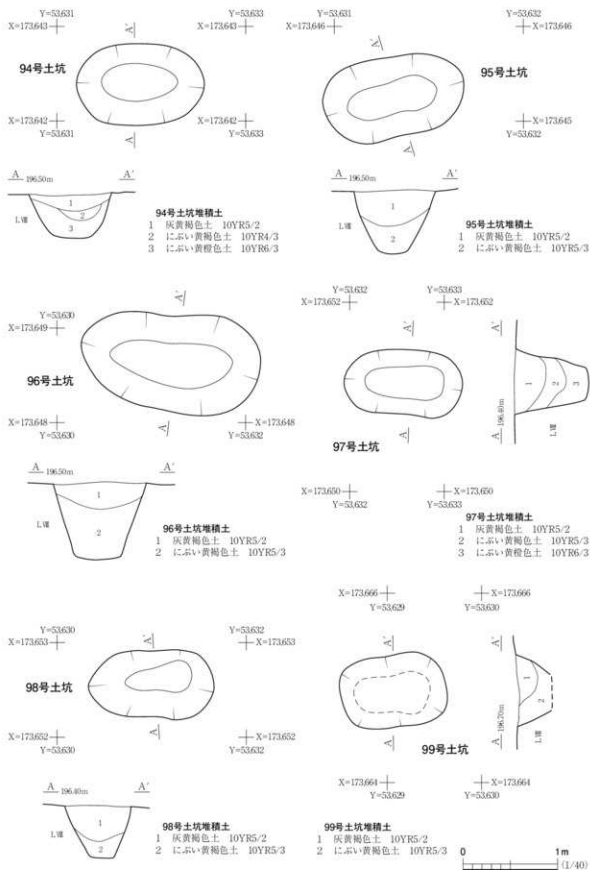


図91 94~99号土坑

第4章 調査⑨区の調査成果

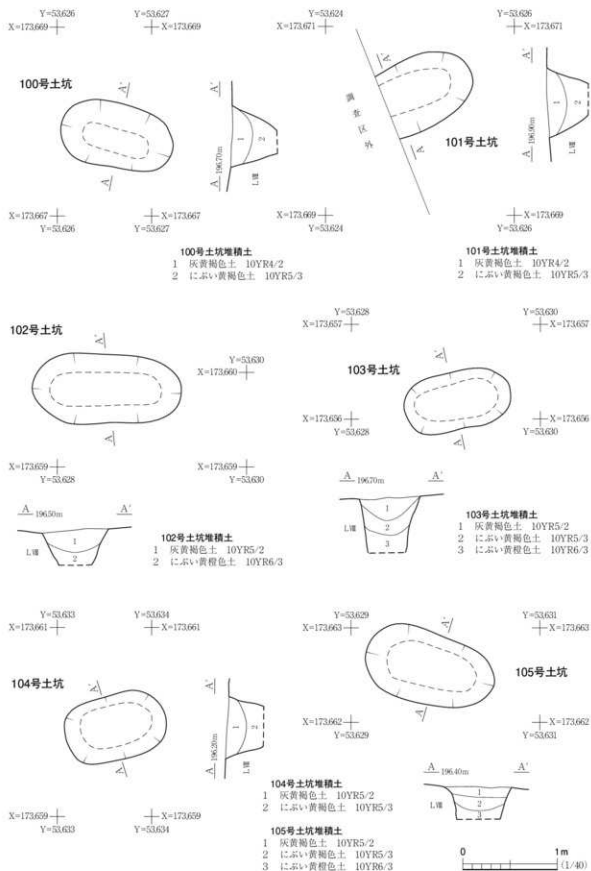


図92 100～105号土坑



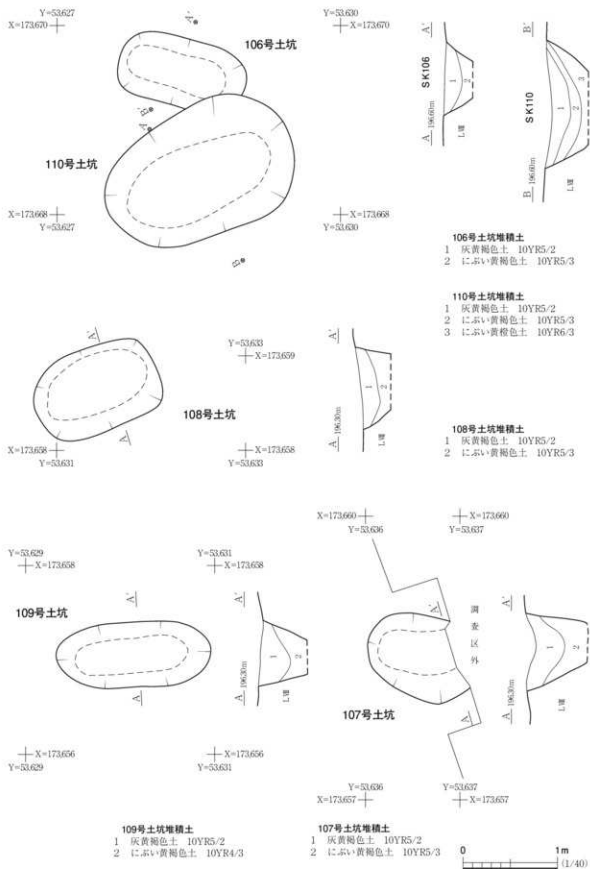


图93 106~110号土坑

た方が妥当である。注目されるのは土坑Aと土坑Bの平面形の規模と深さ、分布状況等がそれぞれ違う点である。前述したように、両者に時期差がないとすれば、この違いは狩猟対象動物の種類や習性に応じて落し穴状土坑を作り分けていた可能性を示唆するものである。なお、該期の土坑から出土した遺物は図94-1に示した石鏃1点だけである。これは57号土坑の堆積土から出土した平基鏃で、両側縁と基部に丁寧な調整剝離が施されている。

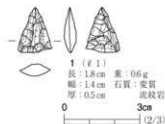


図94 57号土坑出土遺物

中世以降に比定される土坑は67～69号土坑の3基で、調査区北東隅のO 63、Q 62・63グリッドに位置する。東側に隣接する調査⑩区北東部のQ 63・64グリッドで検出された34・35号土坑とはほぼ同時に構築されたものと思われる。具体的な機能・用途は不明である。なお、該期の土坑から遺物は出土しなかった。(小 暮)

## 第4節 溝 跡

調査⑨区で検出した溝跡は2条で、いずれも調査区内から外側に向かって延びている。特に25号溝跡は東側に隣接する調査⑩区でも同遺構の南半部が検出されているが、調査区境において水路により分断されていたため、各調査区で検出された部分をそれぞれの章で報告する。

### 25号溝跡 S D 25 (図95, 写真78)

本溝跡はN 66～68グリッド、O 68グリッドに位置し、平坦なL I d上面で検出された。本調査区内において、他の遺構との重複関係はない。遺構の南東端は調査前まで現用であった水路によって壊されているが、東側に隣接する調査⑩区のO 68～70グリッドで、その続きが確認されている。詳細については第5章第4節でも報告している。

本調査区内での規模は、全長が約19 m、幅は最も狭い部分で23 cm、最も広い部分で55 cm、検出面から底面までの深さは比較的浅い北端部と南東端部で2～4 cm、その他の部分で7～14 cmを計測した。本調査区内においては遺構中央部の約9.5 mがほぼ南北方向に延びており、北端から約2.5 m離れた部分から北東方向に約15°、また、南端から約4.0 m離れた部分から南東方向に約25°屈折している。周壁は底面から約60～70°の比較的急な角度をなして立ち上がっている部分が多く、断面形は扁平な逆台形状を呈する。底面には細かな凹凸が認められるものの、概ね平坦で、北から南に向かって緩やかに下り傾斜している。堆積土は1層のみ確認され、混入物を含まない褐灰色土の単一層であることから、自然流入土と判断した。

本溝跡からは遺物が出土していないため、具体的な所属時期は不明である。検出層位から概ね中世のものと考えている。本溝跡の性格については、底面が北から南に向かって緩傾斜していることから、排水溝や水路の可能性も想定されるが、断定はできない。(小 暮)

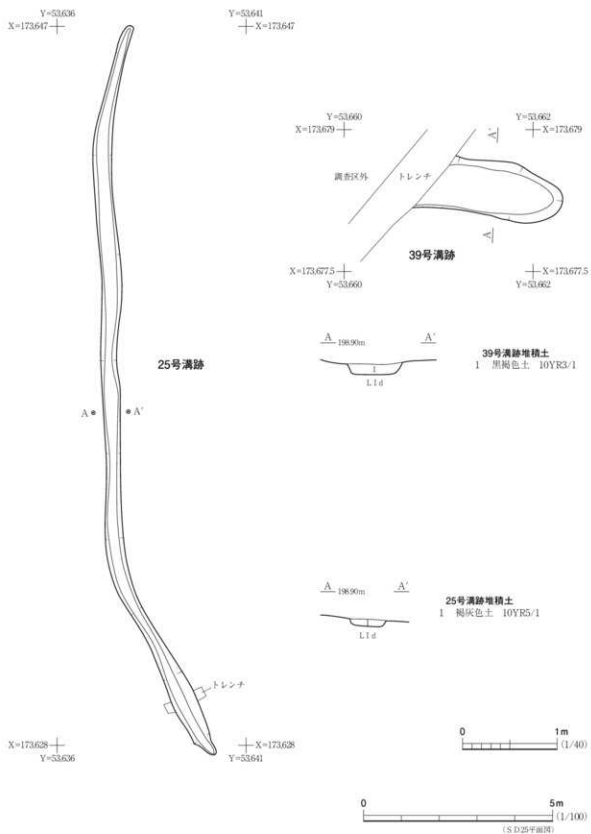


図95 25・39号溝跡

### 39号溝跡 S D 39 (図95, 写真78)

本遺構はQ63グリッドに位置している。本調査区北東部の平坦面に立地し、南に68号土坑、北に69号土坑が近接している。遺構検出面はL I d上面である。

本遺構はほぼ東西方向に直線的な溝跡で、西側部分は調査区外に延びている。調査区内における規模は全長約1.3m、幅約60cm、深さ15～19cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、断面形は鍋底状を呈している。

堆積土は黒褐色土の単一層で、混入物なども認められないことから、自然堆積土と判断した。

本遺構の所属時期については、遺物が出土していないため特定できないが、検出層位などから、概ね中世の所産と考えられる。本遺構の性格や機能については、西側が調査区外に延びているために全容が分からず、特定することはできない。(由 井)

## 第5節 遺構外出土遺物

### 土 器 (図96～100, 写真79・80)

#### 縄文土器 (図96～100, 写真79・80)

遺構外から出土した縄文土器を年代順に説明する。

図96-1は縄文時代前期後葉の大木5式土器と思われる深鉢の口縁部破片である。口縁端部が外側に削かれ、断面が外傾している。口縁部直下には横走する平行沈線と連続刺突文、半截竹管状工具の内側で施文した連続山形文が施されている。

図96-2～13は縄文時代前期末葉の大木6式土器である。同図2は深鉢の口縁部破片である。外反する口縁部には2対の山形突起があり、その直下には楕円形状の貼付文が施されている。頸部には半截竹管状工具の内側を押し引きして、横走する連続爪形文が施されている。同図3は口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢である。口縁部下には平行沈線による波状文、頸部には横走する隆帯が貼付されている。胴部は著しく摩滅している。同図4～9は同一個体と思われる粗製深鉢の破片で、4の口縁部は強く外傾し、断面が「く」の字状を呈している。口縁部は内外面ともにナデ調整され、胴部には横走する結節縄文が施されている。同図10～13は粗製深鉢の破片資料である。同図11は口縁部、同図10・12・13は胴部の破片で、いずれも横走する結節縄文が施されている。図97-1～8は縄文時代前期末葉～中期初頭にかけての深鉢である。いずれも同一個体と思われる口縁部資料で、同図1・2・5・7の断面は内湾している。口縁部下には梯子状沈線、格子状沈線による円形状、三角形状の文様が描かれ、頸部には上面に刻みを持つ隆帯が巡っている。大木6式土器と大木7a式土器の特徴を合わせ持つ資料である。

図96-14、図97-9～22、図98-1・2・5は縄文時代中期初頭の大木7a式土器である。図97-9～15は同一個体で、深鉢の口縁部から胴部にかけての破片資料である。同図10・11の口縁

部の内側には隆帯が一巡し、二重口縁のようにになっている。口縁端部には刻みが施され、隆帯による扁平な渦巻文がところどころに配置されている。同図9はこの渦巻文の部分が剥がれたものである。口縁部下には梯子状沈線による蕨状の渦巻文と三角形の文様が描かれ、部分的に三角形の小さな刺突文が加えられている。同図13～15の胴部には縦走する結節縄文が施されている。なお、破断面を観察すると、いずれも土器の内側から段状に削ぎ落とされたような形状を呈していた。これは粘土帯を積み上げて土器を作る際に、外側の粘土を下に引き延ばして、下の粘土帯と密着させたことを示している。図96～14は深鉢の口縁部破片で、断面は内湾している。口縁部直下の内面には隆帯が一巡し、二重口縁のようにになっている。口縁端部には刻みのある隆帯が貼付され、一部が半円状の突起になっている。口縁部下には梯子状沈線による渦巻文が施されている。図97～16～18は深鉢の口縁部破片である。断面はいずれも内湾している。同図16・17の口縁部直下には横走する1条の沈線が施され、その下に密な縦位沈線と三角形の刺突文が施文されている。同図18には梯子状沈線による円形状の文様と上下に交互施文された三角形の刺突文が施文されている。図97～20は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片である。断面は外傾し、口縁端部は折り返されてやや肥厚している。口縁部下には隆帯を貼付した区画文が施されており、その上から押しつけるように刻みが加えられている。地文は単節斜縄文である。図97～19は頸部が「く」の字状に屈曲する深鉢の口縁部から頸部にかけての破片資料である。口縁端部には刻みを持つ隆帯が貼付され、一部が半円状の突起や渦巻文になっている。口縁部下には梯子状沈線文が施され、頸部には浅い沈線が施された橋状突起が付けられている。この橋状突起の下には浅い沈線による半円形状の文様が配置されている。図97～21・22は同一個体で、いずれも深鉢の口縁部破片である。断面はやや外傾している。隆帯と沈線による区画文が描かれている。図98～1・2・5は深鉢の頸部付近の破片である。同図1・2の頸部には3条の細い隆帯が貼付され、同図5の頸部には2条の浅い沈線文が施文されている。同図1・5の胴部には縦走する結節縄文が地文として施されている。図98～3は関東系土器と思われる深鉢の口縁部破片である。波状口縁を呈し、断面は内湾している。口縁部下には細い沈線で格子状の文様が描かれている。図98～4は大木7b式土器である。深鉢の口縁部破片で、断面は内湾している。口縁部下は爪形の刺突を持つ隆帯によって楕円形状に区画され、その中に有節沈線や縄の側面圧痕による渦巻文等が施されている。図98～6～8は同一個体の深鉢の胴部破片で、縦走する結節縄文が施文間隔を密にして施されている。いずれも大木7b式土器に比定される。

図98～9～11は縄文時代中期後葉の大木9式土器である。同図9・10は口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢の破片である。沈線で縁取られた縄文帯によるアルファベット状の文様が、口縁部下から胴部にかけて縦長に描かれている。同図11は粗製深鉢の口縁部破片で、断面はやや外反気味である。単節斜縄文が地文として施されている。

図98～12・13、図99～1～3は縄文時代中期末葉の大木10式土器である。図98～13、図99～1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも平縁だが、図99～1には小さな山形突起がある。図98～13には沈線で縁取られた縄文帯によるアルファベット状の文様、図99～1に

は沈線で縁取られた無文帯によるアルファベット状の文様が横長に施されているようである。図98-12、図99-2は深鉢の胴部破片で、隆帯で縁取られた無文帯によるアルファベット状の文様が描かれているものと思われる。この隆帯は両側縁がナデ調整され、断面形が三角形状を呈している。図99-3は深鉢の口縁部破片で、沈線で縁取られた縄文帯によりアルファベット状の文様が描かれているようである。

図99-4は縄文時代後期前葉の網取Ⅰ式土器である。深鉢の口縁部破片で、断面はやや外反気味である。頸部に刻みのある低い隆帯を貼付し、口縁部下に無文帯を形成している。胴部には節の細かい斜縄文が施されている。図99-5は網取Ⅱ式土器の口縁部破片である。波状口縁の深鉢で、断面はやや外反気味である。頸部に隆帯を貼付し、口縁部下に無文帯を形成している。波頂部下には「ノ」の字状の貼付文が施されており、その両端に加えられた円形窩文を沈線で結んでいる。胴部には多条沈線による文様が施文されているようである。

図99-6・7は縄文時代後期前半の堀之内Ⅰ式土器で、同一個体である。器形は底部から口縁部にかけて朝顔形に開く小型深鉢である。同図7には横走する集合沈線が施され、波頂部下には渦巻文が縦に3つ並んで描かれている。口縁端部には沈線が1条巡っている。同図6にも横走する集合沈線が施文され、渦巻文の一部が観察される。口縁端部に沈線は認められない。堀之内Ⅰ式の中でも新しい段階の所産と思われる。図99-8は堀之内Ⅱ式土器である。胴部上半から口縁部にかけて外反しながら開く深鉢の胴部破片である。刻みと円形刺突が加えられた隆帯により器面が分割され、その間に充填縄文手法による縄文帯で菱形文もしくは渦巻文が描かれているようである。

図99-9は縄文時代後期中葉の加曾利BⅠ式土器である。深鉢の口縁部付近の破片で、沈線で区画された縄文帯とそれを区切る縦沈線が施文されている。図99-10は加曾利BⅡ式土器である。深鉢の口縁部破片で、断面は内湾している。沈線で縁取られた3段の横帯に縄文を充填施文している。この縄文帯を縦に区切る蛇行沈線も見られる。図99-11は同時期の小型の壺形土器である。口縁部には丁寧なミガキが施され、胴部には沈線文が施文されている。

図99-12、図100-1は縄文時代後期後葉の瘤付土器である。図99-12は深鉢の胴部破片で、磨消縄文による階段状の入組文の一部が見られる。図100-1は台付鉢の台部である。鉢部との接合部分には隆帯が巡らされ、瘤状の突起が6つ付けられている。

図99-13は深鉢の底部付近の破片である。地文の縄文のみが観察される。明確な時期を特定することはできないが、出土層位から縄文時代前期後葉～後期中葉の所産と思われる。

図100-2・3は縄文時代後期末葉～晩期初頭の深鉢である。同図2は胴部破片である。沈線による区画文の間に三叉文が描かれ、地文は節の細かい斜縄文である。同図3は口縁部破片である。口縁端部には刻みが加えられ、小刻みな波状口縁を呈している。文様は櫛歯状工具による細かい条線文が施されている。補修孔と思われる円形の穴が開けられている。

#### 土 師 器 (図100)

図100-6は非ロクロ土師器の甕である。口縁部から胴部にかけての破片で、表面が著しく摩耗

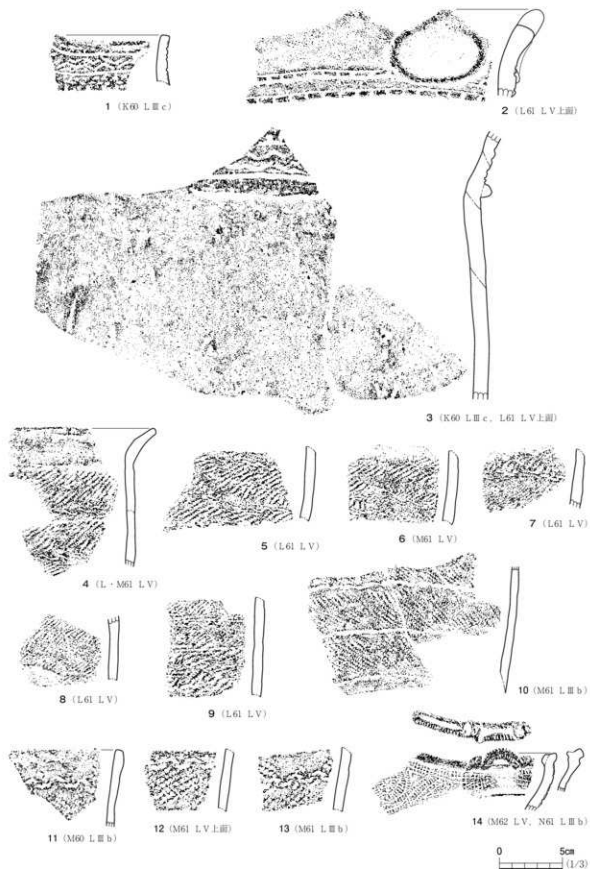


図96 調査⑨区遺構外出土遺物 (1)

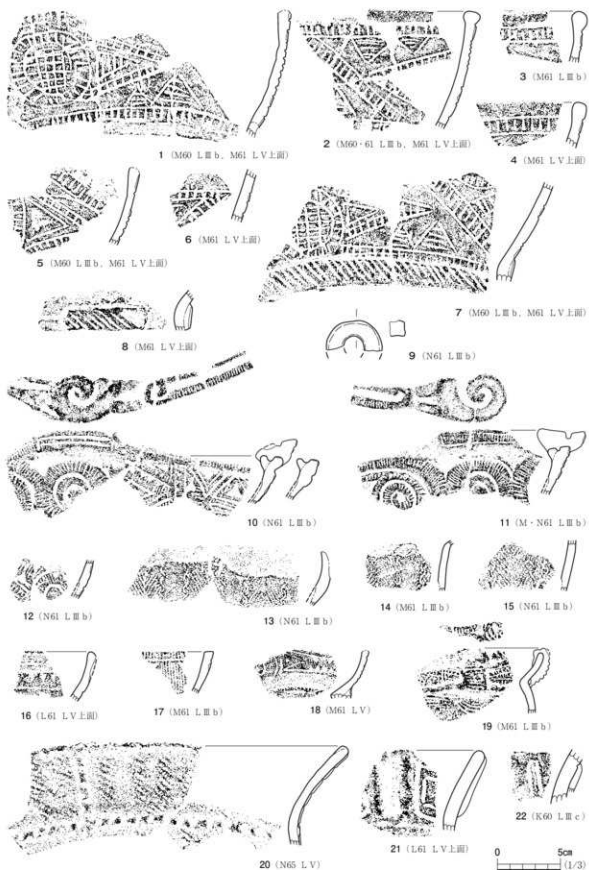


図97 調査⑨区遺構外出土遺物(2)



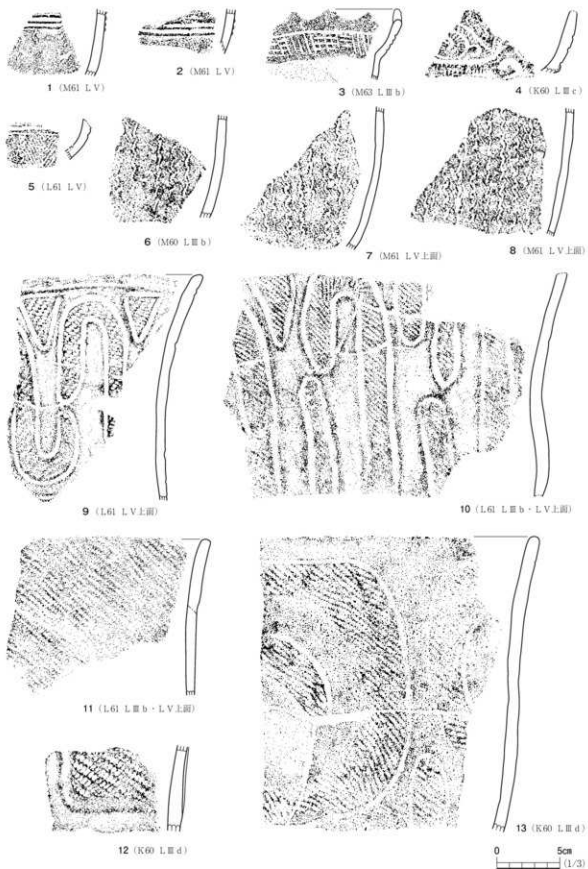


図98 調査⑨区遺構外出土遺物 (3)

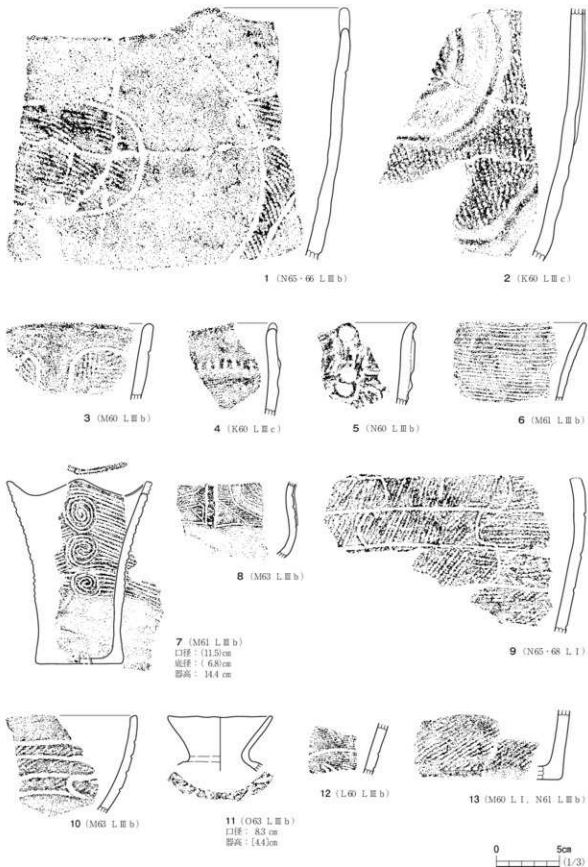


図99 調査⑨区遺構外出土遺物 (4)

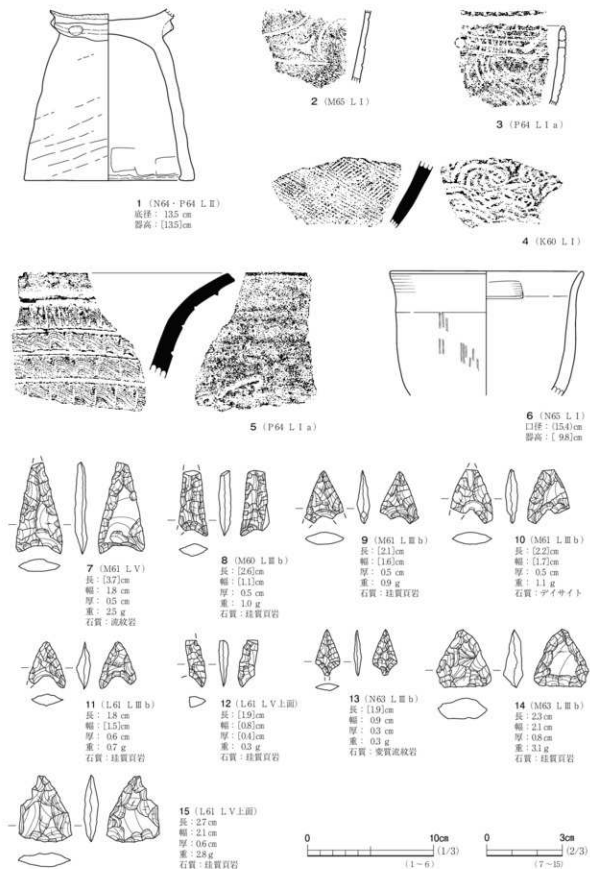


図100 調査⑨区遺構外出土遺物 (5)

している。口縁部の断面はやや外反し、外面にはヨコナデ、内面にはヘラナデによる調整が施されている。胴部の外面にはハケメ調整の痕跡が残されている。所属時期は7世紀代と思われる。

#### 須恵器 (図100)

図100-5は甕の口縁部破片である。口縁端部には面取りが施されている。口縁部下の外面には突帯が1条巡り、その下には横位の平行沈線と櫛歯状工具による波状文が交互に描かれている。図100-4は甕の胴部下半の破片である。内面には同心円状の当具痕、外面には格子状のタタキメが観察される。所属時期はいずれも奈良・平安時代と思われる。

#### 石器 (図100)

図100-7～13は石鏃の完成品、図100-14・15は石鏃の未完成品である。

図100-7・8は平面形が二等辺三角形の凹基鏃で、基部の挟り込みが浅い。側縁部と基部には細かい調整剥離が施されており、その剥離面を観察すると、基部が最後に作り出されていることがわかる。同図7は流紋岩製で、裏面には素材面が残されており、先端部を欠損している。同図8は珪質頁岩製で、先端部と基部を欠損している。

図100-9～12は平面形が正三角形に近い凹基鏃で、基部の挟り込みが深い。側縁部と基部には細かい調整剥離が施されており、その剥離面を観察すると、基部が最後に作り出されていることがわかる。同図9は珪質頁岩製で、基部を欠損している。同図10はデイサイト製で、先端部と基部を欠損している。同図-11は珪質頁岩製で、基部を欠損している。同図12は珪質頁岩製で、全体の半分以上が欠損している。

図100-13は有茎鏃である。側縁部と基部には細かい調整剥離が施されており、その剥離面を観察すると、基部が最後に作り出されていることがわかる。変質流紋岩製で、基部を欠損している。

図100-14・15は石鏃の未完成品で、いずれも珪質頁岩製である。平面形が正三角形に近く、比較的厚みがあって重い。側縁部と基部に調整剥離が施されているが、完成品に比べて剥離面の枚数が少ない。特に裏面の剥離面は急角度で、石器の側縁部から中心線にまで到達していない。そのため、素材面を大きく残している。横断面形も完成品のようにきれいな流線形になっていない。(小 葬)

## 第5章 調査⑩区の調査成果

### 第1節 調査経過と概要

本節では調査⑩区の調査経過と概要について述べる。調査前の現況は耕作地跡であった。調査にあたっては調査区の東側が休耕地、西側が現用の県道73号二本松・金屋線に接していたため、掘削深度に合わせて安全帯を設けて掘り下げた。

年度当初の4月はプレハブ用地及び駐車場の整備、作業員雇用手続き等の準備作業を同時併行で進めた。9日に調査範囲の縄張りを行い、10日に重機を導入して表土剥ぎに着手した。表土剥ぎは原発事故により汚染された表土(地表面から約30cm)を削り取ってから、汚染されていない表土を中世の遺構検出面(L I d上面:1,000㎡)まで掘削するという2段階で行った。汚染土の除去が終了した18日からは作業員を投入して、中世面の遺構検出作業を開始した。19日には測量基準杭を設置して、検出された土坑2基(S K 34・35)と溝跡1条(S D 25)の精査に着手したが、4月下旬以降は調査区が度々浸水したため、その排水と復旧作業に手間取った。5月に入ると調査区東側の休耕地からの浸水が顕著になった。調査区の東側壁面が崩落しないように簡易の土止めを施し、調査区内の排水作業を効率よく行うため、適宜排水溝を設置した。9～10日には中世面の全景写真撮影と地形測量を終了し、下層の調査に移行した。古墳時代の遺構検出面(L II 上面:700㎡)までは遺物出土の有無に留意しながら、重機と作業員の人力により慎重に掘り下げた。調査の進捗に伴って廃土の量も多くなり、限られた工区内に仮置き場を確保するのに苦慮した。調査区的最南部では特殊遺構2カ所(S X 01・14)を精査した。この内、14号特殊遺構については調査区外の南方にトレンチを1本(約10㎡)設置して、遺構範囲の確認調査を行った。その結果、調査区外に同遺構が広がっていないことを確認した。古墳時代面の遺構検出作業と遺構精査が終了したのは21日で、22日には全景写真撮影と地形測量を行った。古墳時代面の遺構調査終了後、調査区内にトレンチを4本(約260㎡)設定し、下層の縄文時代面の遺構・遺物の確認作業を行った。その結果、縄文時代の土器片が2点出土し、極めて希薄な遺物包含層が形成されていることを確認した。しかし、遺構の検出にはいたらなかったこと、湧水が著しく調査が困難になったことから、縄文時代面の全面調査は行わなかった。調査が終了したのは6月6日で、実働日数は41日である。なお、5月31日には現地見学会を開催した。約100名の見学者に対し、遺構と出土遺物の公開を行った。

次に概要について述べる。調査⑩区はトロミ遺跡的最南部に位置し、北流する阿武隈川に近い調査区である。県道73号二本松・金屋線を挟んで北西側には調査⑨区が隣接している。調査区内の地形は中世面・古墳時代面ともにほぼ平坦であるが、北から南に向かって若干下り傾斜している。これは調査区の南方に自然の沢地形が近接しているためと思われる。調査区内の中世面の標高は198.50～198.80m、古墳時代面の標高は198.30～198.60mである。中世面は全体が細かく波打った

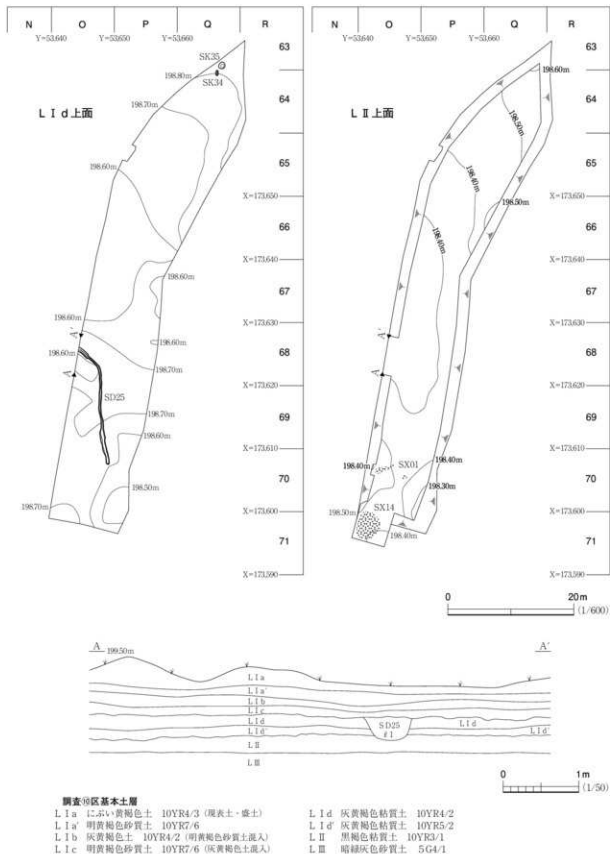


図101 調査⑩区遺構配置図・基本土層

状態であるため、地形図の等高線が乱れている。これは中世に耕作等、人の手が加わった可能性を示すものであるが、調査③区以北で検出された畑跡のような明確な耕作痕は検出されなかった。中世面で検出された遺構は溝跡1条(SD25)、土坑2基(SK34・35)である。この内、溝跡は中世に構築されているが、土坑は堆積土の状態から中世以降の所産と思われる。古墳時代面も全体が細かく波打った状態であり、耕作等人の手が加わった可能性を示している。古墳時代後期初頭頃には調査区の最南部で、石と土器を集積した特殊遺構が2カ所(SX01・14)形成された。出土した遺物は縄文土器片44点、土師器片1,129点、須恵器片1点、陶磁器片3点、石器5点である。これらの遺物の大半は調査区南側で検出された遺構の周辺から出土したものである。(小 巻)

## 第2節 基本土層

本調査区の基本土層は調査区の北西壁・南東壁で観察できるが、ほぼ同一の様相を呈していることから、北西壁の一部で記録を取ることにした。色調と性状の違いから8層に細分された。

L I aは層厚が約10～40cmの現表土・盛土である。にぶい黄褐色土で、色調と性状は異なるが、調査②区のL I、調査⑤区・⑥区のL I aに概ね相当する堆積土と思われる。L I a'は層厚が約10～20cmの阿武隈川の堆積作用に起因する砂層である。明黄褐色砂質土で、色調は若干異なるが、調査⑤区・⑥区のL I aに概ね相当する堆積土と思われる。

L I bは層厚が約10～20cmの灰黄褐色土を主体とする層である。色調は若干異なるものの、明黄褐色砂質土を少量含むことから、調査②区のL I b、調査⑤区・⑥区のL I cに概ね相当する堆積土と思われる。

L I cは層厚が約10～20cmの阿武隈川の堆積作用に起因する砂層である。明黄褐色砂質土で色調は若干異なるが、調査②区のL I c、調査⑤区・⑥区のL I cに概ね相当する堆積土と思われる。

L I dは層厚が約10～20cmの灰黄褐色粘質土を主体とする層である。色調と性状は異なるが、調査②区のL I d、調査⑤区・⑥区のL I dに相当する堆積土である。調査⑩区においては本層上面が中世の遺構検出面で、25号溝跡はここから掘り込まれている。本層上面は細かく波打っているため、耕作等の手が加わった可能性がある。層中からは縄文時代晩期前葉、古墳時代後期、鎌倉時代の遺物が出土した。L I d'は層厚が約10～20cmの灰黄褐色粘質土である。基本的にL I dの下半部に相当する堆積土だが、色調が若干異なるために分層した。この色調の違いは耕作等の手が及ばなかったことに起因する可能性がある。

L IIは層厚が約20～25cmの黒褐色粘質土である。性状は若干異なるが、調査②区のL II、調査⑤区・⑥区のL IIに相当する堆積土である。調査⑩区においては、本層上面が古墳時代の遺構検出面で、1・14号特殊遺構はここに形成されている。本層上面も細かく波打っているため、耕作等の手が加わった可能性がある。本層は縄文時代の希薄な遺物包含層である。

L IIIは湧水の影響でグライ化した暗緑灰色砂質土である。(小 巻)

### 第3節 土 坑

本調査区で検出した土坑は2基である。いずれも調査区の北東端部に位置しており、互いに近接している。本調査区の西側に隣接する調査⑨区の北東端部のO63グリッドで検出された67号土坑、Q62・63グリッドで検出された68・69号土坑と一連の遺構と考えている。以下、これらの土坑について、個別に報告する。

#### 34号土坑 SK34 (図102, 写真83)

平成23年5月に福島県教育委員会が実施した試掘調査において検出された1号土坑である。本土坑はQ63・64グリッドに位置する。調査区北部の平坦面に立地し、北東には35号土坑が近接している。遺構検出面はL I d上面である。

堆積土は2層に分層でき、レンズ状に堆積していることから自然堆積土であると判断した。

平面形は不整な楕円形を呈している。平面形の規模は長軸長0.8m、短軸長0.5m、検出面から底面までの深さは最大で15cmを測る。

本土坑の所属時期については遺物が出土していないため特定できないが、堆積土の特徴などから、概ね中世以降の所産であると考えられる。機能・用途は不明である。 (由 井)

#### 35号土坑 SK35 (図102, 写真83)

本土坑はQ63グリッドに位置する。調査区北部の平坦面に立地し、南西には34号土坑が近接している。遺構検出面はL I d上面である。

堆積土は2層に分層でき、レンズ状に堆積していることから自然堆積土であると判断した。

平面形は不整な楕円形を呈している。平面形の規模は長軸長1.3m、短軸長1.1m、検出面から底面までの深さは最大で19cmを測る。

本土坑の所属時期については遺物が出土していないため特定できないが、堆積土の特徴などから、概ね中世以降の所産であると考えられる。機能・用途は不明である。 (由 井)

### 第4節 溝 跡

本節で報告する溝跡は西側に隣接する調査⑨区でも同遺構の北半部が検出されている。調査区境で用水路により分断されていたため、各調査区で検出された部分をそれぞれの章で報告する。

#### 25号溝跡 SD25 (図102, 写真84)

本溝跡はO68～70グリッドに位置し、平坦なL I d上面で検出された。本調査区内において、



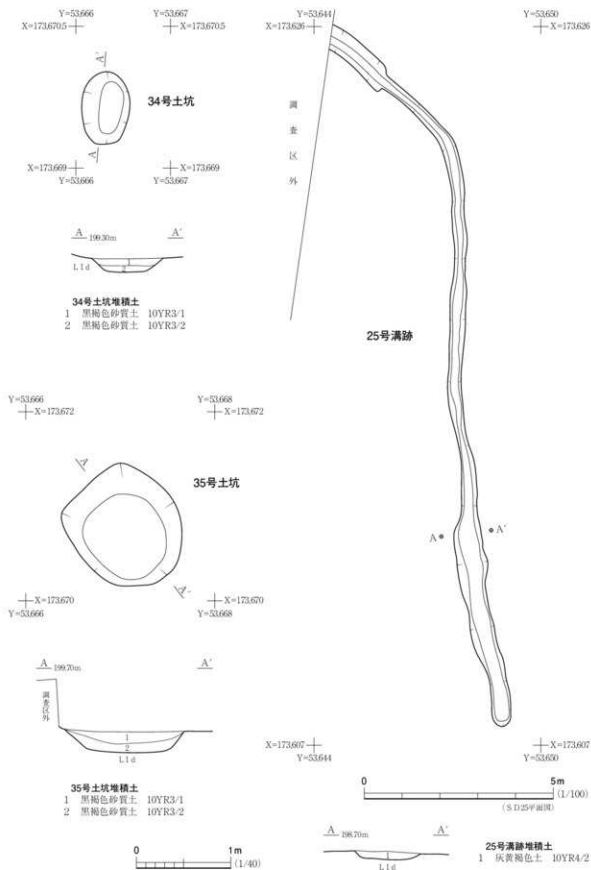


図102 34・35号土坑、25号溝跡

他の遺構との重複関係はない。遺構の北西端は調査前まで現用であった用水路によって壊されているが、西側に隣接する調査⑨区のN66～68グリッド、O68グリッドで、その続きが確認されている。詳細については第4章第4節でも報告している。

本調査区内での規模は、全長が約19.5m、幅は最も狭い部分で20cm、最も広い部分で70cm、検出面から底面までの深さは比較的遺存状態が良好な北西端部で約20cm、その他の部分で5～11cmを計測した。本調査区内においては遺構中央部～南部の約13mがほぼ南北方向に延びており、北端から約3.5m離れた部分から北西方向に約40°屈折している。周壁は底面から約25°～40°の比較的緩やかな角度をなして立ち上がっている部分が多く、断面形は扁平な逆漏斗形を呈する。底面は細かな凹凸が認められるものの、概ね平坦である。堆積土は1層のみ確認され、混入物を含まない灰黄褐色土の単一層であることから、自然流入土と判断した。

本溝跡からは遺物が出土していないため、具体的な所属時期は不明であるが、検出層位から概ね中世に所属するものと考えている。本溝跡の性格については、排水溝や流路の可能性も想定されるが、断定できない。(小 暮)

## 第5節 特殊遺構

本節では調査区南端部の2カ所で検出した特殊遺構について述べる。これらは一定の範囲に土器と石がまとまって出土した状態を「特殊遺構」としたものであり、明確な掘り込み等を伴っていない。検出された場所はいずれも本遺跡の最南端で、西に阿武隈川、南に沢地形が近接している。

### 1号特殊遺構 SX01

#### 遺 構 (図103, 写真85～87)

本遺構は調査区南端部のO70グリッドに位置している。平坦なLⅡ上面に、完形・半完形の土器と石がまとまって遺棄されていた。周辺の標高は198.40～198.50mである。本遺構から南西に約6m離れた地点には同種の14号特殊遺構が存在する。

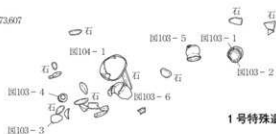
土器と石が遺棄された範囲は東西約4.2m、南北約2.0mと、東西方向に長い広がりとなっている。最も遺物が集中しているのは出土範囲西側の東西約2.0m、南北約1.0mの部分で、ほぼ完形の杯が2個体、甕が3個体、壺が1個体、有孔鉢が1個体出土した。図103-1は同図2を入れ子にした正位の状態出土した。同図3・4は口縁部を下にした逆位の状態、同図5・6、図104-1は横倒しの状態出土している。また、ここから南東方向に約2m離れた場所では半完形の甕が1個体出土している。図103-7は横倒しで土圧により押し潰された状態で出土した。

#### 遺 物 (図103・104, 写真91)

本遺構から出土した遺物は土師器片105点である。この内81点が接合し、8個体の完形・半完形の土器に復元された。上記の出土状態から考えて、これらは一括性が高い資料と言える。この他に、

Y=53642  
+X=173607

Y=53647.5  
+X=173607



1号特殊遺構



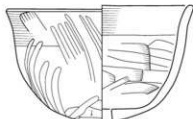
圖103-7



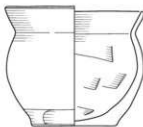
1 (L II 上面)  
口径: 15.2 cm  
器高: 5.7 cm



2 (L II 上面)  
口径: 13.6 cm  
底径: 4.3 cm  
器高: 6.1 cm



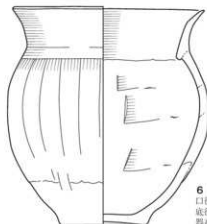
3 (L II 上面)  
口径: 14.8 cm  
底径: 3.4 cm  
器高: 9.1 cm



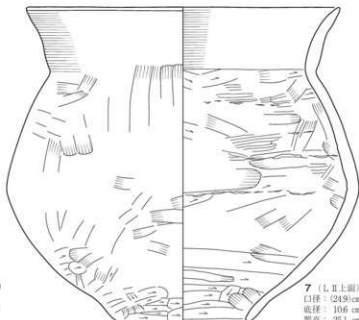
4 (L II 上面)  
口径: 11.0 cm  
底径: 6.7 cm  
器高: 9.5 cm



5 (L II 上面)  
口径: 13.6 cm  
底径: 3.6 cm  
器高: 13.7 cm



6 (L II 上面)  
口径: 15.2 cm  
底径: 6.9 cm  
器高: 17.3 cm



7 (L II 上面)  
口径: 24.9 cm  
底径: 10.6 cm  
器高: 25.1 cm



圖103 1号特殊遺構·出土遺物

遺物としては取り扱わなかったが、石が13点出土した。

図103-1は完形の杯である。口縁部が強く外反し、体部が扁平な丸底風の器形である。口縁の下端はくびれていて、内面には強い稜が形成されている。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部の外面にはヘラケズリによる整形痕が観察される。底面には線刻された「十」の字状の記号が付けられている。体部の内面には全体的にヘラナデが施されているようだが、器面がやや摩耗しているため判然としない。器面は全体的に赤褐色を呈している。組成元素分析は行っていないが、器表面をマイクロSCOPEで観察したところ、赤色顔料の皮膜らしきものが認められた。

同図2は完形の杯である。口縁部がやや外反し、体部が丸底風の器形で、底部は弱い凹底になっている。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面は入念なミガキが全体に施され、丁寧に仕上げられている。器面は全体的に赤褐色を呈している。

同図3はほぼ完形の有孔鉢である。口縁部がやや外反し、体部が丸底風の器形で、底部には直径約1.5cmの円孔が穿たれている。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部の内面にはヘラナデ、体部の外面には主にミガキによる調整痕が観察される。

同図4は完形の小型甕である。口縁部が外反し、胴部が外側に丸く膨らむ器形を成している。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の内面と底部付近の外面はヘラナデによる器面調整が施されているようだが、器面がやや摩耗しているため判然としない。胴部下半を中心にアバタ状の二次焼成痕が認められ、被熱しているのがわかる。

同図5は完形の小型甕である。口縁部が外反し、胴部が外側に丸く膨らむ器形を成している。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の内面はヘラナデ、胴部の外面はヘラケズリによる整形痕とミガキ

による器面調整が施されている。

同図6はほぼ完形の小型甕である。口縁部が外反し、胴部が外側に丸く膨らむ器形を成している。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の内外面はヘラナデによる器面調整が施されているようだが、器面がやや荒れ気味のため判然としない。胴部下半の外面には器面が薄く剥がれて、粘土紐の積み上げ痕が表面に露出した部分がある。

同図7は半完形に復元された甕である。口縁部が外反し、胴部が外側に丸く膨らむ器形を成している。口縁部の内外面にはヨコナデ、胴部の

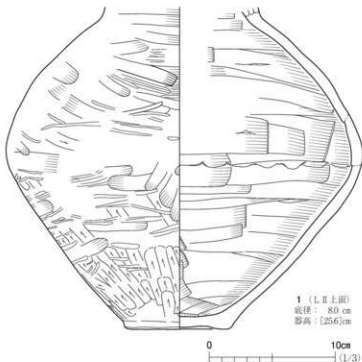


図104 1号特殊遺構出土遺物

内外面は主にヘラナデによる器面調整が施されている。胴部の内面は調整が粗く、部分的に粘土紐の積み上げ痕が消えずに残されている。底部の内面側にはヘラケズリが加えられて、器壁が斜めに削り取られ、直径約9cmの円孔が穿たれている。

図104-1は半完形に復元された壺である。口縁部は欠損している。胴部は外側に大きく膨らみ、胴部中位に最大径がある。外面上半には主にヘラナデが施され、外面下半にはヘラケズリによる整形痕が残っている。内面にはヘラナデによる調整痕がはっきりと観察される。外面がより丁寧に仕上げられているという印象を受ける。器面は全体的に赤褐色を呈している。

#### まとめ

本遺構の所属時期は14号特殊遺構とともに概ね古墳時代後期初頭頃と思われるが、出土した土器には14号特殊遺構よりも若干古い様相がうかがえる。本遺跡内では同時期の遺構が確認されていないため、この地点においてのみ存在する状況である。当初は阿武隈川や自然の沢地形が近接することとも考え合わせて、祭祀跡の可能性も想定したが、石製模造品等の祭祀関係の遺物が皆無であり、土器組成も杯等の特定器種に偏っていないため、何らかの理由で土器を中心とした遺棄行為が行われた痕跡という位置づけに止めるのが適当と考えている。(小 蒼)

### 14号特殊遺構 SX14

#### 遺 構 (図105, 写真88~90)

本遺構は調査区南端部のN71・O71グリッドに位置している。ほぼ平坦なLⅡ上面に、完形・半完形の土器と石がまとまって遺棄されていた。土器と石が遺棄された範囲の規模は東西約3.3m、南北約3.5mである。周辺の標高は198.40~198.50mで、本遺構から北東に約6m離れた地点には同種の1号特殊遺構が存在する。

最も遺物が集中しているのは出土範囲北側の東西約2.0m、南北約2.0mの部分で、杯が2個体、粗製杯が1個体、椀が1個体、大型鉢が2個体、小型甕が1個体、甕が4個体、やや大型の甕が1個体、やや大型の甕が1個体の計13個体が出土した。いずれも完形品か、それに近い状態にまで復元できた。出土状態を見ると、中心に大きな石を3個配置して、その北西側と南東側に土器を密集させて遺棄したような印象を受ける。図106-1~5・9、図107-3・4は正位かそれに近い状態で出土した。この中で図107-3・4は中心の石に立てかけられたような状態で出土している。図108-1は図106-2の上に倒れかかるような状態であったため、その口縁部付近の破片が図106-2の中に落ちた状態で出土した。図106-7は口縁部を下にしてやや伏せた状態で出土している。図108-2は横倒しで土圧により押し潰された状態で出土した。図106-8、図107-2はバラバラの破片の状態で出土し、故意に破損して遺棄された可能性がある。

また、ここから南西方向に約1m離れた場所では、椀が1個体、小型甕が2個体出土した。これらも完形品か、それに近い状態にまで復元できた。図106-6は正位の状態、図107-1はやや傾いた状態、図106-10は四散した破片の状態で出土した。

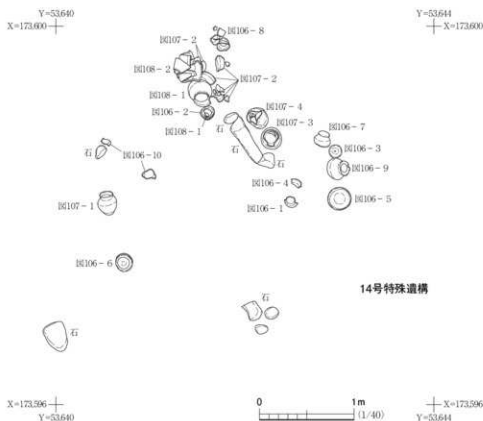


図105 14号特殊遺構

遺物 (図106～108, 写真92・93)

本遺構から出土した遺物は土師器片121点である。この内106点が接合し、16個体の完形・半完形の土器に復元された。出土状態から考えて、これらは一括性が高い資料と言える。この他に、遺物としては取り扱わなかったが、石が8点出土した。

図106-1は半完形に復元された杯である。口縁部が外反し、体部が丸底風の器形である。口縁の下端内面には稜が形成されている。口縁部の外面にはヨコナデ、体部外面の上半にはミガキ、体部外面の下半にはヘラナデとヘラケズリによる整形痕が観察される。底面には線刻された「十」の字状の記号が付けられている。口縁部の内面には主にヨコナデ、体部内面にはヘラナデが施されている。器面は全体的に赤褐色を呈している。組成元素分析は行っていないが、器表面をマイクロスコープで観察したところ、赤色顔料の皮膜らしきものが認められた。

同図2は完形の杯である。口縁部が外反し、体部が丸底風の器形である。口縁の下端内面には稜が形成されている。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部外面の上半にはミガキ、体部外面の下半にはヘラケズリによる整形痕、体部内面にはヘラナデによる調整痕が観察される。底面には線刻された「十」の字状の記号が付けられている。器面は全体的に赤褐色を呈している。組成元素分析は行っていないが、器表面をマイクロスコープで観察したところ、赤色顔料の皮膜らしきものが認められた。

同図3は有孔の粗製杯の完形品である。椀形の器形で、丸底風の底部には直径約1.5cmの円孔が穿たれている。口縁部の外面にはヨコナデ、内面にはヘラナデの調整痕が観察される。体部内面は

調整が粗く、部分的に粘土紐の積み上げ痕が消えずに残されている。体部外面の底部付近にはヘラケズリの整形痕が観察される。

同図4は須恵器の杯蓋を模倣したと思われるほぼ完形の大形鉢である。口縁部が直立気味に立ち上がり、体部が丸底風の器形である。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。体部外面の上半にはミガキ、下半にはヘラケズリによる整形痕が観察される。器面は全体的に、やや明るい赤褐色を呈している。

同図5は須恵器の杯蓋を模倣したと思われる完形の大形鉢である。口縁部が直立気味に立ち上がり、体部が丸底風の器形である。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部の内面にはミガキが施されている。体部外面の上半にはミガキ、下半にはヘラケズリによる整形痕が観察される。器面は全体的に赤褐色を呈している。

同図6は完形の椀である。口縁部が若干反気味に立ち上がり、体部が丸底の器形である。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部の内面にはヘラナデ、体部の外面にはヘラケズリの整形痕とヘラナデによる調整痕が観察される。

同図7は完形の椀である。底部は平底で、底面には木葉痕が微かに残されている。口縁部から体部にかけて内湾する器形で、口縁部には片口が1つ付いている。口縁部の内外面にはヨコナデ、体部の内外面にはヘラナデによる調整痕が認められる。

同図8はほぼ完形に復元された小型甕である。口縁部が外反し、胴部がほぼ球形を成している。口縁部の内外面にはヨコナデ、胴部の内外面には主にヘラナデによる調整痕が観察される。内面の頸部付近には粘土紐の積み上げ痕が残されている。外面の胴部上半から口縁部にかけては、煤が若干付着している。

同図9は完形の甕である。口縁部が外反し、胴部がほぼ球形を成している。口縁部の内外面にはヨコナデ、胴部の外面にはヘラナデによる調整痕が観察される。胴部の内面は主にヘラナデにより調整されており、頸部と底部付近には粘土紐の積み上げ痕が残されている。底部には木葉痕が微かに観察される。

同図10はほぼ完形に復元された小型甕である。口縁部が外反し、胴部は球形、底部は若干凹底となる。口縁部の内外面は主にヨコナデ、胴部外面の上半はヘラナデとミガキによる調整が施されている。底部付近の外面と凹底の部分には、ヘラケズリによる整形痕が残されている。胴部の内面には主にヘラナデによる調整痕が観察される。胴部の外面には煤が若干付着している。

図107-1は完形の小型甕である。口縁部が外反し、胴部がやや縦長のラグビーボール状の器形である。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部内面はヘラナデによる調整が施されている。胴部外面にはヘラケズリによる整形痕が残されている。

同図2はほぼ完形に復元された甕である。口縁部は外反し、胴部は球形を成している。胴部の中央には故意に毀損したと思われる直径約8cmの丸い穴が開けられている。口縁部の内外面にはヨコナデ、胴部外面の上半には主にヘラナデによる調整痕、下半にはヘラケズリによる整形痕が観察

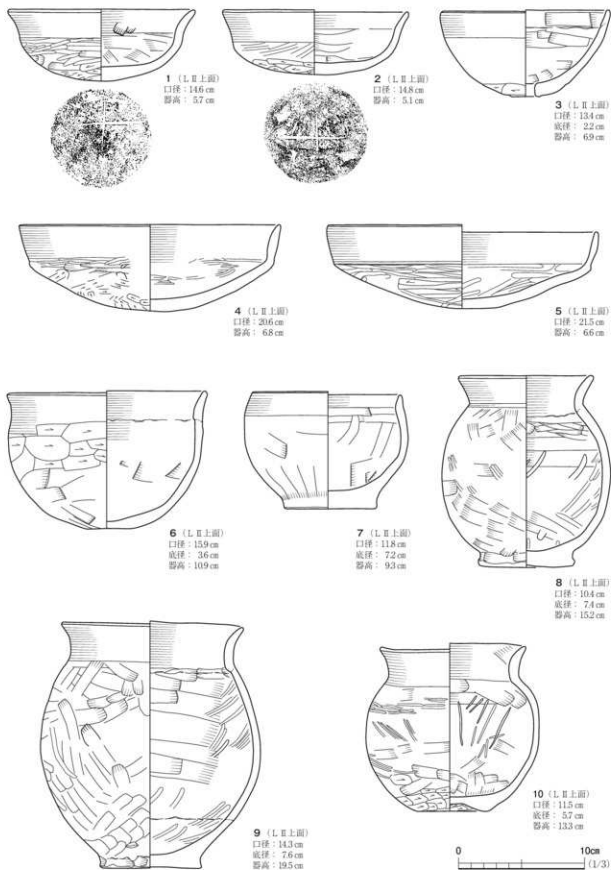


図106 14号特殊遺構出土遺物(1)



される。胴部の内面は主にヘラナデにより調整されており、頸部付近には粘土紐の積み上げ痕が残されている。底部には木葉痕が微かに観察される。外面の胴部上半から口縁部にかけては煤が付着している。

図107-3は半完形に復元された甕である。口縁部が外反し、胴部が外側に大きく膨らむ器形をなし、胴部中位に最大径がある。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の内外面は主にヘラナデにより調整されている。胴部内面の器面調整は不十分で、部分的に粘土紐の積み上げ痕が見られる。胴部の外面には煤が若干付着している。

同図4は半完形に復元された甕である。口縁部は欠損している。胴部は縦長のラグビーボール状

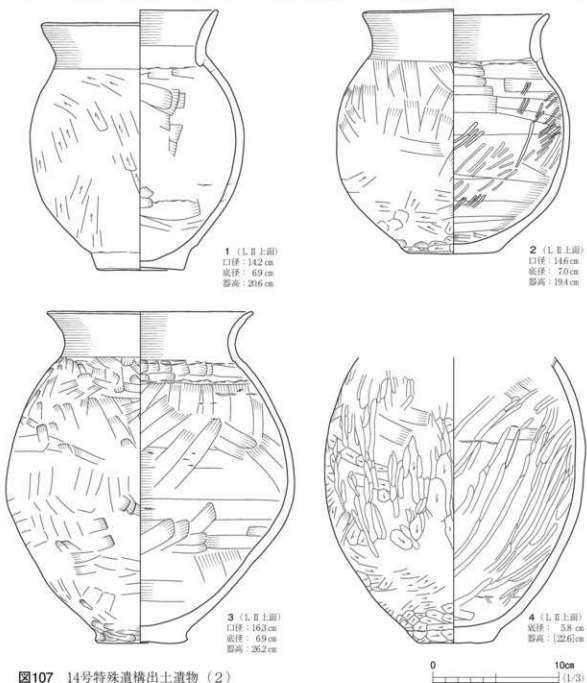
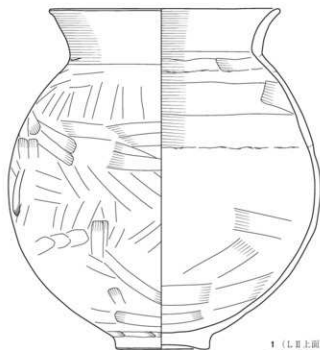
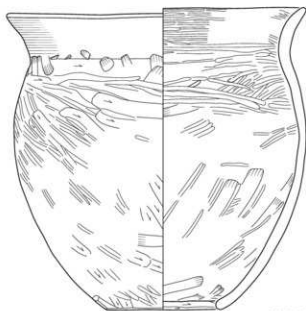


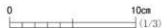
図107 14号特殊遺構出土遺物(2)



1 (L.E.上面)  
口径：18.4 cm  
底径：7.2 cm  
器高：27.1 cm



2 (L.E.上面)  
口径：23.7 cm  
底径：8.9 cm  
器高：23.9 cm



の器形である。胴部外面の上半にはミガキ、下半にはヘラケズリによる整形痕が認められる。内面には主にミガキが施されているが、部分的に粘土紐の積み上げ痕が見られる。

図108-1は完形のやや大型の甕である。口縁部が外反し、胴部は球形を成している。口縁部の内外面にはヨコナデ、胴部の内外面には主にヘラナデによる調整痕が観察される。胴部の内面上半には粘土紐の積み上げ痕が観察される。胴部の外面には若干の煤が付着している。

同図2は完形のやや大型の甕である。口縁部が外反し、胴部が外側に丸く膨らむ器形を成している。口縁部の外面にはヨコナデ、胴部の外面には主にミガキが施されている。内面は主にミガキによる器面調整が施されている。底部には直径約8cmの円孔が穿たれている。

#### まとめ

時期的には概ね6世紀前半の所産と思われる。出土した土器には栃木県の那須地方における当該期の土器と共通する様相がうかがえる。本遺跡内では同時期の遺構が確認されていないため、この地点においてのみ存在する状況である。当初は阿武隈川や自然の沢地形が近接することとも考え合わせて、祭祀跡の可能性も想定したが、石製模造品等の祭祀関係の遺物が皆無であり、土器組成も杯等の特定器種に偏っていないため、何らかの理由で土器を中心とした遺棄行為が行われた痕跡という位置づけに止めるのが妥当と考えている。(小巻)

図108 14号特殊遺構出土遺物(3)

## 第6節 遺構外出土遺物

### 土 器 (図109)

#### 縄文土器 (図109)

図109-1は縄文時代晩期前葉の大洞B2式土器である。器種は、深鉢、鉢、台付鉢のいずれかである。口縁部から胴部にかけての破片で、口縁端部には5mm間隔の浅いスリットが加えられている。口縁部下には横走する平行沈線文と玉抱き三叉文、胴部には節の細かい斜縄文が施されている。器厚は約3mmである。

同図2～6は縄文時代晩期前葉の大洞BC式土器である。2～5は同一個体と思われる深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部下には羊歯状文、胴部には節の細かい斜縄文が施されている。器厚は約5mmである。6は鉢もしくは台付鉢の口縁部破片である。羊歯状文のような文様が観察される。器厚は約3mmである。

同図7・8は底部資料である。いずれも底面に網代痕が認められる。

#### 土 師 器 (図109)

図109-10～15は非ロクロ土師器で、所属年代は6世紀前半代である。10は須恵器の杯蓋を模倣した杯である。口縁部から体部にかけての破片で、内面には黒色処理が施されている。口縁部は内外面ともにヨコナデにより調整され、体部の内面には放射状のミガキが施されている。体部の外面にはヘラケズリによる整形痕が観察される。11は杯の口縁部から体部にかけての破片である。器形は丸底の体部から口縁部にかけて内湾する碗形を呈している。内面には黒色処理とミガキが施されている。外面は全体的にミガキが施され、底部付近にはヘラケズリによる成形痕が観察される。12・13は杯の口縁部から体部にかけての破片である。12は口縁部がやや外傾する器形で、口縁部下の内面には弱い稜線が観察される。内外面ともにミガキが施されている。13は丸底の体部から口縁部にかけて外反する器形で、口縁部と体部の境が屈曲している。内外面ともにミガキが施されている。この12・13の内外面には赤色顔料が付着している。これらについて組成元素分析を行った結果、いずれもベンガラであることが判明した。14・15は甕の底部資料である。15の底面には木葉痕が認められる。

図109-16は非ロクロ土師器の杯で、所属年代は7世紀代である。口縁部から体部にかけての破片である。丸底の体部から口縁部にかけて内湾する器形で、口縁部と体部の境には弱い段が見られる。内面には黒色処理とミガキが施され、口縁部の外面はヨコナデにより調整されている。

#### かわらけ (図109)

図109-17は手捏ね成形の小皿である。口縁部の内外面はヨコナデにより調整されている。鎌倉時代の所産と思われる。

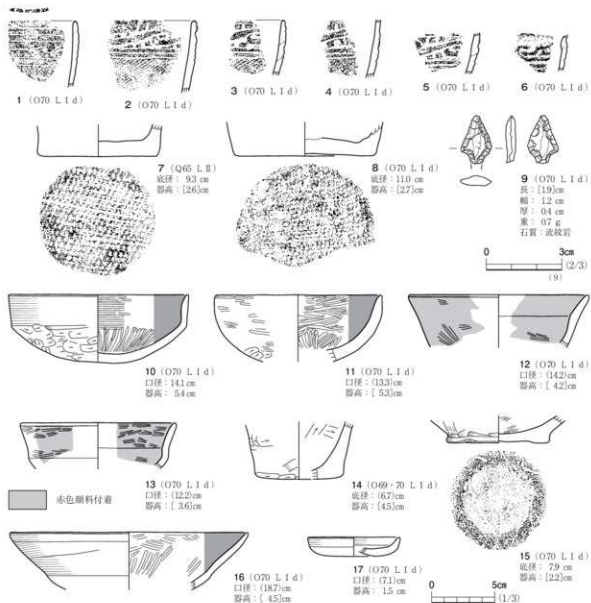


図109 調査地区遺構外出土遺物

石器 (図109)

図109-9は小型の有茎石鉢である。流紋岩製で、基部が欠損している。表裏面とも側縁部に調整刻離が加えられているが、素材面を大きく残している。薄い剥片を素材にしたため、厚みを調整する必要がなく、形を整えるために側縁を少し調整する程度の加工で済ませている。剥離面を観察すると、基部が最後に作り出されていることがわかる。(小 暮)

## 第6章 総括

本章では、前章までにおいて詳述してきた平成25年度調査の各調査区の調査成果をまとめるとともに、3年間にわたる調査の成果をまとめてみることにする。

### 平成25年度のまとめ

調査⑤中区：縄文時代前期の遺物包含層が検出された。

調査③・④区：中世面から畑跡・掘立柱建物跡・柱列跡、古代面から竪穴住居跡・土坑・溝跡・畑跡などが検出され、その下層からは、縄文時代前～後期の遺物包含層が検出された。畑跡は北に隣接する調査⑤中区から連続する生産域を示すものと推測される。また、古代の遺物の中には、完形に近い須恵器長頸瓶や短頸壺、特徴的な土師器甎などもある。

調査①区：奈良時代の竪穴住居跡などが検出され、その下層からは、縄文時代前～後期の遺物包含層と多くの落とし穴状土坑が検出された。落とし穴状土坑は、阿武隈川に面する自然堤防上で確認され、ほぼ南北方向に列をなして北隣の調査②区及び南隣の調査⑨区へと続いている。

調査⑨区：中世面から溝跡・土坑が検出され、その下層から、縄文時代前期後葉～中期末葉の遺物包含層と多くの落とし穴状土坑が検出された。落とし穴状土坑は早期末葉頃のものとして推測され、阿武隈川に面する自然堤防の尾根に沿ってほぼ南北方向に列をなし、北隣の調査①区にも続いていることから、広範囲の狩猟場が形成されていたことが判明した。

調査⑩区：中世ないしは中世以降の溝跡・土坑が検出され、その下層からは、礫と多くの土師器を集積した古墳時代後期の特殊遺構が2カ所確認された。

### 3年間の調査のまとめ

3年間の調査の結果、竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡20棟、柱列跡10列、土坑158基、溝跡39条、畑跡21カ所、井戸跡1基、特殊遺構2カ所、焼土遺構2基、性格不明遺構1基、小穴多数が検出され、縄文時代早期中葉～室町時代までの遺物が出土した。本遺跡は阿武隈川の右岸に形成された自然堤防上に存在し、度重なる阿武隈川の氾濫による洪水を受けていたことが、各調査区の土層の観察からもうかがえ、遺構面が複数確認された。このことから、先述の各遺構は一時期に存在したのではなく、複数の時代・時期のものが混在している。そこで、時代・時期を追って、本遺跡について概観してみることにする。

縄文時代早期中葉：遺跡北部の調査⑤下～⑧区及び南部の調査①区から当期の土器が少量出土していることから、本遺跡に人が住み始めた頃である。遺跡北部には居住域が想定される。

縄文時代早期末葉～前期前葉：この時期のものと推測される落とし穴状土坑が遺跡北部の調査⑤

下区で2基、遺跡南部の調査①・②・⑨区から115基検出されており、大木2 a式土器が遺跡北部の調査⑤下～⑦区から出土している。当時の居住域は北部にあったと推測され、南部において100基を超える落し穴状土坑が阿武隈川に沿って南北に並んで存在していることは、遺跡の南部が大規模な狩猟場であったことを想定させる。

縄文時代前期中葉～後葉：大木3～5式土器が遺跡北半の調査⑤中～⑥区及び南部の調査②区から多く出土しており、関東系の諸磯b式土器や浮島式土器・興津式土器も少量出土している。当時の居住域が大きく2カ所存在していたと推測され、調査②区からは堅穴住居跡も検出している。

縄文時代前期末葉～中期初頭：大木6・7 a式土器が遺跡南半の調査①・②・④・⑨区から出土している。特に、調査①・⑨区からは大木6・7 a式土器が多く出土しているのに対して、調査②区では大木7 a式土器が出土していないことから、前期後葉から中期初頭にかけて居住域が次第に南へ移動していたことがうかがえる。

縄文時代中期前葉～中葉：大木7 b・8 a式土器が調査①・⑤・⑥区から少量出土していることから、断続的な小規模な人の営みがうかがえる。

縄文時代中期末葉～後期初頭：遺跡内の広い範囲から当期の土器が出土しているが、特に、調査③区から④区の南部にかけて後期初頭の土器が多く出土している。なお、後期初頭には、本遺跡は大洪水に見舞われ、厚い砂層に覆われることになる。

縄文時代後期前葉～中葉：前葉の土器は遺跡内の広い範囲から出土している量は少なく、中葉の土器は調査④・⑧・⑨区から少量出土していることから、小規模な人の営みがうかがえる。

縄文時代後期後葉～晩期前葉：遺跡内の広い範囲から当期の土器が出土しているが、南北の調査⑧区と⑨区では当期の土器が連続的に出土しているのに対して、その間の区域では晩期の土器は出土せず、南端部の調査⑩区では晩期前葉の土器のみが出土しており、時期ごとに居住域が変遷している可能性がある。なお、調査⑧区では堅穴住居跡も検出されている。

縄文時代晩期中葉～後葉：遺跡北部の調査⑥・⑦区及び南部の調査①・②区から中葉の土器が少量出土し、中央部の調査⑤上区からは後葉の土器が埋設された土坑が検出されている。

弥生時代：調査①・④・⑧区から弥生時代中期の土器が少量出土し、中央部の調査⑤中区からは完形に近い石庵丁が1点出土している。この石庵丁が出土したことについては、弥生時代に本遺跡において稲作が行われていたことを示唆している。

古墳時代前期：調査①区及び④区から当期の土器が少量出土しているが、その中には祭祀を想定させるものも含まれている。

古墳時代後期：遺跡最南端部から、土師器杯・甕・甔などが集積された特殊遺構が2カ所検出された。遺跡内において、当期の資料が出土したのはこの地点のみであり、遺構の性格も知ることはできないが、当時の土器組成を知ることができる好例であるといえる。

奈良・平安時代：当期の堅穴住居跡及び畑跡が多数検出されている。堅穴住居跡は合計28軒検出されているが、その内の25軒は奈良時代(8世紀代)のもので、北から調査⑧区、調査⑤中～⑥区、

調査④区、調査①～②区の4カ所に分布している。その中でも、調査⑤中～⑥区では重複するものも含めて合計17軒の竪穴住居跡が検出されており、同じ場所而建て替えを行うなど継続的に居住空間が形成されていたことが判明した。残る3軒の竪穴住居跡は9世紀代1軒、10世紀代2軒であり、居住域は前代とは別の区域に移動したか、縮小したものと推測される。これの契機となったのは、8世紀末葉の畑跡の出現である。調査⑤中区では、竪穴住居跡から畑跡への変遷、つまり、居住域から生産域へと変遷していることが確認されている。なお、畑跡は8世紀末葉～9世紀初頭段階のものと9世紀前葉以降の段階のものがあり、後者の下限は鎌倉時代(13世紀後半)、さらには、室町時代(15世紀)まで下る可能性もある。

また、本遺跡における当期の特徴的な資料に、須恵器長頸瓶・短頸壺、墨書土器、石製腰帯具の巡方、円面硯、平瓦がある。これらの資料は、一般集落よりも上のランクの官(役所)的な匂いを持つ資料であり、本遺跡の南西約2kmに所在する当時の安達郡衙と推定されている郡山台遺跡と何らかの関係があったことを推測させる。さらに、24号住居跡や37号土坑から出土した土師器杯は、土師器製作に須恵器工人が関与したことを想起させる。

鎌倉時代：遺跡北部の調査⑤下・⑥区から多くの掘立柱建物跡や柱列跡・井戸跡などが検出されている。掘立柱建物跡は桁行4間以上のものが主体をなし、6間以上の大型のものが6棟ある。また、付近からは中国産陶磁器やかわらけが出土し、井戸跡からはかわらけが多量に出土していることから、この区域には当地の有力者の屋敷跡が存在したことが推測される。

以上のように、本遺跡は縄文時代早期中葉以降、鎌倉時代まで断続的に居住域や生産域、狩猟域として利用されてきたことが判明したが、各時代・時期における遺構の広がり、特に、居住域は調査範囲内に留まるものではなく、さらに調査範囲の東方及び西方へと続いて行っており、本遺跡の全容の一端を垣間見た程度と捉えている。本遺跡の今回の調査が、地域の古代・中世史の解明の一助になれば幸いである。

(能登谷)

## 参考文献

- 万葉の里シンボジウム実行委員会・鹿島町教育委員会 1989 『シンボジウム 福島県に於ける古代土器の諸問題-特に5～7世紀を中心として-』
- 松本 茂他 1991 『東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』福島県文化財調査報告書第243集 福島県教育委員会
- 藤澤貞祐 1997 『中・近世瀬戸焼の福年』『東北地方の在地土器・陶磁器I-11世紀から19世紀-』東北中世考古学会第3回研究大会 東北中世考古学会
- 吉田 功他 2012 『阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告1』福島県文化財調査報告書第487集 福島県教育委員会
- 吉田 功他 2013 『阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告2』福島県文化財調査報告書第490集 福島県教育委員会

## 付章 自然科学分析

### 第1節 出土炭化物の放射性炭素年代

株式会社 加速器分析研究所

#### 1. 測定対象試料

トロミ遺跡は、福島県二本松市南トロミ(北緯37°34'58", 東経140°26'28")に所在し、阿武隈川東岸の自然堤防上に立地する。測定対象試料は、遺構や遺物包含層等から出土した土器付着炭化物と炭化材の合計6点である(表9)。土器付着炭化物No1は、土器の内面に付着した炭化物が採取された。

#### 2. 測定の意義

遺構や遺物包含層等の年代を推定する。また、土器付着炭化物の測定では、炭化物が採取された土器の年代を明らかにする。

#### 3. 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表9に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で

還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4. 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシユウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5. 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表9)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表9に、補正していない値を参考値として表10に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合であ



る。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表9に、補正していない値を参考値として表10に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{13}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCal4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表10に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「calBC/AD」(または「calBP」)という単位で表される。

## 6. 測定結果

測定結果を表9・10に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、No.1が $3960 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.2が $1870 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.3が $1300 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.4が $1360 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.5が $1480 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.6が $3940 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、古い方から順にNo.1が縄文時代中期末葉頃、No.6が縄文時代後期初頭頃、No.2が弥生時代後期頃、

No.5が古墳時代後期～終末期頃、No.4が古墳時代終末期頃、No.3が古墳時代終末期～古代頃に相当する(小林編 2008, 佐原 2005)。

なお、No.2が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾壽 2009, 坂本 2010など)。その日本版較正曲線を用いてNo.2の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60%以上の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.
- 小林達雄編 2008「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
- 尾壽大真 2009「日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代」設楽博己、藤尾慎一郎、松本武彦編「弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭」同成社、pp.225-235.
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years calBP, *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869-1887.
- 佐原眞 2005「日本考古学・日本歴史学の時代区分」佐原眞、ウェルナー・シュタインハウス監修、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集「ドイッ展記念説話 日本の考古学 上巻」学生社、pp.14-19.
- 坂本隆 2010「較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-」『第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集』(株)加速器分析研究所、pp.85-90.
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3), pp.355-363.

表9 放射性炭素年代測定結果 (1) ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132070	No.1	K42G LIV	土器付着炭化物	AaA	-26.87±0.43	3960±30	61.10±0.20
IAAA-132071	No.2	SX20 歳14 #1	炭化材	AAA	-26.02±0.64	1,870±20	79.28±0.23
IAAA-132072	No.3	S123 カマド 底面	炭化材	AAA	-26.31±0.32	1,300±20	85.11±0.25
IAAA-132073	No.4	SK40 #1	炭化材	AAA	-26.59±0.61	1,360±20	84.41±0.24
IAAA-132074	No.5	SK41 #2	炭化材	AAA	-24.12±0.64	1,480±20	83.19±0.25
IAAA-132075	No.6	K37G LIV	炭化材	AAA	-23.57±0.56	3,940±30	61.24±0.20

表10 放射性炭素年代測定結果 (2) ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值, 暦年較正用 $^{13}\text{C}$ 年代, 較正年代)

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Libby Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132070	3,990±30	60.87±0.20	3,957±26	2562calBC - 2535calBC (21.5%) 2492calBC - 2460calBC (46.7%)	2570calBC - 2516calBC (28.5%) 2501calBC - 2432calBC (54.1%) 2424calBC - 2401calBC ( 5.3%) 2381calBC - 2348calBC ( 7.5%)
IAAA-132071	1,880±20	79.11±0.21	1,865±23	87calAD - 107calAD (15.0%) 120calAD - 172calAD (39.9%) 193calAD - 211calAD (12.7%)	80calAD - 222calAD (95.4%)
IAAA-132072	1,330±20	84.88±0.25	1,295±24	673calAD - 711calAD (44.1%) 745calAD - 764calAD (24.1%)	664calAD - 726calAD (62.3%) 738calAD - 769calAD (33.1%)
IAAA-132073	1,390±20	84.13±0.21	1,361±22	650calAD - 669calAD (68.2%)	640calAD - 684calAD (95.4%)
IAAA-132074	1,460±20	83.34±0.22	1,478±23	564calAD - 610calAD (68.2%)	548calAD - 637calAD (95.4%)
IAAA-132075	3,920±20	61.42±0.18	3,938±25	2481calBC - 2437calBC (39.0%) 2421calBC - 2404calBC (11.1%) 2379calBC - 2349calBC (18.2%)	2560calBC - 2536calBC ( 4.8%) 2492calBC - 2343calBC (90.6%)

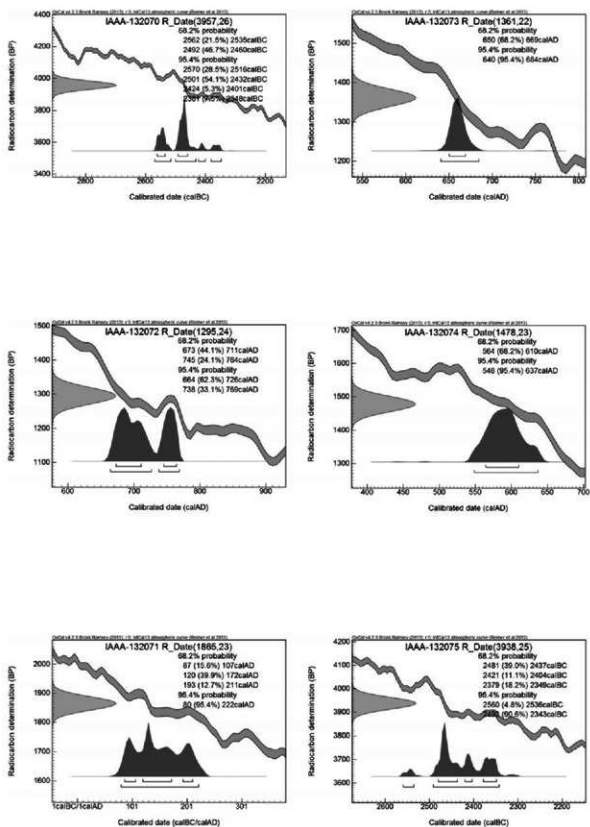


図110 暦年較正年代グラフ

## 第2節 土器に付着する赤色顔料分析

株式会社 バレオ・ラボ

### 1. はじめに

二本松市南トロミに所在するトロミ遺跡より出土した土器に付着する赤色顔料について走査型電子顕微鏡(SEM)観察およびX線分析を行い、顔料の種類を検討した。

### 2. 試料と方法

分析対象は、6世紀前半の遺物とみられる土師器の杯2点に付着する赤色顔料である(図112-1~4)。実体顕微鏡下で、カーボンテープに赤色部分を極少量採取して炭素蒸着を行い、観察・分析試料とした。図112-1・3に試料採取位置を白丸で示す。

観察には、日本電子(株)製走査型電子顕微鏡JSM-5900LVを使用した。さらに、SEMに付属するエネルギー分散型X線分析装置JED-2200による定性・簡易定量分析を行った。

### 3. 結 果

SEM観察により得られた二次電子像を図112-5・6に示す。また、分析により得られたスペクトルを図111に、簡易定量分析結果を表11に酸化物の形で示す。

どちらの試料も、パイプ状の粒子は観察されなかった。また、X線分析では鉄(Fe)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)が検出された。

### 4. 考 察

古墳時代の赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀(HgS)で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二

鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1μmのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており(岡田1997)、含水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬1998)。鉄バクテリアは、湿地などで採集できる。

今回分析した土師器杯付着の赤色顔料2点は、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が多く検出されており、赤い発色は鉄によるものと推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。パイプ状の粒子は検出されておらず、鉄バクテリアを起源とするいわゆるパイプ状ベンガラではない。表12に分析結果の一覧を示す。

### 5. おわりに

土師器杯2点に付着する赤色顔料について分析した結果、両者とも鉄が多く検出され、鉄(Ⅲ)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。なお、パイプ状粒子は観察されなかった。

表11 簡易定量値 (mass%)

資料No.	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
1	11.01	21.97	67.02
2	14.84	33.32	51.84

### 引用文献

- 成瀬正和 1998「縄文時代の赤色顔料Ⅰ-赤彩土器-」『考古学ジャーナル』438、ニューサイエンス社、pp.10-14。  
 成瀬正和 2004「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要』26、宮内庁正倉院事務所、pp.13-61。  
 岡田文男 1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』、pp.38-39。

表12 分析結果一覧

試料No.	遺物名	調査区	グリッド	層位	時期	検出元素	顔料種類
1	土師器杯	99区	O70	L1 d	6世紀前半	Fe, Si, Al	ベンガラ
2	土師器杯	99区	O70	L1 d	6世紀前半	Fe, Si, Al	ベンガラ

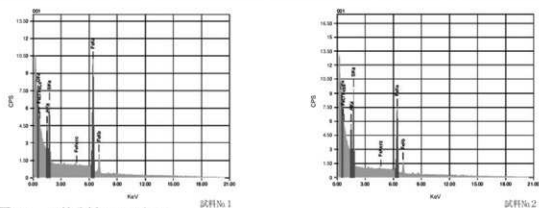


図111 X線分析スペクトル

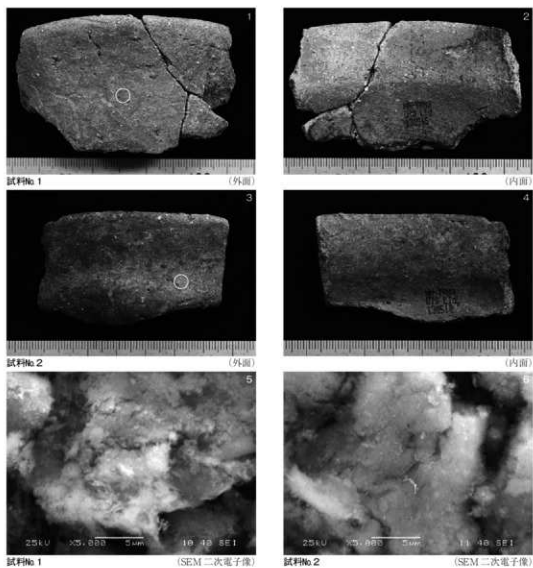


図112 土器付着赤色顔料分析 (○は試料採取位置を示す)



# 写 真 图 版



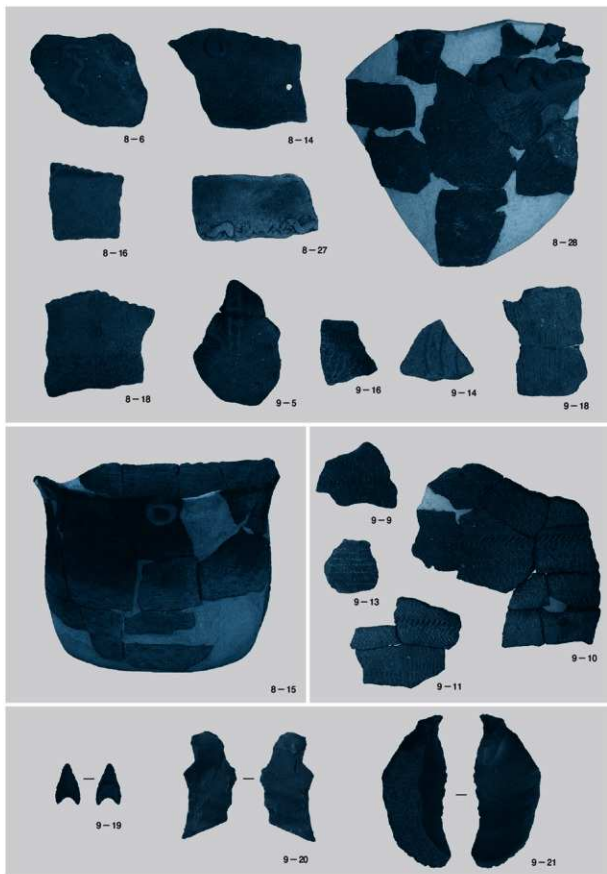




1 調査⑤中区全景（北から）



2 調査⑤中区基本土層（南西から）



3 調査⑤中区遺構外出土縄文土器・石器



4 調査③区L1d上面全景（北西から）



a



b



c



d

5 調査③区（1）

a 調査面全景（南から）

c 工學用道路部分L1e上面全景（南西から）

b L1e～E上面全景（北西から）

d L1e上面全景（北西から）



6 調査③区(2)

- a 重複路部分LⅠe～Ⅱ上面全景(南から)      b 重複路部分LⅡa上面全景(北から)  
 c 市道部分LⅡa上面全景(東から)              d 市道部分LⅡV上面全景(北西から)



7 調査④区LⅠd上面全景(北東から)



8 調査④区(1)

- a 調査前全景(北西から)      b LⅡ上面全景(北から)  
 c 工事用道路部分LⅤ上面全景(北東から)      d 市道行替え部分LⅤ上面全景(北西から)

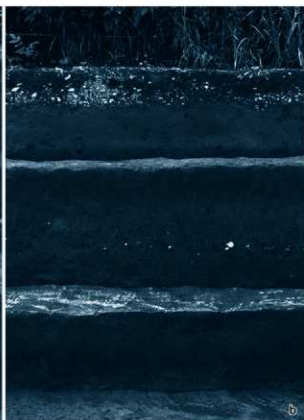


9 調査④区(2)

- a LⅤ上面全景(南西から)      b 重機路部分LⅠd上面全景(北から)  
 c 重機路部分LⅡ上面全景(南西から)      d 重機路部分LⅤ上面全景(南西から)



10 調査③区基本土層



a J43グリッド西壁（東から） b J41グリッド西壁（東から）



11 調査④区基本土層



a P31グリッド東壁（西から） b O37グリッド東壁（西から）  
c N40グリッド東壁（西から） d K38グリッド西壁（東から）



12 23号住居跡全景（南西から）



13 23号住居跡

- a A-A' 断面（南西から）  
 b 新カマド底面上炭化物層検出状況（南西から）  
 c 旧カマド全景（南東から）  
 d 新カマド底面上炭化物層断面（南東から）



14 18号建物跡全景（南西から）



15 19号建物跡全景（南西から）





16 7～10号柱列跡



a 7・8号柱列跡全景(南西から)



b 9号柱列跡全景(東から)



c 10号柱列跡全景(北から)



17 36～39号土坑



a 36号土坑全景(南から)

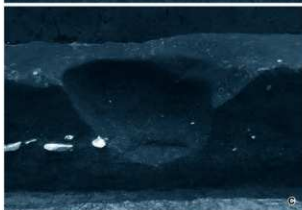
b 37号土坑全景(西から)



c 38号土坑全景(南から)

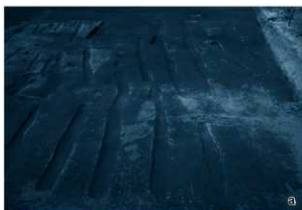


d 39号土坑全景(南西から)



18 40～43号土坑

a 40号土坑全景 (南西から)      b 41号土坑遺物出土状況 (南から)  
c 42号土坑全景 (東から)      d 43号土坑断面 (南東から)



19 12号烟跡

a 全景 (東から)      b 全景 (北東から)  
c 概出 (北から)      d 縦断溝9～11・14断面 (北東から)



a



b



c



d

## 20 13号畑跡

a 全景 (南から)

c 縦開溝 2・4・7 断面 (南西から)

b 全景 (南から)

d 縦開溝 6・8 断面 (南西から)



a



b



c



d

## 21 15号畑跡

a 全景 (南から)

c 縦開溝 3・4 断面 (南から)

b 検出 (南から)

d 縦開溝 5 断面 (南から)



a



b



c



d

22 16号畑跡

a 全景（西から）  
 b 重複跡部分全景（北東から）  
 c 縦間溝1～6断面（北西から）  
 d 縦間溝4～6断面（西から）



a



b



c



d

23 17号畑跡

a 全景（東から）  
 b 縦間溝3～5・7・8（北西から）  
 c 縦間溝6断面（東から）  
 d 縦間溝9断面（東から）



24 18号畑跡

a 全景（北から）

c 縦開溝2・3-9断面（北から）

b 検出（北東から）

d 縦開溝10-12断面（北から）



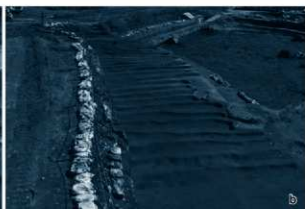
25 19号畑跡

a 全景（南から）

c 縦開溝1-6断面（北西から）

b 全景（東から）

d 縦開溝14-17断面（南から）



26 20号畑跡

a 全景 (東から)      b 市道部分全景 (北西から)  
c 検出 (東から)      d 市道部分検出 (西から)



27 21号畑跡

a 全景 (北東から)      b 検出 (北東から)  
c 鉄罫溝10・11・13断面 (北東から)      d 鉄罫溝1断面 (北から)



a



b



c



d

### 28 22号畑跡

- a 全景（北西から）  
b 重機路部分全景（北西から）  
c 縦開溝2断面（東から）  
d 縦開溝4～6断面（南東から）



a



b



c



d

### 29 23号畑跡

- a 全景（東から）  
b 検出（東から）  
c 縦開溝1断面（東から）  
d 縦開溝2断面（東から）



30 24号畑跡

a 全景（北東から）  
b 縦間溝1断面（西から）  
c 縦間溝2断面（西から）  
d 縦間溝3・4断面（西から）



31 12・24号溝跡

a 12号溝跡全景（南西から）  
b 24号溝跡全景（南東から）





d



b



c



d

32 24・26号溝跡

a 24号溝跡東部 (北西から)      b 24号溝跡断面 (北西から)  
c 24号溝跡断面 (南から)      d 26号溝跡全景 (東から)



a



b

33 27・28号溝跡

a 27号溝跡全景 (東から)      b 28号溝跡全景 (西から)



a



b

34 28・29号溝跡



c

a 28号溝跡東部 (北西から)

b 29号溝跡東部 (北西から)

c 29号溝跡全景 (南東から)



a

35 30・31号溝跡



b



c

a 30号溝跡全景 (東から)

b 31号溝跡西半部全景 (南から)

c 31号溝跡東半部全景 (南から)



36 32・33号溝跡



a 32号溝跡全景 (西から)    b 33号溝跡全景 (北西から)



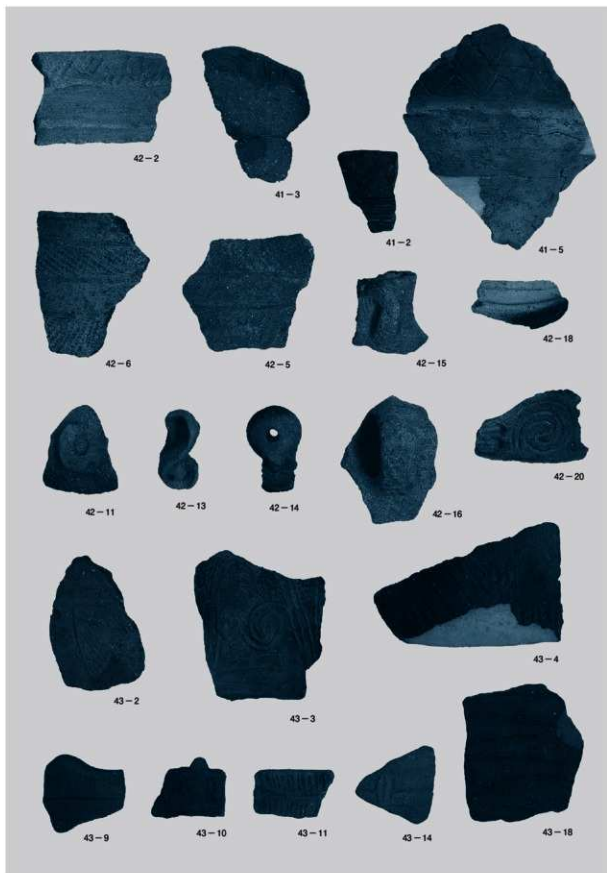
37 35・36号溝跡, 小穴群



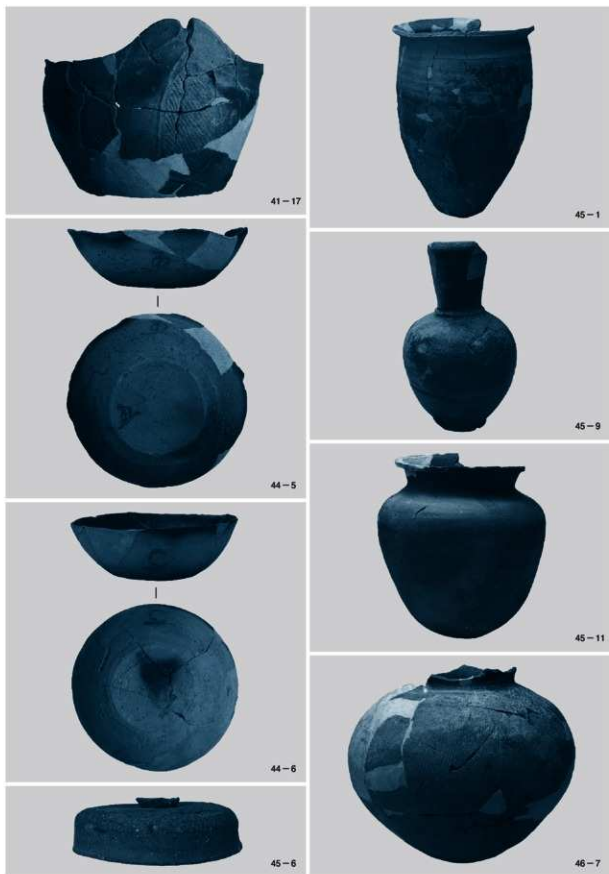
a 35号溝跡全景 (西から)    b M32グリッド付近小穴群 (南から)  
c 36号溝跡全景 (北から)    d N・O32グリッド付近小穴群 (南西から)



38 調査③・④区遺構内出土土師器・須恵器



39 調査③・④区遺構外出土縄文土器



40 調査③・④区遺構外出土縄文土器・土師器・須恵器



41 調査①区LⅢ上面全景 (南から)



42 調査①区LⅦ上面全景 (南から)



43 調査①区北側調査区

a L.E・Ⅲ上面全景（南から）  
b M52グリッド東壁基本土層（西から）  
c L.E上面断面（南東から）  
d M54グリッド東壁基本土層（西から）



44 調査①区基本土層

a K52グリッド西壁（東から）  
b K54グリッド西壁（東から）  
c K56グリッド西壁（東から）





45 24号住居跡 全景（南東から）



a



b



c



d

46 24号住居跡

a カマド全景（南東から）

b 貼床断面（南西から）

c 雛形全景（南東から）

d カマド付近雛形全景（南東から）



47 25号住居跡全景（東から）

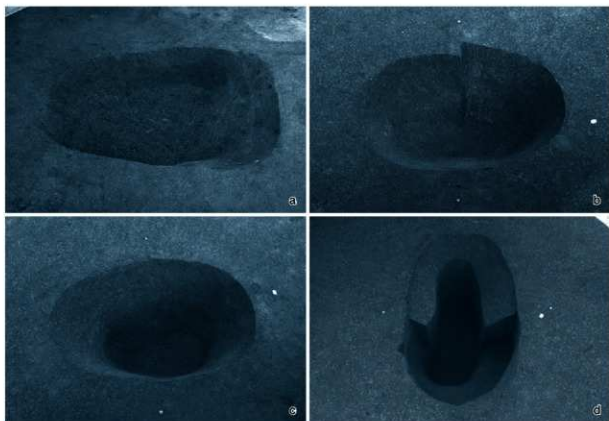


48 25号住居跡

a 全景（北東から）  
b 検出（東から）  
c A-A' 断面（北から）  
d B-B' 断面（東から）

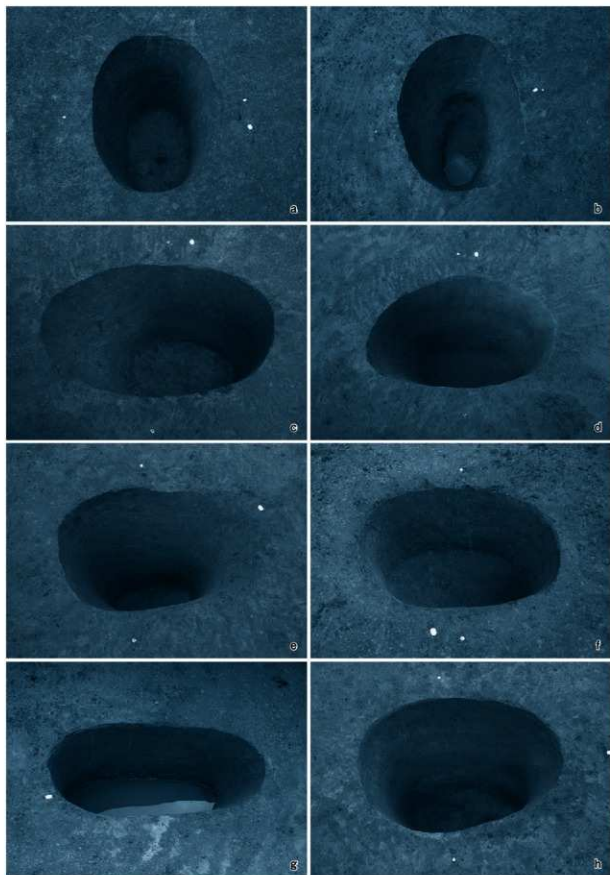


49 20号建物跡全景 (南から)



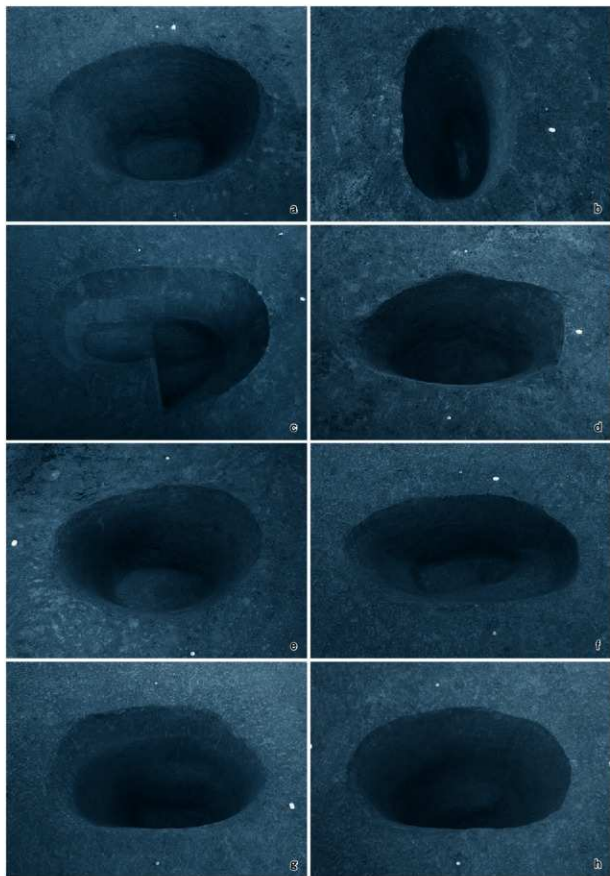
50 66・111～113号土坑

a 66号土坑全景 (東から)    b 111号土坑全景 (南東から)  
c 112号土坑全景 (南から)    d 113号土坑全景 (北東から)



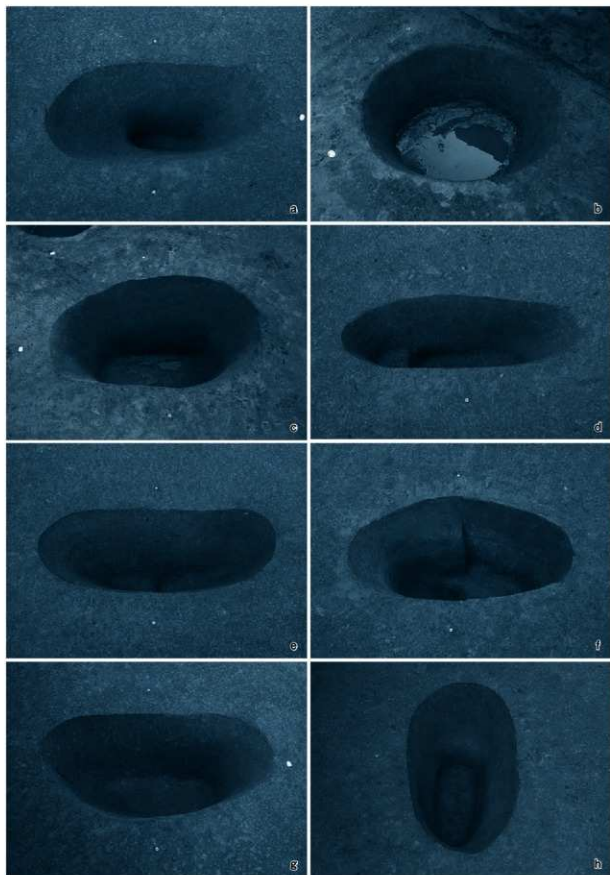
51 114～121号土坑

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| a 114号土坑全景 (東から)  | b 115号土坑全景 (東から)  |
| c 116号土坑全景 (南東から) | d 117号土坑全景 (南から)  |
| e 118号土坑全景 (南から)  | f 119号土坑全景 (北西から) |
| g 120号土坑全景 (北から)  | h 121号土坑全景 (南から)  |



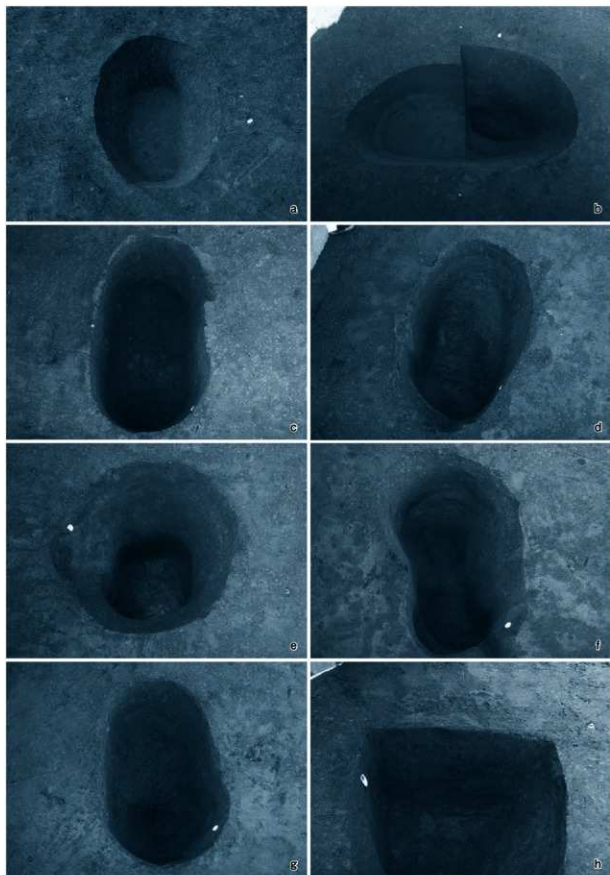
52 122~129号土坑

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| a 122号土坑全景 (南から) | b 123号土坑全景 (東から) |
| c 124号土坑全景 (南から) | d 125号土坑全景 (南から) |
| e 126号土坑全景 (北から) | f 127号土坑全景 (南から) |
| g 128号土坑全景 (南から) | h 129号土坑全景 (南から) |



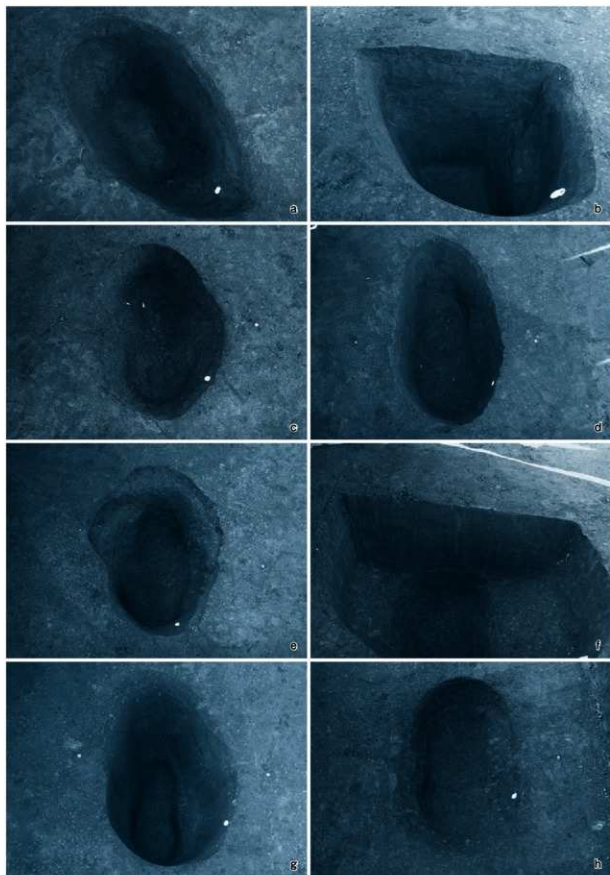
53 130～135・137・138号土坑

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| a 130号土坑全景 (南から)  | b 131号土坑全景 (北西から) |
| c 132号土坑全景 (北東から) | d 133号土坑全景 (南から)  |
| e 134号土坑全景 (南から)  | f 135号土坑全景 (南から)  |
| g 137号土坑全景 (南から)  | h 138号土坑全景 (南から)  |



54 139~146号土坑

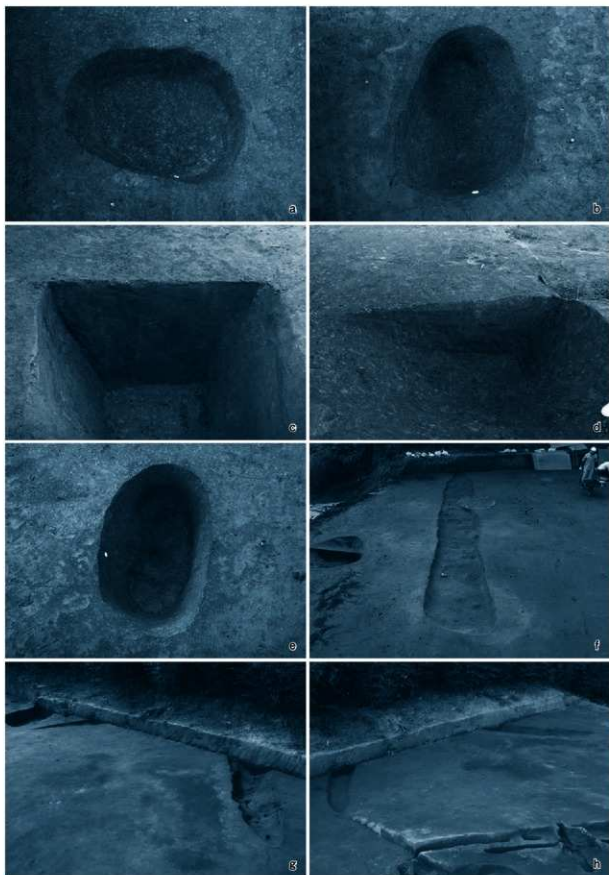
- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| a 139号土坑全景 (东外) | b 140号土坑全景 (南外) |
| c 141号土坑全景 (东外) | d 142号土坑全景 (东外) |
| e 143号土坑全景 (东外) | f 144号土坑全景 (东外) |
| g 145号土坑全景 (东外) | h 146号土坑断面 (东外) |



55 147～154号土坑

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| a 147号土坑全景 (東から) | b 148号土坑断面 (東から) |
| c 149号土坑全景 (東から) | d 150号土坑全景 (東から) |
| e 151号土坑全景 (東から) | f 152号土坑断面 (東から) |
| g 153号土坑全景 (東から) | h 154号土坑全景 (東から) |



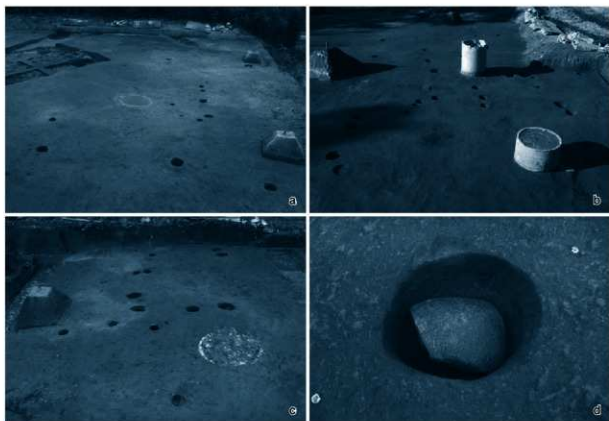


56 155～159号土坑、34・37・38号溝跡

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| a 155号土坑全景 (東から)    | b 156号土坑全景 (東から)    |
| c 157号土坑断面 (東から)    | d 158号土坑断面 (東から)    |
| e 159号土坑全景 (東から)    | f 34号溝跡全景 (東から)     |
| g 37・38号溝跡全景 (北東から) | h 37・38号溝跡全景 (南東から) |

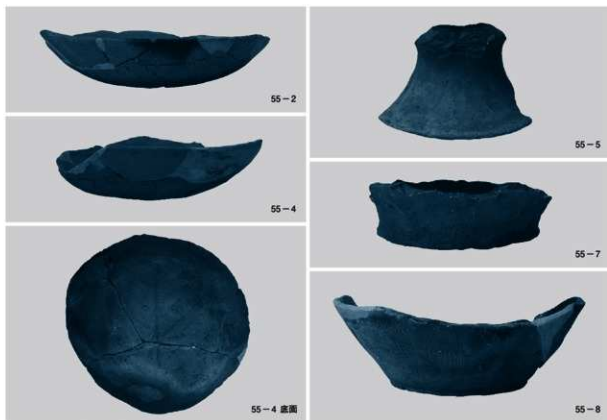


57 調査①区北側小穴群全景（北東から）

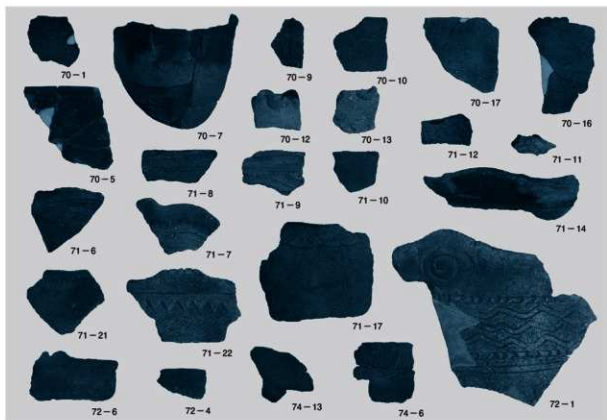


58 調査①区南側小穴群

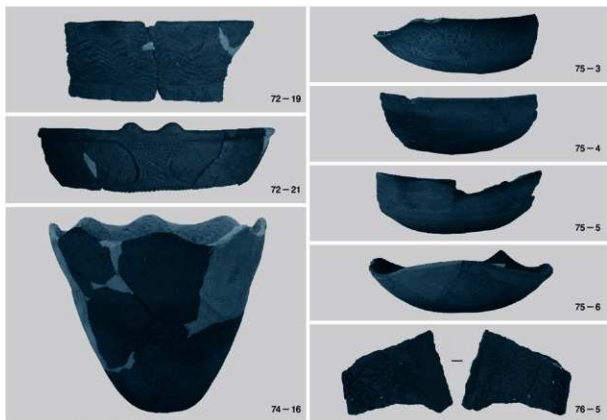
- a L・M56グリッド小穴群全景（東から）  
 b M56・57グリッド小穴群全景（東から）  
 c K・L57グリッド小穴群全景（東から）  
 d L56グリッドP1 掘出土状況（南西から）



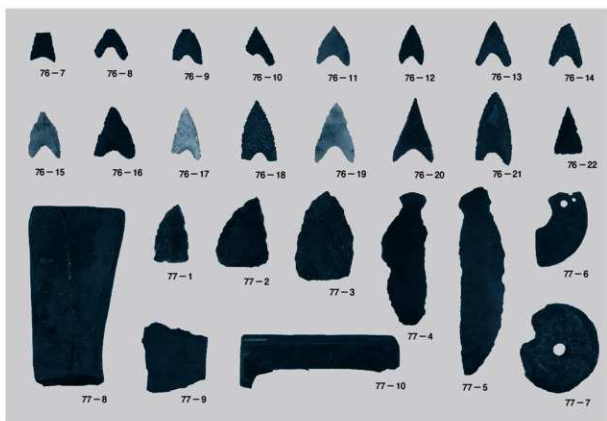
59 24号住居跡出土土師器



60 調査①区遺構外出土縄文土器



61 調査①区遺構外出土縄文土器・土師器・瓦



62 調査①区遺構外出土石器・石製品



63 調査⑨区南側L I d上面全景 (南から)



64 調査⑨区(1)

a 南側北部L I d上面全景 (南西から)

c 南側L II上面全景 (南から)

b 基本土層E-E' (南東から)

d 南側北部L II上面全景 (南西から)



65 調査⑨区(2)

- |   |                     |   |                     |
|---|---------------------|---|---------------------|
| a | 北側L.V上面全景 (南東から)    | b | 南側L.V上面全景 (北西から)    |
| c | L61グリッド遺物出土状況 (南から) | d | M61グリッド遺物出土状況 (南から) |
| e | 基本土層A-A' (南東から)     | f | 基本土層B-B' (南東から)     |
| g | 基本土層C-C' (南から)      | h | 基本土層D-D' (北東から)     |



66 調査⑨区北側LⅧ上面全景 (南東から)

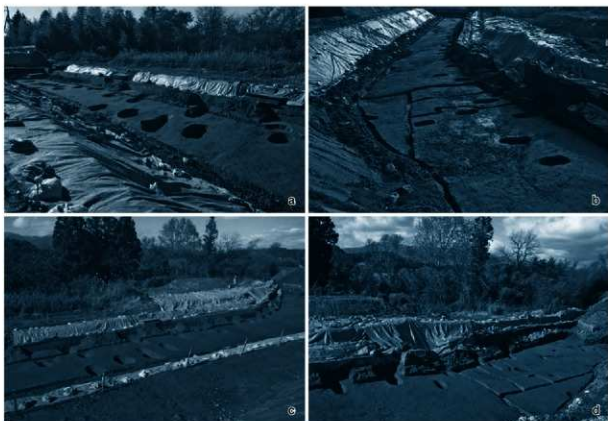


67 調査⑨区北側LⅧ上面

a 土坑群全景 (北西から)      b 土坑群全景 (北東から)  
c 土坑群近景 (南西から)      d 土坑群近景 (北西から)



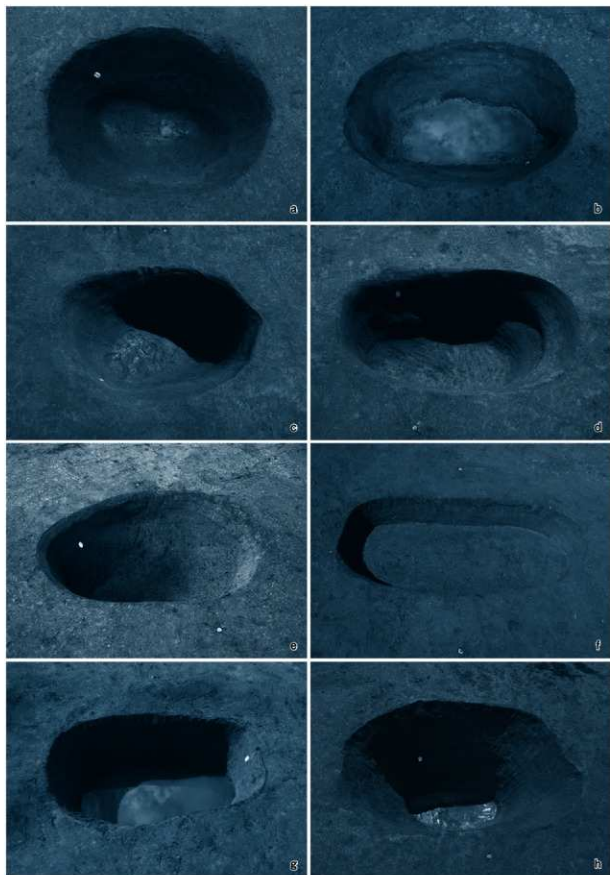
68 調査⑨区南側LⅧ上面全景 (南から)



69 調査⑨区南側LⅧ上面

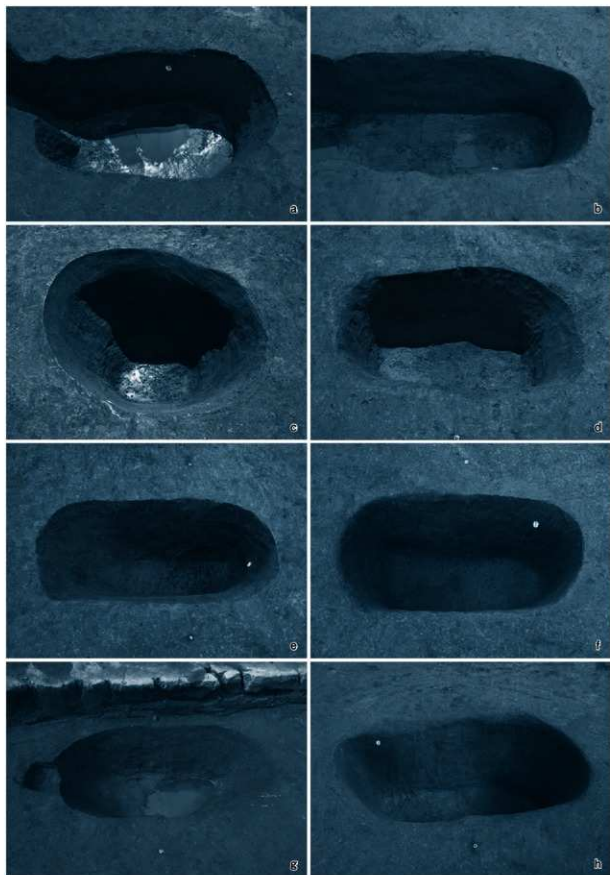
a 土坑群近景 (北東から)      b 土坑群近景 (北から)  
c 土坑群近景 (南東から)      d 土坑群近景 (南東から)





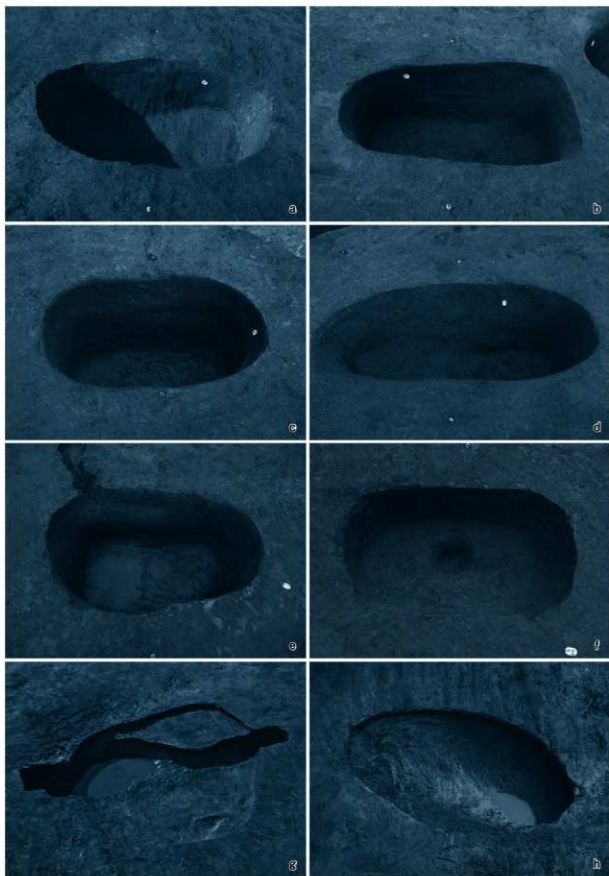
70 44~51号土坑

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| a 44号土坑全景 (北から)  | b 45号土坑全景 (南東から) |
| c 46号土坑全景 (北西から) | d 47号土坑全景 (北から)  |
| e 48号土坑全景 (北から)  | f 49号土坑全景 (南から)  |
| g 50号土坑全景 (南東から) | h 51号土坑全景 (北西から) |



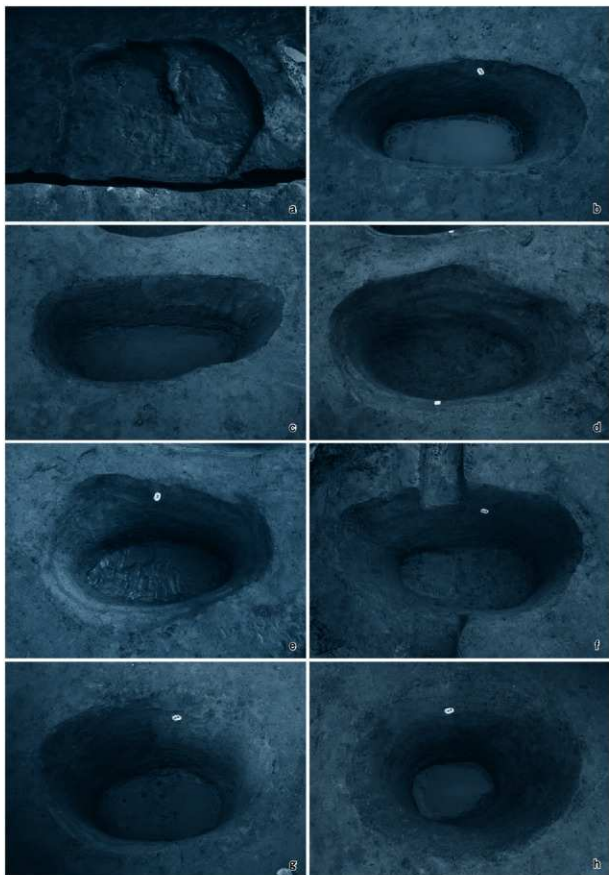
71 52～59号土坑

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| a 52号土坑全景 (北西から) | b 53号土坑全景 (南から)  |
| c 54号土坑全景 (北から)  | d 55号土坑全景 (北から)  |
| e 56号土坑全景 (南から)  | f 57号土坑全景 (南東から) |
| g 58号土坑全景 (南東から) | h 59号土坑全景 (北西から) |



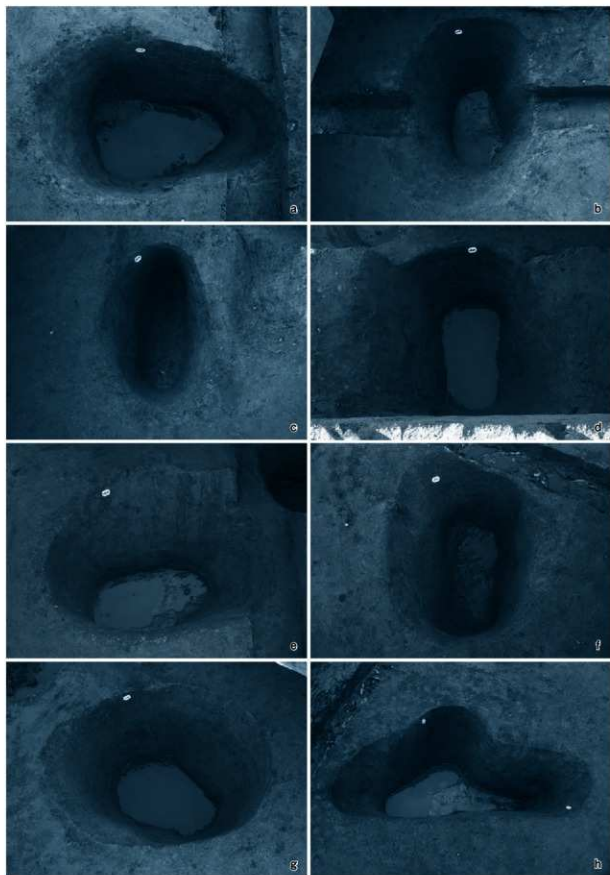
72 60～65・67・68号土坑

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| a 60号土坑全景 (南から)  | b 61号土坑全景 (北から) |
| c 62号土坑全景 (南東から) | d 63号土坑全景 (南から) |
| e 64号土坑全景 (北西から) | f 65号土坑全景 (北から) |
| g 67号土坑全景 (北東から) | h 68号土坑全景 (北から) |



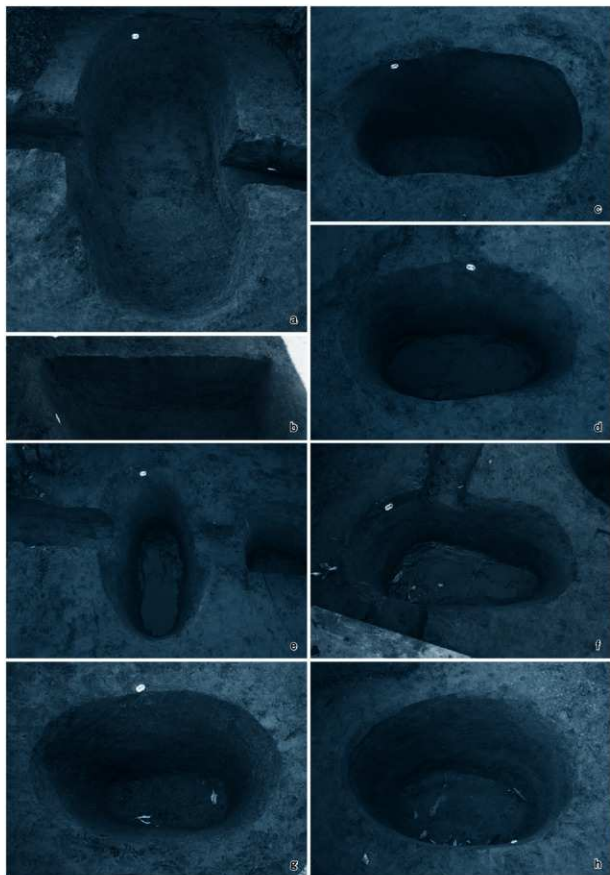
73 69~76号土坑

- |   |                |   |                |
|---|----------------|---|----------------|
| a | 69号土坑全景 (北西から) | b | 70号土坑全景 (南から)  |
| c | 71号土坑全景 (南東から) | d | 72号土坑全景 (南東から) |
| e | 73号土坑全景 (北西から) | f | 74号土坑全景 (北から)  |
| g | 75号土坑全景 (南東から) | h | 76号土坑全景 (北から)  |



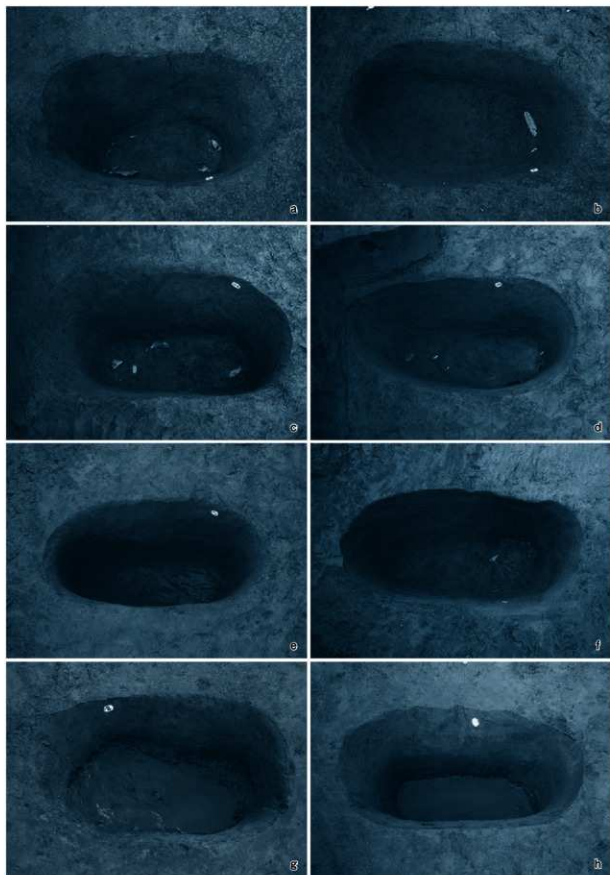
74 77～84・90号土坑

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| a 77号土坑全景 (北から)  | b 78号土坑全景 (東から)    |
| c 79号土坑全景 (東から)  | d 80号土坑全景 (西から)    |
| e 81号土坑全景 (南から)  | f 82号土坑全景 (西から)    |
| g 83号土坑全景 (北西から) | h 84・90号土坑全景 (北から) |



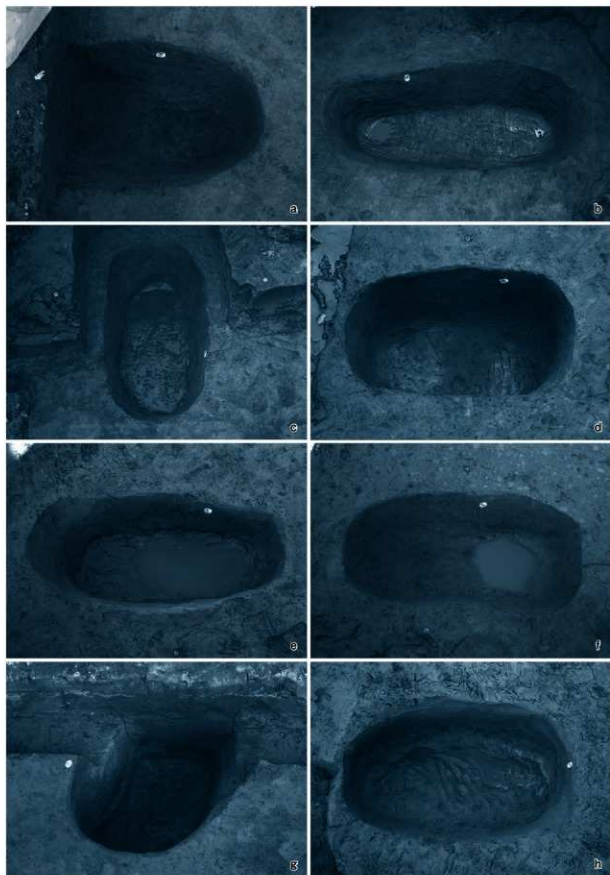
75 85～89・91・92号土坑

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| a 85号土坑全景 (東から) | c 86号土坑全景 (北から) |
| b 85号土坑断面 (東から) | d 87号土坑全景 (南から) |
| e 88号土坑全景 (東から) | f 89号土坑全景 (南から) |
| g 91号土坑全景 (南から) | h 92号土坑全景 (南から) |



76 93～100号土坑

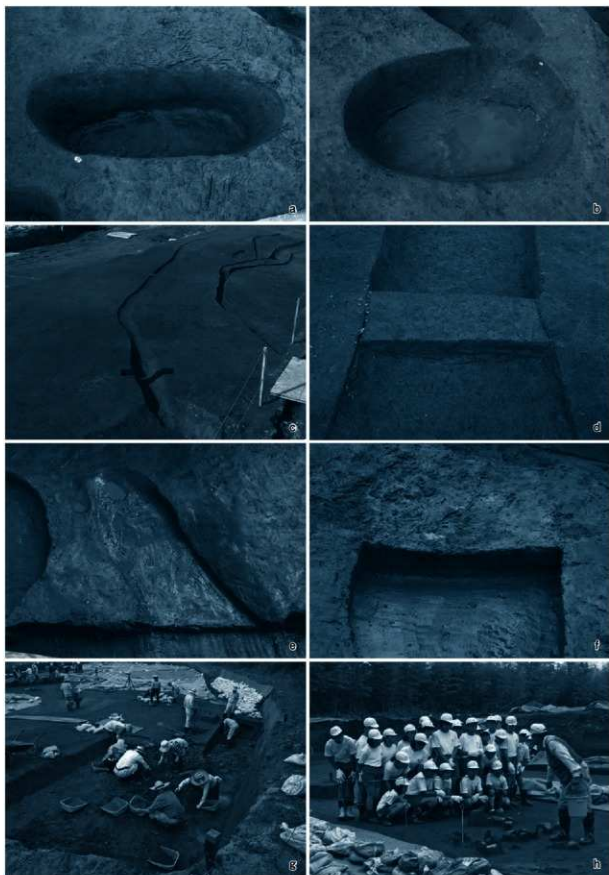
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| a 93号土坑全景 (南東から) | b 94号土坑全景 (南から)  |
| c 95号土坑全景 (南東から) | d 96号土坑全景 (南から)  |
| e 97号土坑全景 (南から)  | f 98号土坑全景 (南から)  |
| g 99号土坑全景 (北から)  | h 100号土坑全景 (南から) |



77 101～108号土坑

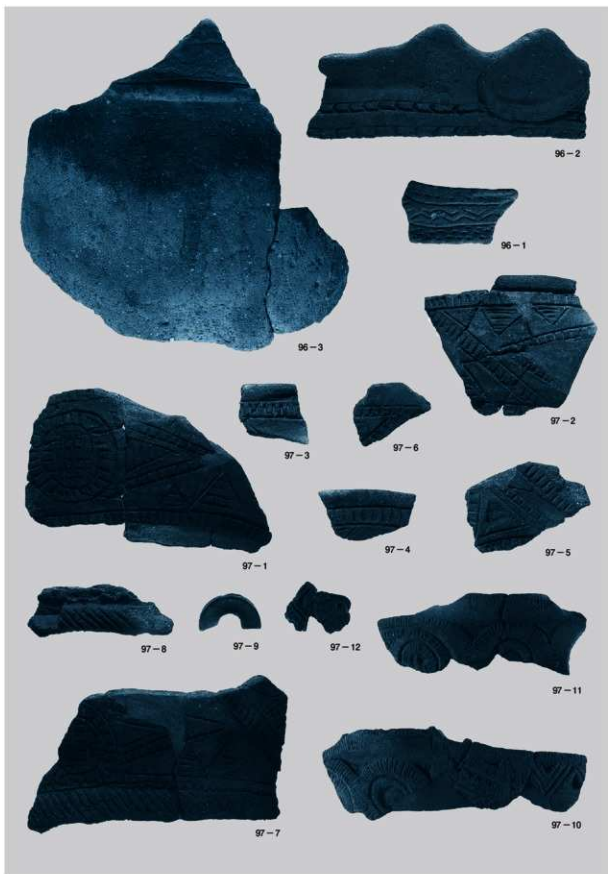
- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| a 101号土坑全景 (南東から) | b 102号土坑全景 (北から)  |
| c 103号土坑全景 (東から)  | d 104号土坑全景 (北から)  |
| e 105号土坑全景 (南東から) | f 106号土坑全景 (南東から) |
| g 107号土坑全景 (南西から) | h 108号土坑全景 (南東から) |





78 109・110号土坑、25・39号溝跡、調査風景等

- a 109号土坑全景（南から）  
 b 110号土坑全景（南東から）  
 c 25号溝跡全景（南東から）  
 d 25号溝跡断面（南から）  
 e 39号溝跡全景（北西から）  
 f 39号溝跡断面（東から）  
 g 調査風景  
 h 二本松市立石井小学校見学風景



79 調査⑨区遺構外出土縄文土器(1)



80 調査⑨区遺構外出土縄文土器（2）



81 調査⑩区L II上面全景（北東から）



a



b



c



d

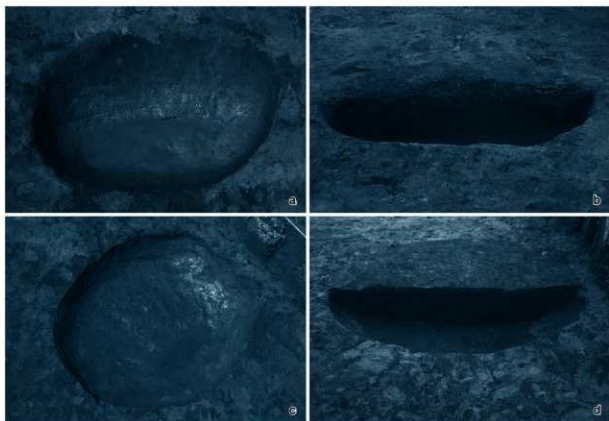
82 調査⑩区

a L II上面全景（南から）

b 基本土層A-A'（南東から）

c L I d上面全景（北東から）

d L I d上面全景（南から）



83 34・35号土坑

a 34号土坑全景（東から）  
 b 34号土坑断面（東から）  
 c 35号土坑全景（南東から）  
 d 35号土坑断面（北東から）



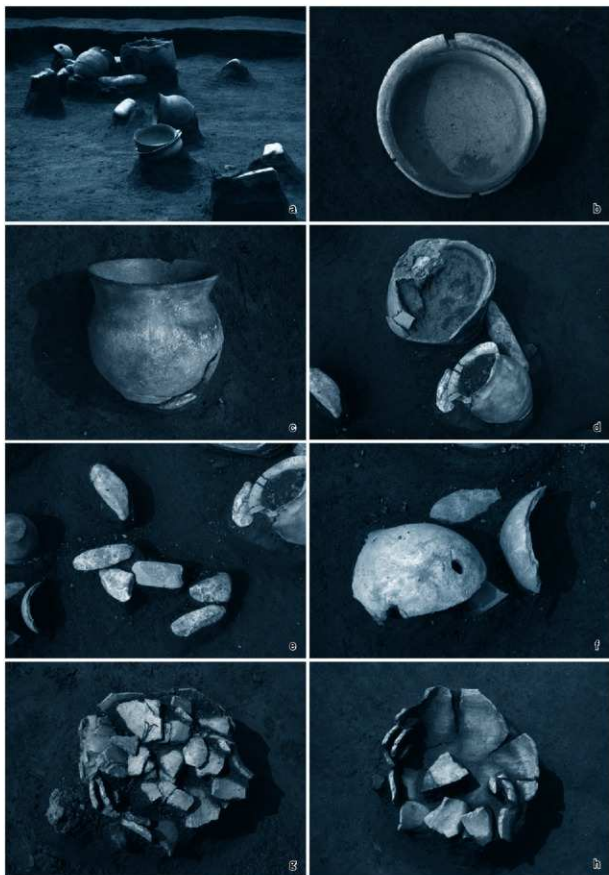
84 25号溝跡全景（南東から）



85 1号特殊遺構全景(1)(東から)



86 1号特殊遺構全景(2)(南から)

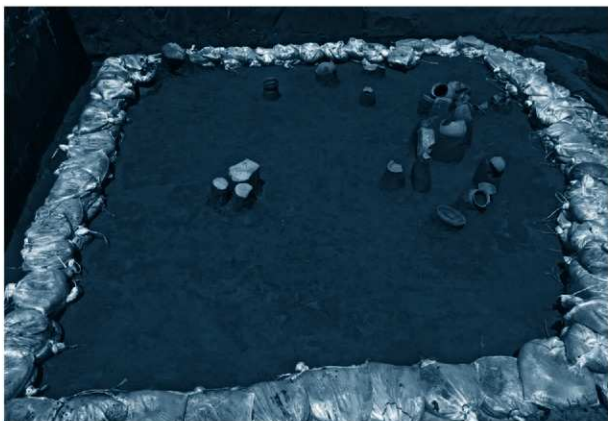


87 1号特殊遺構

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| a 遺物出土状況 (東から)    | b 遺物出土状況細部 (南から) |
| c 遺物出土状況細部 (北から)  | d 遺物出土状況細部 (南から) |
| e 遺物出土状況細部 (南から)  | f 遺物出土状況細部 (南から) |
| g 遺物出土状況細部 (南東から) | h 遺物出土状況細部 (東から) |



88 14号特殊遺構全景(1)(北西から)



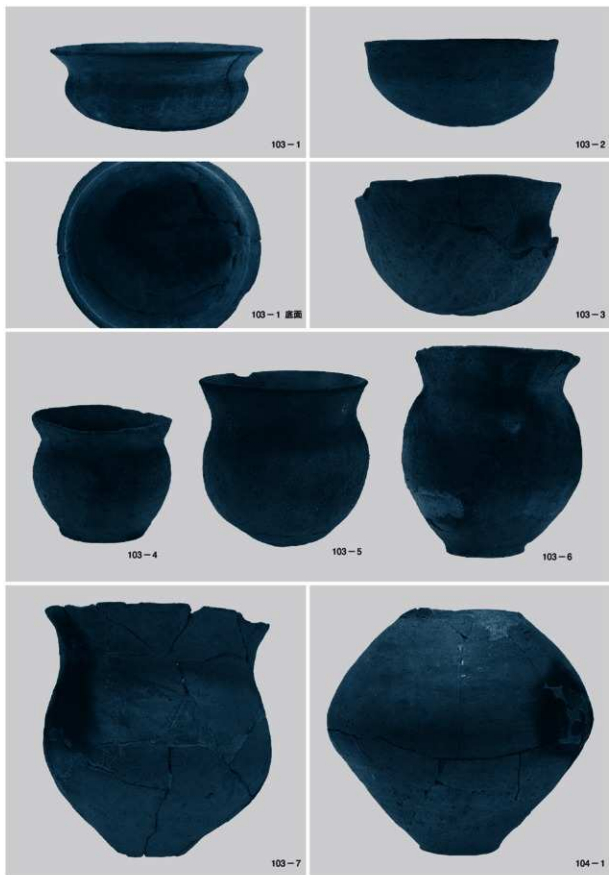
89 14号特殊遺構全景(2)(東から)



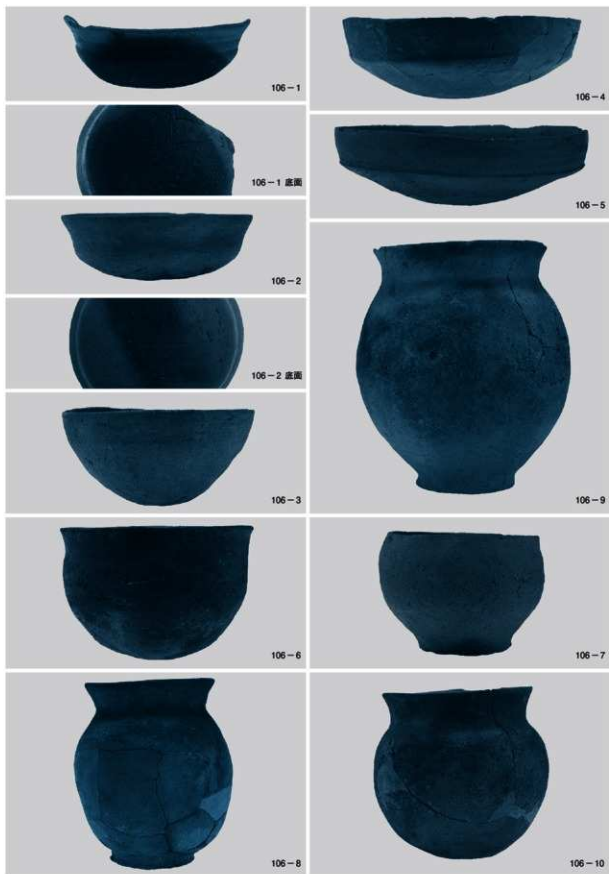


90 14号特殊遺構、見学会風景

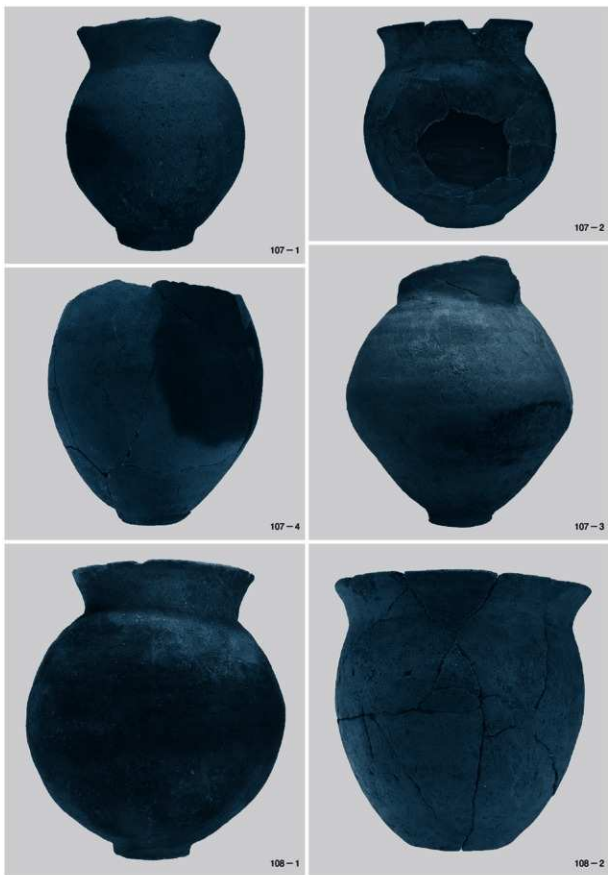
- a 遺物出土状況細部 (南西から)      b 遺物出土状況細部 (南西から)  
 c 遺物出土状況細部 (北東から)      d 遺物出土状況細部 (北東から)  
 e 遺物出土状況細部 (南から)        f 遺物出土状況細部 (南西から)  
 g 遺物出土状況細部 (南東から)      h 見学会風景



91 1号特殊遺構出土土師器



92 14号特殊遺構出土土師器(1)



93 14号特殊遺構出土土師器(2)

## 報告書抄録

ふりがな	あぶくまがわじょうりゅうがせんかいしゅうじぎょうとろみちくいせきちょうさほうこく3							
書名	阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告3							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第497集							
編著者名	吉田 功 能登谷宜康 小暮伸之 鈴木梢加子 下山貴生 由井文菜							
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL.024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL.024-521-1111							
発行年月日	2014年12月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トロミ (3次調査)	福島県二本松市 北トロミ・南トロミ	210	00138	37° 34' 58"	140° 26' 28"	2013年4月8日 2013年12月20日	30,200㎡	阿武隈川上流河川改修に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
トロミ (3次調査)	集落跡	縄文時代 弥生時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居跡 柱列跡 土坑跡 溝跡 特殊遺構 掘立柱建物跡 畑跡 小穴	3軒 4列 125基 17条 2カ所 3棟 12カ所 551個	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 かわらけ 石器 石製品	・古代・中世には昨年度調査区から連続する生産域が存在することが判明した。 ・遺跡南部から、古墳時代の遺構・遺物がまとまって発見され、縄文時代の落し穴も110基以上南北方向に並んで検出された。		
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トロミ遺跡は阿武隈川東岸に形成された自然堤防上に存在する、縄文時代早期～鎌倉時代にわたる複合遺跡である。</li> <li>・調査①区では、奈良時代の竪穴住居跡が検出され、その下層からは、縄文時代前・中・後期の遺物包含層と落し穴群が検出された。落し穴群は、阿武隈川に面する自然堤防上で確認され、調査⑨区から続いてほぼ南北方向に列をなしている。</li> <li>・調査③・④区では、中世の畑跡・掘立柱建物跡・柱列跡、古代の竪穴住居跡・土坑・溝跡・畑跡などが検出された。畑跡は北に隣接する調査⑤中区から連続する生産域を示すものと推測される。</li> <li>・調査⑤中区では、縄文時代前期の遺物包含層が検出された。</li> <li>・調査⑨区では、中世の溝跡・土坑が検出され、その下層から、縄文時代前期後葉～後期後葉の遺物包含層と落し穴群を検出した。落し穴群は前期前葉以前のもので、阿武隈川に面する自然堤防の尾根に沿ってほぼ南北方向に列をなし、北隣の調査③区にも延びており、広範囲の狩猟場が形成されていたことが判明した。</li> <li>・調査⑩区では、中世ないしは中世以降の溝跡・土坑が検出され、その下層からは、礫と土器を集積した古墳時代後期の特殊遺構が2カ所確認された。</li> </ul>							

\*経緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

---

福島県文化財調査報告書第497集

## 阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告3

### トロミ遺跡（3次調査）

平成26年12月18日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団	遺跡調査部	
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688)	福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116)	福島市春日町5-54
	国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所	(〒960-8584)	福島市黒岩字榎平36
印 刷	八幡印刷株式会社	(〒970-8026)	いわき市平字田町82-13

---